

近代日本人が描く「中国」に関する研究

指導教員：水本浩典 教授

学籍番号：9513201

氏 名：徐 茜

目 次

序章 明治前後における中国観変化の芽生え	1
付表・表1（戦争読み物の目次内容）	22
注	23
第一章 日清戦争期の戯画が描いた中国	25
はじめに	25
第1節 戦争期発行の戯画及び主な内容	27
1.1 検討素材について	27
1.2 戦争戯画が扱う主な内容	27
第2節 戯画で描かれた清国	33
2.1 清国は、「弱い」!	33
2.2 清兵は、「弱兵」だ!	35
第3節 戯画で描き出された清国イメージ	40
3.1 清人は、「豚尾漢」だ!	40
3.2 民衆が受け止めた清国イメージ	42
おわりに	45
注	47
第二章 『日清戦争実記』で報道された中国	49
はじめに	49
第1節 平壤陸戦の報道からみた中国	53
第2節 黄海海戦の報道からみた中国	61
第3節 二分化された中国評価～旅順半島攻略の報道から～	66
第4節 雑報によって再確認された中国イメージ	72
おわりに	80
注	82
第三章 ジョルジュ・ビゴーが描いた日清戦争	84

～イギリスの画報紙『ザ・グラフィック』を素材にして～

はじめに	84
第1節 ビゴアの従軍取材及び『日清戦争写真帳』について	85
第2節 『ザ・グラフィック』に投稿した日清戦争報道画	92
2.1 『ザ・グラフィック』及びビゴア報道画の概要	92
2.2 風俗画の性格を持った報道画	95
2.3 ニュース性をそそえた報道画	101
第3節 ビゴアが描いた日清戦争	103
3.1 戦争以前におけるビゴアの作品について	103
3.2 ビゴアが描いた戦争中の人々	108
3.3 ビゴアが描いた戦後の日本	123
おわりに	127
付表・表7（ビゴア親筆の報道画）	128
注	131

第四章 中国東三省を旅した夏目漱石の眼差し

～新聞掲載紀行「満韓ところどころ」から～

はじめに	136
第1節 旅行の経緯及び紀行文「満韓ところどころ」について	138
第2節 「満韓」で描かれた満鉄の諸相及び戦跡めぐり	144
2.1 「満韓」からみる漱石の満鉄「視察」	144
2.2 当時の話題から遠ざけた戦跡めぐり	162
第3節 「満韓」で描かれた中国の諸相	168
3.1 満鉄の中でいきた中国人労働者	168
3.2 「満韓」からみる利権回収の問題	173
3.3 「満韓」からみる「鷹揚」な中国人	179
おわりに	183
注	185

第五章 中国取材に旅立った芥川龍之介の眼差し

～新聞掲載紀行『支那游記』から～

はじめに	190
第1節 中国旅行の経緯及び紀行の概要	191
第2節 先行研究の現状と検討方法について	194
第3節 芥川が記した上海の印象記	203
3.1 芥川が中国に対する第一印象 ～眼差しの転換～	203
3.2 上海から見出した「現代」の中国	207
第4節 『游記』からみる江南地域及び長江地域	213
第5節 芥川が描いた「王城」北京	220
おわりに	228
注	230
終章 近代の新聞雑誌からみる日中のまなざし	236
注	251

近代日本人が描く「中国」に関する研究

序章 明治前後における中国観変化の芽生え

近世中期まで、日本人の中国認識は、二つの面からうかがえる。一つは近世鎖国期までの日本貿易状況に表れている。

島原・天草一揆(1637(寛永 14)年)で、幕府は外国貿易に対する警戒心が次第に増長した。1639(寛永 16)年幕府はキリシタン禁制を発布するとともに、外国との貿易も出島でしか行わないことにした。それに関わらず、鎖国令が発布された時期に唐船¹の渡航が非常に頻繁であった。清初海禁制度の影響²や三藩の乱(1673年～1681年)の影響で渡航数は一時減少したが、中国の展海令(1684年)が公布された以降、唐船の渡航数は一時飛躍的に跳ね上がった(図1)。

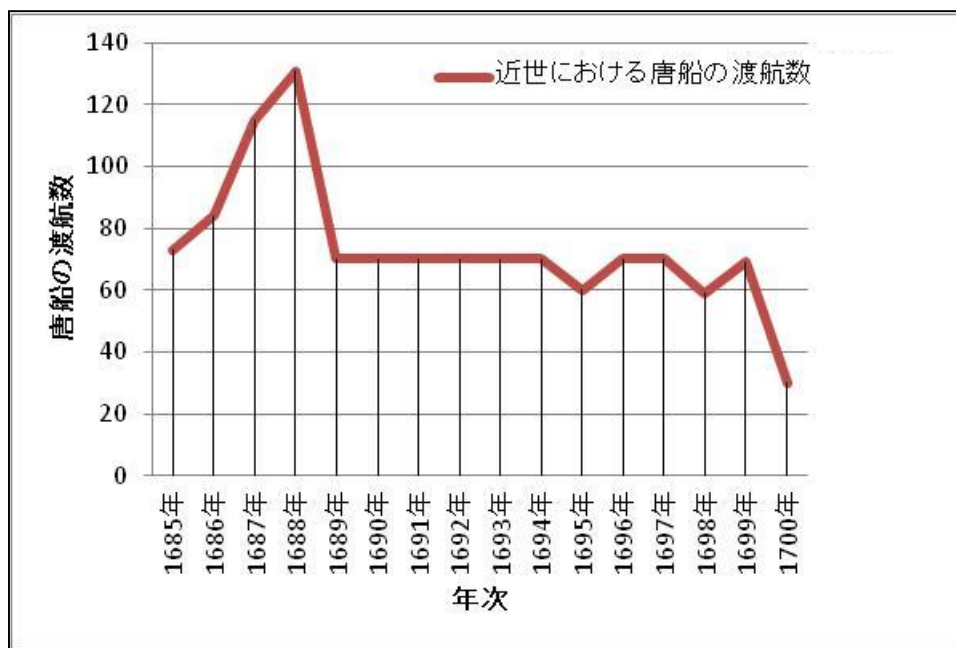


図1 近世鎖国期(展海令の発布以降)の唐船来航数

注) 岩生成一「近世日支貿易に関する数量的考察」³をベースに作成

そして、大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』により、「長崎は中国の方物、薬産、典籍、珍籍、珍器、異品、勝絳の到来する場所であり、唐船新渡の品々はまことに江戸時代の垂涎のまどであった」⁴とある。つまり江戸時代には中国商品に対する需要が大きく、中日交流は非常に盛んだったのである。これは、日本が中国製品に対する信頼と憧れに基づいた貿易

現象とみるべきである。

またもう一つの特徴は、中国文化に対する姿勢である。中国思想の代表格といえる儒学に注目してみよう。

豊臣秀吉の朝鮮出兵によって朱子学⁵の書籍が日本国内にもたらされ、当時国内藤原惺窩など伝統学問から脱皮することを求める学者に応じて、儒学が日本国内で芽生えたといわれている。さらに、徳川政権の時、儒学中の王道論は家康の興味を起し、儒学はさらなる発展を遂げていった。薬種や織物より利益が薄く、またキリシタン禁制にからむ禁書の問題が起りかねないとしても、中国の書籍が絶えず日本に輸入されていたのである。このように、当時日本の儒学に対する尊敬が高まり、それに従い、儒学の源流を生み出した中国に対する関心が生じるのも不思議ではない。その例として、当時のエピソード⁶を紹介したい。

儒者、品川へ引越、弟子ども家見の祝儀に行き、「先生は繁華の日本橋を御見すて
被成、何の能思召御座候哉」、儒者まじめな顔にて、「唐⁷へ二里近い」(珍話楽牽頭)

つまり、一人の儒者が、「唐へ二里」だけ近づくために、わざわざ日本橋から品川へ引っ越したというのである。風刺半分の話であるが、たしかに当時日本知識人の中国文化への熱意がうかがえる。

また、江戸中期の著名な儒学者荻生徂徠も中国文化に関心を払い、当時みずから自分の名前を中国風の「物徂徠」「物茂卿」に変えた。荻生の家祖先が「物部」氏であったことを根拠に、中国風の一字名として「物」を名乗ったのである。

支那癖を有せり、唐紙、唐筆にあらざれば用ゐず、すべての物成るべく中華の如くならんを欲す⁸

との記載もある。これほど中国と中国文化に熱意と憧れを覚えた反面、日本人は自国のアイデンティティに対し一種の卑屈のコンプレクスさえ抱いていたことがわかる。中国の言葉のなかに、「蛮夷戎狄」という中華である中国の周りにある国を際している言葉である。具体的にいうと、「東夷、西戎、南蛮、北狄」であり、中華という先進国・中国に対して、文化が遅れる地域として考えられていた。そのため中国の周りに位置している日本も「夷狄」の範囲に属すると考えられてきた。

また、中国国内に起こった王朝交替によって、清朝が興る。しかし、日本人は、満族人が統治した中国に熱い視線を投じていなかった。一つの原因は、清廷は満族人の政権で、清朝は満人によって築かれた王朝だと考えられた。それで、歴代と違って清に対して日本人は違和感を抱いていた：

まづ今の清を以て古の唐山に競れば、土地も古の唐山に一倍し、武芸も北風[北方民族の風習]を伝へて能修練シ、情慾も北習を承て剛強に移り行故、終に北狄貪略の心根次第に唐山に推移りて、其仁厚の風儀も漸漸に消滅シ…⁹

ここで、満族を「北狄」と呼び、王朝交替による満族政権の確立は、「唐山」を侵入した結果だとも認識されていた。侵入者として、「剛強」や「貪略」などの言葉使いから、当時満族の風習などには好感を抱いていなかった。また満州族特有の風俗として、中国人は辮髪をたくわえていたので、一層日本人の中国印象に違和感を強めていったと考えられている。

江戸時代を通じて、日本は次第に西洋文化と接触し始めた。「蘭学」と称する知識は西欧の科学知識などに限定されてはいたが、西欧の先進性を評価していた証しでもある。次第に、中国文化への憧れから西欧文化の先進性を導入する傾向は、アヘン戦争の結果を受けて、この転換に拍車を掛けた。

そして、アヘン戦争の勃発は、日本人の国際観念を一気に回転されるほどの大きな出来事だった。昔「西戎」と呼ばれてきた西洋人がこれほど先進的かつ強力なパワーを持っているのを、日本人は初めて認識した。この衝撃を受けて、幕末千歳丸に乗って中国に渡った濱松の納富介次郎¹⁰は、随筆風に綴った『上海雑記』¹¹(1862 年)に戦後当時中国の貿易状況を話していた：

咸豊以前ハ西虜ノ支那ニ来リテ貿易スル処五港ニ過ギザルガ、和議以来ハ十余港ヲ開キテ貿易スルコトニナリタルヨシナリ。(後略)

ここでアヘン戦争後西洋と中国の貿易が増えたことを話していたが、「西虜」という言葉は興味深い。「西」はもちろん西洋のことで、「虜」は昔からえびす、奴隷をののしった言葉で、「胡虜」¹²の表現にも使われている。つまり、この「西虜」は前に話した「夷狄」等と同じく、蔑視の感情を持っている。ずっと軽蔑していた西洋国が意外にも中国との戦争に勝って、これほど中国

との貿易を強要することができた。予想に反した国際状況の激変に、「西虜」のような言葉は依然として口にしながらも、中国に対する信頼感も動揺したことがわかる。この複雑な心情を表したものに、日比野輝寛の『贅疣録』¹³で次のような文章が示されている。

十日 晴

早起樓ヲ下リ面ヲ拭フ。佛人余ノ傍ニ立チ、ロニ聲アリ、語ルゴトシ。コノ時張麗香来ル。余彼ハ如何ナル者ト問フ。麗香云フ、コレ佛蘭西ノ耶蘇教ヲ傳フル僧ナリ。コノ樓ニ宿ス。余コレヲ聞イテ愕然、怒髪サカノボリ目眦サケ、感慨勃勃天ヲ仰イデ嘆ズ。ソノ詩云フ。
奪國資基在此樓。満堂諸士果知否。試憑欄檻看黃浦。濁浪排天萬里流。

西洋人について、「ソノ容貌甚ダ異ナリ。禿頭佛衣、ソノ面鬼ノゴトシ」と評し、また宣教師という身分を知り、作者は「愕然、怒髪サカノボリ目眦サケ、感慨勃勃天ヲ仰イデ嘆ズ」と述べ、さらに詩の中にも、「奪國資基在此樓」、いわば中国を侵略する源がこの楼にいる宣教師たちだと憤慨している。この一文によって、作者が自分を中国の味方に設定した姿勢が考えられる。つまり、納富介次郎は当時の中国に対して同情を寄せているのである。

アヘン戦争で中国がイギリスに負けた事実から、日本の知識人たちも日本の立場に危険を感じるようになった。この中国での旅を通じて、彼らは真剣に中国の状態を見つめ、中国敗戦の原因を見出そうとしていた。前掲の紀行においても、いくつかの評論が出されている：

意フニ清国ハ固ヨリ文學無雙ノ国ニシテ、コレニ因テ國家ヲ治ムルコト論ナシ(1)、然ルニ、近世ノ風ハタダ志シ己ガ為ニスル者ナク、偏ヘニ科級ヲ貪ルニアリ(2)。コレタダ制科時文ノ試舉ニ中ラント虚驚徒勞スルノ弊ナリ(2)。然ラザレバ、縦令文藝ヲ尊ブモ、何ゾカクノゴトキノ大金ヲ費ヤサンヤ。故ニ世自ラ虚文卑弱ニ落ち、遂ニ自國ヲ治ムルコト能ハズ。内長匪ニ苦シメラレ、外夷狄ノ制ヲ受ク。實ニ清國ノ危キコト累卵ノゴトシ。憐レムベキコトナリ。(後略)(傍線筆者、下同)

清人ヲ見ルニ、凡テ柔弱ナル躰ナリ。尤モ數度ノ戰場ヲ經シ者ナドハ稍武骨ヲ帶ビタリ。
(後略)¹⁴

つまり、中国古来の政治と文化の優秀性を認めながら(1)、当時(近世)現れた中国の問題も提示した(2)。また、すでにこの時期、中国の衛生問題を指摘する記述も『上海雜記』であらわ

れ始めている：

上海市坊通路ノ汚穢ナルコト云フベカラズ。就中小衢間逕ノゴトキ、塵糞堆ク足ヲ踏ムニ處ナシ。人亦コレヲ掃フコトナシ。

或ヒト語ツテ曰ク、市街ヲ出ヅレバ則チ大野ニシテ荒草路ヲ没ス。只棺槨横シ、或ハ死人ヲ蓆ナドニ包ミテ處處ニ捨テタリ。且炎暑ノ頃、臭氣鼻ヲ穿ツバカリナリトゾ。

誠ニ清国ノ亂政コレヲ以テ知ルベシ。¹⁵

史料に下線を付した箇所は、当時上海市街の衛生状況を生々しく表現している。以後、中国の衛生状況を語る際にたびたび使われる用語が、幕末にはすでにあらわれている点に注意をしておきたい。元来、日本人は来日した西洋人が驚嘆するほどのきれい好きであった。街路には塵ひとつ落ちておらず、粗末な木造家屋のなかも、きれいに掃き清められている。こういった階級を超えた清潔好きの習慣を長年培っていた日本人にとって、上海の衛生状況は、逆の意味で驚嘆に値する惨状であったことがわかる。この「驚嘆」すべき現状を日本に喧伝することとなる。

以上は、アヘン戦争後、中国教養を多く受けてきた日本人の中国紀行を基に考えてきた。ここでもう一人重要な人物を紹介したい。彼は『学問のすすめ』を著した福沢諭吉である。福沢は若い時から緒方洪庵について蘭学¹⁶を学び、のち幕府に用いられ、使節に随行し前後三回欧米に渡っていた。西洋文化から受けた教養や思想論の影響が大きいと考えられ、海外の見聞の経験のない多くの知識人より先に西洋文明に対して先取的理解をしていた。そして、その反面、中国に対する目は非常に厳しく、とくに日清戦争以後、「脱亜入欧」の説も提示するようになる。アヘン戦争の時期、彼による中国批判の文章も多く残されている。

まず中国について、彼が書いた子どものための啓発書である『世界国尽』を見てみたい。1869(明治2)年に上梓された『世界国尽』¹⁷は、欧米の資料を参考してまとめた翻訳書である。彼個人が編集したこの本のなかで項目化されたものは、彼の好悪・価値観などを鋭く反映したものになっている。「亜細亞洲の事」の部分で、彼は「^{おとこ}国中の男子は皆けし坊主なり。始て見る人には甚おかしく思わる」とのように中国人を紹介している。ここですでに「けし坊主」を使って、当時中国人の風習の髪型——辮髪を軽視する表現で紹介している。

支那の政事の立方は、西洋の語に「デスポチツク」といえるものにて、唯上に立つ人の

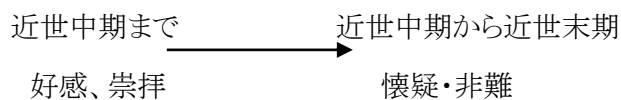
思う通に事をなす風なるゆえ、国中の人皆俗にいう奉公人の根性になり、帳面前さえ
済めば一寸のがれという気にて、真実に国の為を思う者なく、遂に外国の侮を受けるよう
になりたるなり。

ここでは、彼は古代中国の孔子などの名人を尊称して、古来の中国文明に関してある程度
認めているが、やはり中国の政治を「ですぼちつく」(専制)だと非難している。つまり、中国に
国のための「志士」が存在せず、専制のために働く人だけしかいないので、外国の侮を受ける
ようになったのだと論評している。

さらに、諭吉は『時事新報』で中国について「文明開化後退去」^{あとずさり}だと批評を続けていた。アヘ
ン戦争の勃発は中国に対する「天罰」だと酷評し、中国人を「懲ざる無智の民」と批判していた。
アヘンを焼却し中国を救おうとした当時の特命全権大使・林則徐の行為についてもアヘンを
理不尽に焼捨てたと非難し、さらに林則徐を智慧なしの短気者だと批判していた¹⁸。

このように、福沢は中国に対して言及した箇所では、批判的な文章が多い。『世界国尽』のな
かで中国人の髪型に対する習慣(弁髪)を、「けし坊主」と表現している点など、幕末にいち早
くアメリカ文化に順応する姿勢を顕著にする諭吉からすると、日本人の「ちょんまげ」や中国人
の「けし坊主」など、論外の風俗であったのであろう。

以上、まとめてみると、近世末期まで、日本人の中国認識は以下ように推移している。



この大きな変化の要因として、大国であり尊崇の対象であった中国が、アヘン戦争にあっけ
なく西欧に敗北した。この衝撃が日本人の中国観に劇的な認識の変化をもたらしたことがわか
る。

また、明治に入ると、日本国内も江戸から明治という体制の変化を経験し、西洋文化に対す
る認識が深まり、中国に対する見方も変容していく。

この時期、ひとつ注目すべき新しい情報発信装置として、「新聞」の創出があげられる。明治
初期の各種「新聞」の創刊は、大衆への情報伝達をより一層可能にした。それに従い、中国に
関する情報も、知識人から民衆によりインパクトを伴って伝達されるようになる。知識層から民
衆へ情報を発信する最初の試みは、この時期から始まったといえる。そして知識層と民衆の国

際意識の接点となっている新聞雑誌も、重要視して検討する必要がある。ここでは、明治前期新聞雑誌に表れた中国に着目し、知識人の中国認識を新聞誌面の記事のなかから検討してみる。

1874 年の「台湾出兵」(牡丹社事件)¹⁹で、日本は初めて中国と真正面の交渉を経験し、日本民衆も初めて中国を模範とすべき友好国でなく、紛争国・対立国としてとらえた。台湾出兵は起業したばかりの新聞業にとって、千載一遇の好機にもなった。なかでも、『東京日日新聞』(以下『東日』と略す)の岸田吟香はいろいろな困難を押し切って、初めての海外従軍取材を遂げた。海外取材の成果である「台湾信報」(1896 年より)の掲載は、「東日」を 2000 部程度の発売数から一気に 15000 部に伸ばすことに効果があった²⁰。

この事実は、日本人が近隣諸国との「紛争」・「戦争」に関する情報を、新聞を通じて吸収していく状況を示している。逆に、部数を伸ばしたかった新聞社側は、読者の渴望を癒やすかのよう、中国との「紛争」や「戦争」をあの手この手で書き立てることとなる。

1874 年の台湾出兵の発端は、1871 年台湾に漂流した琉球御用船の乗組員が原住民に殺害された事件からである。71 年以後の三年間事件の決着がつかず、国内で征韓論の失敗や西郷隆盛の下野などもあり、国内の不穏な空気を外敵に向けさせるため、この国内日本最初の海外出兵に至ったと考えられている。東京日々新聞(図 2)は、当時の状況をさらに具象化して、強烈な「蛮地」のイメージと、それを征討する正当性を読者に伝えていく。



図 2 『東京日々新聞』、出版日不詳、絵師一恵斎芳幾²¹

図中では、「蛮地」で雄々しく武勲を立てる日本人兵士を描いている。血まみれに倒れたの

は台湾民衆であろう。また、絵に付けられた文章にも同じ姿勢がみられる。

頃ハ明治七年。日本国の師台湾**生蕃の暴悪**を懲さんため。彼島に舶来ぬ。然るに**不教の夷等人理を知らず**。不意に手向ひなす故に。ついに五月皇国の兵威を以て是を制せんと。牡丹人種が巢穴を襲同国車城の東へ入る事三里。(中略)大石を以て胸壁を造り往還を塞ぎ。其中より小銃繁く打出しぬ。ここにいたりて、我兵一策をめぐらし道なき山を辛じて後へ廻り半腹より拳下りに牡丹種が。屯所を目掛けて発炮なすハ高嶺嵐に誘引れて霰迸る如なり蕃人は是に辟易し全く降伏謝罪して日本の天威万国に。輝わたるハ同月の。二十二日の暁天にて此石門の一戦なりとぞ。

(墨陀西岸 温克龍吟)

いずれも台湾当時の民衆を「生蕃の暴悪」、「不教の夷」と形容し、日本兵を称賛している。このように海外取材の成果を報道するなかで、現実をデフォルメしアジテートする記事は、「報道の客観性」が全く失われていると指摘されてもいる。しかし、読者の興味を起こすため、表現を不適切に誇大する傾向は、以後の日清戦争期に至っても顕著になり、新聞報道が民衆の中国認識に大きな影響を及ぼしていく。

この時期、台湾人を貶す類似した例として、福沢は「要知論」(1876 年)のなかで台湾人を「禽獣と殆ど扱ばざるものにて、人の二人や三人を喰ひ殺すは通常」と形容している。また、ここで注意すべきは、「野蛮」などの表現は、事件の中心となる台湾当地の生蕃(高砂族)を対象にしたものであるが、この表現が後になるとすべての中国人全般の認識にも大きな影響を与えていた。

一方、同時期の日本で中国に対する差別表現はすでに存在し、小松裕はそれについて「近代日本のレイシズム：民衆の中国（人）観を例に」²²において具体的に追跡を行っていた。同研究が提示したように、当時の『東京朝日新聞』(1874 年 7 月 22 日)のなかで、日本人が中国人を「チャン〜坊主と嘲弄せし」、中国人が「巡行の査官に訴へ」たのような、中国人差別の結果生じた事件が報道されていた。

「チャン」は、「チャンコロ」の簡略した呼び方で、もともと中国人を意味する中国語音「zhong guo ren」から転じたものだと考えられていた。当初は軽く揶揄する表現であった「チャンチャン」という言葉は、中国人を指して強烈な差別を表現する攻撃的・侮蔑的な用語として意識されるようになっていく一端を、この記事は示している。

また、豚を中国人の象徴として使う事例について、前掲小松の論文でも言及がみられる。朝鮮国内の壬午軍乱(1882 年)と甲申政変(1884 年)に関連して対立する日中が朝鮮を間に挟んで惹起した国際問題のなかで、「屠豚運動」²³さえ開催されたという。運動当時では、「京都の有志者は」は「豊国神社境内の芝生に於て屠豚運動会といふを催ほし」たなかで、「紙製の〇〇〇〇〇〇〇〇〇に模したる物の槍に突刺したるを捧ぐる者あり又豚の首筋を縊めながら豚殺せ豚殺せと連呼する者もある」様相が報道されていた。記事の中では「屠豚運動」に参加する知識人を「有志者」だと称賛し、新聞記事そのものが中国蔑視の意識を助長する点など一顧だにしていなかったとみられる。

さらに、当時では清国人の辮髪姿に豚のイメージを合わせ、中国人を「豚尾漢」や「豚尾坊」と呼称する場合もあった。例えば、1882 年 5 月 16 日の『大阪朝日新聞』では、中国人の密輸事件を報道した際に、「又しても～豚尾坊の奸策は憎むべく」とのように、「豚尾」という言葉を使用した。

豚を中国人の象徴として使う原因について、小松裕は豚が図体大きくして弱くて鈍い印象があること、また不潔のイメージがあることを論じていた。つまり、図体大きくして弱くて鈍いイメージは、中国は大国と称して国土が広い一方、近代化に遅れた意味合いを持っていたと考えられていた。「豚」という表現が生まれた根底に、日本は中国を長く付き合ってきた友好国・尊崇すべき国でなく、競争相手でありしかも近代化の道で遅れつつある国と認識しはじめたことに注目すべきである。

しかし、識字率の低い当時では、『朝日新聞』や前掲の政府系新聞『東京日日新聞』をよむ読者はまだ知識層にとどまっていた。しかし、1877 年『团团珍聞』(以下『団珍』と略す)の創刊は、中国情報を知識層から民衆まで広範に伝達することを可能にした。絵入り風刺雑誌として、『団珍』は政府系新聞より自由で面白く読みやすい性格の新聞で、創刊初期から民衆の間で人気を博した。

多くの「新聞」が文字を媒体にして情報伝達をすることが基本方針であったのに対して、『团团珍聞』は、文字と絵の両方を活用しながら、世相などを批評する編集方針であった点の評価するからである。絵のなかに込められた「毒」であり「嘲り」であり「揶揄」は、ストレートに民衆に受け入れられやすい性質を持つと考えるためでもある。中国と日本の外交問題が続々浮上していく中、『団珍』に中国を表現するものも当然として多く掲載されるようになり、日清戦争期になると中国風刺の内容が全紙面で展開されていく。次の章では、絵入り新聞であり、当時の世相・社会風俗を批判的な視線で記事にした『团团珍聞』に着目して具体的な検討を行う。

まとめていうと、近世末期から明治初期に至る日本人の中国認識は、以下のように変化しているといえる。アヘン戦争で中国の戦敗から、日本では中国、西欧について国際認識の転換に対して、中国そのものに対しての認識に変化が生じ、中国を軽視する風潮が生じてきた。中国に対する侮蔑的な表現として、台湾当地民衆を「野蛮」だと評価すること、侮蔑感情を込めて「豚尾」や「チャンチャン」などの呼称を使用し始めたこと、中国を「豚」のイメージにたとえることが指摘できる。

明治初期に中国への侮蔑的表現がさまざま現れ始めるが、この段階ではごく一部の知識人の言動に限定されている。その対象も政治の面での中国に対するものがほとんどであった。甲申政変期に行われた「屠豚運動会」も自由民権派が民衆を煽動するため、意図的に取られた行為だったともいわれている。そして、「豚尾」や「チャンチャン」などの言葉も、侮蔑感情を含めて使われる場合はごく少数で、綽名的な蔑称であり揶揄的表現と理解すべきである。

台湾出兵で日本が勝利をおさめたとしても、中国との本格的な対決ではなかったもので、日本は中国の本当の国力を正確に把握したという確信には至っていない。またアヘン戦争で敗北した中国が、西洋先進技術を吸引し軍事力を充実していた(洋務運動)情報も絶えず日本国内に伝わっていたので、この時期日本人すべてが中国人を軽視するようになったとは一概に言い切ることはできない。

未だ中国を強国として一種怯えを持って受け止めていたことを、1891 年の中国北洋艦隊の日本来航にともなう日本全国の騒動のなかに見てみたい。『大阪朝日新聞』の 1891 年 7 月 5 日号はかなりの紙幅で、当時北洋艦隊について報道している。

或人曾て社員に語て曰く定遠、鎮遠は恰も我軍艦浪速、高千穂の如く形状機具頗ぶる相似たりと今親しく同艦を視るに機関の如何は知らず船体の形状全く相違して我軍艦中に之と比すべき種類のものなし(後略)

(「船体の模様」,『大阪朝日新聞』,1891 年 7 月 5 日)

中国北洋艦隊の軍艦を評価する文面であるが、日本の軍艦がかなわないほどの威容であったことを書いている。軍艦のほか、北洋艦隊に関する内容を漏らさず報道していたことから、当時中国の軍事力について、日本は脅威に感じたことがわかる。また今回の来航が、中国が日本に国威を示すためだと受け止められ、中国が「日本を見下ろす」ためだとするなど、いずれもこの時期、日本自身がまだ中国と対等に対峙する自信がなかったことを示している。ところが、

中国に対し日本が抱えてきた自信不足は、日清戦争によって一気に覆され、中国に対し蔑視感さえ形成するようになる。

以上の内容を踏まえて、本論文は、近代の新聞雑誌資料を取り上げ、中国に対する認識の転換をめぐってその軌跡を探っていく。具体的な検討内容について、日本と中国の20世紀前半の約半世紀にわたる戦争と軍事的大規模紛争の背景に、メディア出版物で日本人の描いた中国について考察を試みる。また、日清戦争期は日本人の中国観が大きく変貌したターニングポイントであり、またメディア事業が飛躍的な成長を遂げた時期でもあるため、本論は当該時期の中国報道に重心を置き、三章にわたって具体的な考察を行う。

各章で使用する主な素材として、

第一章 日清戦争期の戦争戯画:『日本萬歳 百

撰百笑』、『团团珍聞』、『時事新報』の戦争戯画等

第二章 『日清戦争実記』(博文館)

第三章 フランス人絵師ジョルジュ・ビゴーの戦争報道画

(イギリス画報紙『ザ・グラフィック』)

第四章 夏目漱石の満韓紀行文「満韓ところどころ」(『東京朝日新聞』)

第五章 芥川龍之介の中国紀行文『支那游記』(『毎日新聞』、『改造』、『女性』)

を取り扱う。また各時期の論調を確認するために、『朝日新聞』や『時事新報』などの新聞記事も参考として取り上げる。

第一章と第二章では、日清戦争期において人気を博した戦争戯画、戦争読み物を考察し、第三章では、日本人の描いた中国イメージを再確認するため、戦場に從軍取材した欧米人絵師の報道画を取り上げて考察する。また第四章及び第五章においては、日露戦争以降における海外旅行ブームの発生という時代背景を把握し、新聞雑誌に掲載された数多くの紀行文から、夏目漱石及び芥川龍之介の作品を取り上げて考察する。

ここで注意すべきなのは、大衆読み物は独立した存在ではなく、近代という歴史背景に依存していたものである。印刷技術の発展はいうまでもなく、民衆に向けて販売されるものである以上(たとえ一定の階層に向けたとしても)、その内容編集は当該時期における民衆の知識レベルや関心事に影響されると考えられる。以下では、各戦争期の特殊性について、具体的にいうと民衆の教育レベル、メディア報道を支える技術、各種の報道形式及び受容度など、種々の要素を参考にしながら、各章で取り扱う素材について紹介していく。

まず、明治維新から第一次世界大戦後における民衆の教育程度を、小学校教育の普及率の変化によって考えてみる(図3)。

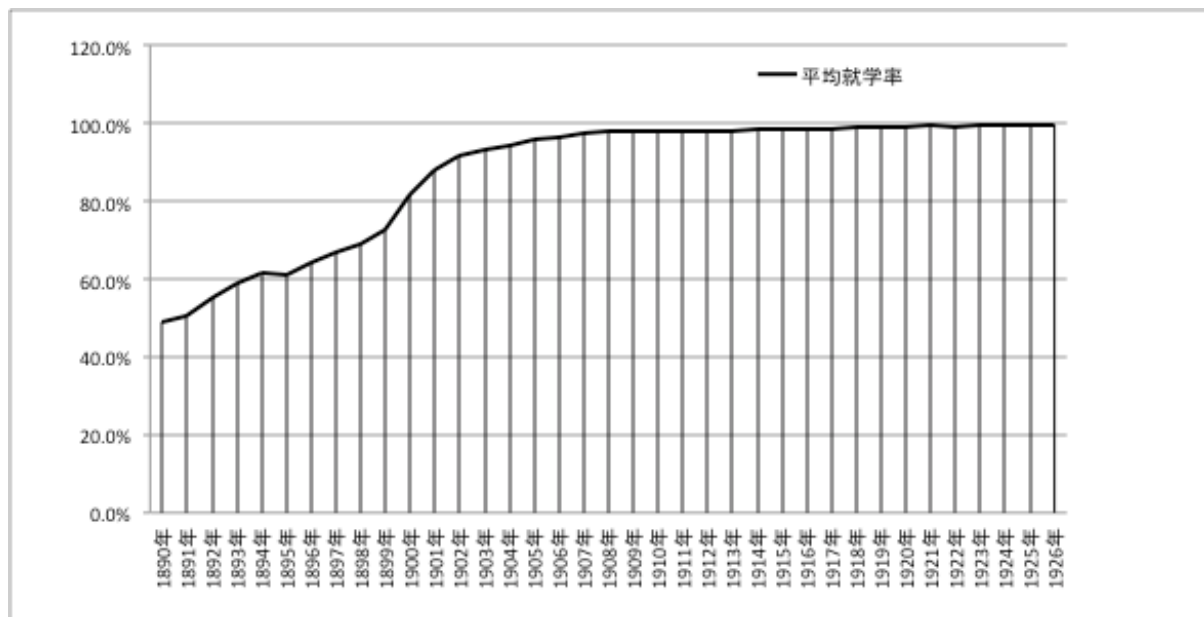


図3 日清戦争以前から第一次世界大戦後までにおける小学校の平均就学率

注) 文部省編『学制百年史』²⁴をベースに作成。

図3で示されたように、日清戦争以前から日露戦争期まで、小学校教育は急速に普及していた。1890年頃の50%前後から、小学校の普及率は日清戦争を経て60%(1895年)前後に増長し、さらに日露戦争期になると94%前後(1905年)に大きく伸びたとみられる。そして、第一次世界大戦期になると、小学校教育は一般的に普及していたことがみられる。

識字率の高まりによって、一般民衆は読書の能力を身につけていく。また、教育程度の向上は、必然的にさらなる知識、情報に対する需要の高まりにつながる。江戸末期から明治初期にかけて、文章テキストの読みやすさの改善、そして印刷技術及び出版業の成長によって、民衆の読書の習慣も「共同体的な音読的・均一的な読書形態から個人的な黙読・多角的読書へ」と移行し、また「反復熟読的な読書」から「消費的な読書」へと形態が変化していったという²⁵。

特に新聞雑誌事業の台頭によって、国民の中では国家の政治から社会全般の情報を消費する習慣が養成されていったと考えられる。また、情報の多様化していったなかで、読者のメディア情報に対する選別の能力も鍛えられていった。情報に対する盲信から脱出していく過程で、最初の読みやすい直観的なもの(戦争戯画など)から情報性のあるものへ、そして単一な報道から多角な報道へ(『日清戦争実記』)、さらに量から質へ(実地の報道)というふうに、

民衆が情報に対する要求が高まっていったのである。

このように、メディア事業は民衆の知識レベルと相互作用しながら成長していったといえよう。その変化をもっともよく反映したのは、報道の活発化した戦争期だと考えられる。以下では、各戦争期の時代背景と結びつつ、本論文の検討素材を紹介していく。

近代日本にとって初めての対外戦争として、日清戦争は民衆に注目されていた。戦争の時運に乗って、錦絵や版画は最後の繁盛を迎えていた²⁶。この時期における代表的な戦争戯画として、「日清戦争 百撰百笑」シリーズ、絵入り雑誌『团团珍聞』、また大新聞²⁷『時事新報』があげられる。

『日本萬歳 百撰百笑』(以下『百笑』と略す)は、日清戦争だけを取り扱う戯画読み物である。戦争中に一枚ずつの形で販売され、戦後は 50 枚揃いの冊子として出版された。そして、前文ですでに触れた『团团珍聞』(以下『団珍』と略す)は、明治 10(1877)年团团社により創刊された絵入り週刊誌である。白黒の諷刺戯画を掲載し、絵のサイズは挿絵のような小さいものもあり、A4 一枚を占める大きめのものもある。また、『時事新報』(以下『時事』と略す)は、明治 15(1882)年福沢諭吉が創刊し、政治関係の新聞報道を主とするものであった。

以上のように、知識人から一般民衆まで、各読者層がよむ戦争戯画を素材にとりあげ、第一章では、戦争戯画のなかで描かれた中国を考察する。

一方、錦絵は戦争報道から数々話題性のあるシーンを切り取り、戦争のイメージに再構成し、読者の共鳴を求められたが、その内容の信憑性は非常に低い。そのため、視覚メディアとして日清戦争によって一時の隆盛を極めたが、読者の情報の迫真性に対する要求が高まっていく中で、錦絵は漸次写真などの資料に取り替えられていく²⁸。

また、錦絵だけではなく、同時期において新聞事業が発足し、各社の新聞雑誌もこぞって戦争の報道を行っていた。勝負を伝える報道をはじめ、電報から、兵士や戦地記者の通信文、さらに戦場写真まで各種の報道形式を試みることによって、新聞雑誌事情は戦争期という短期間で飛躍的な成長を遂げていた。各報道形式の集大成的な存在として『日清戦争実記』が代表性を持っている。

『日清戦争実記』(以下『実記』と略称す)は、博文館によって発行された戦争読み物である。日清戦争そのものを題材とし、1894(明治 27)年 8 月末で発刊され、1896 年まで総計 50 号刊行されたのである。

十年後に同社で発行された『日露戦争実記』と異なり、この時期の博文館は、戦地に従軍記者を派遣せず、他社の新聞記事を組み合わせる形で戦争報道を構成することに終

始したという²⁹。この編集手法は、同社が創設当初で創刊した雑誌『日本大家論集』の手法を踏襲したものだとみられる。同誌は他社の同種類の読み物より絶好の人気を博したが、無断転載で一時著作権の争議を起こし、他社から非難を浴びた事態も発生していた³⁰。一方、新聞記事の著作権が明確化されていなかった近代では、各社の間で記事また写真の転用する現象は珍しくないと考えられる³¹。

このように、『実記』は新聞記事を再整理し、戦況及び従軍体験の報道から、(欧米諸国を含めた)海外通信の情報³²、戦地写真まで多岐にわたった報道形式を取り入れ、より迫真性のある戦争報道を読者に提示した。

戦争当時では、『実記』が爆発的な売れ行きを遂げ、「博文館の事業の礎石を築いた」読み物だと高く評価されていた³³。宣伝ではやや誇大された数値ではあるが、1895 年度だけで総計二百万部の売り上げを誇り、同時期の定期刊行雑誌の中でダントツの部数になっている。浅岡邦雄が博文館社史の原稿である『博文館五十年史稿』によって、さらに信憑性の高い数値に突き止め、第一編は九版まで六万六千余部を発行し、そして終刊の第五十編は総計二万二千の刷り高くらいに達したと提示していた³⁴。戦争の進行状況によって売り上げが変動し、戦争の終結を迎えた後は販売部数の下落がみられるが、それでも、当時の他社と比べるとかなりの売り高だといえる。

この好調な販売について、今まで先行研究の多数は、博文館が社史の『博文館五十年史』で提示した原因と同じく、「毎号四枚の写真銅版印刷の口絵と戦局地図を掲載して大成功を博し」と写真掲載の重要性を論じている。

日清戦争期まで、印刷技術の制限によって、写真の多くは記録の手段として活用されていた。戦場写真は現場を示す証拠であり、戦争の臨場感を読者に味わわせる格好な素材となっている。この意味で、日清戦争の早期から写真を掲載したことは確かに画期的な意味を持ったといえよう。

しかし、『実記』で提示された写真は、一冊百ページ余りの中で、わずか三、四ページの分量しか持っていなかった。また、前掲浅岡の研究ですでに指摘したように、銅版写真の掲載について、『実記』が「先頭をきったわけではない」。『実記』より十日間前に春陽堂が創刊した『日清交戦録』(以下『交戦録』と略称す)は、早くも8月26日(第二号)から銅版写真を掲載しはじめた。そのほか、春陽堂はまた対抗誌『戦国写真画報』(以下『画報』と略称す)を発刊し、「所載の写真を戦闘の景況に限らず、広く範囲を取りて、風俗地理凡て三国の事情にして、江湖が知らんと欲する所の実物を把て之を掲ぐる」³⁵との趣旨を以て、写真を専ら取り扱う雑誌を作

それで、『実記』の人気を一概に写真の掲載で解釈するのは、いかにも妥当だといひ難い。『実記』を対抗誌の『日清交戦録』、『戦国写真画報』に比較してみると、『実記』は月三回、一冊(百ページ余り³⁶)八銭、『交戦録』は月六回、一冊(六十ページ余り)四銭五厘、『画報』は月2回、一冊(四十ページ余り)十二銭の値段で販売されている。銅版写真の印刷がかなり高額だと考えられ、『画報』はほかの二誌より遥に高価になっている。一方、『実記』と『交戦録』は販売の頻度が異なっているが、実際ページ数と値段を合わせると、それほど差異がみられないのである。次に、内容構成の面から考えてみると、三誌の冒頭で掲げた目次は図5になっている。

日清戰爭實況
 日清戰爭實況
 日清戰爭實況
 日清戰爭實況

日本
 日本...
 日本...
 日本...

水紀
 水紀...
 水紀...
 水紀...

文苑
 文苑...
 文苑...
 文苑...

地紀
 地紀...
 地紀...
 地紀...

史記
 史記...
 史記...
 史記...

公報
 公報...
 公報...
 公報...

電報
 電報...
 電報...
 電報...

傳記
 傳記...
 傳記...
 傳記...

發行所
 發行所...
 發行所...
 發行所...

博文館
 博文館...
 博文館...
 博文館...

自序	第九	戰國寫眞畫報	第六卷目次
第一回	一	日清交戰錄第十一號目次	
第二回	二	論說	
第三回	三	戰紀	
第四回	四	兵事	
第五回	五	雜錄	
第六回	六	時事	
第七回	七	電報	
第八回	八	日記摘要	
第九回	九		
第十回	十		
第十一回	十一		
第十二回	十二		
第十三回	十三		
第十四回	十四		
第十五回	十五		
第十六回	十六		
第十七回	十七		
第十八回	十八		
第十九回	十九		
第二十回	二十		
第二十一回	二十一		
第二十二回	二十二		

15

目次の内容が示したように、『実記』の内容は『交戦録』と『画報』よりバラエティを持ち、充実した感を与えている。戦争状況をリアルタイムで報道する「本紀」(第 31 編以降は「戦争実記」と改称された)をはじめ、戦争の関連知識を紹介する「史伝」、「地理」、そして当時の流行に即して俳句などを取り扱う「文苑」、また国内外の戦争評論と時事を揃った「内外彙報」³⁸、戦争に関係したあらゆる情報を網羅したことが特徴的である。

それに対し、『交戦録』の目次からみると、各項目は「論説」、「戦紀」、「兵事」などと簡略にタイトルづけられ、戦況から国家の経済や時事の論説が大半で、内容編成は少々堅い印象を与える。また、『実記』の「地理」欄のように、戦争の解説が少ないため、読者に一定の戦争知識を要求したと考えられる。そして、『画報』はさらに内容を限定し、毎編では写真だけを取り扱い、リアルタイムの戦争報道を行っていない。

つまり、博文館の名のごとく、各方面の情報を網羅した点で、『実記』は『交戦録』と『画報』より大きな優勢をみせている。販売の好調は、単に技術の革新を代表した写真の掲載によるものではなく、多種の情報を取り込む内容編集に負うところが大きく、一種の博文館なりの経営戦略だといえる。また、日清戦争の戦況がほぼ定着した時期で、博文館は『太陽』(1895 年 1 月創刊)などの総合雑誌を新たに創刊したが、その内容編成も一部『実記』を参考に行っていた。

以上の考察を踏まえて、本論文は第二章において『日清戦争実記』の記事(戦況報道と各種の雑報)に着目し、代表的な戦況報道、また各種の雑報で表出された「中国」を検討する。

架空の戦争錦絵より、『実記』ははるかに信憑性があったとはいえ、『実記』の記事内容はやはり早期の小新聞の性格から脱していなかった。早くも安南戦争の時期から、戯作者雑賀柳香が清仏戦争をテーマにした『安南戦争実記』³⁹を執筆した。冒険商人による清仏戦争の見聞を記した作品で、その時から著者によって「記録・報道」の意識が存在したと考えられていた

⁴⁰。

しかし、文章の中で「リビエール氏は少も騒がず部下の兵士を指揮して雲霞の如き賊兵を相手に死力を尽くして防ぎ戦ふと雖も衆寡敵し難…」⁴¹など、誇張的な表現が頻出し、「新聞雑報をひきのばしたもので、文飾の多い三面記事だと評価されたのである⁴²。

その一方、『実記』のメイン記事となった戦況報道においても、「死あるのを知つて、生歸を歸せざる勇猛無双の我軍は争かでか踟躕せん、前後左右に勵まし、死ねや死ねやと叫びつゝ、獅子奮迅の勇を顯はし」⁴³など、『安南戦争実記』に類似した稚拙な表現が多数みられる。

周知のように、江戸末期から戯作の衰退を迎えた戯作者は、明治期になると、小新聞の執筆

者に転身していった。明治初期での新聞は、大新聞と小新聞に分けられているが、小新聞は多くの場合戯作者によって執筆されていた⁴⁴。『実記』の報道からも戯作のような誇張的な表現がよくみられる。

それで、内容編集の際に新聞記事に対する取捨選択はまず避けられなく、戯作風に誇張的に再現された報道は、さらに信憑性を影響したと思われる。本当の実況報道というより、報道を「実見したように」見せた性格が強くみられる。

ここでは、より信憑性のある戦争報道を検討する必要があるが出てくる。確かに、この時期では戦地に赴き直接従軍取材を行った日本人が多く存在していた。その一方、日露戦争期と違って、対外戦争の初体験となった日清戦争について、当時の民衆がこぞって支持していた。たとえば、日露戦争期で猛烈な反戦論を掲げた内村鑑三も、日清戦争で自ら「日清戦争の義」を書いて戦争支持の姿勢を示していた⁴⁵。

それで、日本人の中国に対する描き方を再確認するには、第三者の記録が必要に思われる。そこで、戦場に赴いたフランス絵師ジョルジュ・ビゴーが描いた戦争報道画は、格好の参考素材となっている。

ビゴーは 1882 年で来日し、十数年の間で日本文化に深く浸かり、近代日本を反映した数多くの絵作を描き残した人物である。彼は近代日本の軍事改革を目撃し、フランスの軍制からドイツ軍制の採用に転換した動向にも注目していた。それに加えて、ビゴーは母国の普仏戦争を体験し、戦地を描いた経験を持っていたため、より冷静な姿勢で日清戦争をみていたと考えられる。このように、近代の日本を見守ってきたビゴーが描いた戦争絵は、特に検討するに値する。それで、本論文は第三章において、『ザ・グラフィック』に投稿したビゴーの報道画を素材にして、彼が描いた日清戦争及び戦時下の人々について考察する。

ビゴーの報道絵を掲載したイギリスの週刊画報『ザ・グラフィック』について考えてみると、この新聞紙は日清戦争期から、すでに写真や画像を独立な報道記事として取り扱っていた。同時期でまだ戦争絵を挿絵として取り込んだ日本新聞と比べると、『ザ・グラフィック』はより一歩進んだとみられる。

また、ビゴーの報道画について述べると、彼は一部の報道画の制作に戦場写真を参考していた。一方、外国人として、戦場取材の制約があるのではないかという疑問点もあげられる。しかし、ビゴーは私蔵の写真だけでなく、他人の写真を転用した場合も見られる。その情報源を確認するために、ここでは簡単に日清戦争当時の写真技術の普及を触れておく。

まず、技術面から考えると、戦争以前から早取り写真術がすでに日本に伝わっている。『東

京朝日新聞』において 1894 年の広告から、前述の品川写真店をはじめ、都屋薬房(「簡単早取写真機」、『東京朝日新聞』,1894 年 3 月 4 日)、東京写真館「新奇發明 軽便早取写真器械」(『東京朝日新聞』,1894 年 6 月 8 日)など、「早取り寫眞術」に関連した宣伝も見られるようになっている。

実際、日清戦争前から、写真技術に対する関心がかなり高まっていた。たとえば、品川写真店は、1893 年 12 月から写真術通信伝授の広告を出している：

弊店の寫眞術ハ大に好評を博し授傳生の多き數千名に及び今般の祝意を表し五百名を限半減價にて傳習す全國有志の士至申込あれ器械入らず早取り寫眞術

通信教授料一圓の所半減價五十錢卒業期三日(攻略)

(広告、『東京朝日新聞』,1893 年 12 月 7 日)

いわば、日清戦争直前から、写真技術がすでに普及し始め、一定の金額を払えば写真店で学ぶことができるようになっている。そして、1894 年の 4 月で日清の関係は緊張感が募っていた中で、品川写真店に届いた申請者の礼状(写真術勉強の申し込み)は、「數萬通」にも達した現象がみられた⁴⁶。その繁盛の様相を描く絵に礼状と謝状を合わせて、広告欄の一面を占めていた。

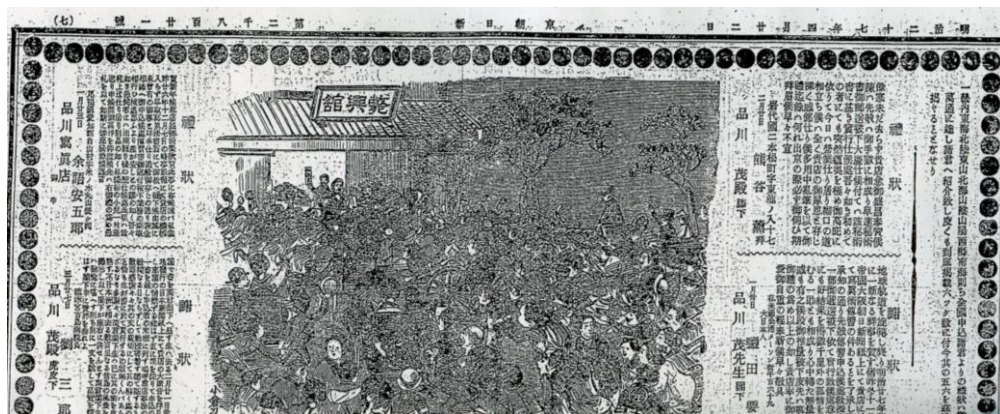


図 6 品川写真館の写真術通信伝授の広告(『東京朝日新聞』,1894 年 4 月 22 日,第七面)

注) 広告の冒頭では、「全國申込諸君よりの禮状ハ數萬通に達し諸君へ紹介致し度くも到底掲載六ツケ敷に付今其の五六を茲に掲ぐることをなせり」と書いている。



図 7「満員に付謝絶す」、『東京朝日新聞』,1894 年 6 月 24 日,第六面

この好況がさらに二ヶ月続き、戦争直前の 1894 年 6 月の時点になると、「満員に付謝絶す」(図 7)とのように、品川写真店はわざと満員の知らせを新聞紙に掲示したのである。いわば、写真技術の習得は、ある意味で当時一種の流行になったとも考えられる。

また、日清戦争が勃発した直前で、「平民寫眞師」が詐欺を働いた事件も起こったのである：

平民寫眞師市川繁次郎と云ふは朝鮮へ渡りて愈よ開戦となりたらバ其模様を寫眞に取り本國へ送りて大金を儲けんと計畫したれど旅費ハ勿論寫眞機もなきに悪策を考へ戸主金丸より六十一圓を詐取し又同市長島町の寫眞師前木幾太郎方より日光へ行くからとて三日間の契約にて寫眞器械を借り直に神戸へ行きて…

(「朝鮮へ渡航を企て詐欺を働く」、『東京朝日新聞』,1894 年 7 月 27 日)

旅費や写真機の貸借代を詐取し、戦場で撮影した写真によって儲けようとした事件だが、平民写真師の詐欺が罪に問われた一方、朝鮮への渡航が問題にされていなかった。つまり、戦前から朝鮮への渡航はそれほど制限されていなかったと推測できる。また、写真機が高額なもの、賃貸の契約さえ結べば機械をもらって撮影もできることがうかがえる。

また、当時写真師はかなり儲け仕事で、戦場写真は普通に流通したものだとうかがえる。ちなみに同時期の写真の値段について、「奇々妙々之寫眞」⁴⁷と題した記事では「一組(四枚)三十錢」と、また戦時の「海陸軍大激戦現場写真」は「一組十二枚十五倍目鏡付き一圓」⁴⁸とのように、主に一枚は 8 錢前後となっている。それに対し、『朝日新聞』は一枚 4 錢となり、当時では写真がかなり高額なものだと確認できる。

さらに、当時では戦場の写真をとった兵士も存在したのである。

征清軍の起りし以来、府下写真師の家は朝より夕に至る迄非常の雑沓にして、或は兵士の自ら撮影して親戚故舊の許に贈るあり、或は親戚故舊の特に従軍者を同伴して写真するあり(後略)

(「写真屋は皆ホク〜」、『大阪毎日新聞』,1895年3月5日)⁴⁹

以上の内容から、ビゴーの戦争情報源はある程度確認することができる。そこで、本論文は、ビゴーの写真帳また関連の写真資料を参考にしながら、ビゴーの作画する方法を考察し、写真の模写と想像絵を区別し、ビゴーが作画した意図を推測する。その上、ビゴーが来日以降に発表した風刺も参考し、彼が報道画によって表現した戦争と日中両国を検討する。

日清戦争の戦後になると、文学者という身分は独立の職業として成立し、新聞報道において多様な論調が現れるようになったのである。日清戦争後を迎えて、日本主義論が盛んに唱えられた同時に、社会が被った甚大な損失も気付かれ、一部の知識人の中で戦争に対する反省の論調が台頭したのである⁵⁰。それに従って、中国に対する冷静な姿勢を呼びかける声も上がり、その証明として、以下の記事があげられる:

我國人の清國に対する、古昔は何事も彼を師としたれば、中華中國大國などと尊崇し、支那人の言行は處世の金科玉條なりと信ぜられたりしに、…其後二十七八年の戦争に克ち、清國は引き續いて漸く其弱點を暴露せしかば、子供迄も清國は我より劣れるものと思ひて、清國人を見て嘲弄の言を發すること、恰も米國の惡小年が日本人に對するが如くなるに至れり…日清戦争當時に嘲罵御免を禦りし新聞記者は、今も尚其筆癖を脱せず。何か清國に事有れば、心にも無き嘲弄の文字を羅列して紙面を填むるの惡風を脱却せず(中略)

近來清國の朝野には、日本文を解する人士非常に増加したれば、…また厚く日本新聞に注意し、日毎に其記事の要領を調査せしむとも云へり(中略)

清國及其國民に對しては今尚往々不謹慎の筆を弄することも有れば、失敬ながらこの一點に關し、全國の同業者に向ひ一層の用心を促さんと欲す。日清兩國利害の上に於ては、各人皆別見有り。敢て歩を一にするを望まず。唯無用の言辭に於て隣人の感情を害し、併せて自己の徳を傷つけざらんことを切望す(後略)

「小事は大事」、『東京朝日新聞』,1909年9月27日

また日露戦争以降、日本人は中国旅行を盛んに行いはじめた。その背景には、交通運輸の整備⁵¹や世界中で起こった旅行ブーム⁵²、そして近代化した日本が経済的余裕を持ち始めたことや、伝統文化を守る意識の芽生えなど様々な要素が影響していた。そのなかで、多くの日本知識人が中国へ出向かい、自分の目で当時の中国の様相を確かめたのである。

そして、彼らが書き残した紀行文は、また一般読者が身近に中国を認識する手段となり、いままで戦争に関連した情報だけでなく、中国社会そのものを身近でリアルに理解する価値の高い資料になっている。その中で、中国趣味を貫いた紀行文や中国を軽蔑的に描く紀行文も存在し、また中国の現実を熱心に語る紀行文もみられる。

代表的な紀行文として、漱石の「満韓ところどころ」が挙げられる。1909 年、漱石は満州鉄道会社の総裁に新任した中村是公から頼みを受け、中国東北及び朝鮮旅行を行っていた。帰国後間もなく、彼は旅行の体験を「満韓ところどころ」と題した紀行文を『東京朝日新聞』に掲載したのである。掲載当時から批判をうけてきたこの作品は、文学の面からいうと、漱石の代表作とは言い難い。しかし、1909 年新聞紙法の発布によってさらに厳しくなった検閲制度⁵³、親友の招待に対する考慮、また満州鉄道会社と中国内地両方の体験など、様々な要素に影響されて綴られたこの紀行文は、却って近代の様相を追跡する格好な素材だと考えられる。

また、芥川龍之介が第一次世界大戦後で発表した中国紀行『支那游記』も、漱石の紀行文と類似している。第一次世界大戦後、芥川も中国に旅立ち、新聞取材を行ったのである。漱石のように上層部の招待をうけていなかったが、芥川は記者の役目を尽くして、中国の南から東北まで多くの地方を遍歴していた。また、紀行文『支那游記』の内容は、興味深いほど漱石と類似した部分があり、中国に対する辛辣な論調も一時先行研究の中で議論を起こしたのである。以上の考察を踏まえて、本論文では第四、五章で、それぞれ漱石の「満韓ところどころ」と芥川の『支那游記』を取り上げて具体的な検討を行っていく。

表1 戦争読み物の目次内容の比較(10月発行の紙面を例に)				
目次の内容	日清戦争実記 (第五編、1894年10月9日) 口絵(写真計14枚)		日清交戦録 (第11號、1894年10月11日)	戦国写真画報 (創刊号、1894年10月)
			論説 支那征伐勝利の要素	第一圖 陸軍大将大勲位有栖川熾仁親王殿下 第二圖 内閣總理大臣伯爵勲一等伊藤博文公 第三圖 海軍大臣兼陸軍大臣海軍大将勲一等伯爵西郷従道公 第四圖 内務大臣勲一等伯爵井上馨公 第五圖 清国皇帝 ・ ・ ・ 第十一圖 帝国軍艦松嶋號 ・ ・ ・
	本紀 平壤攻撃の部署 清軍の防禦 我軍先鋒黃州節度使を詰責す 朔寧枝隊大同江を渡る 混成旅團大に船橋里に苦戦す 元山枝隊順安を取る 朔寧枝隊牡丹臺に迫る 元山朔寧の二枝隊牡丹臺を陥る 我軍遂に平壤を陥る 黄海海戦の詳況 黄海海戦餘聞		戦紀 黄海之海戦	
	史傳 聯合艦隊司令長官海軍中将伊東祐亨君傳 赤城艦長故海軍少佐坂本八郎太君傳 松島艦分隊長故海軍大尉志摩清直君傳 故陸軍大尉金藤之明君傳 橋立艦分隊長故海軍大尉高橋義簡君傳 故陸軍中尉細井有順君傳 故陸軍少尉竹内英男君傳 松島艦分隊長海軍少尉伊藤満嘉記君傳		兵事 支那事情(接前)	第廿四圖 清國北京宮門 第廿五圖 同上 第廿六圖 同北京萬壽山離宮 第廿七圖 清國軍艦定遠號 第廿八圖 同靖遠號
	地理 北京…天津…京城…今後の戦地 …北清用地里程一覽…清國沿海沿江地名讀方		雜録 智利國內亂中海軍に關する事項 軍歌二首	
	文苑 敵愾餘聲、詩、歌、俳句、…		時事 大元帥陛下の吳行幸 金鵄勲章年金令 伊東司令長官の奉答 坪井司令官の奉答文 戒嚴令宣布 石井糧餉部長の報告 清國軍艦及び兵器を購入す 廣東及び南洋艦隊 清帝赫怒張鳳綸を逐ふ 軍艦赤城乗組員の手翰其他十數件	
	内外彙報	日本 樺山中將白旗を棄てしむ 阪元少佐笑つて眠す 黃村詩伯愛兒を励ます 軍事公債募集の結果 大山陸軍大臣の訓諭 瀬戸内船舶通行禁止の告示 屯田兵の配備 新砲術の實驗 軍用ソツプの發明 藤島武彦氏 名誉の戦地死亡者	支那 盛京省の兵備 安徽省の牡丹李爺の門に集る 萬里の長城と清人 長爪と清國軍人 清國各廳の實存銀額 清の支那統一と豊臣秀吉 旅順半島と冬籠り 清國の貿易戰略 黒艦と黒服 清兵清艦を撃たんとす 遼陽事件に就き支那政府の贖罪 日本雜貨輸入嚴禁の省令 佛艦朝鮮に至る 好む所は唯亞片と妾 支那の軍費 大院君は清國の罪人 兵卒を罷めると盜賊となる 清國廣東省日本雜貨の輸入を禁す 明朝の遺臣八十萬人 哥老会の實狀 哥老会中の釋元恭氏	朝鮮國 朝鮮古代の富強 現今貧弱の大原因 官人は皆盜 凌虐の一斑 東學黨の述懷詩 韓人は無邪氣なり 京城と釜山間道路工事 韓廷の大使と公使 官妓八十人の注文 局外國 日清戦争と歐米諸国の意向 歐洲諸國常備兵の増加 小銃射撃の數と負傷者の割合 新發明の爆裂藥 本邦製產品輸入禁止
			日記摘要	

- 1.大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』(関西大学東西学術研究所研究叢刊,1967年,p.9)において、「唐王聿鍵ノ唐ヲ取テ福建及臺灣舶人ヲ呼ブ號ニシテ、仍ホ是明人ナル意ヲ示ス」ものと反清政府の思想とみる説もあるが、唐船は江戸時代中国貿易船の代名詞とする汎用語とみるべきだと考えられている。
- 2.浦廉一「唐船風説書の研究」、『帝國學士院紀事』5(1),1947年,pp.54~84を参考。
- 3.岩生成一「近世日支貿易に関する数量的考察」、『史学雑誌』62(11), pp.981~1020, 1953年11月。
- 4.前掲大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』,p.8。
- 5.中国宋朝に興した儒学の一流派。
- 6.吉田精一「「小ばなし」のおもしろさ」、『近世思想家文集』月報、p.11。
- 7.当時一番繁栄した唐代を中国の代名詞としていたので、ここで唐は中国を意味している。
- 8.『荻生徂徠』、山路愛山、民友社、1893年。
- 9.住田正一編、『日本海防史料叢書』第二巻、p.8。
10. 近世日本の有名な教育者、画家。香川県立高松工芸高等学校および佐賀県立有田工業高等学校をそれぞれ創立し、校長を務めた。
- 11.納富介次郎『上海雜記』,小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第1巻(ゆまに書房,1997年6月)に収録されている。
- 12.北方のえびす、異民族、蛮人を意味する。
- 13.日比野輝寛『贅舘録』,p.62(前掲小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第1巻に収録)より。
- 14.前掲納富介次郎『上海雜記』,p.19,29より。
- 15.前掲納富介次郎『上海雜記』,p.15より
- 16.オランダ文化を意味する。
- 17.『世界国尽;窮理図解』、『福澤諭吉著作集』第1巻,慶応義塾大学出版会,2001年3月。
- 18.前掲『世界国尽』より。
- 19.台湾出兵は日本側の呼び方で、1874年日本が台湾を侵略することをさす。
- 20.『正岡子規、従軍す』、末延芳晴、平凡社、2011年5月25日より。
21. 土屋礼子編 CD-ROM 日本錦絵新聞集成, 文生書院, 2000年。
- 22.小松裕「近代日本のレイシズム:民衆の中国(人)観を例に」、『文学部論叢』(78),2003年3月,pp.43~65。
- 23.聞蔵Ⅱビジュアル『大阪朝日新聞』, 1885年1月25日。本論文では、主に同データベースより『朝日新聞』の内容を引用している。
- 24.帝国地方行政学会,1970年10月
- 25.永嶺重敏『雑誌と読者の近代』, 日本エディターズスクール出版部,1997年7月16日
- 26.井上祐子『日清・日露戦争と写真報道:戦場を駆ける写真師たち』を参考,吉川弘文館,2012年7月,pp.20~26。
- 27.近代新聞は、読者層によって、大新聞と小新聞に分けられる。大新聞の読者層は政府関係者と知識階層などを主にし、それなりに、大新聞の論調も多少政府の姿勢に影響されている。それに対し、小新聞は知識レベルのより低い大衆に向けて発行され、誌面には全部ルビを施し、内容もより自由で、民衆の興味を引きやすい記事が中心である。(山本武利『新聞読者の歴史』,法政大学出版局,1981年)
28. 同上。
- 29.鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』, 思文閣出版, 2001年7月
- 30.原秀成「雑誌の法と博文館:整えられる近代」,『日本研究:国際日本文化研究センター紀要』(23),2001年,pp.143-178,viii-ix
- 31.著作権条例は、明治30年以降になってはじめて条文化に整えられたが、それにしても、新

聞記事の著作権は不明確のままであった。小新聞の先駆者となる仮名垣魯文の盗作事件も左様であり、著作権意識のまだ薄い明治初頭では、無断の転載が珍しくない問題だといえよう(『<盗作>の文学史』,新曜社,2008年6月,pp.21~62より)。

32.この時期では、博文館で内外通信社の通信を取り入れる試みはあったが、日清戦争期では「ルーター電報(外国電報の通信)は世間にいまだ重視され」ていなかったため、報道の効果が少なく、一時「事業が毎月収支償はず」という状況もあったという(坪谷善四郎著『博文館五十年史』,博文館,1937年6月)。

33.前掲『博文館五十年史』より。

34.浅岡 邦雄「明治期博文館の主要雑誌発行部数」,『明治の出版文化』,pp.143~177

35.『東京朝日』,1894年8月18日,p.6

36.以上のページ数は、広告のページを除いて統計した数値である。

37.目次の具体的な内容は、付録の表1に示している。

38.この項目欄は、二回の改編によってさらにいくつかの項目に細分されていた。

39.明治16年7月、近代デジタルライブラリーより公開されている。

40.小笠原幹夫「戯作者たちの自由民権—『安南戦争実記』をめぐる—」,『文学近代化の諸相Ⅱ—江戸と明治のはざままで—』,高文堂出版社,平成6年3月5日,pp.166~186

41.前掲『安南戦争実記』,第十ページの右側。

42.前掲小笠原幹夫「戯作者たちの自由民権—『安南戦争実記』をめぐる—」,『文学近代化の諸相Ⅱ—江戸と明治のはざままで—』を参考。

43.「混成旅團大に船橋里に苦戦す」,第五編,pp.18~22。

44.日清戦争期になると、大新聞と小新聞の性格を融合する中新聞も現れていた。

西田長寿『明治時代の新聞と雑誌』,志文堂,1966年

45.「日清戦争の義」,『明治ニュース事典 第五巻』(明治ニュース事典編纂委員会編纂、1985年1月18日発行)

46.広告,『東京朝日新聞』,1894年4月22日より

47.『東京朝日新聞』,1892年12月20日より

48.広告,『東京朝日新聞』,1894年10月3日より

49.「国会揺籃期:明治二十四年~同二十六年」,中山泰昌編著『新聞集成明治編年史』第八卷,本邦書籍,1982年。

50.岡野他家夫『明治言論史』原書房,1983年,pp.134~142

51.日露戦争以降、「朝鮮鉄道と満鉄が直接連結することによって、いわゆる朝鮮・満州ルート of 日本とヨーロッパ間の国際連絡運輸がはじめて実現された」ことである(劉建輝『魔都上海:日本知識人の「近代」体験』,講談社,2000年6月より)。

52.1912年3月「日本郵船、東洋汽船、満鉄などの共同出資で、ジャパン・ツーリスト・ビューロー(JTB)が設立されたことをさす(前掲劉建輝『魔都上海:日本知識人の「近代」体験』より)。

53.金子喜三『新聞法制研究』,芦書房,1966年4月,pp.37~40。

第一章 日清戦争期の戯画が描いた中国

はじめに

日清戦争は、日本にとって近代最初の対外戦争であり、また日本人の中国観が劇的にかわるターニングポイントともいえる。最初の本格的な外征のために、民衆の戦争に対する関心が高く、不景気にもかかわらず、戦争読み物の販売が絶好調となっていた。

その中でも、版画読み物、特に戯画¹は、民衆の間で人気を博していた。戯画とは、「ふさげてかいた絵、滑稽な絵、諷刺的な絵の総称」²で、漫画や諷刺画を総じていう。

戦争時における日本で版画的な売れ行きについては、当時の『読売新聞』(1894年8月9日)で、「都下の絵草紙屋は大に忙しく、新絵出版を競ふて恰も戦争の如くなる」が、「現に出版せるもの」として「凡そ廿五種にして、摺立つるや否や売捌きは争って之を持ち去る、故に売子は全く鼻が明き内外大混雑を極め」たという記事が掲載され、戦時において、版画は爆発的に売れたことが分かる。民衆受けを狙ったため、敵国である中国についての「あざとい」表現や誇張した表現は、当然多く存在したと考えられる。

撮影技術がまだ発達していない近代では、絵は最も直観的に物事を伝えるものだと考えられる。近代版画読みものを素材にした研究については、すでに石曉軍著の『「点石齋画報」にみる明治日本』³及び、中野美代子・武田雅哉編訳の『世紀末中国のかわら版—絵入り新聞「点石齋画報」の世界』⁴などがあり、『点石齋画報』という中国の近代版画を取り上げ、中国人の日本観を考察している。石曉軍は、『「点石齋画報」にみる明治日本』において、従来中国人の日本観を論じる際に使った素材は、「ほとんどが歴代の中国正史の日本伝を始めとする日本関連記事、もしくは中国民間の文人や僧侶の手による日本印象記や旅行記などの文字史料」だと指摘し、絵画は「一層明瞭に中国の対日認識を反映する史料」と述べ、近代版画の価値を主張している。同じく日本版画も、日本人の戦争観や中国観を考察するに重要な素材ではないかと思われ、本章で取り上げて考察したいと思う。

日清戦争期の戯画に注目し検討した先行研究として、酒井忠康、清水勲編『日清戦争期の漫画：G=ビゴー、田口米作』⁵、滝澤民夫『戦時体験の記憶文化』⁶、同「日清戦争後の「豚尾漢」的中国人観の形成」⁷、同「日清戦争後の「豚尾漢」的中国人観の形成(2)」⁸、小松裕「近代日本のレイシズム：民衆の中国(人)観を例に」⁹などがある。

清水は、戦争前後の日本国内の状況に焦点を当て、戦争期でのビゴーと田口米作の戯画を列挙し、内容の紹介を行った。しかし、中国に関する戯画は2枚に限られ、詳しく分析が行われていない。また日清戦争中に発行された戯画もほとんど紹介していない。

滝澤は、戯画入り雑誌『団団珍聞』を素材にし、戦争期の戯画に描かれた「豚尾漢」の図像を紹介し

た。また、小松も、近代日本人の中国蔑視観の形成に注目し、明治初期における『団団珍聞』で掲載された戯画について言及している。滝澤や小松の論説は、共に『団団珍聞』の図像を紹介することに終始し、戯画の内容に関する分析は詳しく行っていない。

以上の研究状況をふまえ、本章では、日清戦争期の戯画に描かれた中国像について考察する。日本人は戦争の真っ直中で敵国(清国)や敵兵(清兵)をどのように描き、民衆の戦意を高揚させていったのかを検討する。なぜまた、プロパガンダ的戯画が日本国民に受け入れられていったのかについても考えていきたい。

第1節 戦争期発行の戯画及び主な内容

1.1 検討素材について

日清戦争期における戯画は、新聞雑誌に登載されたもの及び、単枚の形で発行されたものに分けられる。本章は、当時日本の読者層が熱狂的に受け入れた大新聞『時事新報』、絵入り雑誌『团团珍聞』、戯画読み物『百撰百笑』⁹を素材に検討していく。

『時事新報』(以下『時事』と略す)は、明治 15(1882)年福沢諭吉が創刊し、政治関係の新聞報道を主とするものであった。当時の中国¹¹に関する論説も多く、一定のレベルを持つ知識人を対象にしたと考えられる。日清戦争に入ると、日報である『時事』は、2、3 日間隔で戦争をテーマにした戯画を掲載しはじめた。形態は、A5 の半分ぐらいの大きさで、白黒のものが主である。

『团团珍聞』(以下『団珍』と略す)は、明治 10(1877)年团团社により創刊された絵入り週刊誌である。白黒の諷刺戯画を掲載し、絵のサイズは挿絵のような小さいものもあり、A4 一枚を占める大きめのものもある¹²。風刺絵を通じて、『団珍』は民間の事件をはじめ、大胆に社会問題を取り上げ、政府の問題も掲載し批判している。「团团」は伏せ字の「〇〇(まるまる)」を意味し、まさに絵入り雑誌『団珍』の性格を的確に表現している。刊行以来、特に日清戦争期には、同じ絵入り雑誌の中¹³でも、発行部数で高い割合を占めていた¹⁴。文章にすべてルビが振られており、一般民衆に親しみやすい雑誌だったと考えられる。日清戦争期において、『団珍』が掲載した戯画は百枚以上に達し、主筆絵師の本多錦吉郎と田口米作は、当時辛辣な諷刺手法で名を知られていた。

『日本萬歳 百撰百笑』(以下『百笑』と略す)は、日清戦争だけを取り扱う戯画読み物である。戦争中に一枚ずつの形で販売され、戦後は 50 枚揃いの冊子として出版された¹⁵。戦中で販売されたものとしては、『時事』や『団珍』より遥かに大きい A3 サイズである。色の付いた風刺絵と絵解き文章を1枚の構図に表現し、絵解き文にすべてルビが振ってある。一枚ものであることと相まって、非常に民衆に親しまれやすいものであった。主筆絵師はもともと『団珍』で執筆した小林清親で、解説文を担当したのは骨皮道人である。小林清親は、伊藤博文と親交を結んだ絵師で、政府との関係が深い。骨皮道人は当時、笑話文学で一定の知名度を保ち、日清戦争期、中国関係の作品は年間 10 冊にも達している。当時『百笑』は、「江湖の喝采を博し東京の紙問屋をして為に紙価を貴しめたる」(『百笑』の「口上」より)とあることからわかるように、巷間で大人気を博した。

1.2 戦争戯画が取り扱う主な内容

『時事』では、日清戦争期を題材にして、戯画を続々掲載し始めた。読者が一定の政治知識を持っていることを前提にした内容であった。例えば、図 8¹⁶にみられるように、タイトルなしのものも多く、図像

だけで内容を読者が充分読み解くことができるのを前提にしていたことが分かる。そして、説明となる解説文もかなり少ない。¹⁷

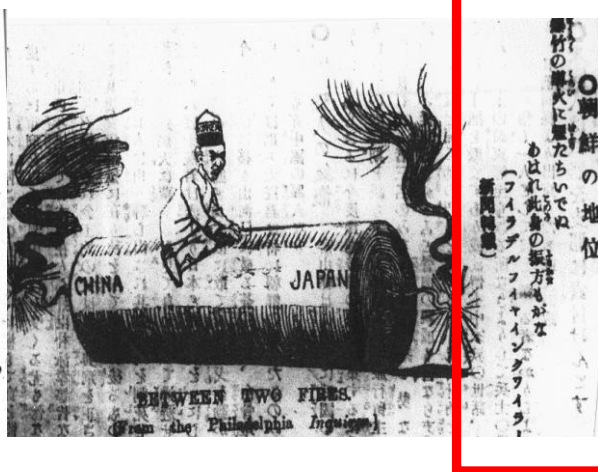


図8 無題(『時事』1894年7月8日より) 図9 「朝鮮の地位」(『時事』1894年8月28日より)

また、内容について、欧米新聞紙から転載した戯画(図9)も存在している。清国の劣勢をもじった戯画が多く、戦いに勝っている日本そのものを表現したものは少ない。弱い中国に注目し諷刺するものが主である。ここに転載したもの以外では、日本のイメージが登場することは比較的少ない。

清国の敗戦という結果を強調するもの以外では、清国の内情を分析し、滑稽な形で敗戦の原因を提示する傾向を持っている。清軍隊に内在する問題、たとえば、出陣した兵士の未練(図10)、行動の鈍さ(図11)などを詳しく取り上げて諷刺し、当時の中国の劣勢や敗因を図像に表現してみせる。

つまり、『時事』の戯画は、いかに清国が弱兵国であり、軍隊の規律も乱れ、戦意も低いのかということ、これでもかといわんばかりに描いてみせる。知識人の政治に対する関心を満足させるための努力がうかがえる。国際関係を理解させた上、清国に注目したものが主で、清国敗戦の原因を提示するなど、深い分析を入れたところは特徴的である。



図10 「旧式の清国兵装」(『時事』,1894年9月9日より) 図11 「知らず臀の重さ幾貫なるを」

を」(『時事』,1894年7月25日より)

次に、『団珍』では、日清戦争が開始する直前の6月30日から、清国関連の戯画が急激に増え、日本の戦勝がほぼ決まった1894年の12月までに、計116枚の戯画¹⁸を掲載していた。数日間隔で戯画を掲載する『時事』と違い、『団珍』は、毎号戯画が掲載されている週刊誌であった。絵と説明文の組み合わせという形で描かれ、『時事』のように一定の政治状況や戦争過程が分からなくても、説明文を読めば、絵解きができる形になっている。内容が比較的に理解しやすく、まさに一般民衆に向けたものであった。

開戦直前の6、7月において、『団珍』の戯画は、清人を朝鮮から追い出す図像(図12)¹⁹や、日本の強さを強調したりするもの(図13)など、中日韓の国際情勢を描いたものが多い。

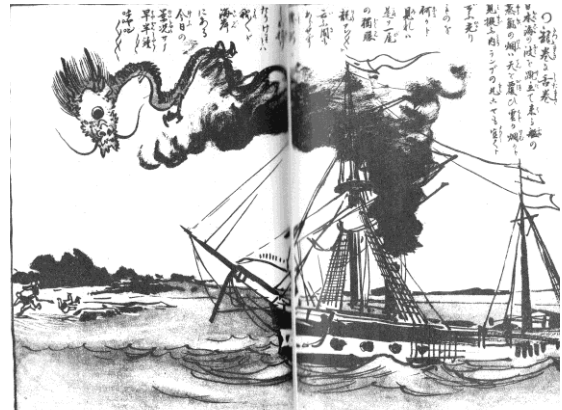


図12「鶏に蛇」(『団珍』,1894年6月30日より) 図13「龍巻に舌巻」(『団珍』,1894年6月30日より)

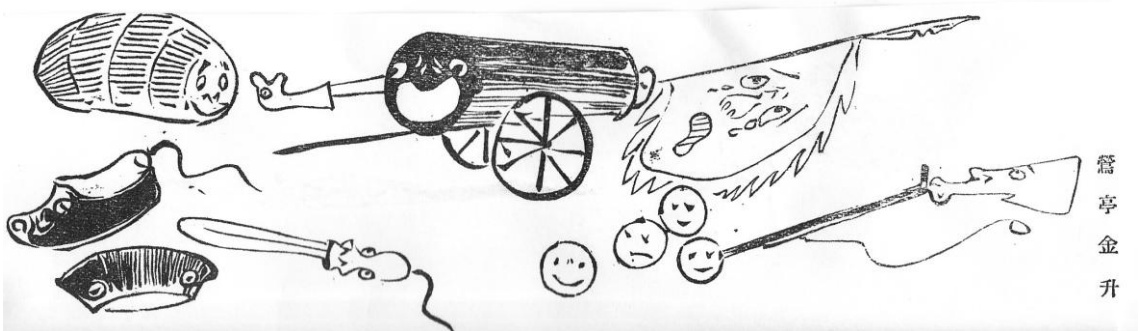


図14「分捕もの展覧会」(『団珍』,1894年8月18日より)

8月初頭の『団珍』の戯画は、日本の強さと清国の弱さを対比するものが多かったが、「分捕りものの

展覧会」(図14)(8月18日)と題した一枚をはじめ、清国からの分捕り品など、証拠を提示しつつ、清国敗戦状況を証明する題材が次第に多くなっていく。

詳しくみると、清国軍の敗戦を示す戯画が多数を占めている(図15)。清国の敗戦を強調するために、戦争での清兵死者や捕虜の夥しさ、分捕り品の多様さや敗戦した清軍の悲惨な様相など、多様な題材を取り上げている。

敗戦による清国の窮境を表現した絵も少なくない(図16)。清国軍の敗戦を諷刺するものをはじめ、清国の領土の日本軍による占領、清国執政者の失脚、国際地位の低下などを強調する絵が多く描かれるようになっていく。読者は、開戦後たった2ヵ月で破竹の連勝を続ける日本軍の姿を戯画の中に見ることになる。



図15「萬死節」(『団珍』,1894年8月4日より) 図16「役者と人足」(『団珍』,1894年10月3日より)

つまり、『団珍』は『時事』と同じく、清国の敗戦を中心にした戯画を掲載している。しかし、清国と日本のイメージが同時に戯画に出現したものが多く、両国の対比が頻繁に図像の中に表現されている。また『時事』のように、敗戦の原因を紹介し²⁰諷刺したわけではなく、『団珍』の戯画は、清国敗戦との結果を繰り返し強調することで、清国がさんざん負けたということを読者の脳裡に刻み込んでいく。

また、『団珍』には、『時事』よりもさらに過激な戯画を掲載したものもある。清人を殺害する内容を主題にした戯画である。8月25日の誌面で、「もろこし団子」(図17)という一枚が掲載され、清人の首だけが初めて戯画で描かれる。また、9月の「勇気車」(図18)では、清兵の首が取られた場面が描かれている。10月の「千世南瓜の馬印」(図19)、12月の「身体限り」(図20)などでは、さらに過激な場面、具体的には、清人が殺され、首がとれ血まみれになった姿が生々しく描かれている。図17から図20でみてきたように、清人を殺す場面は、弁髪首に対する嘲笑から始まり(図17,19)、首を切る場面(図20)、さらに清兵を殺す場面(図18)まで、非常に自然な形で読者に浸透していった傾向がみられる。

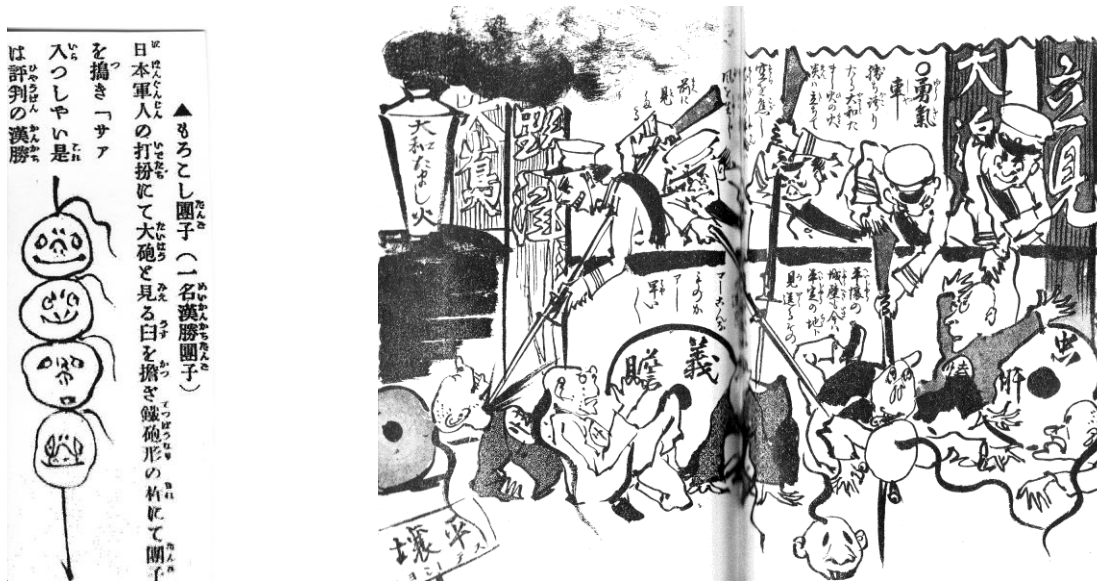


図 17「もろこし団子」(『団珍』,1894 年 8 月 25 日より) 図 18 「勇気車」(『団珍』,1894 年 9 月 22 日より)

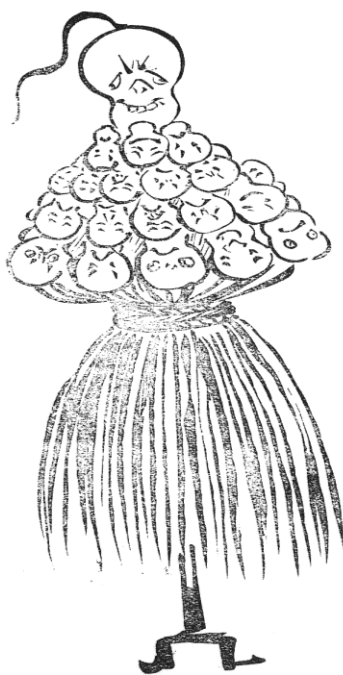


図 19 「千世南瓜の馬印」(『団珍』,1894 年 10 月 20 日より) 図 20「身体限り」(『団珍』,1894 年 12 月 1 日より)

また、『百笑』は、一枚ものの戯画である。1 枚の刷り物の中に、すべてを表現する形態が前述の 2 者と違った点である。清国、清兵を諷刺する傾向は前述の 2 者より強い。清国の弱さ、連戦連敗の清国(図 21)や清人の臆病さ(図 22)がこれでもかと強調して描かれる。しかし、その題材は、また表面的な清国の弱さをイメージ化したものが主で、『時事』のように清国の敗戦の理由を考えさせるような含蓄の

ある戯画はほとんどない。また、『団珍』のように清国の敗戦を具体的に証明しようとする姿勢もみられない。



図 21 「御注進〜」(『百笑』より)



図 22 「退将の泣別れ」(『百笑』より)

以上みてきたように、大新聞『時事』の戯画には、国際情勢を前提にした視点から戦争を把握しようとする姿勢がうかがえる。また、敗戦した清国を描くもので、清国軍隊の内情などにも注目し、清はなぜ、いかに負けたのかという、敗因を図像のなかに込めて、なぜ、日本軍が勝ったのかを読者に納得させようとする姿勢をうかがうことができる。

それに対し、『団珍』、『百笑』には清国と日本両方を取り上げる戯画が多い。『時事』のように読者を啓発しようとする傾向より、両国の比較を行いながら、清国敗戦という結果を様々な場面から見せる傾向が強い。つまり、一般読者が理解しやすい形で清国敗戦を宣伝し、清国に対するあざとい笑いを誘い、敵愾心を煽てることで、民衆の視線を引き寄せる意図がみられる。

また、『団珍』の戯画は、清国を表現する題材が多様かつ具体的であるのに対し、わずか 50 枚しか発行されていなかった『百笑』は、内容が過激でデフォルメされ、テーマも偏在している。

『時事』・『団珍』・『百笑』3 者を比べてみると、民衆に親しみやすければやすいほど、戯画の内容が浅くなり、題材も単一化する傾向がみられる。しかし、3 つの素材に共通するテーマとしては、清国は弱い国である、清兵は弱兵である、という点を抽出できる。『百笑』のように、読者が受け入れやすく、すぐ納得できるテーマを過激なかたちで戯画化するものが多い。日本が大国清に連戦連勝した要因を、日本に求めるのではなく、対戦国である清国に求め、戯画として表現している。次節では、この点に着目して、考えてみたい。

第2節 戯画で描かれた清国

2.1 清国は、「弱い」！

日清戦争における清国の敗戦は、それまでに日本の国民が漠然と共有していた「清国は強国」²¹という認識を一気に覆した。戦争最中に描かれた戯画でも、清国のその「弱さ」を強調した題材が大きく取り上げられている。

具体的にいうと、まず、清軍の連戦連敗が注目されていた。『団珍』を例に、開戦の8月から12月までの間だけで、清軍の敗戦をテーマにした戯画は20枚以上に達している。たとえば、『百笑』で「人間の皮剥」と題した一枚(図23)がある。地面に跪いた弁髪人が、次々と服を脱がされて持ち去られた情景が描かれている。解説文に、

李「(中略)すでに豊島の遣り損ない²²にも。成歙牙山²³の大味噌付でも。其都度にと屹度一枚づつハ抜かされています。それに又侯平壤²⁴の大敗北に黄海²⁵の大めちゃめちゃとを一所に持ち込まれては、実にはや諸外国^{せけん}へ対しても。余り外聞が悪すぎます。」

と、弁髪姿の老人の嘆きが書かれている。「李」は、当時清の執政者である李鴻章²⁶をさしている。ここで、服が剥かれるのは、つまり、開戦直後から、清軍が豊島沖海戦、成歙の戦い、牙山の戦い、平壤の戦い、黄海海戦など、緒戦を「遣り損ない」、陸戦でも「大味噌」を付け、「大めちゃめちゃ」に「敗北」という一方的な負け戦が続いた状況のなかで、領土を次々に占領されていく様子を、服も「抜かされ」ていく李鴻章の困惑として描いてみせたのである。簡単に服を脱がされて持ち去られてしまうように、戦場の清軍が戦うと直ぐ負けてしまうことが諷刺されている。



図23 「人間の皮剥け」(『百笑』より)

『団珍』には、連戦連敗をテーマとする次のような一枚(図24)もある。絵の中で、日本兵だと思われる軍服姿²⁷の兵士たちは、続々と「遼陽」、「牛荘」、「営口」と名付けたターゲットをなぎ倒して盛り上がっている。そばで様子を見ていたチャイナドレスの清国婦人が大慌てしている。

日清戦争の後期、日本軍は、清国の領土に侵入し、次々と領土を手に入れた。ターゲットを「総倒し」にしたということは、まさに日本軍の勢いを表現し、各地の清軍が次々と簡単に倒されていったことをさしている。一方、そばの清国婦人は、当時の清政府の執政者の一人である西太后だと考えられ、当時清政府は、かくのごとく困惑と恐慌を来しているであろうと、想像して描いた戯画である。そこには、ウィットに富んだ諷刺や辛辣な世相批評という戯画本来が持つ手法は影をひそめ、単に対戦国の負け戦を「嘲笑う」だけに終始している。



図24「総倒し」(『団珍』,1895年3月16日より) 図25「龍料理」(『団珍』,1894年10月20日より)

また、戦争の勝負だけでなく、清国そのものも取り上げられ、領土の喪失や財政困難など、敗戦による清国の惨況が、さまざまな題材で描かれた戯画も多く存在している。

例えば、前掲の図20と同じく、清国領土の分割をテーマにした戯画として、「龍料理」(図25)という一枚が『団珍』で掲載されている。日本人だと思われる職人が、龍を捌いている情景である。龍の尻尾に「牙山」、足に「平壤」、「義州」、頭に「九連城」、胴体に「奉天」が書かれている。手足がバラバラに切られたことは、まさに朝鮮から中国まで領土が日本軍に分割されたことを暗示している。

また、『時事』では、次のような一枚がある。絵の中で、弁髪の人が跪いて、「外債募集」、「私財安全」という木牌を拝んでいる。敗戦によって、清国の国庫が空虚となり、財政が不穏で、自国の安全を守るため、外債の募集に強いいられたことが読み取れる。



図 26 「利己和尚の祈願」(『時事』より)

このように、戦争期の戯画は、非常に単純化され、パターン化した「笑い」しか表現しなくなる。戦前の『団珍』が戯画という手法を駆使して、当時の政治世相を強烈に諷刺し批評する姿勢は、ここには存在しない。描かれるのは、清国の「弱さ」である。弱い清国の影から透けて見えるのは、日本の「強さ」である。

戯画をみていくと、「清国は弱い」という認識を、これでもかというほど強調したものが多い点を指摘できる。ついには、巨人と化した日本兵が息を吹きかけるだけで、清兵が小さな紙人形のように飛んでしまうような場面を描き、「弱小」清国に対比して「強大」日本国を配する戯画も登場する。このイメージが戦勝報道に高揚する日本国民が納得できるパロディだったのであろう。



図 27 「飛んだ老大国」(『百笑』より)

2.2 清兵は、「弱兵」だ！

戦争戯画で「清国は弱い」が強調されていくなかで、戦場に立った清兵もうまでもなく、嘲笑の的となっていた。

いち早く近代化を達成した「強国」日本と、「老耄国」清国が戦えば、そこには、負けた側の将兵の悲惨な状況が脳裡に浮かぶ。図 28、29 は、多数の将兵を失った清軍の「弱さ」を見事に穿った表現で描いてみせている。

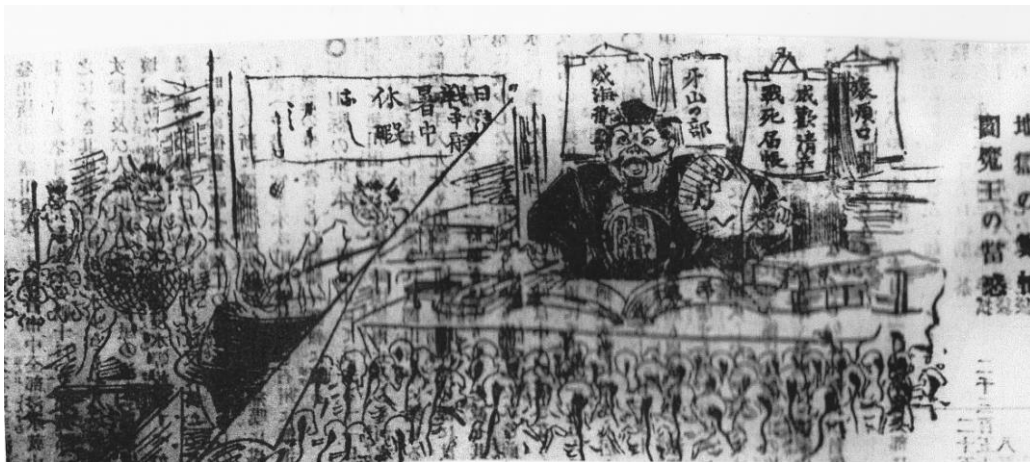


図 28 「地獄の繁忙 閻魔王の当惑」(『時事』,1894 年 9 月 15 日より)



図 29 「地獄の大繁盛」(『百笑』より)

「地獄の繁忙 閻魔王の当惑」(図 28)と「地獄の大繁盛」(図 29)の二枚は、共通して、清兵が戦死し、地獄に落ちた情景を想像したものである。死を示す白い冠、「天冠」をかぶった弁髪の人が、閻魔と鬼の前で大勢集まっている場面が描かれている。あまりに大量に戦死した清兵に、さぞや閻魔もてんてこまいしているだろうというイメージを戯画にしたのである。「地獄の繁忙 閻魔王の当惑」(図 28)では、「休暇なし」との張り紙が絵の中で描かれ、また「地獄の大繁盛」(図 29)の解説文では、「地獄の開闢以来初めてしょう。お負けに来る奴も〜皆チャンチャン坊主ばかりですが」と書かれている。

敵国の兵士は、正義をかざす日本軍によって戦死したわけだから、よもや「天国」に行くはずがない。皆地獄に落ちるはず。そうすると、閻魔大王も、「休暇」返上の大忙しだろうと、嘲笑うのである。地獄に落ちた清兵の夥しさで、閻魔さえ困ってしまうということを諷刺している。

それでは、なぜ清国は、大敗を続けていたのか。その原因も、また清兵に求められている。前述のように、『時事』の戯画では、清兵の様相が描かれたものが半数以上に達し、たとえば、次のような一枚(図30)がある。



図30 「清兵の七つ道具」(『時事』,1894年8月2日より) 図31「御敗将」(『百笑』より)

清兵は、図30で描かれたように、「七つ道具」を持って戦場に立ったと考えられている。つまり傘、降参旗、法螺、阿片、葛根湯、ピクニックバスケット、提灯などである。まともな戦備をほとんど持たず、非常に未熟な姿が嘲笑されている。戦争する準備さえ出来ていない清兵は、いうまでもなく、戦いの心構えもないことが想定され、絵で見られるように、足も後ろを向いている。

そして敗戦での清兵の逃走に関する報道は、ほぼ毎日日本の新聞で掲載されていた。戦うと、すぐ負けて逃げてしまう、あるいは戦う前から命を守るため敵前逃亡してしまう。このような記事は、読者の目を引いている。『百笑』で逃亡を題材にした戯画は総数50枚の中で10枚に達し、『時事』、『団珍』の戯画も週一回の頻度で、清国将兵の逃亡が格好の題材として描かれている。

図31はまさにこのような一枚である。絵中の男は、ポーズを構え鏡に向かって照れている場面が描かれている。女の姿に成りすますために、けばけばしい女服を身につけ、髪を束ねて簪さえ刺している。最後の確認のために、それらを鏡に映し照れていたと分かる。そして、鏡を持つ弁髪を頭に巻い

た兵士の、背後には、「にげ隊」、つまり「逃げたい」をもじった言葉が書かれている。解説文に、

女の姿になって逃げ出したといふのハ。そもそも僕が手始めだから。同じチャンチャン仲間が見たら。支超馬鹿にて居るといふか知らないが。此九死一生の場合に。外飾も糸瓜も云ってハ居られない。是で首尾よく逃負ふせて。

と書いているが、つまり、当時の清将軍葉志超²⁸の逃亡を諷刺するものだと考えられる。8 月から、朝鮮に駐在するはずの葉が行方不明となり、新聞に「葉志超の行く方」(『朝日新聞』、8 月 30 日)のような記事が多く現れ、推測を行っていた。結局葉の清国帰国の情報が日本に入り、葉は清国に逃げたとの結論が出された。この一枚は、葉の逃げ姿を想像してもじったものだと考えられる。

葉のような特定の人物以外にも、清人の逃亡姿を描く戯画はまだまだたくさん存在している。図 31 と同じく、清人が扮装して逃亡することを嘲笑した図 32(『時事』、8 月 17 日)もあり、図 33(『時事』、8 月 5 日)のように、骨になってしまっても、風塵を巻きあげ一心に逃げる清兵の姿も印象的である。



図 32 「清將韓女に扮して牙山を去る」(『時事』、1894 年 8 月 17 日より)



図 33 「餓山兵の潰走」(『時事』、1894 年 8 月 5 日より)

また、清国将兵の逃亡は、結局日本軍に対する恐怖によるものだと読み取られるようになっている。それを表現した戯画として、図 34 と図 35 のように、日本兵の案山子を見るだけで驚くとか、または「日本兵隊様御定宿」との張り札を見るだけで逃げてしまうなどの場面が描かれている。絵の中での清兵は、神経質になるほど、日本に対し深い恐怖を抱いたように表現されている。



図 34 「チャンチャンの肝潰し」(『百笑』より)



図 35 「頓智盗難余け」(『百笑』より)

このように、戯画の中での清兵は、まともな戦備も持たず、戦う気もないので、日本軍に深い恐怖を抱え、戦場でいつも逃げてしまうと表現されている。一言でいうと、清兵は「弱兵」だとまとめられる。



図 36 「臆病神」(『百笑』より)

このような清人の姿は、「臆病神」(図 36)と題した一枚で辛辣に諷刺されている。解説文に書かれたように、「日本兵の来ぬ中に、一刻も早く逃げた方が宜いじゃ(中略)臆病神ハ跡見送りて、莞尔と笑うと、戯画の中では、白い姿の臆病神が清兵に宿って、逃亡を誘っている情景が想像されている。

このように、清兵はまるで臆病神に宿られたように、日本軍に危惧し、戦場ですぐ逃げてしまうと表現されている。笑いを誘いながら、戯画は様々な表現によって、「清兵は弱兵」のように描かれていった。

第3節 戯画で描き出された清国イメージ

3.1 清人は、「豚尾漢」だ！

明治初期の戯画のなかに描かれた清人のうち、男性は例外なく「弁髪」という独特の結髪姿で描かれている。「弁髪」を描けば、すなわち、描かれた男性は清人であることを示す基本的な記号になっている。弁髪は、満洲族の風習であり、清国成立以来漢族にも強要した習俗でもある。頭の上まで髪を剃り上げ、後ろに残りの髪を三編みにして垂らす。しかし、明治維新以降の断髪令²⁹で月代をそり、髻を結う風習を捨てた日本人にとって、清人未だにこのような長い「弁髪」にこだわる姿勢は、近代化が遅れた清国そのものを代表する記号として認識されていた。そして、未だに弁髪に固執する清人の旧弊に、近代化が遅れた清国を象徴させたわけである³⁰。

戦争期の戯画においても、ほぼ例外なく清人や清兵は、弁髪で描かれている。たとえば、『百笑』の「ぶるぶる退将」(図 37)には、戦場で恐怖で震える清国軍の大将が描かれている。体が「ぶるぶる」震える大将の弁髪も、「ぶるぶる」震えながら逆立って解説文の部分まで届いている。恐怖を表す逆立ちの弁髪は、また『団珍』で多く現れ、懦弱で勇気のない将兵を表現する格好の記号として使われている(図 38)。このように、弁髪は旧弊から脱することができない清国の現状を記号化しており、弁髪の描き方で状況が表現されていく。



図 37 「ぶるぶる退将」(『百笑』より) 図 38 「いよいよ開業」(『団珍』, 1894 年 7 月 28 日より)

もう一つ注目すべきは、戯画で清人の弁髪を綱に見立てるなど、嘲笑の小道具に仕立てている点である。例えば、『時事』の「豚尾車」(図 39)で示すように、清人の捕虜は馬車を引っ張る馬のように駆使され、弁髪をまるで手綱のように、日本兵が引っ張っている。『百笑』の「清発明の危機」(図 40)で、清国將軍は兵士たちの弁髪を手にとり目隠して、兵士の行動をコントロールする道具に使っている。清

人の様相をひどく愚弄しながら、清軍の未練などを諷刺している。

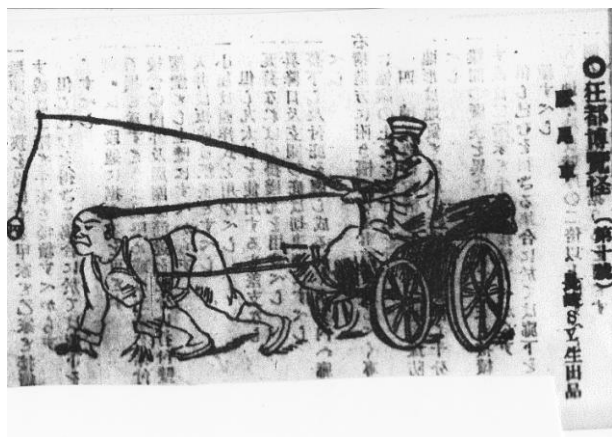


図 39 「豚尾車」(『時事』, 1894 年 8 月 18 日より)



図 40 「清発明の危機」(『百笑』より)

さらに過激なものとしては、「平壤の新船橋」(図 41)がある。そこでは、日本軍が行軍する道を作るために、清人の捕虜が弁髪で結ばれて橋にされている。弁髪を道具に使い橋を作れるほど、捕虜の多いことが強調されている。このように、戯画では、清人の弁髪姿が道具として取り上げられ、日本軍の戦勝を誇示する一方、清兵の悲惨な姿も表現した。

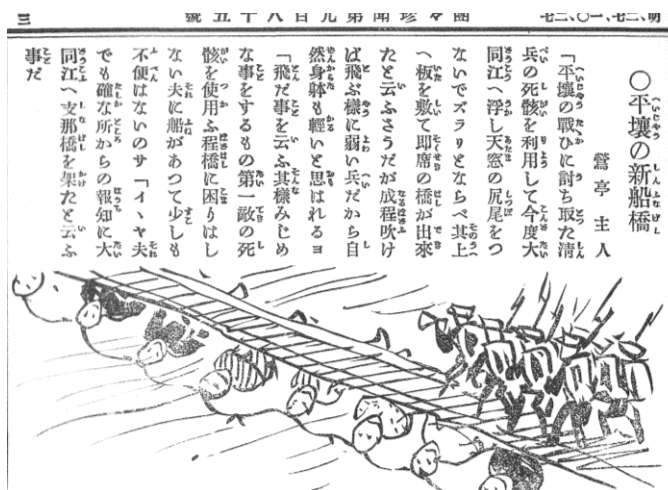


図 41 「平壤の新船橋」(『団珍』, 1894 年 10 月 27 日より)



図 42 「豚の当惑」(『百笑』より)

清人の特徴的な弁髪姿以外にも、次の『百笑』の「豚の当惑」(図 42)のように、清国全体を「豚」にイメージして笑う戯画が多く現れている。清国と日本の対比によって、「豚」は清国の版図の大きさに対する諷刺だと思われる。具体的に、清国のイメージが「豚」へと定着する理由については、前掲した小松裕の論文「近代日本のレイシズム: 民衆の中国(人)観を例に」で、「豚」は、

1. 清人の弁髪は「豚尾」との別称があるからと考えられる、

2. 「豚」が図体大きくして弱くて鈍い印象もある、

3. 古代からユダヤ人の軽視イメージからの推測によって、「豚」が「不潔」にも連想されていたとまとめられている。そして、もう一つの理由として、図 42 で示されたように、清国の豚としてのイメージは、日本の「蜻蛉」のイメージと対照的になっているからだと考えられる。蜻蛉は体が軽いため行動が素早く、また後退しない特徴を持っているので、前に進み続けられる印象が強く、豚は図体が大きくて行動が鈍いのと対照的である。

そのほか、「豚」の太い体形は多く食べる印象を与えるので、当時清軍の糧食不足を背景に、「豚」は清兵の「喰い辛抱」を表現する素材にも用いられている。図 43 のようなものがあり、清国軍隊は「豚」の軍隊として描かれ、戦場である朝鮮の牙山を食いつくして「餓山」にしながら行軍した様相を諷刺的に表している。



図 43 無題(『時事』、1894 年 7 月 12 日より)

このように、弁髪姿に豚のイメージが重なり合うことで、戯画で清人の「豚尾漢」というイメージが浮かび上がっている。そこから、実際、戦争時では清国に対し「豚尾漢」という蔑視的な呼称が出版物で広く用いられていた。たとえば、新聞に「豚尾漢の拘引」³¹のような記事が溢れ、清人を「彼らが貪婪無恥なるハ今にはじめぬこと」と評価したものが多くみられる。このような蔑視的なイメージや呼称は、日本人の清国蔑視観の形成にもつながっていくと考えられる。

3.2 民衆が受け止めた清国のイメージ

戦争期で戯画読み物が溢れているなか、民衆はそれを読んで、どこに目を向け喜び、また清国イメージをどのように受け止めていたのかを以下では検討する。ここで、特に取り上げて考えたいのは、弁髪首というイメージである。前述のように、弁髪首の姿は、ほとんどの戯画で描かれているが、実際、日本の民衆の間でも中国敵愾の道具として、多く用いられていた。

まず、戦争の祝捷大会を取り上げてみたい。戦争中、戦勝を祝うために、日本の各地では祝捷大会が行われていた。大会で多くの民衆が集まり、祭り気分で様々なイベントを行い戦勝を祝うが、そのなかで清国敵愾の行為も避けられない。たとえば、1894 年 12 月の戦局がほぼ決まった時期に、日清戦争の勝利を祝った東京市³²祝捷大会が行われた。木下直之の『戦争という見せ物』³³で大会を詳しく紹介しているが、当日おこなわれた行列にも言及している。具体的には、自由新聞社の社員が筆の形をした提灯を押し立てて歩く一場面が紹介されている。図 44 から明らかなように、提灯には清国兵の顔が描かれ、提灯をさしている竿は弁髪に見たてている。

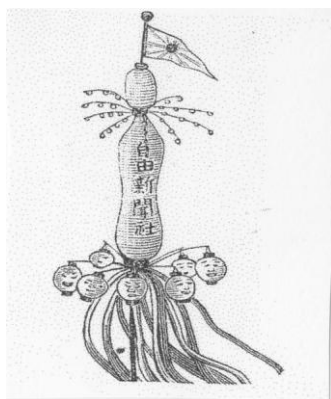


図 44³⁴

つまり、弁髪首のイメージが、実際の戦勝展示物にも使われているのである。さらに過激な行為として、祝捷当時、「小間物問屋連は清国兵の首級数百を製作し、それを百人の雇い人が沿道に向かって投鞠のように投げ与えながら歩いた」場面もあげられている。

祝捷大会以外だけでなく、弁髪首のイメージはさらに商品化もされている：

日本橋區馬喰町の平尾方より、分捕しやぼんと云へる、支那人の生首の形に造られる石鹼を売
出した

(「支那人の生首が「石鹼」の意匠——擦り潰す様に」『時事』、10 月 23 日)

との記事があり、弁髪首の形をした平尾商店の「分捕り石鹼」が人気商品となり、清兵の首をすりつぶせというスローガンで売れ行き絶好調だったと報道されている。

戯画で表現された弁髪首の姿は、民衆の意識に深く浸透している。このように、戦時中の人々の生活にも影響を及ぼし、さらに敵愾心を表出するための道具にさえなっている。日本の民衆の間でも、戯画と同じく、清人の弁髪首を敵愾や嘲笑の対象にしていた。戦時中は、このように、戯画の中でも、人々の間でも、清国に対する敵愾心を過激な形であおっていた。清人のイメージをおとしめ、また前述のように「豚尾漢」のような蔑視呼称を頻繁に使うことによって、日本人の間には清国を蔑視する物の見方が次第に形成されていったと考えられる。

おわりに

本章は日清戦争期の戯画に注目し、その中に描かれた当時の中国のイメージを検討してきた。戦時中に読者の人気を博した『時事』、『団珍』および『百笑』を取り上げ、その中の戯画を考察した。『時事』、『団珍』、『百笑』は、それぞれ出版指向が異なるものの、その中で掲載された戯画が、「清国は弱い」、「清兵は弱兵」と表現しているところや、清国を弁髪姿や豚のイメージで表現しているところが共通し、いずれも上からの視線で当時の中国を批判していた。それをみた民衆たちも、戯画のイメージをそのまま受け入れ、人々の間では、清人の弁髪首の姿が展示や商品に使われ、敵愾や嘲笑の対象となっていた。中国の諷刺を繰り返す戯画は、民衆の敵愾感情を高揚させ、さらに中国蔑視感情の形成も促した。

『団珍』や『百笑』は一般大衆に向けた読み物で、笑いを誘うことに終始するため、過激な表現が不可避だと考えられる。しかし、『時事』のような大新聞も、『団珍』や『百撰百笑』と共通して、清国を豚にたとえたりする過激なイメージを頻繁に掲載し、知識人向けの大新聞にあるべき冷静さを失っていた。そのため、清国を嘲笑する戯画は単に、一部教養の低い民衆が戦争の雰囲気流されて楽しんだものでなく、知識人から一般民衆まで、幅広い読者層が楽しむものとなっていた。このような高まった戦争感情は、当時の日本人に普遍的に見られた清国蔑視観の形成にもつながっていく。

しかし、この時期、欧米人絵師たちは当時の中国と日本をどのように描いたのか。ここで、フランスの絵師ビゴーを取り上げたい。ビゴーは、日清戦争中にロンドン・グラフィック新聞の新聞特派員となり、戦地に派遣された³⁵。彼はいかに戦争を描いたのかを見るために、ここで次の一枚を取り上げてみたい。



図 45 『ショッキング・オ・ジャポン』におけるビゴーの挿絵³⁶

図 45 は、『百撰』や『団珍』ではみられない情景を描いている。絵の中で最も目立つのは、日清戦争

期特有の軍装を着し、星章の第二種帽をかぶった日本兵である。次に弁髪を引く人、服に丸が付けられた清兵も登場している。絵の中の日本兵は弁髪人つまり清兵を殺し、村田銃の先端で清人の何人も貫いて刺しながら、銃把(グリップ)で清兵を殴りつけ、片足で清兵を踏みつけている。

同じように清兵を殺す情景としては、前掲の図 18 などが、日本絵師が描いたものもあるが、ここで描かれた日本兵の姿に注目したい。図 18 をみると、清兵を切る日本兵は、表情が真剣で、姿も勇ましく感じられる。それにひきかえ、図 45 では日本兵の表情から、狂気じみた感じが伝わってくる。いわば、同じく戯画として、絵の中の主人公をからかう性格がみえるが、諷刺の主旨がかなり異なってくる。第三者だからこそその冷静な目線がみられ、敵・味方の区別をしない欧米絵師によって、戦争の実像が伝わってくる。

死傷者を生む戦争は、決して笑って楽しむようなものではない。清兵の死亡はもとより、勝利を収めた日本軍でも、戦場で多くの戦死者や病死者を出したのは事実である。しかし、現実性が削られていた戯画は、清兵を殺す過激な場面があるとしても、滑稽に加工されたため、非常に自然な形で読者に浸透できた傾向がみられる。絵の中で日本兵士の表情が終始勇ましく見え、清兵の驚愕した表情も笑いを誘っている。それで、清兵が殺されるのも極当たり前に描かれ、日本戦勝を誇示する一種の嬉しささえ伝えられている。『団珍』や『百笑』よりも読者を納得させる『時事』の場合でも、戦争による社会の不穏、両国民衆の生活苦、肉親を失う悲しみなどの現実に関する題材がほとんど見られない。この点は、当時の日本人の戦争認識や、戯画自身の性格に深くかかわっているが、戯画が戦争や中国を伝える際の特徴ともいえよう。戯画によって育成された戦争を楽しむ感情は、中国蔑視観を形成した一因とも考えられる。

第三章では、日本の絵師と欧米の絵師が描いた戦争や外国を対比しながら、各時期の絵で反映された中国観を考察し、さらに検討を試みる。

- 1.「版画」は、絵の製作方法から定義された絵の種類であるが、それに対し、「戯画」は、絵が取り扱う内容によって定義された絵の種類である。
- 2.国史大辞典編集委員会、『国史大辞典』(4「キ」―「ク」),吉川弘文館,1984年,p.21。
- 3.石曉軍『「点石齋画報」にみる明治日本』,東方書店,2004年
- 4.中野美代子・武田雅哉編訳『世紀末中国のかわら版―絵入り新聞「点石齋画報」の世界』,中公文庫,1987年
- 5.筑摩書房,1985年6月。
- 6.有志舎,2008年7月。
- 7.『歴史地理教育』(562),1997年4月。
- 8.『歴史地理教育』(577),1998年4月。
- 9.『文学部論叢』(78),2003年3月。
- 10.日清戦争期で、『時事』は唯一戯画を掲載した大新聞である。そして、『団珍』は同じ絵入り雑誌の中で、最も高い売行きを達成している。『百笑』に関しては、戦後民衆の要望によって数度再発行されていた経緯があり、人気があったことがよく分かる。また、日露戦争の時も、同じく『百笑』と名付けた戯画も販売されていた。
- 11.本章では、日清戦争期で戯画に描かれた中国を中心に検討するため、以下、中国や中国人に関する呼称は、統一して当時の呼び方に従って「清国」、「清人」(または「当時の中国」、「当時の中国人」)を使用する。
- 12.『団珍』のサイズは、一ページ A5 である。
- 13.ほかには、『風俗画報』などがある。
- 14.日清戦争期(1894～1895年)における保証金を要する定期刊行雑誌のうち、1894年度日本で発行された絵入り雑誌には、『団団珍聞』(年間 139,666 部を販売)、『風俗画報』(年間 135,020 部を販売)、『戦争写真画報』(年間 16,940 部を販売)、『日清交戦画報』(年間 1,419 部を販売)などがある。そのうち、『団団珍聞』が年間 139,666 の配布部数で、もっとも売れた絵入り雑誌だとわかる。(『警視庁』, 忠愛社, 1895 年)
- 15.本研究で使った『百笑』資料は、古本屋で売られた 50 枚揃いの冊子(A3 サイズ、左下で戦中の日付が付けられる)及び、早稲田大学データベースで公開された冊子(B4 サイズ、日付が付けられない)両方である。戯画の内容は一緒であるが、出版時期の差異によって形態が異なると考えられる。本章は、主に原本の冊子を参考する。
- 16.本章で取り扱った戯画は、『時事』のマイクロフィルム資料を引用したものである。
- 17.図 8～9 において赤枠で囲んだのは、タイトルまた解説文の部分である。
- 18.『団珍』で統計の対象とした戯画は、文章の挿絵を含め、単独で主旨が読み取れるものである。しかし、独立した意味を持っていない挿絵は、統計に含めていない。
- 19.本章では本邦書籍出版の『団団珍聞』復刻版(1983 年 10 月発行)、第 30～31 巻を参考している。
- 20.図 10、図 11 を参照。
- 21.アヘン戦争(1840 年)での清の敗戦や、台湾出兵(1884 年)での日本の勝利によって、日本では清国の弱さを嘆き、中国を軽視する傾向が現れた。しかし、日清戦争に至るまで、日本は清との本格的な対決がなく、清の本当の国力を正確に把握したという確信を持っていない。その一つの現れとして、1891 年に起った清の北洋艦隊の日本来航に関する報道が例にあげられる。当時日本の新聞は、日本にきた北洋艦隊について、「我軍艦中に之と比すべき種類のものなし」などと高く評価し、清を強国として受け止めていたことがわかる。
- 22.1894 年 7 月 25 日、豊島沖海戦が起こり、清国側の高陞号商船が撃沈された。
- 23.同 7 月 29 日、朝鮮の成歓における日清の交戦で、日本軍が勝利した。後牙山も日本軍によって占領された。

-
- 24.同9月15日、日本軍が平壤の戦いで清軍に勝利した。
- 25.同9月17日、黄海の海戦で日本軍が勝利し、制海権を手に入れた。
- 26.李鴻章(1823～1901年):中国清代の政治家。日清戦争前後、清政府の直隸總督及び北洋大臣を兼任し、外交を管轄する権利も持ち、当時の重臣として西太后から暑い新任を得ていた。日清戦争の媾和で、李は全権大使として下関条約の調印を行った。(岡本隆司『李鴻章 東アジアの近代』,岩波書店,2011年)
- 27.日清戦争において、日本兵は、基本的に星章の帽子をかぶり、正衣、正袴を着用している。中国兵の服装は藍色で、身分を示すために、前後「兵」などが書かれた白い丸の模様が付いている。
- 28.葉志超(?～1901年):清代の将軍である。日清戦争当時は直隸提督を任じている。牙山、平壤の戦いで退却し、敵陣逃亡で歴史上怯懦な人物と評されている。(趙爾巽編『清史稿列傳二百四十九』,1914～1927年)
- 29.1871年9月太政官によって下された法令である。当時散髪の撤廃を要求した一揆もおこっていたが、結局、主導者が反乱罪で死刑に処された。

30.明治維新が始まった明治6、7年頃、文明開化を宣伝する本が盛んに出版されているが、代表的なものとしては加藤祐一の『文明開化』がある。『文明開化』では散髪すべき理由を述べているが、

「漢土も明といふ世の時分までは、惣髪で居たものじゃか鞆鞆といふ片隅の国から起って、明を亡ぼして、清といふ世に改たまった、其頃から其の鞆鞆の風に成て、皆芥子坊主に成たのじゃ芥子坊主あたまといふものが、見よい天窓じゃとおもはしやるか、ひんもなく威もなく下人あたまにちがひない、此方の野郎あたまも、身晶屑なり見馴て居た事故、をかしいとも思はずに居たのじゃが、能う考へて見ると可笑なあたまと、ちやん坊主も笑はれぬ事じゃ」

との記述があり、散髪すべき理由を述べるために、中国人の辮髪が散髪の反面教材として取り上げられている。(小松裕「近代日本のレイシズム:民衆の中国(人)観を例に」,『文学部論叢』(78),2003年3月,pp.43-65)

- 31.『朝日新聞』,1894年11月7日。
- 32.1894年当時では、まだ東京市という呼び方があり、現在の東京の一地区をさしている。
- 33.木下直之『戦争という見せ物』,ミネルヴァ書房,2013年。
- 34.前掲の『戦争という見せ物』より。
- 35.「ビゴーを戦地に特派」,『時事新報』,1894年8月21日。『新聞集成 明治編年史』(第九巻 日清戦争)中山泰昌編、財政経済学会、1959年。
- 36.フェルナン・ガネスコ、ビゴー合著『ショッキング・オ・ジャポン』,1895年。東京大学 大学院法学政治学研究科 附属近代日本法政史料センター(明治新聞雑誌文庫)所蔵された原本より

第二章 『日清戦争実記』で報道された中国

はじめに

1894年8月末で創刊されてから、『日清戦争実記』(以下『実記』と略称す)は月三回で発行され、多岐にわたった戦争報道を読者に提供しはじめた。発刊の直前において、博文館は『東京朝日新聞』¹で広告を掲げ、『実記』の特徴について「昨今の戦況より之に伴ふ社会現象を網羅して正しく之を編纂」することを宣伝していた(表2)。

表2 新聞と『実記』の比較

新聞	『実記』
前後錯綜疎密均しからず 真偽相混じ能く事局の順序正し前後の関係を知り難く 殊に戦争に伴ふ社会上各種の影響を通覧する能はず	遠く日清韓三国従来の関係より筆を起し 昨今の戦況より之に伴ふ社会現象を網羅して正しく之を編纂

戦後を迎えると、『実記』は第三十一編からさらなる改編を行い、「本誌の一大改良」において、

本誌は續々發刊して本年末にいたり、五十編を以て局を結ばんとす、而して前編に廣告せる如く、凱旋の将校某氏等の賛助を得、材料を精撰し、事實を審察したる征清戦史は遠からずして其の稿を起し、本誌五十編の終にいたり完成を告げんとす。

(「本誌の一大改良」,第三十一編,pp.1～3)

と、戦争回顧の「征清戦史」の掲載及び第50編までの刊行を予告していた。さらに「終刊の辞」では、五十編の報道を綜覧しながら、『実記』の報道指針及び戦争報道における位置付けを再び振り返っていた:

(前略) 本誌ハ一昨年二十七年十月を以て生る。時恰も征清師出でより數月、國民敵愾心の勃興絶頂に達せり。爾後本誌は王師の連捷と共に着々歩武を進め、篇を累ね冊を増して、江湖諸君の瀏覧を辱くせり。昨二十八年四月にいたりて両国平和の約成りしも、遼東半島還付の所置、臺灣土匪の鎮定を始めとして記載報道を要すべき事項尚多きを以て、本誌は敢て輒ち終刊せず。續々板行して本編に至り全部五拾編茲に完成を告ぐ。今や臺灣全く鎮定し、第一回の償金と遼東還付償金と既に我國庫を富ませり。臺灣出征軍と遼東守備隊とは全く凱旋せり。論功行賞の事舉がり、招魂吊祭の典畢れり。

本誌終刊の時機正に會す。(後略)

(「本誌終刊の辭」,第五十編,pp.1～3)

以上の内容から見られるように、『実記』の刊行は、戦争の進捗と大きく関わったことがわかる。戦争の進行状況によって、『実記』の内容は、三回ほど大きく改編されたが、各時期における内容構成は表 3 にまとめられている。

表 3 各段階における『実記』の内容構成

時期	第一期 (第一編)	第二期 (第二～十編)	第三期 (第十一～三十編)	第四期 (第三十一～五十編)
	タイトルなし(口絵)	口絵	口絵	口絵
	タイトルなし(本紀)	本紀	戦争實記	戦争實記(内容に戦事通信が加わる)
内容構成	戦争餘譚	地理 文苑 史伝 内外彙報 公報 豊公朝鮮軍記	地理 文苑 史伝 軍人逸話 戦事公報 海内彙報 海外評論 国論一斑 海外彙報 軍事叢談 戦事私信/通信 付録	東洋風土(さらに詳述) 戦争文学(古今の戦争に関する内容も) 勲功美談 軍人餘譚(古今の英雄美談も) 最近電報 海内時事 海外評論 国論一斑 海外時事 軍事叢談 外交史談 海外戦史 戦後経済 征清戦史

注) 『日清戦争実記』の目次をもとに作成。改編前後の項目名を比較しやすくため、目次で掲示した順番をやや調整している。

各時期における戦況報道の内容を要約した結果、第一期の創刊号は宣戦布告がなされた直後まで、第二期の 9 編は主に朝鮮戦場の陸戦から第二軍の中国上陸まで、第三期の 20 編は中国大陆の攻略から講和条約の締結まで、第四期の 20 編は戦後の台湾本土の抵抗を鎮圧したまでという区切りで報道が進められていったのである。

その中で、『実記』の前半の内容は戦況の実録報道に終始し、無題(第一編)から「本紀」欄(第二編～十編)、そして「戦争實記」欄(第十一編～五十編)とのように題名が変わっていた。戦後になると内容が漸減していったが、全体的にメイン記事として、一冊のなかで大きな分量

を保っていた(図 8、以下は統一して「本紀」欄と呼称す)。戦況報道は、実際の戦闘より約一週間から一ヶ月遅れで行われた報道にかかわらず、広告で「秩序整然」と宣伝したように、戦闘の経緯が新聞記事よりまとまった形で読者に提供したことが特徴的である。

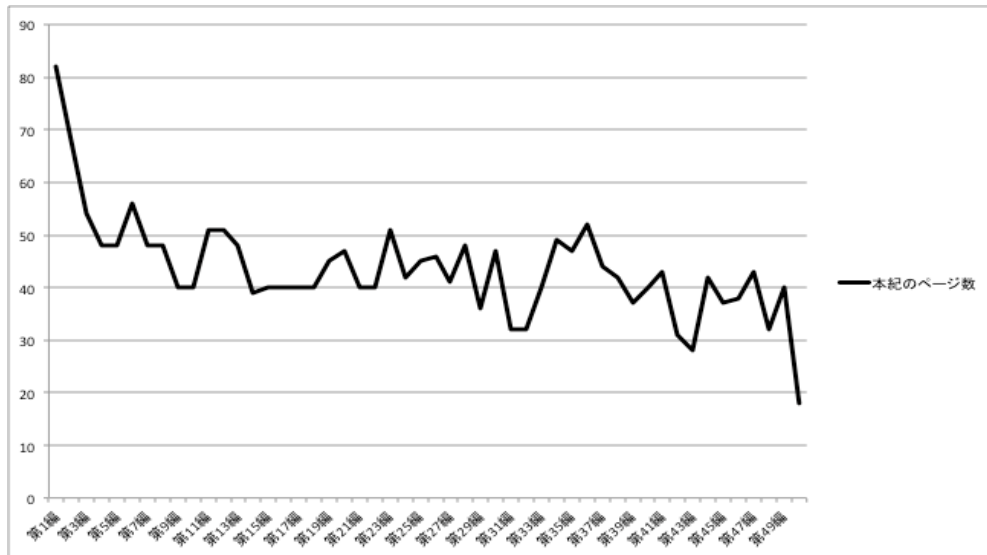


図 46 本紀のページ数の変化

戦争の中で、『実記』は戦況報道をさかんに掲げていたが、戦局の定着から戦争の終結を迎えると、報道内容が台湾鎮定の戦況報道に傾き、本紀の分量も減少した傾向がある。また、戦争後における日清戦争の回顧は、「戦争實記」または彙報の最後尾に配置され、いずれも五枚以内の紙幅に抑えられていた。

それに対し、『実記』の後半では、主に戦闘の周辺に関わる多様な情報を取り上げた雑報である(以下は統一して雑報と呼称す)。第一編では「戦争餘譚」欄に一括されたが、第二期から第四期を経て、漸次多様なテーマ(欄)に細分化されていき、第三、四期では各欄に解釈も施されるようになっていた。

分量の変化について、雑報の部分は戦中において紙幅はほとんど変わらないが、戦争後期(第三期)や戦後(第四期)になると増量した傾向がみられる。特に、通信社の利用で海外通信の情報を取り込む試みがみられ、戦後において日本の国際地位を再確認する意図が読み取れる。

内容の細分化そして編集手法の成熟化に反し、戦況そのものの報道が劇的に減少していったのである。このように、後継誌の『太陽』²が注目を浴びるようになったと同時に、『実記』の購読者数も次第に減少していったのである。

『実記』のなかで、中国に関係した内容は、主に戦況報道の「本紀」欄雑報に属した「地理」欄、彙報欄に集中していた。

本稿では戦況報道の考察に重点を置きながら、中国特に中国人の性格を紹介した雑報を参考にし、『実記』の報道で構成された中国人イメージを検討する。戦況報道については、代表的な戦役として、平壤陸戦（朝鮮戦場）、旅順半島の攻略（中国戦場）、そして黄海海戦（大規模の海戦）を取り上げ三部にわけて考察を行う。朝鮮から中国へ、そして陸戦から海戦へ戦場の移行を追跡しながら、戦況報道で描かれた中国について分析する。

考察の対象について、戦中のリアルタイム報道を中心に取り上げるが、戦後に定着した中国イメージを確認するため、第四期で連載された「征清戦史」など参考として取り上げる。

そして、最後の一節では、戦況報道の情報を補完した各種の雑報を取り上げ、その中から中国人に言及した記事を抽出して、雑報で構成された中国人全般のイメージを再確認してみる。

第1節 平壤陸戦の報道からみた中国

宣戦布告後の9月15日、日本軍は平壤攻略で最初の勝利を収めた。本格的な陸戦として、平壤陸戦の戦勝は各新聞紙で大きく取り上げられ、『実記』においても、「近世無双の大捷利」³とのような高い評価がみられる。表4にまとめたように、関連の報道は総計8編にわたり、戦中において最も詳細でかつまとまった形で報道された戦闘になっている。

表4 平壤陸戦（1894年8月～9月中旬）の戦況報道

戦争中の報道（本紀の部分）	第三編 （1894年9月19日） 我斥候騎兵中和に 勇戦す	第四編 （1894年9月29日） 我北進軍先鋒の進発 我軍大勝して平壤を陥る	第五編 （1894年10月9日） 平壤攻撃の部署 清軍の防禦 我軍先鋒黃州を取る 混成旅団大に船橋里い苦戦す 元山枝隊順安を取る 朔寧枝隊牡丹台に迫る 元山朔寧の二枝隊牡丹台を陥る 中央部隊江北に戦う 我軍遂に平壤を陥る	第七編 （1894年10月29日） 平壤陥落史 第一 一般方略と行軍計畫 第二 各部隊の行進 其一 大島混成旅團の行進 其二 朔寧枝隊の行進 其三 師團本隊の行進 其四 元山枝隊の行進 第三 清軍の防備	第八編 （1894年11月7日） 平壤陥落史（承前） 第四 各道の戦闘 其一 大島混成旅團の苦戦 其二 朔寧及元山支隊勇戦 其三 師團本隊の鏖戦 其四 平壤城の陥落 其五 勝利品及捕虜 其六 敵軍の後援及兵站 第五 全軍の凱旋 第六 外國人の手に成る戦勝記 第七 帝國議會	第十編 （1894年11月27日） 敗軍の將
戦後の報道	第三十五編 （1895年8月7日） [戦争實記] 日清交戦日誌	第四十編 （1895年9月27日） [征清戦史] 大轟の親征、第一軍の進發 平壤の大戦				

注）『実記』の目次をもとに作成。下同。

記事の概要について、第三編(1894年9月19日)は本戦の直前に起きた中和の競り合いがピックアップされ、そして第四編(1894年9月29日)では戦勝を伝えた初報が掲載されていた。次に、第五編(1894年10月9日)で掲載された9枚の記事は、陸戦の経緯から各要塞の戦闘を具体的に記述した詳報になっている。さらに、第七、八編(1894年10月19日、10月29日)の「平壤陥落史」は、第五編を踏まえて新たなエピソードを取り込みながら再構成された回顧の特集である。また、最後に第十編では、陸戦後の清国捕虜を紹介した記事も掲載されていた。

一方、戦後になると、平壤陸戦に対する回顧がごく限られていた。第三十五編(1895年8月7日)では「日清交戦日誌」、第四十編(1895年9月27日)では平壤陸戦の一周年として「征清戦史」から関係の記述が見つかったが、内容はそれぞれわずか二、三ページの紙幅しかなく、簡潔に陸戦を概観したものだと思われる。

表 3 で示されたように、戦況報道の大きな特徴として、記事の多数は軍隊の動向によって命名されていた。捕虜を紹介する第十編を除いて、各編の戦争報道はほとんど全文を通して、「主役」の日本軍について具に書いていったのである。「王師の連捷と共に着々歩武を進め」と回顧されたように、戦況報道は主に日本軍の「活躍」に主眼を置いたことがわかる。

それに対し、清軍に関する叙述は散見した程度にとどまっている。関連の記述を考察した結果、第四編の場合、戦況報道は計 6 ページ余りに対し、清軍を取り上げた記述はわずか 4 ～5 行ほどである⁴。また、詳細報道を取り上げてみると、第五編は 26 ページに対し清軍の記述は、合わせて多くも 4 ページ程度であり、清軍を取り上げる分量は実際かなり限られていたことがわかる。

清軍に対する具体的な描写を検討する前に、まず関係の記述を全体的に把握しておきたい。戦況報道を取り扱った五編⁵からまとめた結果、清軍に対する表現は以下六つのテーマに分類できている：

- ① 戦闘条件(17)
- ② 戦闘中 (33)： 戦略、対抗、動揺等
- ③ 戦闘直後(34)： 逃亡、降伏、兵器の遺棄など
- ④ 清兵の残虐行為 (8)
- ⑤ そのほか (4)： 清兵の姿(「賤劣」、「獣類」)、兵営内の様相(「不潔」、「散乱」)

注) 括弧内の数字は記述の件数。下同。

以上で示されたように、清軍について戦闘中および戦闘後を取り上げた記述が最も多く、次に戦闘条件を紹介した内容も数少なくなっていく。また、相対的に記述が少ないながら、清軍残虐行為(④)が 8 ヶ所、ほかの表現(⑤)も 4 ヶ所ほど見かけられ、概ね特集「平壤陷落史」(第七、八編)で転載された外国人記者の報道に集中している。

平壤陷落前の報道となる第三編では、軍隊の行進で起こった小競り合いを報道していたので、戦闘中の姿しか記述されていない。その一方、第四編以降になると、報道段階によって報道内容の偏重がすこし変化しながら、戦闘条件(①)、戦闘中の状況(②)、戦闘後の姿(③)の記述は各編に共通して頻出した。

一方戦闘中の描写は、表面的な叙述にとどまった内容が多い。「敵亦必死に應戦するも、衆寡の勢ほひ得て抗すべからず…早くも恐怖心を生じ、城門指して逃げ出す」や「敵は頗ぶ

る力戦せるも、我が榴散弾に射すくめられ、竟に紛々として隊伍を亂せしかば」とのように、清軍の戦闘姿は、すごく簡潔な語句⁶でまとめられ、多くの場合は戦闘直後の逃亡と一緒に書き連ねられている。内容の多くは清兵の対抗または動揺が淡々表現され、日本軍の描写に反し、清兵の戦闘姿そのものの描写がほとんど省略されたのである。

また、言葉使いについても、「狼狽」、「一支も支へず」、「恐怖」、「士氣沮喪」、「色めき立て」などの定型な文句が多数であり、清軍の訓練不足と動揺した姿を強調した内容が主である。「狼狽」という言葉は5回、「一支も支へず」に類似した言葉は4回ほど、単一な表現が言い方を変えながら、繰り返し使用された傾向が見出せる。以下では、①、②、③の内容をめぐって、いくつか代表的な戦闘場面を取り上げながら、具体的な叙述を考察する

戦闘中と戦闘直後の情景の描写に先立って、清軍の戦闘条件がよく提示されている。例えば、第四編では初捷報「我軍大舉して平壤を陥いる」の中で 1 ページほど言及され、第五編の詳報また第七・八編の特集になると、「清軍の防禦」と題した単独の記事が設けられ、それに加えて各戦闘の報道においても戦闘条件への言及がみられる。具体的な記述を列举してみると、

- イ) 其地は險要に據り、其兵は大衆を擁し、清國陸軍の精を抜て此に集め、加之其背後には義州を経て遠く奉天吉林に連なる、固より牙山に於ける葉志超が孤軍の比にあらざるなり

「我軍大舉して平壤を陥いる」,第四編,pp.28～35

- ロ) 成歡の敗将葉志超は、敗竄の兵を集めて平壤に投じ、既に我軍の伎倆を知るが故に、最も守備を嚴にし、其兵は直隸省の精銳と満州兵とを集め其兵器は銳利なる發銃と、精巧なる山砲野戰砲を備ひ…彼は險要に據り、糧食兵器に富み、最も地理に委はし。

「平壤攻撃の部署」,第五編,pp.1～4

- ハ) 清軍の防備は…東方一面大同江に望み、三面繞らすに城壁を以てし…而して大同江沿岸は、斷崖絶壁、高く峙ちて頗ぶる防備に便に、又三面の城壁は、堡壘高く聳えて攀援に難んず(後略)

「第三 清軍の防備」,「平壤陷落史」,第七編, pp.46～48

いずれも清軍の優勢を強調した内容だと思われるが、第四編で「無上の要害」を占有した上、「陸軍の精を抜いた」と紹介した、各編は共通して地理の優勢および精鋭部隊であることを強調していた。

第五編の場合、上記の二点に加えて、さらに「我軍伎倆を知る」、「鋭利なる連發銃」、「精巧なる山砲野戦砲」また「糧食兵器に富む」などと、交戦の経験、兵器そして物資の面を新たに語るようになる。

また、第七・八編になると、表現を変えながら第五編の叙述を再度提示し、そして描写がさらに具体化した傾向を示している。そのほか戦闘ごとにも戦闘条件の紹介をはめ込んで報道する手法がみられる。以上のように、清軍が擁した絶好な条件を紹介したうえで、戦闘描写を展開していったのである。各戦闘における清軍の優勢を強調し続けた反面、平壤作戦に関わった日本軍の苦労を最大限に表現できたのである。

当時の戦況を整理してみると、9月15日の早朝、大島混成旅団は三路にわけて長城里の橋頭堡、船橋里近傍の十里船艙洞そして羊角島から攻撃を始めた。船橋里の方面において、日本軍は馬玉昆の毅字軍と衛汝貴の盛字軍に遭遇し、激戦の末勝負が決着できなかった。一方、羊角島方面の混成旅団また北方面の朔寧支隊も強力な攻撃によって日本軍が大同江の渡河を遂げ、先に平壤城の進攻に着手した。

朔寧、元山の両支隊は平壤城の北から攻め込み、榴散弾によって諸陣地を陥落させ、最後に要塞の牡丹台も占領していた。玄武門で守備した総統左寶貴は、自ら戦闘に加わった末重傷を受け戦死した。それに従って葉志超をはじめとした将軍が動揺し、ついに城内から白旗を掲げて、夜に乗じて逃亡を謀ったが、日本軍の追撃を受け大きな死傷を引き起こし、平壤城もついに陥落した⁷。

上記の戦闘状況を把握し、ここでは代表的な戦闘場面として、日本軍が圧勝した大同江渡河の競り合い、勝負が未決着した船橋里の激戦、そして平壤城の占領を考察してみる。

初期報道となった第四編では、上記の戦闘に関する詳細な叙述が行われていなかった。それに対し、第五編から以下のような報道が見かけられる：

イ) 大同江渡河

(大同江近くの)封洞は…敵の潜伏には甚だ便利にして、若し此嶮要に據り、我兵を狙撃するあらば、渡江頗る難きものあらん。然るに清兵の怯弱なる、暫時の射

撃に魂を消し、自ら此要害の地を棄てゝ去る…其の怯懦眞に笑ふべし。

「朔寧枝隊大同江を渡る」,第五編,pp.16～18

ロ) 船橋里の戦い

此の方面こそは我軍の全力を注ぎて攻撃するものと信じ、敵は精鋭を盡して此に集り…平壤の敵軍は實に精鋭を盡くして正面を防禦し、大同江に橋を架し、江の南岸船橋里に於て高さ四メートル許の堡壘三個を築き險岨に據りて我軍を待てり
…

「混成旅團大に船橋里に苦戦す」,第五編,pp.18～22

ハ) 平壤城の陥落

平壤城も、将さに陥いらんとする一刹那、卑怯なる清兵は、忽ち白旗を玄武門内の高城郭に翻して降参の意を表したり…當時清軍が一夜の猶豫を乞へるは、此夜の中に遁走の準備を為さん為なりしとは後に至りて知られたり。…午後八時頃より續々群を為し、或は城門を出で、或は城牆を越へ、潜行して甑山及び義州の方向に逃る。…

「我軍遂に平壤を陥いる」, 第五編,pp.27～35

日本軍が快勝を遂げた大同江渡河について、清兵は戦うとすぐ「魂を消し、自ら此要害の地を棄てゝ去る」ように主観的に表現していた。清軍の戦闘条件の優勢と大きな落差を感じらせ、清軍に対する「怯懦」など否定的なイメージが構成されていた。

その一方、船橋里の激戦について、敵前逃亡の描写はない反面、戦闘条件だけに着目した描き方が特徴的である。それに対し、日本軍の戦闘姿は、「死あるのを知つて、生歸を歸せざる勇猛無双の我軍は争かでか踟躕せん、前後左右に勵まし、死ねや死ねやと叫びつゝ、獅子奮迅の勇を顯はし」⁸など、より具体的で勇ましく描写されている。

また、平壤城陥落の描写になると、清軍の逃亡が再び注目され、特に陥落の寸前で降伏を装って逃亡したことが「卑怯」な行為として詳しく報道されていた。

中国旅順半島の後略が始まった 10 月下旬において、以上の戦闘場面は、また『実記』の第七、八編で特集「平壤陥落史」によって再度回顧された。

報道の材料は、戦場の兵士が書き残した日記書信や、外国人記者の記事などを使用し、

さらなるバラエティを持ったエピソードが加わったのである。左實貴の戦死や、日本兵原田重吉の玄武門一番乗りなどについて、戯作特有の文章表現が多数である。各戦闘場面における叙述は、以下の通りである：

イ) 大同江渡河

我砲手の發射毎に命中し、敵軍頗る狼狽す(中略)

折しも韓人の老幼婦女五六十人清兵に逐はれて江中の小島に避難し、食料續かず、殆ど餓死せんとする者あるを認め、即ち奪ひ得たる舟を艤し、無事に之を救ひて歸りたれば、彼等の悦び物も譬ふべきなし。清兵の酷虐に反して、我が軍隊の恩恵を謝し(後略)

「其一 混成大島旅團」,「第二 各部隊の行進」,pp.29～37

ロ) 船橋里の戦い

(清兵の)砲撃益ます激を加ふる…此の方面に迎へる敵軍は、奉天府の盛字軍と、李鴻章麾下の盛字軍とにして、剽悍を以て知られたる馬玉崑之を率ゐ…其兵器は精銳無比なるモーゼル連發銃を携ふるもの多く、遙かに船橋によりて連絡を對岸の兵を通じ、新陳代謝して勞逸相代はり、地の利によりて防守するなりき。

(中略) (死傷者)盡とく敵の為に首級と右腕とを截り去られて、亦一完體なし。是れ敵將は日本軍の首級一個を獲たるものは、少なくとも金二十兩の賞を與ふるの規定を設けて士卒に命じたるに由ると云ふ。其残忍の舉動は、之を記するも酸鼻に堪へざるなり。

「其一 大島混成旅團の苦戦」,「第四 各道の戦闘」,「平壤陷落史(承前)」,第八編,pp.1～10

ハ) 平壤城の陷落

午後二時頃に至り、一隊の歩兵は突貫して敵の堡壘に迫り、敵は蜘蛛の子の散ずるが如く、隊を崩し先を争ふて逃げ去りたれば…敵兵既に偽りて降を請ひ、夜に入り遁逃を企てたりなり。…

左は敵将中最も剛悍にして能く衆を撫し、…前日提督葉志超等が退軍を議したることありしとき、大に罵りて之に抗し、死を以て防守せんと誓ひ、此日朝より激しく戦ひ、尚ほも激しく衆を指揮し、…自ら其傍に進み、代りて大砲を指揮しつゝありしとき、

再び銃丸を胸に受けて倒る。…陣營に到りしときは、既に死せり。

此に於て兵氣大に沮喪し、衆皆逃れんとするも、三方既に我軍の為に圍まれたれば、偕は降旗を掲げて偽り降り、夜に入りて逃れたるなりといふ。

「其三 師團本隊の鏖戦」,「第四 各道の戦闘」,「平壤陥落史(承前)」,第八編,pp.14～17

以上からみると、清兵の戦闘姿に対する回顧は、概ね第五編と軌を一にしている。圧勝した戦闘では清兵の逃亡に注目し、そして激戦の場合は清軍の戦闘条件に注目する描写の手法が一貫している。また叙述の中でわずかでありながら、清将軍左寶貴を肯定的に描写した内容もみられる。しかし、肯定的な評価の持った左寶貴は特例とされ、清軍の大多数は消極的に対戦したことが再確認できていた。

また、上記の記述から、一つ注意すべきなのは、庶民の駆逐や、日本兵に対する「酷虐」な行為を表現する内容がみられるようになっている。特に勝負が未決着の船橋里の激戦において、清兵の「残虐」さを描く内容が具体化したのである。特集の「第六 外國人の手に成る戦勝記」の節にも、清軍の残虐行為に対する言及が目立っている：

沿道郡邑は皆清軍の為に已に掠奪し了せられ、住民は居を擧げて四方に逃竄し、
一片の食一掬の水、竟に之を求むる處無き(中略)

無惨にも日軍の某将校及び兵士二十餘人の頭顱を切斷して床上に排列せるを發覺
せり、余が此際最も憤慨したるものは、清軍提督の残忍無忌なること是れなり…彼現に
無辜なる韓民は、之れが為め、利を貪る清兵若しくは韓兵によりて、幾場の殺傷を逞ふ
せられたりと聞く(後略)

(「第六 外國人の手に成る戦勝記」,「平壤陥落史(承前)」,第八編)

いずれも残虐行為を提示した内容で、敵愾な感情を喚起するような描写が印象深い。この記事は、ニューヨークのベラルド新聞の記者 A・B・ド・ガーヴィルによって書かれたものである。ガーヴィルは、旅順半島(金州・旅順)の攻略も取材し、旅順虐殺事件の弁護を続けていた人物である⁹。中国大陸の侵攻が始まった 10 月末で、平壤陸戦の回顧で清兵の「残虐」行為を強調することは興味深く感じられる。その他、この転載記事で清兵に対する新たな表現も現れている：

余は自ら捕虜を觀しに、實に賤劣此上も無き憫むべき一群なり…人類と謂ふよりも、寧ろ獸類と評するを適當と思惟せしめたり…

清軍の疇昔迄據りつゝありし堡砦…は不潔なるも堅牢に建設せらる、然れども牙營の
内に入れば、實に紛擾亂雜を極め、各種の軍器皆な散亂して收拾せられず、彼等が全
く之を委棄して走り去りこと頗る章々たり、…蓋し清兵は其軍敗北と聞けば、直ちに軍服
を脱し、辮髪を斷ち、以て他に逃遁するを常と為す

今までの戦況報道と違い、ガーヴィルは戦地における清兵の生活様相から逃亡の手段も詳しく取り上げて批判したのである。「獸類」のような激烈な表現、そして清兵が民間人に変装し逃亡したことも前掲の戦闘報道にみられなかった内容である。

一方、日清戦争後になると、平壤陸戦に対する回顧が非常に簡略化していた。表 3 で示されたように、回顧の記事はわずか 2 件で、さらに文幅はそれぞれ 5 枚を超えていなかった。特に第四十編の[征清戦史]は、同号の内容の最後尾に配置されていた。具体的な記述を取り上げると、

誠に是れ天險の地、地利の良好無双といふべし。清兵既に牙山に敗る。よりて早くも本據を此の地に定め、數萬の軍兵を集め日夜防備の策を講じたり。…敵兵モーゼル七連發銃を累發し、彈丸雨の如く下る。(中略)

敵兵算を亂して斃れ、驍將の聞にある左寶貴もまた丸に中して死す。敵軍之に辟易して色めき立て見ゑければ…清兵忽ち白旗を玄武門内の高城郭に翻して降意を表す。(中略)

敵騎三四十同じくヲイソン堡壘の裏手なる小川を渡りて逃げ出だすを同じく黍畑より狙撃して悉く之を仆す。後敵騎亂出して、我堡壘攻撃を防ぎしも、午後二時頃に至り、我歩兵の突貫に逢ひ蜘蛛の子を散らす如く、隊を崩して逃げ去つたり。

「平壤の大戦」,[征清戦史],第四十編,pp.126～130

第五編ないし第七、八編の内容を簡潔にまとめたように、絶好の戦闘条件を持ったに反し、清軍が戦うとすぐ逃亡するという報道パターンが形成したとみられる。「蜘蛛の子を散らす」ような表現も、そのまま戦中の記述を踏襲したのである。その一方、簡略な叙述の中でも、清軍の

臆病なイメージが定着していた。

以上を見てきたように、平壤陸戦は、初報道→詳報→(回顧の)特集→戦後の回顧という順番で報道され、それにしたがって中国に関する描写も具体化していたが、共通して戦闘条件の優勢に反し戦闘中すぐ敵前逃亡するという、臆病なイメージが強調されていた。また、激戦の場合、清兵の「残虐」行為も特筆され、戦争中の特集では最も詳しく描写されたのである。

一つ注意すべきなのは、前述のように、明治初期では多くの戯作者が新聞記者に転身し、小新聞の記事を執筆していたが、『実記』の記事にも、少なからず戯作の色が残っている。物語風の綴り方は大衆読者の興味を引く反面、誇張的な表現、矛盾な情報はよく見かけられる。

たとえば、平壤陸戦に関わった清軍隊の規模について、第四編において時には二万人、時には四万人だと報道し、第五編になると二万人、第七編では一万四五千人とのように、記述の変化がみられる。

また電報で弾薬不足の問題を強調したにもかかわらず、戦闘場面の描写では日本兵が榴散弾を「雨の如く」発射したと誇張的に表現していた。さらに、場合によって、「劳逸相代わり」など同じ言葉を清軍と日本軍の間で相互に転用する現象も珍しくなかった。

そもそも、当時の博文館は従軍記者も派遣しなかったため、戦況情報の信憑性を実地で確認する方法はなかったに近い。しかし、当時の読者が関心したのは、戦闘の勝負だけでなく、戦場に立った親族や友人の安否、さらに戦地生活の様相である。安否確認の欲求が満足された以上、この時期では、戦闘場面の信憑性がさほど重視されていなかったのではないだろうか。以上の考察を踏まえて、次からは続いて黄海海戦、旅順半島攻略の戦況報道を分析する。

第2節 黄海海戦の報道からみた中国

平壤が陥落した二日後、黄海海域の利権を争った海戦も勝負が決着した。宣戦布告前の豊島海戦と異なり、黄海海戦は清海軍(北洋艦隊)の主力がほとんど出戦した大規模な海戦となっていた。そして、近代化の先進軍備を誇った北洋艦隊に、日本軍が戦勝していた。戦勝の報道は一時各社の新聞雑誌の紙面にあふれて、『実記』でも「近世絶無の大捷を奏した」と黄海海戦の戦勝を絶賛した内容が確認できる。

実際、戦争勃発の何年前から、日本人は清海軍の北洋艦隊に対し一定の認識を持ってい

た。北洋艦隊は、組成された当時から 1885 年、1891 年の二回にわたって日本を訪れ、当時の日本の国内で強い関心を引き寄せていた。特に一回目の来訪では、上陸の清水兵は日本人と乱闘した事件(長崎事件)も発生し、国際の仲裁が参入したまで大きな話題になっていた。また、二回目の来訪という、序章で述べたように、北洋艦隊について「船体の形状全く相違して我軍艦中に之と比すべき種類のものなし」¹⁰と、高い評価が数多くみられる。そのなかから、日清戦争前まで日本がある程度北洋艦隊に脅威感を抱いたことが読み取れる。そのため、黄海海戦の戦勝も一層大きく意味付けられたのである。

『実記』の記事は、黄海海戦について「惟ふに世界海戦の大なるもの…新式の戦術備はりて後、双方十数隻の艦隊を操縦して、五時間餘の激戦を試みたるは、實に今回黄海の戦を初と為す」¹¹と分析しつつ、その勝利を「日本帝國の威武は此より後周ねく全世界に耀かすに足る」と、国際的な角度からとらえて評価を行い続けたのである。全 50 編の中で、黄海海戦に関する記事は、表 5 にまとめられている。

関連の戦況報道は、戦中において平壤陸戦より少々簡略化していた、戦後の回顧が陸戦より盛んに行われたことが特徴的である。戦中の報道形式は平壤陸戦と類似し、初期報道から詳報へという順番で報道を進め、戦勝までの経緯を整理した上、各部隊の勇戦にも注目していた。

一方、表 5 で示された通り、黄海海戦に関する報道は、平壤陸戦と比べると、戦後になっても多くみられる。海軍将校の回顧談から海外の評論、さらに戦勝後の一周年の回顧など、海戦に対する回顧は様々な形で行われていた。

表 5 黄海海戦（1894 年 9 月中旬）の戦況報道

戦争中の報道（本紀の部分）	第四編 （1894年9月29日） 我海軍大に清国艦を撃破す	第五編 （1894年10月9日） 黄海海戦の詳況 黄海海戦の餘聞	第六編 （1894年10月19日） 黄海海戦の最詳報 樺山中将の豪膽 比叡艦の勇戦 赤城艦の勇戦 黄海海戦の別報 海戦に関する清国の風評 黄海海戦の評論	第七編 （1894年10月29日） 松島艦の勇戦 扶桑艦の勇戦 黄海戦死者を祭る 大敗後の支那海軍	第八編 （1894年11月7日） 黄海の戦い
戦後の報道	第二十四編 （1895年4月17日） 【海外彙報】 ●佛蘭西 黄海海戦の教訓	第三十三編 （1895年7月17日） 【戦争實記】 伊東中将の實歴談	第三十四編 （1895年7月27日） 【戦争實記】 河原大佐の實歴談	第三十五編 （1895年8月7日） 【戦争實記】 日清交戦日誌	第三十六編 （1895年8月17日） 【軍事叢談】 黄海海戦談
	第三十七編 （1895年8月27日） 【勲功美談】 定遠の紀念物 海戦一週年の祝宴 【軍事叢談】 佛國士官の黄海海戦評判	第三十八編 （1895年9月7日） 【軍事叢談】 佛國士官の黄海海戦戦評（続）	第四十一編 （1895年10月7日） 【海外評論】 黄海海戦の評（米） 【征清戦史】 黄海の海戦		

では、以上の報道はいかに海戦中の中国を描いたのか。戦中の部分について、清艦隊の対抗より、日本軍の勇戦が注目されたとみられ、第四編から第十編における中国関係の記述は、陸戦報道より簡略化した傾向がみられる。各種の記述を分類した結果は次の通りになっている：

- ① 戦闘条件 (1)
- ② 戦闘中 (22)：対抗(2)、動揺(13)、練度(4)、策略(3)
- ③ 戦闘直後 (26)：逃亡(19)、命乞いや号泣の聲(4)、焼棄(3)
- ④ そのほか

戦闘中と戦闘直後の記述が多数を占め、そして動揺、逃亡姿に注目した点は、前掲した陸戦報道と共通している。戦闘中で清軍について、対抗を叙述した内容がわずか 2 件にとどまり、攻撃され続けるような姿が重点的に描かれ続けた。

「支ふる能はず」など定型の文句が多数みられ、そのほか「火災起り頗る混雑の證あるを見たり」¹²や、「敵は四分五裂し復艦隊を整列する能はず」¹³などの表現は、いずれも清軍の動揺、混乱ぶりを表したのである。それに従って、清軍の逃亡姿も印象深く描き出されていた。戦艦の沈没に際し、「乗込兵士號泣の聲」¹⁴から、「乗組員の海に投げ助を乞ふの聲は、砲聲

と和して惨憺の光景」¹⁵、「水兵は悲哀の聲を挙げつゝ板子を抱へ波間に浮きつ沈みつする態」¹⁶、さらに「沈没時に當りて萬國信號旗を出し救助を求めたる」¹⁷表現は、いずれも清兵の「臆病」な性格を強調したのである。

そのほか、戦闘中における水夫の逃亡も素材として、日本人士官の日記で描かれている：

支那軍艦は極めて脆弱其の水夫の如きは劇戦最中にも我れ先きにとボートを下して其の生命を免るゝに汲々たることなるに此の戦に限りては更に左る事とはなく各々殊死して戦ひたるものは何ぞ他なし此の役十二隻の清艦中一隻のボートなく進退只本艦に訴ふるの已むを得ざるものあるより扱ては彼れ等脆弱の水夫士官等が死物狂ひをなしたるなり…

「黄海海戦の別報」,第六編,pp.28～32

勝負に関係せず、自分の命だけを守ろうとして、「死物狂ひをなし」て救命のボートを下ろした姿が活写されていた。また、第十編においても、以下のような回顧が語られている：

七千五百噸の甲鐵艦を有し乍ら、脆くも打敗けて怯名を千歳に傳ふるは、抑も将校兵士の忠君愛國の念乏しきに由らずんばあらざるなり。彼れ命を惜んで名を惜まず、故に開戦の初め勢甚だ猛烈なりと雖も、一旦敗ぶるゝや先を争ふて狼狽逃走し、復た上官の命を聞かず、陣形亂れ列整はずして敗は益々敗となる、眞に憐むべきなり…

「黄海の戦」,第十編,pp28～39

以上の描写は、清軍や水夫の「臆病」な性格だけでなく、無秩序、愛国心の欠乏などの問題も強調されている。同時期の雑報において、「清兵清艦を撃たんとす」¹⁸と題した記事は、捕虜兵が「日本の待遇の厚きに感涙を流し自から舊つて日本軍艦が清國に向ひ海戦を為すに就ては一人宛各軍艦に乗り込み支那沿岸威海衛旅順口を始め各要港の案内を為」すことを報道し、清兵の愛国心が欠乏するイメージがさらに強化されていたのである。

そして、戦闘時における戦艦の様相について、「遁逃」など単一な表現が繰り返された場合が多く、詳細な描写が非常に限られていた。たとえば、逃亡中で座礁した揚威号について、各編は以下のように報道していた：

揚威號亦我遊撃隊の彈丸を受けて、既に沈没に瀕し、逃れんと欲して忽ち浅瀬に乗り上げたり…遁れて浅洲に乗り上げたる、揚威號の棄て去されたるあるを發見し

「黄海海戦の詳況」,第五編,pp.36～44

敵艦揚威の焼けて坐礁するあるのみ

「黄海々戦の最詳報」,第六編,pp.4～13

性急に逃亡した結果座礁してしまった内容だが、戦闘後で他の戦艦に見捨てられたことによって、海軍の臆病なイメージが再度確認できていた。そのほか、命中点の面から北洋艦隊に対する否定的な評価もうかがえる:

両艦隊の距離四千メートルならんとするとき、敵は既に轟然として砲聲を發し、射撃を始む、然れども我は命中點に達するまでは敢て發せず

「黄海海戦の詳況」,第五編,pp.36～44

彼れ先づ發砲を始む、其距離六千メートル、固より、一も我に中らず…

「黄海々戦の最詳報」,第六編,pp.4～13

敵艦之を見て意を戦と決しけん、直ちに其舷首を盡く我右翼に向け、六千メートルの距離に於て、既に砲撃を始めたなり…

「樺山中将の豪膽、西京丸の勇戦」,第六編,pp.14～21

此時敵艦亦戦意を決し、直ちに近前し來り、其の距離六千メートルにして、彼れは既に砲撃を始む、然れども我は未だ命中點に達せざるを以て動かず…

「松島艦の勇戦」,第七編,pp.1～6

当時の日本艦隊は、圧倒的に速射砲を装備し、そして北洋艦隊は、30センチの重砲を備えた代わりに、速射砲が少なく速力も日本側より随分劣っていた。日本の軍艦が北洋艦隊より遅く発砲したのも、速射砲の射程が短いからだとみられる¹⁹。その一方、戦艦の説明が不足したため、以上の記述は誤解を招きやすい表現になっている。命中点に達する前の発砲することが、清の戦艦を「臆病未練」なイメージに連想させている。また、「小弱を見て勇む」²⁰などのような記述もあり、清軍の「卑怯」なイメージを反映した描写も現れていた。

一方、戦争後において黄海海戦を回顧した内容について、前述のように、「日清交戦日誌」および「征清戦史」のシリーズのほか、日本人の将校の実歴談、そして外国人の評論も五篇

ほど取り上げられていた。

まず、「征清戦史」では、黄海海戦の勝利を「我威力は益々宇内に震動せんとす」とのように、国際的な影響力をもう一度強調し、戦闘地図や戦力の対比も含めて再度の回顧を行っている。しかし、日本軍の勇戦に注目した一方、北洋艦隊に関する記述は「敵艦は或は沈み或は逃る」、「大破損に及ぶ」と、やはり簡略な表現だけにとどまっている。

そして、「日清交戦日誌」においても、「火災起り頗る混雑の状ある」や「威海衛の方向に遁去る」、「浅瀬に乗上たる揚威」など、戦中の記述を抽出し繰り返した表現がみられる。

また、個人の回顧談からも同じ傾向がみられる。「伊東中将の實歴談」では、戦闘中の北洋艦隊について、「船も列も亂れ」と叙述し、そして敗北した清軍について「狼狽の爲めに遂に船を顛覆させました」という簡略な言及しかない。「河原大佐の實歴談」では、日本軍の勇戦がさらに注目され、北洋艦隊については「困苦」とのように漠然とした評価しかみられない。「内田千代田艦長の黄海々戦談」の中で、「黄海の海戦は支那婦人の報告より起こる」とのように、中国人婦人との偶然な出会いによって北洋艦隊の行方をたどり着いたなど、海戦を「奇譚」にする傾向さえあるが、清軍の戦闘姿に対する回顧がほとんどみられなかった。

また、西洋人による海戦回顧には(主にフランス側)「黄海海戦の教訓」などの記事もみられるが、「清國の軍艦にも、火災多かりし爲め、佛國政府にては、今回其軍艦に消火器を増」すように、北洋艦隊の敗北に鑑みて自国の海軍を強化した内容が主である。そのほか、「佛國士官の黄海海戦評判」および続編も同じく戦備に着目した内容で、中国に対する評価がみられなかった。要するに、戦後の回顧談は、日本海軍の戦績、国際的な影響を再確認することに役割を果たした。

このように、黄海海戦は国際的にも影響力のあった戦闘として、『実記』では戦中そして戦後でも盛んに報道されていた。日本軍の勇戦が強調された一方、清軍は相変わらず臆病なイメージで描かれていた。さらに、逃亡に対する描写が具体化し、清軍はまた無秩序、そして愛国心を欠乏したように表現されていた。戦後回顧の記事が多い一方、清軍に対する描写は陸戦と同じく簡略化し、敵前逃亡を示す定型な語句が繰り返されたことから、清軍の臆病イメージがある程度定着したとみられる。

第3節 二分化された中国評価～旅順半島攻略の報道から～

1894年10月において、第一軍が鴨緑江を強渡し中国国境を突破した同時に、9月で新た

に編成された第二軍も旅順半島の侵攻を開始した。侵攻の過程は、第二軍の上陸から金州・大連湾の攻略(清軍の逆襲を含めて)、旅順口の攻略になっている。「永久防禦の設備」を誇った旅順口の占領によって、中国内陸の侵攻を進める肝心の第一歩が遂げられていた。その同時に、旅順攻略の中で起きた虐殺問題は各国の新聞紙面をにぎわしていた。

『実記』における旅順半島攻略の戦況報道は、平壤陸戦と類似し、戦争中は第九編から第十五編にわたって幾度も繰り返し行われていた。戦後の回顧は相変わらず「征清戦史」と「戦争實記」と簡略化した傾向を持っている(表 6)。

表 6 旅順半島攻略(1894 年 10 月～11 月末)の戦況報道

戦争中の報道 (本紀の部分)	上陸の報道	金州・大連湾攻略の報道				旅順攻略の報道		
	第九編 (1894年11月17日)	第十編 (1894年11月27日)	第十一編 (1894年12月7日)	第十二編 (1894年12月17日)	第十三編 (1894年12月27日)	第十一編 (1894年12月7日)	第十二編 (1894年12月17日)	第十四編 (1895年1月7日)
	第二軍の上陸 第二軍の総撫	金州及大連湾の占領	金州攻署記 大連湾占領記 金州陥落後記	金州後戦記	金州後戦詳記 金州の行政廳	旅順口陥る 旅順陥落餘聞	旅順口陥落記 旅順陥落後記 旅順海戦記	「土城子激戦の別報」
戦後の報道	第三十六編 (1895年8月17日)	第四十二編 (1895年10月17日)						
	[戦争實記] 日清交戦日誌	[征清戦史] 金州及大連湾の占領 旅順口の陥落						

報道の順番は、初報から詳報までとのように、平壤陸戦の構成を引き継いだ一方、各戦闘の報道が明らかに簡略化した傾向があった。旅順攻略の詳報を取り上げると、平壤陸戦のように単独の節を設けて、各方面の勇戦を詳述する形ではなく、一節ですべての戦闘経緯を収めた形をとっている。

そのほか、戦中の回顧報道もかなり簡略したことが特徴的である。全般的な回顧を行う特集報道がなく、金州・大連湾攻略の場合、回顧のかわりに後続の戦闘である清軍の逆襲が取り上げられていた。また、旅順攻略となると、土城子そして二龍山方面の戦闘だけが回顧されたのである²¹。

次に、全般的に中国関係の記述を把握してみる。戦場が朝鮮から中国本土への移行によって、日本軍が敵国との接触は、戦闘時の清軍に限らなく、中国本土清国の一般民衆(以下は統一して「清民」と略称す)また風俗文化へも範囲が広がっていた。そのため、『実記』の報道では清民の登場も明らかに増えていた。

戦中記事から関係の記述を抽出した結果、清軍に関する記述は 118 件、そして清民に関

する記述が 21 件に達したと判明している。その中で、清軍に関する表現は以下のように分類できる：

- ① 戦闘条件(14)：人数、地形
- ② 戦闘中 (35)：対抗(26)、戦略、動揺
- ③ 戦闘直後(47)：逃亡(33)、軍備の遺棄(6)、変装(3)
- ④ 野蛮、残虐行為(13)
- ⑤ 戦闘前からの避戦(9)、その他

平壤陸戦の報道手法と類似にして、旅順半島の戦況報道も清軍の優勢を紹介したうえで、清軍の逃亡姿に注目した描き方をとっていた。具体的な表現として、臆病なイメージを強調したと思われる「攻撃に支へず」、「狼狽舉を失し」、「逃竄」、「遁逃」、「潰走」など定型の文句が繰り返されていた。それに加えて、逃走中で軍備の遺棄や、軍服を脱いで民間人への変装も多く取り上げられるようになっている：

敵兵皆潰散せし後にて、後ろ向ふ岸老龍頭より六發の砲撃ありしのみ、遁跡の大砲は撃つ許りに装薬したるもあり、總て備筈などに傷けずしてあり、金州城内には旅順に應援を請ひ、旅順より援兵は送り難し、李鴻章へ出でよとの電信文残り居りき…

「金州及大連灣の占領」、第十編,pp.1～12

敵兵の軍服、銃劍等委棄せるあり、是れ敵兵の其難を免れんが為め城外に出で軍服を脱して平服と改装したるもの、其卑怯の情憐むに堪へたり…

「金州城攻略記」、第十一編,1894 年 12 月 7 日,pp.1～9

このように、逃亡の方法も具体化され、清兵の臆病なイメージが再確認できていた。しかし、平壤陸戦と違うのは、逃亡だけでなく、清軍の対抗姿に対する描写も 26 件ほど見つかった。

敵も亦此處破られじと死力を盡して此を拒守し、應戦頗る激烈を極め、松樹山黄金山の敵壘共に此を援け、敵の海岸堡も亦巨砲を放つて之を助け…

「旅順口陥る」、第十一編,1894 年 12 月 7 日,pp.22～28

彼が砲臺及兵營に盡く白旗を掲げたるなり…白旗とは降旗と知る、我等空しく計畧に
陥るも知らず…間もなく旅順砲臺の各所より、數發の砲撃を受く…

「土城子激戦の別報」，第十四編，1894 年 12 月 27 日，pp.16～26

また、激しい対抗姿の描写と伴い、清兵の「野蛮」な印象も伝えられていた。その一つの表
現として、伝統的な戦闘方式が注目されていた：

敵と距る千五百米突なり、二三發の無駄放發に敵の展開する事甚た多し(中略)

彼満洲の騎兵は、馬を御するに手綱を操らず、手綱は馬の鬣に放置し、雙手にて銃を
弄し、一口の鈍刀あれども、更に使はんとせず無二無三に發射するのみなり(後略)

「土城子激戦の別報」，第十四編，1894 年 12 月 27 日，pp.16～26

金州城北方の高地と東北方の高地とを目標として猛進し来る…錯雑なる散兵と側面
縦隊とを以て来進し、…恰も盆上に螻蟻の群がりたるが如く(後略)

「金州後戦詳記」，第十三編，1894 年 12 月 17 日，pp.31～36

「無駄放發」、「錯雑」な隊形、そして「手綱を操ら」ない騎兵、「無二無三」な射撃方法など、
いずれも清軍の近代化に遅れた戦術また戦闘形態を描き出したのである。また、もう一つの
表現として、国際法に違反した残虐行為も多数みられる。

近来戎器を弄して人民を脅威するの聞えあるのみならず現に敵兵と見認め難き者の刀
創に殪るを目撃せり甚だ穩かならざる儀を有之候

「金州陥落後記」，第十一編，1894 年 12 月 7 日，pp.16～22

清兵の残忍なる我戦死者の頭を斷ち手を切落し、腹を割きて膽を出し、最も慘毒を極
めたるにぞ、我將士は之を見て怒氣心頭に徹し、皆為に此怨を報いんことを誓へり

「旅順口陥る」，第十一編，1894 年 12 月 7 日，pp.22～28

清兵の一たび過くるや、掠奪姦淫、狼藉至らざるなきを以て、恰も亂後荒涼の觀あり

「我軍復州を取る」，第十四編，1894 年 12 月 27 日，pp.12～16

以上のように、旅順虐殺問題が起きた時期に当たって、清軍による略奪行為また残虐行為
が却って報道の対象となり、その記述が 13 件にも達している。

そして、旅順攻略に対する回顧においても、清兵の臆病なイメージだけでなく、「残虐」や「野蛮」な行為が重点的に描かれていた。その中で土城子の激戦²²における日本兵の切断事件は、繰り返し報道の素材として取り上げられていた。「中尉は全く赤裸となり、目を抜かれ胴を劈かれ」など露骨な描写は、敵愾心を喚起するに大きな役割を担っていた。

その一方、清民に関する描写は、清軍と分離した形で行われていた。関連の記述は、以下のように分類できている：

イ 逃亡(日本軍上陸の直前) (6)

ロ 日本軍の歓迎 (10)

ハ そのほか (5)

(教育レベル、風俗習慣、強盗、清官の賄賂など)

日本軍上陸の直前において、民衆の逃亡に関する記述が多い一方、上陸直後の記述は、日本軍歓迎の内容が明らかに多くなっていく：

沿道の清民は頗る好意を我に致し、時に土物を捧げて軍司令部の幕下に拜過するものあり…土地の父老水を汲みて一行に供し壮者は畚鍤を執りて道路を修め歓迎具さに至る(後略) (「金州及大連灣の占領」,第十編,pp.1～12)

劉父子直ちに大山大将に謁し、献ずる金州城の精圖一冊、黄金五百兩、乗馬五十頭、其の他鶏、豚無數を以てせり(後略)

(「明の遺民」,第十四編,1894年12月27日,pp.33～37)

ここでは、清民は「^{じゅんりょう}馴良」であり、日本軍とは味方の関係で描き出されたのである。その原因は、第二軍の「^{すいぶ}綏撫」によるものとされ、三回にわたって諭示を「土民に頒」した効果と解釈されていた。いわば、日本軍が国際法に従って民間人に接したことが強調されていた。

旅順半島の攻略の報道が開始された以来(1894年11月17日)、戦況記事の中から民衆への諭告、兵隊の「徴発心得」²³との内容が『実記』の紙面で明らかに頻繁にみられるようになっていた。戦場の移行に伴う敵国民衆の対応は、かなり慎重的に報道されたのである。国際法を準拠した点を繰り返し強調し、朝鮮戦場で使用した「徴発」という言葉をわざと「代償徴発」とのように置き換える現象もみられる。このような慎重化した表現は、いずれも国際法に対する

強い意識を反映している。そのため、清民に対する評価も清兵と区別され、「馴良」だと強調した一方、マイナスな表現が控えられた傾向が見出せる。

実際、第二軍が上陸直後では哨兵が襲われた事件も発生したという。この時期の戦場にいた軍夫の回顧²⁴によると、

土人の風をなしたる清人、藪に抛りつつ來りて我が第二連隊第三大隊の歩哨に迫り、天秤棒をもって打ち掛かりしかば、歩哨は殺気満々、直ちに一人を衝殺し二人を生擒して師団司令部に送る。詰問の後、全く土民なるをもって放逐す。

と、一般民衆との身分が判明し、襲撃の人を釈放に至ったようである。一方、同事件について、『実記』の報道では「糾問せらるゝや夷然として聲色を動かさず、頻りに咒文を誦して死に就かんことを請ふ、決して尋常一様の土民に非ざるが如し」との記述があり、その民間人が変装した清兵と一貫して報道したことも興味深く感じられる。

そして、清民が「金州城の精圖一冊」を日本軍に贈った行為は、清軍との対立な関係を表出していた。また前文で言及した民間人の「逃亡」は、実際に清軍の「乱暴」を証明するものとして取り上げられていた。

清兵と清民に対する評価の二分化は、また清兵と清民の「歸順」に対する描き方の差異から確認できる。

まず、清兵の降伏について、第十一編では「我某将校より旅順の彼の将校に興へて降を勧むるものにして、…金州の副都統連順…は歸順の心あるものゝよし、此書面は大に彼れの兵氣を弱むるに於て其効蓋し尠なからざりしなるべし」²⁵と、清兵の降伏を否定的な論調で表現したと読み取れる。日本軍の軍隊が「降を勧むる」と、すぐ投降の意をもつようになり、そのため軍隊の指揮も大きく影響されたとみられる。ここでは、清官員の「歸順」は、愛国心の欠如として否定されていた。それに反し、清民の日本軍歓迎は、「暴虐の餘に飽いて仁義の雨露に懷くに至ては、此民の情誠に憐むべきものあり」²⁶と、文明開化による感化を受けたように、民衆の「歸順」は積極的な方向から解釈されたのである。

また、戦後の回顧談についていうと、また平壤陸戦と同じく内容がかなり簡略化したのである。清軍についての評価は定型の文句「野蛮」、「残虐」に固定し、また清民に関しては「馴良」と戦中の報道を大概にまとめた傾向がみられ、ここでは繰り返し列举することを控える。

まとめていうと、旅順半島の攻略で報道された中国人は、清軍と清民に二分化した評価が

みられる。清軍については、今までの通り「臆病」なイメージが強調されながら、激戦における清軍の伝統的な戦闘様式、また残虐な行為が注目され、「野蛮」、「残虐」なイメージも強調されるようになっていた。その一方、清民は清兵と対立的な存在として取り上げられていた。清民に対する言及は、多くの場合、日本軍歓迎という内容でみられていた。そのなかでは、「馴良」なイメージが強調され続けていた。この描き方は、また戦後の回顧においても保たれていた。

第4節 雑報によって再確認された中国イメージ

前述したメイン記事である「本紀」（「戦争実記」）欄は、戦闘の経緯、勝負の報道を重視した一方、各戦地の状況、軍隊の様相に対する具体的な紹介が簡略化している。それに対し、『実記』の後半に配置された記事は、各種の情報で本紀を補完した役割を果たした。

「本紀」欄は一段組みで大文字、長篇の掲載形式に対し、雑報の記事は主に二段組みで小文字、短篇の形式をとっている。具体的な内容というと、戦地周辺の情報だけでなく、戦争報道は戦闘状況から、さらに戦時下の国際、社会全般の状況へと広い範囲で展開されていた。国際の評論から、三面記事のような戦場の裏話まで、多分野にわたった情報が集められたため、ここではまとめて『実記』後半の内容を雑報と称する。それで、雑報によって構成された中国イメージも確認する必要があると思われる。

特に戦況報道は、戦闘状況だけをテーマにしたため、定型の語句を多用し（「一支も支へず」など）、評価も単一化（臆病、残虐）した傾向がある。そして、日本軍の勇ましさおよび正義性を強調するため、清軍と清民に対する評価が二分化した現象も現れていた。そのため、本節では、雑報を参照し、そのなかで反映された清軍そして中国人全般のイメージを分析する。

中国の情報を多数取り扱った項目欄として、戦中では彙報部分の「支那」欄、そして戦後では「地理」欄が挙げられる。

彙報の「支那」欄について、中国軍隊の様相を紹介するエピソードを数多く掲載している。そのほか、戦時下における政府また一般民衆の動向も、報道の対象として取り上げられていた。一方、戦争後になると、記事の分量が大幅に減少した傾向が現れ²⁷、下関条約の締結に伴って、「支那」欄もほとんどなくなったのである。

また「地理」欄はタイトルの通り、戦地の地理情報を取り扱い、そして彙報の部分は日本国内外の時事、論説、また関連の雑談を網羅している。

戦争中では、「地理」欄は主に同時期または今後の戦地に注目し、地名、地形、気候など、いわば日本軍の生活環境を紹介する内容が大半で、中国人を評価するものが少ない。一方、戦後を迎えると、第三十一編から「東洋風土」に改称されたように、占領地(台湾を含めて)の風土人情、特に中国人の性格に着目した連載報道が多く現れていた。

まとめていうと、戦争中では、清軍の紹介が主だが、戦後になると、報道の重心が中国人社会全般の紹介へ転換した傾向が読み取れる。本節では、戦中の清軍、そして戦後の中国人全般の報道にわけて、雑報から反映された中国イメージを考察する。

戦争中の清軍について、雑報の報道は主に軍隊組織、戦地での様相、捕虜兵の姿にわけて展開されていた。軍隊組織の紹介は、主に兵隊の規律、戦闘の軍備、給与とのいくつかの面に着目していた。そして、戦地での様相については、戦闘中の戦術、また戦地生活を紹介する内容が多数みられる。さらに、捕虜に関する報道は、多くの場合は取り調べ、日本軍との関係で取り上げられていた。全体的にいうと、清軍のイメージは以下の三つの評価によって構成されている。

- ①自己本位:利己心、金銭欲、愛国心の欠乏
- ②無秩序:寄せ集めの組織、「無頼漢」の集まり
- ③戦闘力が低い:訓練不足、軍備整頓せず(近代遅れ)

まず、自己本位の性格について、第八編で掲載された「俘虜の述懐」との一文には、以下のような記述がみられる:

上官より頃日朝鮮釜山邊の地に日本軍あり兎に角平壤まで進發すべしとの言に欺かれ月俸三倍の額を給せらるゝが嬉しさに出張せしに竟に今の境涯に立至れりと泣く〜人に語れりぞ

(「俘虜の述懐」, 第八編,p.96)

ここから、最初の従軍の理由から清兵の性格が確認できたのである。いわば、国家のために戦場に立ったわけではなく、将校に騙されて高額な給料を目的に従軍したことである。このように、雑報のなかでは、清兵の自分本位な性格を強調した記事が頻繁に掲載されていた。その自己本位は、また清兵に関する報道の中で、よく金銭欲や愛国心の欠乏という形で表現され、一つの例証として、軍隊内の衝突に関する報道が挙げられる。

軍隊運動の眞最中に三人の兵士は何か氣に食はぬ事ありしと見へ兵營に歸る可しと決心しける…士官も癩癩を起して…杖を振上げて打据えけるが残りの兵士は夫れと見るより列を崩して士官の身邊に輻輳し鐵拳亂打の後の彼の杖を挽取り三人の者共は何の仔細もなく其まゝ歸營するを得たり云々…老大國の兵法は兎に角古色を帯びて面白しと雖も…兵糧に究したる時は平生は豚の如くノロマなる兵士も忽ち變じて狂犬の如く先づ第一に己達の大將を煮て食ふかも知れず(後略)

(「支那特色の軍律」,第一編,p.94)

記事のなかから軍隊の無秩序も反映されていたが、ここで最も強調されたのは、清兵は自分の利益に触りがあると、上下の身分に関わらず、すぐ軍紀の破れてしまうことである。そのほか、第四編の「世界無比の良兵」には、以下のような紹介がみられる:

この好漢皆氣慨に乏しく一死以て國に報ずるの赤心なし且つ之に長たる者の中には儉安苟且唯衣食の豊裕ならん事を是れ祈り兵士の彈藥銃劍を隠して己れの懷を温めんとするものあり(後略)

(「世界無比の良兵」, 第四編, p.93)

また、このような自己分位な性格は、また捕虜の姿によってさらに明らかに反映されている。本紀で掲載された「捕虜によりて敵情を知る」(第四編)と同じく、雑報の中では、捕虜に関してさらに具体的な報道がみられる。「清國俘虜の取調書」(第三編)や「俘虜の書簡」(第九編)²⁸でみられたように、審問されると、清兵がすぐ軍事秘密を漏洩したことや、日本の優遇に安心した記述が多く報道されていた。命を守るために母国を裏切る行為を描くことによって、清兵の愛國心の欠乏さらに利己主義をよく表出したのである。そのほか、すこしの優遇を受けて、すぐ敵国の「恩情」に「感銘」し、自ら進めて敵国を助ける行為は、愛國心の欠乏を確認した証拠としてあげられていた:

(前略)彼等は擒兵として獄中にあるも日本の待遇の厚きに感涙を流し自ら…威海衛旅順口を始め各要港の案内を為さん事を申し出で居る由

(「清兵清艦を撃んとす」,第五編,p.94)

我等は現に生命を助けらるゝのみならず、曾て日本に送附せられし我國捕虜の厚遇

を受くる由を聞き、感銘謝するに辭なし、今敢て之を謝するとはあらねど、曩に我等が朱雀門の傍に埋め置たる韓錢若干あり、願くは之を掘出して大日本帝國軍隊の兵資に備へられなば、聊か微意を表するに足らん云々

(「捕虜士官の微意」, 第十一編, p.113)

従軍した時に朝鮮の土地に金を埋めた行為から、清兵は戦闘の意欲がなく、単に金銭欲に駆られて戦場に立つことが再び実証されていた。また、自らその金を敵国の将校に献上した行為は、愛国心のない清兵イメージをよく表出したのである。

また、前掲した「支那特色の軍律」からも軍隊の無秩序なイメージが確認できているが、第八編の「清國軍備一斑」で紹介された軍隊の応募者は、清兵について「だめ押し」の証拠となっていた。

同記事においては、軍隊への「通常の応募者」が、「概ね無職無頼の徒」、つまり「親族中無職の者」や「一族中持餘の厄介漢」と紹介し、清軍隊を「一国の無頼漢の淵なり」と形容していた。この紹介は、また清軍の組織全体への否定につながっていた。

第一章取り上げた「清兵の七つ道具」(図 30)は、すでに従軍中の清兵姿を風刺的に表現していた。阿片、ピクニックバスケットなどの所持品を描くことによって、軍隊の無秩序をよく表出できていた。このようなイメージは、また『実記』の雑報において文章の形で描き出していた。具体的な例として、第四編の「清兵軍中に玩具を携ふ」、「清兵西瓜を携へて従軍す」などの記事が挙げられる:

陣中に官妓を携へ頻に艶聞を流す將軍すらある世の中清兵に在りてはこの位のことは當然かは知らぬど…清軍の士官とも云ふべきは孰も馬上烟を喫し蝙蝠傘を携へ悠々寛々又部下の整列すると否とを顧みず且つ平生自分の嗜好する所の物は兵士をして之を携へしむ或は小鳥を籠に入れて大切さうに持ち行くあり或は玩具入れの箱を擔ぎ行くあり(後略)

(「清兵軍中に玩具を携ふ」, 第四編, pp.94～95)

以上紹介してきた無秩序な様相は、いずれも清軍規律の散乱を反映している。たとえば、第八編の「清軍一律の定例なし」では、清軍の組織は「各隊各将各々其為す所を為して敢て一律の定例なし」と紹介されていた。

さらに、清兵の無法行為に対する描写は、軍紀の問題を顕在化させたのである。第五編の「兵卒を罷めると盗賊となる」のなかで、「李鴻章幕下の軍隊は清國中第一の強兵と稱すれど…兵卒を罷められる時は糊口の道なきより忽ち盗賊に變じて諸所を荒れ廻り人民の迷惑す尠からず」とのような報道も掲載されていた。

このように、兵士の利己心や軍隊の無秩序な様相は、戦闘中における清兵の未練な姿を解釈する格好な素材となっていた。そして、雑報のなかでも、軍備や清兵の戦闘姿の描写がみられる。具体的にいうと、「清國の軍器」(第八編)、「清國の砲兵戦術しらず」(第三編)、「清兵の多寡を知る方法」(第四編)などが挙げられる。

老大國の軍備整頓せず其軍隊が所持する兵器の如きも種々雑多にして或は精銳のモーゼル、スナイドル、クルツプの如き或は火繩銃青龍刀の如き其銃器に於てさへ數十種の多きに及ぶ程なる…軍器の雑多なるは實に軍器の撰擇を知らざるものと云はざる可らず(後略)

(「清國の軍器」,第八編,pp.107～108)

彼れは我が砲火を開きしより一時間を経て漸く砲火を始め而も我が砲兵陣地を砲撃せずして唯々我が歩兵を射撃せしが其距離亦た測算を誤りたれば我兵一人も砲火の損傷を受けざりしと云ふ

(「清國の砲兵戦術しらず」,第三編,p.96)

清兵の多寡を知るには先づ我兵七八名をして試に清軍中に發射せしむれば彼は直に全兵を舉げて之に應射するが故に其砲聲に依り容易に其多寡を知り得べしと云ふ

(「清兵の多寡を知る方法」(第四編,p.96)

以上を見てきたように、戦中の雑報記事は、清兵の自己本位な性格から軍隊組織の無秩序、そして戦闘力の低さという三つの面から、清軍を否定的なイメージで描き続けてきた。軍隊性質の面から、戦闘中における清兵の敵前逃亡などの行為を検証し、清軍の敗戦を解釈していった。戦況報道「本紀」のように、清軍に対する評価は単に「臆病」などのような文章表現を繰り返すわけではなく、雑報は多様な情報を取り入れ具体的な表現から、清軍に対する否定的なイメージを構成していったのである。

また、前述のように、戦争の後期また終結を迎えると、中国の風俗人情の報道が重視されていったのである。そのなかでは、中国人全般を評論した記事は、まとめて以下のような連載物が挙げられる：

「支那雜記」：第十三編、第十八編、第十九編、第二十二編²⁹、第二十四編(計五回)

「清俗一斑」:第二十五、二十六編(計二回)

「支那人氣質」:第三十一～三十五編(計四回)

一方、中国人全般への評価は、戦中の雑報のなかで清兵の性格を紹介する際に、すでに言及がみられる。例えば、「清人の性質及習慣」³⁰のなかでは、中国の「南北相通じて人智其他百物の上に進化の理あるを解せず怠惰不潔徒だ金銭の生命よりも貴きを知るのみ」と論じた内容があり、前述した清兵の利己心や金銭欲、近代遅れという評価と共通している。では、戦後の報道はいかに中国人を表現していたのか。

第三十一～三十五編で連載された「支那人氣質」は³¹は、欧米人アーサー・スミスの「支那人氣質」を語訳して転載し、そのなかで反映された中国人の特質を紹介した。各編では、中国人の「無神経なる事」、「保守主義」、「同感の缺乏せる事」、「互の猜疑」という四つのテーマで中国人を批判し、戦中の利己心や時代遅れより、さらに具体的に種々社会現象を取り上げて、中国人の特質を論証し批判を行っていた。

一つの例として、「互の猜疑」(第三十五編)³²では、中国人の猜疑心を「生れ落つると同時に」有したものと表現し、いくつの社会様相を取り上げて論述した。「高壁を廻らしたる市府」は、猜疑心による「防御」な手段とみられ、また学童が学校で「終始聲を限りに課程の書を読む」だのは、そうでないと、「教師はそが課業に不熱心なるを疑ふべければなり」と紹介していた。さらに、経済面においても、「借金の利子極めて高」いことも、「相互の間に信用の缺乏せる證據」と論じていた。

以上のように多種の事例を出して中国人の性格を論じたのは、中国の实地考察をベースにしたものだと思われる。この点において、戦争後期から掲載されはじめた「支那雑記」も共通していた。また、具体的な内容は、中国社会全般の現象だけでなく、さらに教育制度についても具体的な紹介を掲載していた。

社会の様相(第十三編)³³という、「胃病患者」の多いことから、遊郭の景気、暴飲家の夥しさ、アヘンの氾濫、飲料水の不潔など、全般的に退嬰な気風が描かれていた。そして、第十八～十九、第二十二～二十四編は、主に中国の教育制度に着目して中国を論じていた。

支那は封建制度を以て民を治めたるが故に、今日の如く文學の試験によりて、人材に登庸するとなかりしと雖も、位官に居るの徒は必らず聖賢の遺書を解せざる可からず…支那人の文學を究むる所以は、今も昔も、此に依て權勢利欲の地位を獲むを欲するに外ならず(後略)

(第十八編,pp.53～56)

商賣、職工、及田舎紳士の如きは、概ね其の兒童をして一通りの書物を読み上げさすなり、而して其の學ぶ所は僅かに古文學或は歴史學に止まり、特に詩文の練習は最も心を碎く所なりと雖も、算數學、物理學、博物學等の實驗的科學に於ては、少しも學ぶ所なく(中略)

尋常學校の外、更に中等學校及び高等學校あり、…孰れも衰微振はず

「支那雜記」(三),第十九編,pp.54～56

(武官は)下流社會より昇進したる者多きを以て、上下の尊信文官の如く甚しからず、彼等は砲術兵法を解せず、築城工廠を知らず、甚しきは、文字の何たるを識らざる者あり(後略)

「支那雜記」(四),第二十四編,pp.50～52

「權勢利欲の地位を獲むを欲する」ために「文學を究むる」ことから、消極的な勉強意欲がうかがえる。また、教育の内容は文學にこだわり、近代的な理系知識を重視せず、教育が衰退した傾向が読み取れる。

以上の記事と同じく、「清俗一斑」も実地考察の内容を取り扱っていた。執筆者の仁禮敬之について、「両毛鐵道会社理事」で、「明治十四五年頃より十九年に至るまで、支那に止まり、具さに彼の國の事情に通ず」との紹介がみられる。その内容は、宗教、人種から貿易、工業、一般風習まで、多岐にわたっているが、論調は上記の記事より冷靜的なところは特徴的である。たとえば、一般の風習について、前記の記事では退嬰な氣風が紹介されていたが、「清俗一斑」は、

支那人中に商人は人も知る如く極めて儉約にて随つて一般人民にも其風を傳へ金錢を重んずること甚だし但だし中には阿片を呑みて寝たり起たりする所の懶惰漢も少なからねど細かに全般を通覽すれば人皆勤勉にして此點にては蓋し宇内屈指の勉強なる人民の部類ならんと信ず(後略)

(仁禮敬之「清俗一斑」(承前)、第二十六編、pp50～52)

のように、今までの報道に反し、中国人に対する積極的な評価が確認できる。

以上をまとめると、戦争後期また戦後の雜報は、社会、教育から中国人の性質まで、実地考

察で確認した種々の社会現象を取り上げ、根本的な面から中国を論じていた。戦争中と同じく、中国人を否定的に描くものが多いが、中国人の性格からいうと、「無神経なる事」、「保守主義」、「同感の缺乏せる事」、「互の猜疑」との批判がみられ、また社会面からいうと、社会気風の退嬰、教育、経済の衰退を強調した内容も確認できる。その一方、長年の滞在経験によって、中国を冷静に評価した記事も現れている。戦中から盛んに論じてきた金銭欲の強く、腐敗な生活を極めた中国人像に反し、仁禮敬之は「清俗一班」において、中国人の「勤勉」なイメージを紹介したのである。

このように、『実記』の雑報は、戦中において清軍に注目し、自己本位、無秩序、戦闘力の低さを論じてきたが、戦後になると、その内容が中国の風土、中国人全般への転換し、社会の諸相から中国人の性格を紹介していた。戦中の論説より、戦後の雑報は主に実地の考察をベースにしていた。そのため、戦中の論調を踏襲して、「無神経なる事」、「保守主義」など、中国を否定的に評価した内容が多かった一方、「宇内屈指の勉強なる人民」とのように積極的な評価を掲げた報道も現れていた。

おわりに

本章では、日清戦争期の人気読み物『日清戦争実記』を素材に取り上げ、その中で描かれた中国を検討した。全体的な内容構成から『実記』の性格を把握し、その上でメイン記事である戦況実録「本紀」欄に重点をおいて、三節にわたって清軍また一般民衆に対する描写を考察した。

そして、戦況報道の補完の役割を担った後半部分の記事、つまり各種の雑報を取り上げ、第4節において、戦中の清軍から戦後の中国全般の紹介に注目し分析を行った。

まず、戦況報道で描かれた「中国」は、主に清軍及び中国内地の民衆(統一して「清民」と称した)の描写によって紹介されていた。代表的な戦役となる平壤陸戦(朝鮮戦場)、旅順半島の攻略(中国戦場)、そして黄海海戦(大規模の海戦)を対象に考察してみた結果、各戦闘描写は共通して清軍の否定的なイメージを描き続けていた。平壤陸戦では、清軍の臆病なイメージが重点的に強調されたが、旅順半島の攻略になると、清軍の強い対抗も描くようになった一方、「野蛮」、「残虐」なイメージも強調されるようになっていった。また、黄海海戦の場合は、引き続き清兵の臆病的な行動に注目したが、その理由として、清兵の愛国心の欠乏を表現した内容も現れていた。

また、雑報の部分について、戦争中では清軍の紹介が主だが、戦後になると報道の重心が中国人社会全般の紹介へ転換した傾向が読み取れる。戦中の雑報は軍隊性質の面から、戦況報道でみられた敵前逃亡などの行為を検証した。多様な情報によって、清軍の自己本位、無秩序、戦闘力の低さを強調し続けていた。

一方、戦後になると、雑報の内容が中国の風土、中国人全般へと転換したが、論説より実地の考察の内容が多くみられた。戦中の論調を踏襲して、「無神経なる事」、「保守主義」など、否定的な評価は多数である一方、中国に対する冷静な論調も確認できるようになった。

『実記』は、戦争戯画より膨大な戦争情報を提供し、内容の信憑性もわりと高く考えられる。その一方、読者の購読を狙うためだとみられ、内容からやはり様々な編集手法が確認できた。内容構成の面から考えると、平壤陸戦の特集となる「平壤陷落史」は、第七、八編の二部に分けられ、第七編で作戦の方略や行進状況、清軍の防備を紹介する部分で記事の内容を切り、具体的な戦闘報道をわざと第八編に設定した手法がみられる。

また、序章で述べたように、小新聞の性格を受け継いだ『実記』は、記事の中で少なからず戯作の書き方が色濃く残っている。物語風の綴り方は大衆読者の興味を引く反面、誇張的な表現、矛盾な情報は避けられなかった。そして、新聞記事をベースに記事を再構成したため、

報道の信憑性も大きく影響されたと思われる。

それで、日本人の中国に対する描き方を再確認するため、次章では、戦場に赴いたフランス絵師ジョルジュ・ビゴーが描いた戦争報道画をとりあげ、具体的に検討していく。

- 1.『東京朝日新聞』, 1894 年 8 月 18 日。
- 2.1895(明治 28)年 1 月創刊。
- 3.「我軍大擧して平壤を陥いる」,第四編,p.28。
- 4.一ページで 16 行の設定になっているが、電報を引用した際に大文字を使用することによって行数が変動する場合もある。
- 5.第十編の「敗軍の将」は、平壤陸戦の捕虜が日本に押送された後の状況を紹介した記事で、戦闘現場の報道ではない。そのため、ここでは第三、四、五、七、八編だけを考察対象に設定している。
- 6.唯一清兵の戦闘姿を具体的に言及したのは、左寶貴が戦死した部分である。
- 7.戦闘経緯の紹介は、以下の旅順半島の攻略及び黄海海戦を含めて、大谷正『日清戦争』(中公新書,2014 年 6 月)、宗澤亜『清日戦争』(北京連合出版公司出版,2014 年 6 月)を参考にしている。
- 8.前掲「混成旅團大に船橋里に苦戦す」,第五編,pp.18～22。
- 9.大谷正『近代日本の対外宣伝』、研文出版、1994 年 12 月 1 日。
- 10.「船体の模様」,『朝日新聞』,1891 年 7 月 5 日。
- 11.「黄海海戦餘聞」,第五編,p.44。
- 12.「我海軍大に清國艦隊を撃破す」,第四編,pp.35～40 より。
- 13.「黄海海戦の別報」,第六編,pp.28～32 より。
- 14.「黄海海戦の詳況」,第五編,pp.36～44 より。
- 15.「黄海々戦の最詳報」,第六編,pp.4～13 より。
- 16.「黄海海戦の別報」,第六編,pp.28～32 より。
- 17.同上。
- 18.第五編,p.94 より。
- 19.前掲宗澤亜『清日戦争』を参考。
- 20.「比叡艦の勇戦」,第六編,pp.21～24 より。そのほか、「赤城艦の勇戦坂元少佐の戦死」(第六編,pp.24～28)においても類似した表現がみられる。
- 21.主な戦いとして、土城子付近、案子山から旅順口、二龍山付近の戦いが挙げられる。土城子付近は、秋山第二中隊が徐邦道、姜桂題、程允和の三軍と衝突し、清軍がはじめての勝利を収めた一方、日本兵死者を切断した事件が問題として日本のメディアに大きく取り上げられたのである(前掲宗澤亜『清日戦争』より)。
- 22.「土城子激戦の別報」,第十四編,1894 年 12 月 27 日。
- 23.「第二軍の綏撫」,第九編,pp.23～26。
- 24.一ノ瀬俊也『旅順と南京―日中五十年戦争の起源』,文藝春秋,p.43。
- 25.「旅順陥落餘聞」,第十一編,1894 年 12 月 7 日,pp.29～32。
- 26.「金州陥落後記」,第十一編,1894 年 12 月 7 日,pp.16～22。
- 27.戦後の賠償、敗将の処置などが挙げられるが、中国人の性格を反映する内容が少なくなっていた。
- 28.中国の親族へ寄せた書簡の中で「日本に擒にせられて優遇せられ居れば安心せよ」などの記述がみられる(「俘虜の書簡」,第九編,p.79)。
- 29.この編における「支那雑記」の番号はつけられておらず、他の四編の番号について、それぞれ第十三編は「支那雑記」(一)、第十八編は「支那雑記」(二)、第十九編は「支那雑記」(三)、第二十四編は「支那雑記」(四)となっている。
- 30.「内外彙報」,第四編,pp.93。
- 31.「東洋風土」,第三十一～三十五編。

-
- 32.「支那人気質(四) 互の猜疑」,「東洋風土」,第三十五編,pp.72～76。
33.「支那雜記」,「地理」,第十三編,pp.61～64。

第三章 ジョルジュ・ビゴーが描いた日清戦争

～イギリスの画報紙『ザ・グラフィック』を素材にして～

はじめに

日清戦争から、従軍記者がはじめて正式に認められた¹。各新聞社から派遣され、戦場に赴いた従軍記者は、日本人のほか欧米人記者も多かった。戦争時の日本における世論について、「外国新聞は經からぬ注意を、征清の役に拂ひつゝあり。(中略)彼等をして従軍の自由を得せしむるは、我聲譽と實力を天下に廣被せしむる所以也」²と、外国新聞記者の従軍について積極な姿勢をみせたものが多かった。このように戦場に駆けて戦争取材していた欧米人のなかで、長い間日本に在住した絵師ビゴーがいた。

1882年に来日したフランス絵師ビゴーは、15年以上日本に滞在し、その間数多くの作品を描き残していた。彼は子供の時代に普仏戦争を体験し、そのきっかけで絵画生涯をはじめたという³。そして、1894年の日清戦争で、彼はイギリスの画報紙『ザ・グラフィック』の特派員として、再び戦争の現場に赴いて取材を行った。彼は、どのようにアジアで勃発した日清戦争を描き記したのだろうか。

ビゴーの作品に関し、今まで数多くの研究がなされてきた。作品の解説から、多岐にわたった考察が多くみられる。清水勲主宰の『風刺画研究』⁴だけでは、ビゴー関係の論文が四十本以上であり、また展覧会のカタログを除いて、関連の著書も10数冊⁵以上見つまっている。拙稿はこれらの研究をベースにして、ビゴーの描き出した日清戦争に注目し検討を試みる。素材として、ビゴーが『ザ・グラフィック』に投稿した日清戦争報道画⁶を取り上げ、戦争写真帳や関係作品との対照を行いながら、報道画の性格から具体的な内容について分析を行っていく。

また、当時の日本では、まだ『ザ・グラフィック』のような、定期的に刊行し多様な分野で報道を行う画報紙が少なかったが、「画家を従軍させて、紙面に多数の挿絵を掲載するという方針を採った」新聞社は存在し、中で『時事新報』と『国民新報』が代表的だったという⁷。『時事新報』については、従軍絵師と写真師の追跡に関する先行研究、そして『国民新聞』については、報道画の内容に関する先行研究が見つまっている⁸。これらの先行の研究手法を参考しながら、ビゴーの戦場写真帳と報道画の考察を試みる。

第1節 ビゴアの従軍取材及び『日清戦争写真帳』について

『ザ・グラフィック』の特派員であるビゴアの日清戦争従軍について、清水勲はすでに新聞や日本人従軍記者の日記などによって、以下のように、主な移動のルートを追跡できている：

①1894年8月20日～1894年11月初旬 釜山、仁川、平壤、金州

(約二ヵ月半)

②1894年12月初旬～1894年12月末 中国戦場、詳細不明

(約一ヵ月未満)

しかし、外務省の記録「日清戦役の際外國新聞記者戦況視察ノ為従軍願一件」⁹において、ビゴアの従軍出願が見当たらないかわりに、同社に派遣された中国軍側の特派員 C・E・フリップの従軍願(1895年3月、不許可)は見つかったのである¹⁰。

それで、具体的な従軍経緯について、未だ判明できていない部分が多くみられる。清水の研究では、1894年の8月21日発行の『時事新報』と同年の9月29日発行の『ザ・グラフィック』からビゴア関係の記事が見つかった。『時事新報』において、

東京に名を知られたる仏蘭西の画家ビゴア氏は、このたびロンドン・グラフィック新聞の特派員となりて、朝鮮に出張するよし¹¹

と、ビゴアの出発が報道され、『ザ・グラフィック』では、

戦闘の勃発と同時に、経営陣はジョルジュ・ビゴア氏(日本の東京に長期滞在中の著名なフランス人画家)を日本軍つきの記者として、また C・E・フリップ氏を中国軍側の記者としてそれぞれ派遣した。このチャンスを最大限に生かすことになるのか興味津々というところである。¹²

と、同じくビゴアとフリップの従軍が紹介されていた。

一方、当時の新聞において、ビゴアの名前の日本語表記は、必ず「ジョルジュ・ビゴア」で統一していたのか。例えば、『朝日新聞』(1894年9月25日)の記事「仁川近事 九月

廿四日午前十時 特派員堀田磋二郎馬関發」¹³には、以下のような報道が見つまっている：

去る廿日在仁川青山好恵發の郵報摘録左の如し
(中略)

外國新聞記者 佛國フィガロ新聞、英國イラスト、レーテツド、ロンドンニウス兩國新聞通信員佛人ジョン、ビゴー氏肥後丸にて来りしが許可を得次第征清軍に随従する筈、氏ハ畫師にして繪畫の通信もなす由に聞く

ここでは、ジョルジュ・ビゴーではなく、「ジョン・ビゴー」という名前が取り上げられている。ビゴー本人を指すとなると、彼は『グラフィック』ではなく、イギリスの『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』(以下 ILN と略す)¹⁴、『フィガロ』の通信員という名義で従軍の願いを出したことが興味深い。記事から、彼は朝鮮に行つて釜山で滞在し、9月24日仁川に到着した時点で、まだ従軍許可を得ていない状況が推測できる。

この記事で言及した『フィガロ』紙について、前掲の「日清戦役の際外國新聞記者戦況視察ノ為従軍願一件」では、同社の「フェルナン・ガネスコ」という人物の出願書類が見つまっている¹⁵。

ガネスコとビゴーとの接点というと、両者は『ショッキング・オ・ジャポン』(1895年)と題した美術評論書を合著したことがあった。文章の執筆はガネスコで、挿絵の担当はビゴーとなっており、内容には当時日本国内の戦争絵を大きく取り上げて批判したものもある。ガネスコとビゴーの関係についても、様々な推測が行われてきた¹⁶が、定論がつかず、確認できる資料も少ない。

『朝日新聞』のほか、1894年9月16日の『国民新聞』では、「昨日佛人ビーゴット氏当港に來泊せり氏は大本營より従軍許可を得て派出せり」¹⁷とどのような記事が見つまっている。

ビゴーのアルファベット表記は「bigot」なので、この一則では「ビーゴット」と誤って表記された可能性も考えられる。しかし、ここでは「ビーゴット氏」の職業にも言及していなく、しかも「従軍許可」を得たと報道している。

名前の表記のほか、「従軍許可」の定義も非常に曖昧に考えられる。1894年9月15日の『国民新聞』において、次のような一則がある：

新聞記者の従軍は四十名と限られたる為め折角入韓して空しく京城に在る者多し
山縣大将着京の上は何んとかなるべしと楽しみ居れり¹⁸

いわば、たとえ朝鮮に行けたとして、人数の制限で必ずしも軍隊と同行できるとはいえない。それで、「従軍許可」は、朝鮮へ行く許可なのか、あるいは戦場で軍隊と同行する許可なのかも判明できない状態である。

次に、ビゴーと他の従軍記者とのつながりから考察してみる。日清戦争期では、日本国内の新聞社からも多くの従軍記者が戦場に派遣されたのである。大谷正が「日清戦争と従軍記者」¹⁹において提示した数字によると、記録に残された従軍記者だけで百名以上になり、画工も 16 人に達したことがわかる。画工の中では、浅井忠、久保田米僊のような名の知られた絵師も多く存在している。

浅井忠の従軍日記『従征画稿』において、「横濱ノ写真師荻原氏ビゴーノ代理トナリ撮影ノ為メ来ル」(1894 年 9 月 25 日)という記述があったことは、すでに清水の研究で提示されている²⁰。いわば、荻原という写真師がビゴーの取材を手伝っていたのである。そして 9 月 24 日の浅井の日記から、「四時平壤ノ西端ニ着」し、そして日暮れの時に「司令部ニ至」って、「平安道監司ノ宮殿」で宿泊したことも判明できている。つまり、荻原が到着した地方は平壤だとわかる。

また、9 月 25 日以降の日記でも、いくつ荻原を追跡できる記述がみかけられる：

十時出船ありと 余等一行(小山山本魁一安西荻原(樋口氏亦同行ス)諸氏ト分レ
テ出立ス 大同門ニ至ル (1894 年 9 月 29 日)

(十二時出帆 五時旗津ニ着ス) 此所ノ兵站部ニ付テ仁川ニ至ル乗券ヲ乞ハ子^{ネ(子)}バ
ナラズ魁一荻原外ニ一人之ニ赴キ掛合フ (1894 年 9 月 30 日)

前記の記事によって、ビゴーは 9 月 20 日に仁川についたと推測できたが、部隊に従うことが許可されなかったか、荻原を先に平壤に行かせた可能性が考えられる。

日本にとって最初の対外戦争なので、日清戦争の段階では、従軍記者の対応がまだ明らかになっていないことが想定できる。そこで、ビゴー私蔵の『日清戦争写真帳』をもう一つの手がかりとして考察する必要がある。

『日清戦争写真帳』²¹(以下『写真帳』と略す)は、一九九五年清水がビゴーの子孫から入手したもので、計 198 点の戦場写真を収録し、中には旅順虐殺の問題写真も見つまっている²²。表紙(図 47)には、縦書きの漢字での「日清戦争写真帳 明治廿七年八月ヨリ十二月迄 佛人画工美好²³」が書かれて、そして横書きのフランス語でのタイトルと時間帯(1894～1895)も書かれている。また、戦場の地名や『ザ・グラフィック』の通信員、住所などもフランス語で注記されている。フランス語で記された時間帯が漢字のものと合致していないが、時間帯の広さからフランス語の方は後で書き加えたのだろうか。

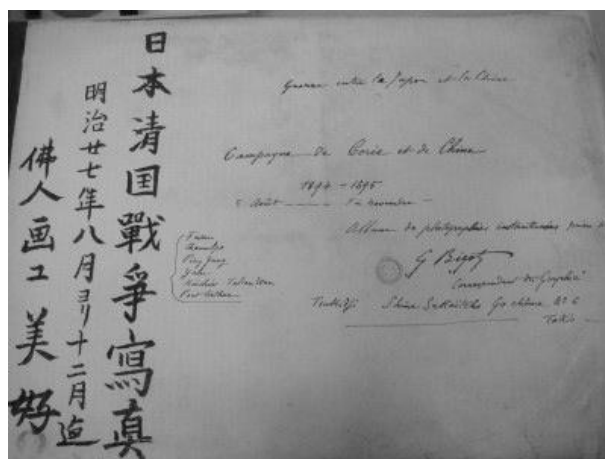


図 47 『日清戦争写真帳』の表紙

また、表紙に注記された地名は、釜山、平壤、仁川、鴨緑江、金州、大連湾、旅順である。写真帳の内容を考察した結果、内訳は以下の通りになっている：

朝鮮戦場：釜山 38 点、仁川 8 点、平壤 49 点、大同江 1 点、

朝鮮の風俗写真 32 点

中国戦場：金州 19 点、大連湾 4 点、旅順 9 点

その他(場所不明)：38 点

その中で、ビゴー自身が写ったようなものも 3 点ほど見つかっており(47 番, 72 番, 143 番)²⁴、3 点とも朝鮮で撮影されたものである。一点ずつの写真は、上に番号が振られてあり、下には多くの場合、フランス語の手書きの説明文がつけられている。

一方、写真の内容について、いくつかの問題がみられる。まず、写真のサイズについて、写真帳の一点(縦 27 センチ、横 35 センチ²⁵)に四点が貼付されており、一点およそ 16 切りの大きさで、当時の戦場写真師鈴木経勲²⁶や浅井魁一²⁷が出版したものよりずいぶん大きいものだと思われる。写真のサイズはカメラの大きさによるものなので、ビゴーが戦場に持っていったのは鈴木経勲や浅井魁一より大きいカメラだと推測できる。

また、ビゴーは九月に一回『ザ・グラフィック』に寄稿したので、九月は朝鮮現地から写真を送ったことが考えられる。それで、大きいカメラの機材を運び、そして現地で現像まで行うことは、ビゴー一人でどうしてもできかねないことと考えられる。

次に、写真帳に収録されたのは、全部ビゴーのものだと判明できていない。旅順の写真が 9 点あるにもかかわらず、旅順虐殺事件が起きた当時では、ビゴーが日本にいたことがすでに判明されていたのである²⁸。『時事新報』の特派カメラマン浅井魁一が戦争後出版した『日清戦況写真帖』²⁹から、ビゴーの写真帳に収録された捕虜写真や負傷者を船に運搬する写真に似たようなものが見つかっている。例えば、『日清戦況写真帖』の「捕虜」(図 48)の 3 点とビゴーの写真帳の 113 番、115 番³⁰(図 49)、149 番の場面がよく似ている。撮影の角度は少々ずれているが、その場でないと撮れないことは確かである³¹。

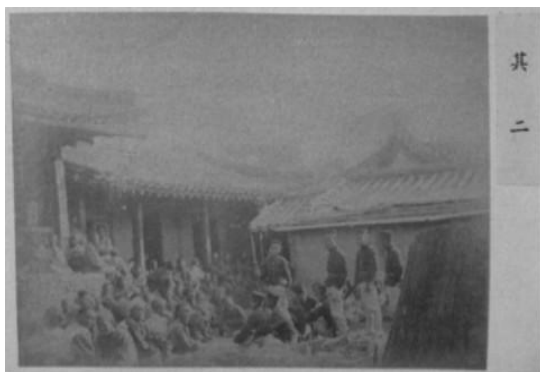


図 48「捕虜」(浅井魁一『日清戦況写真帖』) 図 49 149 番(ビゴー『日清戦争写真帳』)

さらに、番号からみると、同じ地方で撮影したものがアルバムの中に散在し、たとえ同じ場面の写真でも前後に混在している。その例として、前掲の捕虜写真は 3 点見つかっているが、番号はそれぞれ 113 番、115 番、149 番であり、ビゴー一人で撮影したものだと考えると、配置の仕方には少し疑問が感じられる³²。

つまり、ビゴーは写真帳を作成する際に、他人から入手した写真を集めた可能性が高い。入手についてもさまざまな手段が思われ、代理の荻原に依頼して撮影してもらう可能性も

あり、また序章で述べたように、市場で販売できる写真なら、出版前後個人的に他人から購入した可能性も考えられる。日清戦争では、写真技術が普及し写真師も多くなったので、写真師の間における写真の流通も難しくないと思われる³³。

例えば、写真帳に収録されていないにもかかわらず、ビゴーが他人の写真をベースに作画した場合もある。写真師『戦国写真画報』(第十巻)で掲載された「朝鮮杖罪」は一つの例である³⁴。この写真は、1895年3月10日で『戦国写真画報』に掲載されたもので、すでに1894年10月27日の時点で、『ザ・グラフィック』でビゴーのサインが載った報道画として発表されている。

以上のように、写真帳の写真によって、ビゴーの取材を追跡することも難しく思われ、今後他の写真師の写真と対照しながら、さらなる考察が必要に思われる³⁵。

以上の考察から、現段階では、ビゴーの従軍経緯を究明するが困難である。そのため、ビゴーの戦場取材を基礎に、彼の日清戦争報道画を分析することは不可能であると、本章はビゴーの画像資料の内容だけに注目し、検討を試みていく。

総計198点の写真の中で、人の姿が確認できたのは120点以上である。木下直之は「ビゴーが撮った日清戦争」³⁶において、ビゴーの写真は「被写体との距離が近い」と指摘している。ビゴー自身が写った47番(図50)を例に挙げると、兵士の襟章の番号が判読できるほど、近距離からの撮影である。



図50 47番(ビゴー『日清戦争写真帳』) 図51 46番(ビゴー『日清戦争写真帳』)

近距離の人物写真は多くが写真帳の前半に集中している。たとえば、46番(図51)で朝鮮人の姿の撮り方は、風俗を記録する際に使った常套手法にみえる。

また、旅順の写真以外に、写真帳で見かけられた一部の写真が、『ザ・グラフィック』の他の絵師に参考され絵に描き直された。写真の上下に番号と説明文を付記したのは、ビゴーも写真帳の写真を横浜写真のように、『ザ・グラフィック』社に提供し、そして一部必要なものを選んで買ってもらった可能性が推測できる。

被写体を統計した結果、写真帳の中では、日本人の写った写真は 77 点ほど、朝鮮人関係は 70 点ほど、そして中国人の登場はわずか 8 点である。

日本人は、将軍、一般兵士から傷病兵、人夫まで、さまざまな身分が確認できる。そして朝鮮人も、役人、漁師、鶏商など様々な職業がみかけられる。それに対して、中国人は多くの場合は捕虜が撮影されている。

写真帳が私蔵である原因もあり、写真帳の内容は陸軍測量部のものは言うまでもなく、浅井魁一や鈴木経勲が出版した写真帳より人間性を持っている。激しい戦闘写真が見当たらないかわりに、戦闘のない時の兵士の生活様相、そして朝鮮人が商売している場面など、のどかな日常を撮影した写真が多い。

その一方、死傷の清兵、負傷の日本兵、病死の軍馬など悲惨な場面を撮った写真もみられ、日本軍に「不都合」に思われたものも何点存在している。木下が提示したように、「目の前で起こる出来事を次々と記録してゆこうとする撮影態度がはっきりとあり」、「演出の度合い」が少なく、陸軍測量部のものと違い不都合な写真も含め、「違う日清戦争を垣間見せてくれ」る。日本軍の勇ましさを撮ったものより、戦場そのままを記録するというビゴーのレアリスムの姿勢が見られる。

ビゴーが来日初期に出版した画集³⁷からも、ビゴーのレアリスムの姿勢が確認できる。彼は滞日の間で、各職種の間を歩いて日本の風俗を記録したのである。このような姿勢は、来日以前(19 世紀中期)において、フランスで流行った写実主義から大きく影響されたものと思われる³⁸。ここで「写実」は、写真のように真実そのままを描くことより、社会の現実を描く意味合いが強く、「庶民の生活、つまり同時代の現実の様相をきわめて実感をこめて描きあらわす」ことを指している³⁹。しかし、庶民姿を描くビゴーは日本新聞紙で批判されたこともあった：

(前略)仏国の画工ビゴーは、我が東京市中を徘徊せる紙屑拾いあるいは新内語りなどの諸商人を呼び入れ、日本人の最も賤しき状態を写して、その本国へ送りやる

とのことなるが、これ等は大いにわが国風に関し外人の軽蔑を受ける一端ともなるべければ、何とか御免をこうむりたきものなり⁴⁰

このようなリアリズムの目線を持ったビゴーは、いかに日清戦争を報道画に取り込んでいたのか。以上の考察をベースに、次からビゴーが投稿した報道画について考察していく。

第2節 『ザ・グラフィック』に投稿した日清戦争報道画

2.1 『ザ・グラフィック』及びビゴー報道画の概要

『ザ・グラフィック』⁴¹で報道された日本について、Terry Bennett 編の『Japan and The graphic :complete record of reported events,1870-1899』⁴²では詳しい紹介が行われている。

同書によると、『ザ・グラフィック』(『The Graphic: an illustrated weekly newspaper』)は、19世紀60年代で創刊された週刊画報である。創刊者の William Luson Thomas (以下「トーマス」と略称す)は、14歳の若さで兄のジョルジュに従い、挿絵刊行物に関係した仕事についたのである⁴³。

トーマスが協力した刊行物には、『イラストレイテド・ロンドン・ニュース』(『The Illustrated London News』、1842～1971年、略称はILN)のような大手画報紙もある。そして、画像の伝達力を重んじたトーマスは、才能のある芸術者たちを雇い、ILNよりさらに高品質で、多岐にわたった新聞報道を志していた。

『ザ・グラフィック』における日本報道の初登場は、19世紀の70年代である。ILNより遅かったが、報道内容の深さ、そして特派画家による現地取材など、ILNより優勢であった。

Hugh Corrazi は「ザ・グラフィック 明治維新から条約改正まで」⁴⁴において、『ザ・グラフィック』における日本報道の軌跡をたどりながら、報道内容を五つの項目にわけて論じている:

- ①明治維新、地震及び津波(災害類)、
- ②ミカドそして社会活動(祭りなど)、
- ③イギリス海軍の日本訪問、

④日清戦争、

⑤条約改正問題

Hugh の考察によると、19 世紀 70 年代から 80 年代までにおける日本報道は非常に限られていた(合わせて計 146 ページという)が、90 年代になると大きな増幅(計 260 ページという)が見られ、中でも日清戦争の報道が大きな分量を占めていた。日清戦争が「早期で大量な画像を以て報道された戦争の一つ」であるが、絵師の描いた負傷兵や兵士の報道画によって日清戦争戦場の雰囲気がよく伝わったと、同氏が高い評価を与えている。

次で、『ザ・グラフィック』における日清戦争関係の記事を考えてみる。戦争に関係した報道は、1894 年 7 月 7 日の「朝鮮における戦争騒ぎ」と題した記事から始まっている。同記事では、朝鮮の所有権を巡った日中両国の争議、朝鮮統治における各国の権益、そして当時派兵の動向が簡単に紹介されている。そのなかで欧米諸国の軍隊も朝鮮の軍港に駐在したと提示し、日清戦争を報道する最初のきっかけは欧米の駐在軍隊の安否に対する注目だとみられる。この記事に続いて、8 月 4 日における宣戦布告の報道を経て、『ザ・グラフィック』の日清戦争報道は 1895 年末まで続く⁴⁵。

戦争報道画の提供者は、主に日本軍従軍特派員ビゴー、中国軍従軍特派員 C・E・フリップ、その他の記者/絵師に大別できる。中国軍従軍特派員 C・E・フリップは 20 点前後を提供し、他の記者や絵師もそれぞれ何点かの画像を提供していた。

戦争初期(8~9 月)の段階で、従軍特派員も決まっておらず、様々な記者や絵師に頼りしかなかったと思われる。戦争情報の欠如が考えられ、初期は詳しい報道が行われておらず、ほとんどの内容が朝鮮当地の紹介や軍事力と時局の分析にとどまっていた。報道画だけで考えると、この時期の報道では軍隊の出発や軍艦の報道画はあったが、戦地における軍隊の動きを描いたものはほとんどなかった。そのほか、肖像絵、集合写真、風俗画から日本の戦争錦絵も紙面に取り上げられていた。

そして、1894 年 9 月 29 日になると、『ザ・グラフィック』は、ようやく日清戦争の従軍特派員を紹介し、戦局分析ではなく正真正銘の戦場報道を予告したのである。

約一か月後の 10 月 27 日、『ザ・グラフィック』は増刊号を発行して「東方の戦争」⁴⁶(1894 年 10 月 27 日)と題した特集を掲載した。この特集は、まさにビゴーの戦場取材をベースに作成されたものである。「日本軍従軍特派員」ビゴーの肖像と仕事時の姿をはじめ、記事及び数点の画像が掲載されていた。

前述したように、ビゴーは戦争前の1887年から、すでに『ザ・グラフィック』と契約を結んでいた。1887年の4月に掲載された「日本の人物画」(「CHARACTER OF SKETCHES IN JAPAN」、筆者意識)をはじめ、彼は一八九七年までの十年間にわたって、断続的に日本関係の報道画を投稿し続けていた。しかし、日清戦争までビゴー本人の言及は少なく、顔写真まで掲載し紹介されたのは、従軍特派員になってはじめてである。

それ以降、「日本軍従軍特派員」はほとんどビゴーの代名詞として使われ、『ザ・グラフィック』の紙面で、「日本軍従軍特派員」や「M・G・ビゴーによる」と説明された画像がよくみられるようになっていく。

1894～1895年までの『ザ・グラフィック』には、ビゴーが関係したと思われる画像が総計50点に達している。その内訳は表2「ビゴーと関係した戦争報道画像」(表2)に示した。

この50点について、サイン及びキャプションによって、ビゴー関係の画像は以下の四種類に大別できる：

- ① ビゴーの手書きサインが確認できた報道画
- ② ビゴーのサインはないが、ビゴーの写真帳で類似した写真がある報道画
- ③ キャプションにビゴーや「日本従軍特派員」によったものと注記しながら、写真帳にも関連したものもなく、ビゴーのサインもない報道画および写真
- ④ ビゴーの写真帳で同じものがみかけられた写真

50点には、他人の作品が混在したものと推測できる。たとえば、戦闘のシーンを描いた報道画が2枚ある⁴⁷。1894年12月1日(図52)の1枚は1ページを、そして1895年1月5日の1枚は2ページを占め、二枚とも大判サイズで掲載されたのである。ところで、当時軍部の制限で、戦闘現場の取材は非常に難しく、まして両軍の対決場面を見るのはさらに不可能であった。絵の中で描かれた深い目の彫りや、尖っている鼻先は、欧米人の顔を基準にして描いたと想像できる。服装や所持品には日本兵や清兵らしさが感じられる一方、顔立ちはいかにもアジア人らしくなく、アジア人の顔の特徴をうまく把握して描いたビゴーの絵と大分違っている。



図 52「平壤での小競り合い: 中国軍の拠点之急襲」
(⑱、『ザ・グラフィック』、一八九四年十二月一日)

つまり、この二枚は写真やスケッチをベースに描いた可能性が非常に低いと考えざるを得ない。『ザ・グラフィック』社は読者の興味を引くために、わざわざ戦闘場面を描いた2枚を加えたのであろう。つまり、『ザ・グラフィック』社はビゴーが提供した画像を利用する際に、欧米読者の受けを考慮し、何らかの形で編集を行ったとわかる⁴⁸。

サインによってビゴーが確実に描いたと判断できるものは、33点しかない。拙稿はこの33枚(表3入る)を中心に、考察を試みていきたい。

2.2 風俗画の性格を持った報道画

33枚の報道画は、ほとんど人が主体として登場している。日本人が登場するのは二十八点、中国人は六点、そして朝鮮人は十点となっている。報道画は写真帳の人物写真と同じく、近距離で人物を表現することが特徴的である。

多くの日本人を素材にしてきたビゴーは、いうまでもなく日本人の特徴をよくつかんでいる。1894年3月2日の付録で掲載された兵士の肖像画図53と図54は、夏服と冬服も明確に区別し、袖章からも両者の階級を判別できる。



図 53 「進軍命令を受けた歩兵中隊司令部の将校」 (㉔、『ザ・グラフィック』、1894 年 3 月 2 日)

図 54 「進軍命令を受けた第 10 歩兵連隊の兵士」 (㉕、『ザ・グラフィック』、1894 年 3 月 2 日)

日清戦争期における兵士の服装は、1886(明治 19)年、陸軍下士官の第 2 種軍装が改正され日露戦争まで使用されていた。軍装は夏と冬に分かれて、夏の前後は白衣で、袴は白で他は紺絨服である。冬は、帽子付きで長い外套が使用されている。軍装は短衣に近く、一部肩章を使用している。袖の半面から階級を区分する章を付けていて、色区分は肩章と同様である。階級によって袖章の模様も異なった。

また、兵士の装備は、歩兵の場合 60 発入りの弾薬箱を腰に付け、多量の際は背囊や背負い袋に収納した。そして、携帯食料、着換え品、修理材料、日用品を入れ組み、弾薬や水筒も入れるため、当時背囊が多く用いられた。戦闘の時には、便宜的に背負袋を使う。⁴⁹。ビゴーはこのような姿を細緻に描いたとみられ、前掲の 2 枚からもそれを確認できる。

そのほか、報道画の中には、テントの番号や兵士の襟章番号までも細かく書き添えたものもある。たとえば「東方の戦争：鴨緑江の渡河地点の虎山の闘いにおける日本軍の進撃」(1895 年 1 月 5 日、図 55)は戦闘中の兵士姿を描いた 1 枚だが、襟でも番号が描き込まれている。「11」または「21」なのかは判別し難いが、歩兵第 11 連隊と第 21 連隊両方も確かに鴨緑江渡河の戦いに参戦していた⁵⁰。



図 55 「東方の戦争：鴨緑江の渡河地点の虎山の闘いにおける日本軍の進撃」
(⑩、『ザ・グラフィック』,1895 年 1 月 5 日)

しかし、ビゴアの報道画以外、『ザ・グラフィック』の戦争報道は、大規模な戦事の記事が主で、兵士の様相を細かく紹介する記事がほとんどなかった。いわば、ビゴアが描いた夏と冬服、襟章、袖章またテントの番号は、日本軍に対し一定の知識がないとほとんど描写し得ないものである。前掲した架空の戦闘シーンの報道画も、9 月の平壤陸戦を描くものにも関わらず、兵士は上下黒の冬服で登場している。それに対し、ビゴアは写真に近いほどリアルに、兵士の姿を描きしめたのである。

ビゴアは、兵士だけでなく戦場の軍夫も描いている。「日本軍の軍夫の点呼と食料の供給」(1895 年 3 月 16 日、図 56)において、様々な職業から集まった軍夫の姿が描かれている。法被を身にまとう姿もあり、洋服を着る姿もある。そして向こう鉢巻をした者、さまざまな帽子をかぶった者もいる。ビゴアの報道画によって、軍夫は様々な職業から集まった集団であり、統一した軍装は支給されていなかったことがわかる。また袖に「M」のような袖章も描かれている。

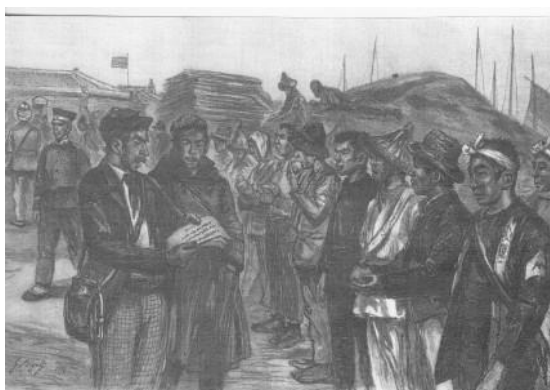


図 56 「軍夫の点呼と食糧の配給」(⑳、『ザ・グラフィック』,1895 年 3 月 16 日)

大谷著の『兵士と軍夫の日清戦争：戦場からの手紙をよむ』⁵¹によると、当時の軍夫は主に和装と草鞋履で、召集後は各師団によって統一の服などが支給される。しかし、「出発時の衣服は自弁であったので」、「服装はちぐはぐであった」であったという。つまり、ビゴーが描いたのは軍夫の出発時の場面だとみられる。

以上のように、日本軍について、ビゴーはスナップ写真のように様々な姿を描き出したのである。

また、日本国内の民衆を描く際にも、ビゴーは子守りの姿、御高祖頭巾をかぶる姿など、日本の風俗をよく表現できる人物像を報道画に取り込んでいる。

次に、清軍について考えてみる。当時の清兵の服装は、当時捕獲品から確認されたのは、「紺色の服にして赤色の羅紗にて縁をとり。胸部背部に白布を圓形に截ちたるものを付け。これに何軍何營の何哨何隊に屬するものなるを明記」するようになっていたという⁵²。「東京へ護送される捕虜」(1895年4月27日、図57)という一枚は、まさにその通りに描かれている。辮髪を頭に巻き付けた様子も、漏らさず描かれている。

そして、日本における中国居留民は、丸帽子に黒い馬褂を着た姿や、辮髪を蓄え円やかな額が露出した特徴も正確に描いている。

さらに、朝鮮人については、ビゴーは役人から路地の乞食まで、様々な身分の人を取り上げている。朝鮮族の特有の緩めな白衣はともかく、役人(「両班」)は伝統帽子をかぶることから、庶民の男性は頭の上で布を結束するか、または檜木笠をかぶること、さらに人夫は背中に「支股ある木牙を負ひ腰に縄を結」ぶことまで、朝鮮族の特徴がよく表現されている。さらに腰部に鐵片巾着等を纏い付けた細部も、ビゴーは意識し描いている(図58)

53。
。



図 57「東京へ護送される捕虜」(③、『ザ・グラフィック』、1895年4月27日)



図 58「朝鮮における処刑の方法：釜山の警察官にムチ打たれる泥棒」(⑤、『ザ・グラフィック』、1894年10月27日)

以上のように、『ザ・グラフィック』への投稿絵は人物の姿を細緻に表現している。人々の姿を正確に描き分けたのは、ビゴーが戦場写真などを参考していたからであろう。そして、ビゴーの異国の風俗に対する強い感受性もうかがえる。長い在日に、日本人を描いてきた経験を持っているからこそ、日本兵・軍夫・清兵・朝鮮民衆などの独特な風俗をうまくつかまえたのではないと思われる。

来日初期に出版した日本人画集『あさ』『おはよ』『また』そして『クロッキ・ジャボネ』のように、ビゴーは一般の日本人だけでなく、戦場の人々もうまく特徴をつかんで活写したのである。それについて、清水は『ビゴー日本素描集』において、「日清戦争報道画における日本人・朝鮮人・中国人の正確な描き分けなど、作画における人間の表現描写の厳密さは見る人の心を打つ」⁵⁴と高く評価している。

このように正確に描き分けられたのは、一部写真を参考した可能性があるとはいえ、やはりビゴー自身が持つ異文化に対する強い感受性がないと描けないとみられる。大佛次郎が小説の中で挿絵に取り組んだほど⁵⁵、ビゴーの絵は地方の風俗を的確に伝えている。このようにみえてくると、ビゴーの描いた報道画は、単なる戦事の報道画というだけにとどまらず、一連の風俗画の延長線上に位置づけられるものでもある。

また、「絵」のために写真を「利用」することは、早くも十九世紀五十年代から始まったといわれている。ビゴーの来日以前において、ワーグマンが『ザ・イラストレイテッド・ロンドンニュース』の特派員を勤めた時期に、すでに写真をもとにして報道画を描いた事例があった⁵⁶。

直接写真ではなく報道画を使った理由として、木下が言及したように、「印刷技術の問題」で、「小さくて不鮮明な写真を大きく鮮明に印刷することは困難で、新聞雑誌のような大型の印刷物の挿図には使えなかった」からだと思われる⁵⁷。

日清戦争期は、浅井忠、久保田米僊、鈴木経勲のように、写真をベースに作画した画家も多く存在していた。

ビゴーの写真帳と報道画を比較してみると、写真帳の写真から描き起こされたものが、四枚ほど確認できている⁵⁸：

- ① 「病体から回復の兵士たちが釜山で乗船を待ち、帰国の道につく」(1894 年 10 月 27 日) ⇨写真帳の 66 番 (図 59、60)
- ② 「兵士用の米を洗う最中」(1894 年 10 月 27 日) ⇨写真帳の 4 番 (図 61、62)
- ③ 「釜山にある一軒の肉屋の中：朝鮮の婦人たちが肉を切り売りする」(1894 年 10 月

27 日)

⇔写真帳の 17 番 (図 63、64)

④ 「朝鮮の役人」(1894 年 3 月 2 日、図 76)⇔写真帳の 45 番



図 59「病体から回復の兵士たちが釜山で乗船を待ち、帰国の道につく」(①、『ザ・グラフィック』、1894 年 10 月 27 日)

図 60 66 番(ビゴー『日清戦争写真帳』)

上記 4 枚の報道画は、全体的な構図が写真と類似した一方、いくつ修正された形跡もある。

①では、報道画に描かれた兵士たちの姿は、全体的に写真よりさらにクローズアップされている。そして、兵士たちの荷物もわざわざ画面の真ん中に置いて描かれている。画面真ん中で座っている兵士の姿は、そのまま写真から写されたが、左側の兵士の姿は、元の写真に写った座る姿から立つ姿に描き直されている。

②では、「軍隊のために洗米」は前掲の一枚と同じく、米の運搬用の桶が画面の右側で写真よりさらに鮮明に描きかかれている。背後で軍夫の働きをみている朝鮮人の姿も描き加えられている。

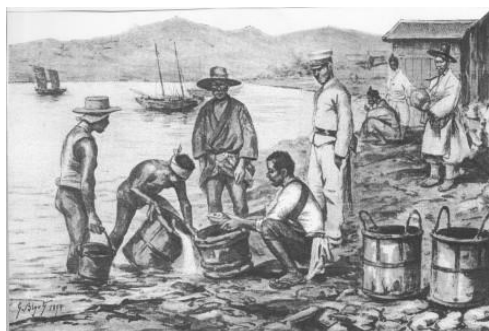


図 61 「兵士用の米を洗う最中」(③、『ザ・グラフィック』、1894 年 10 月 27 日)

図 62 四番(ビゴー『日清戦争写真帳』)



図 63 「釜山にある一軒の肉屋の中：朝鮮の婦人たちが肉を切り売りする」
(④、『ザ・グラフィック』、1894 年 10 月 27 日)

図 64 17 番(ビゴー『日清戦争写真帳』)

また、③でもいくつかの修正がみられる。座った女性の体の向きがやや調整され、半分の顔がみられ、右手でナイフを持っている姿になるように工夫されている。そして、そばで働いた二人の女性は、それぞれ背後と正面の姿で表現されたのである。このように、三人の女性姿から、よく当時の朝鮮女性の髪型、身なりを把握できる。

このように、ビゴーは意図的に修正を行い、写真に撮りきれなかった情報を補完したのである。欧米読者が見知らぬアジア人の姿を紹介しようとしたビゴーの報道画は、やはり強く風俗画の性格を持っている。

2.3 ニュース性をそろえた報道画

写真帳の写真から作画した報道画は四枚しか確認できていなかったとはいえ、残りの何枚かは、ビゴーの想像によって構成された架空の情景とはいえない。たとえば、以下の報道画は、実際の事件をベースに描かれたことが判明できたのである：

- ①「朝鮮の第二王子が日本への途次、仁川に到着」(1894 年 12 月 29 日)
- ②「東京の中国人捕虜：日課の散歩」(1895 年 4 月 20 日)
- ③「東京へ護送される中国人捕虜」(1895 年 4 月 27 日、図 57)

まず、「朝鮮の第二王子が日本への途次、仁川に到着」は、世子義和宮の訪日を取り上げたものと見られる。『朝日新聞』(1894 年 10 月 9 日、10 月 16 日)から、以下の記事が見られる：

天皇陛下より西園寺侯を勅使として差遣はされし返禮の為め朝鮮政府より派遣する報聘使ハ(中略)今回ハ朝鮮國王の世子義和宮を来朝せしむることに確定したるといふ。此義和宮といふハ朝鮮國王第二王子にして(後略) (1894 年 10 月 9 日)

仁川特報 十三日午後五時青山好恵仁川特發

報聘使義和宮の一行十三名本日仁川に來り十五日頃蒼龍号にて廣島に向ふ筈 (1894 年 10 月 16 日)

また、「東京の中国人捕虜 日課の散歩」で描かれたような、多くの日本民衆が清捕虜を見物しに集まった情景も、当時東京の本願寺の捕虜収容所で実際に起きたことである。『朝日新聞』では、1894 年 12 月 29 日から、民衆が捕虜を見物する記事が掲載されている。「本願寺門前にハ見物群をなし折々捕虜玄関などへ立出で何か食ふて居るを見る時ハ小兒までが弱蟲めちゃん〜坊主めなど罵り合へり」などの情景も報道されている。

「日課の散歩」の情景は、「俘虜ハ午前九時より十時まで午後一時より二時まで毎日二回つつ門内の廣庭にて運動させる」ことだと見られる。「此時間を計りて見物に來る者夥多く頗る雑踏を極むる」とみられ、民衆の大きな関心がうかがえる⁵⁹。

また、1 月 5 日の記事では、「見物の中でも兵士の如きハ玄武門の原田を氣取て塀を乗蹠え屋根へ上り為めに瓦を破損すれば寺僧の迷惑一方ならず」とのような事例さえあったという。

最後に③は、広島滞在の捕虜を佐倉市に移送した時の情景を取り上げている。それに関しは、幅亮子が「日清戦争における清国兵捕虜について」⁶⁰において、詳しい考察を行っている。

同氏によると、佐倉捕虜廠舎は 1894 年から、東京の赤十字病院から断続的に捕虜を受け取り、そして 1895 年 2 月 15 日、捕虜が広島から、新橋を経て佐倉へ転送されてきた。新橋停車場では、「期刻に先ち停車場前の広場にハ見物人の山を築き新橋通筋の両側にハ老幼男女押しかへす程の人出」だったという。捕虜が到着すると、「見物人中にハ鯨波の聲を揚げて嘲弄したるものあり又小石を投付し者もありしが憲兵巡查の注意にて格別の事なかりき」あるような光景出現していた。ビゴーの報道面に付けられた説明文には、次のような紹介がある：

34 人の中国人捕虜を護送する一行が新橋駅に着くと、彼らを見ようと明け方から待ちうけていた群衆が罵詈雑言を浴びせかけ、なかには石を投げる者もあった。警察は手回しよく乗合馬車数台を雇っていたが、捕虜が乗車を終えるまで興奮した暴徒を押し返すのに大いに手を焼いた。馬車で鉄道の駅へ運ばれた捕虜たちは、そこから汽車で東京近郊の町、佐倉に送られた。

内容は捕虜の人数も『萬朝報』で報道された通りであり、出発地の新橋駅と押送先である佐倉市も全く一致している。

「東方の戦争 偵察中に起きた小ぜり合いの後、前線から負傷兵が運び込まれる」(1894 年 10 月 27 日)の一枚も、中和の闘いを描いた可能性が高い。中和の闘いは、8 月 10 日日本の斥候兵が黄州から中和に向かい、偵察中で清の軍隊に遭遇して起きた衝突である。ビゴーの投稿は、10 月に掲載されたこの一枚は、真にリアルに戦場を報道したニュース性を持った報道画といえる。

ビゴーの報道画は、単に架空な場면을想像で描くのではなく、一部の報道画でニュース性のあるテーマを取り扱ったこともわかる。ビゴーはいままでみてきたように、わりと話題性の乏しい場面を取り上げている。彼は一体戦争をどのように表現しようとしたのか。次節では、戦争前後の作品に結びつけながら検討していく。

第 3 節 ビゴーが描いた日清戦争

3.1 戦争以前におけるビゴーの作品について

日清戦争は、ビゴーがはじめて体験した戦争ではない。彼は早くも 11 歳の時に、普仏戦争(1870～1871 年)を経験した。その時から、ビゴーは目撃した殺戮の現場や燃えさかる市街を描いたという⁶¹。

普仏戦争が勃発した同時期の日本に目を向けると、当時の日本はちょうど明治維新を経て、欧米に模倣して新たな政治制度の制定を模索した時期にある。そして、戦争におけるフランス軍の敗北が、日本の軍制にも影響を及ぼしていたと考えられている。当時ヨーロッパ視察旅行をしていた山縣有朋は、プロイセンの国民皆兵主義から強い印象を受けたといわれ、帰国した後、軍制改革について、「大きくフランス式からドイツ式、つまり志願主義から国民皆兵主義へ」という転換を構想しはじめたという⁶²。その影響によるものか、普仏戦争が終わっての 1872 年から、官雇フランス人に大幅の減少がみられる(図 65)。

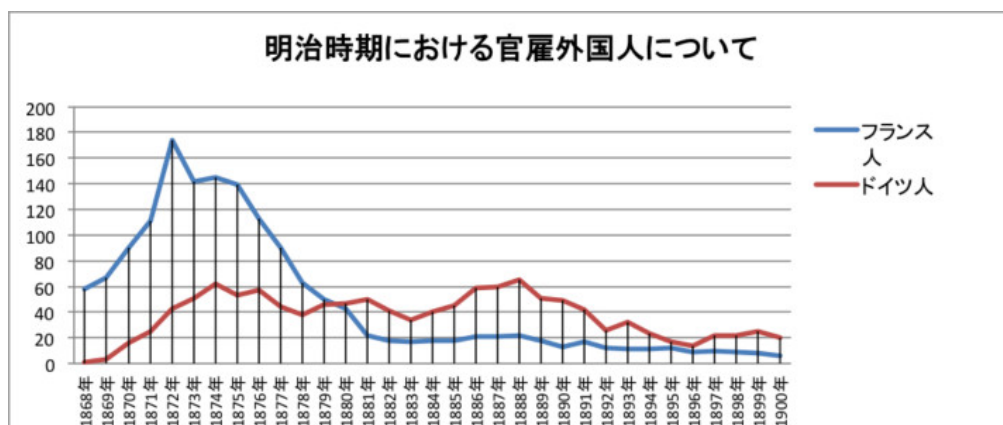


図 65 明治時期における官雇外国人の人数推移(フランス人とドイツ人の場合)
 注) ヘーゼル・ジョーンズ「グリフィスのテーゼと明治お雇い外国人政策」(『近代化の推進者たち—留学生・お雇い外国人と明治—』, 1990 年 2 月, 220～221 ページ)をベースに作成。

そして、普仏戦争の 11 年後(1882 年)、ビゴーは渡日し、以降日本で 17 年間を過ごした。ビゴーが渡日した理由は、フランスの文化や先進技術を日本に紹介するためではなく、日本伝統の浮世絵の勉強を志したからである。当時のヨーロッパでは、ジャポニズムが流行し、ビゴーもその影響を受けて日本の伝統美術にひかれたのである。

しかし、浮世絵は一人での制作は技術上で不可能であり、ビゴーはやむをえずその勉強を断念する。また、当時日本の芸術界は「日本美術に目を閉じ」、欧米美術を高く評価するという現実と直面した。「西洋美術の模倣は卑屈であり、古い日本画壇の巨匠作品とその才能の模倣は大いなる名誉」と考えた彼は、日本の近代化に疑問を抱き始めたのである⁶³。

彼が来日した 1882 年は、フランス人雇用が大幅に減少し、ドイツ人に超えられた時期にあたり(前掲図 65)、そして自由党総裁の板垣退助が刺殺され、自由民権の志士河野広中が弾圧された「福島事件」が発生した年である。そして、滞日の 17 年間は、まさに『四民平等』といった啓蒙思想が自由民権運動に発展し、自由党が生まれ、弾圧によって瓦解してゆく敗北の時期⁶⁴、さらに「シンボルの形成期・歴史的転換期(日本の帝国主義化)」⁶⁵で、即ち近代化によって日本が劇的に変貌した時期であった。

あらゆる面から「欧米」の吸収を行った近代日本に対し、ビゴーが違和感を持つようになった。「西欧の後を追って、「東洋の一新帯国」たらんなどとの野望に駆られ」、「牧歌的な美の国たることを捨てて、急速にさまがわりしつつあった」⁶⁶日本、そして、それを実感したビゴーは、様々な角度から近代化の進展具合を観察しはじめ、画筆を取って記録しはじめたのである。滞日の間でビゴーが個人で出版した作品を、表 1 にまとめてみた。

ビゴの作品について、今まで膨大な先行研究がみられる。ここでは、これらの先行研究を踏まえながら、日清戦争以前におけるビゴ作品歴を簡単に追跡し、彼が近代日本に対する考えた及び表現の手法について略述しておく。

来日初期のビゴは、陸軍士官学校で画学教師の職を得て、1882年から1884年秋まで務めていた。彼は日本の文化に興味を示し、『あさ』『おはよ』『また』など風俗をテーマにした画集を出版していた。この時期の画集は、日本の民衆に注目し描いたもので、居留地で人気を博したという。

一方、士官学校の職を辞した以降、生計のためでもあり、ビゴははじめて風刺画創作に着手した。早期の創作は、『団団珍聞』への投稿などに止まっていた。1887年から風刺雑誌『トバエ』(第二回)を出版しはじめた。

『トバエ』は69回まで続き、ビゴが出版した雑誌の中で最も長く発行し、内容も充実したものである⁶⁷。様々な人物像によって時局を風刺することや、日本国内に拘らなく国際関係も多く取り扱った点が特徴的である。

芳永桜香は「ジョルジュ・ビゴの風刺画における『日本』像」⁶⁸のなかで、ビゴは「『国民意識』の形成に深く寄与した雑誌の風刺画」を、「長期に渡って日本で居留外国人や日本人に発信し続けた唯一の外国人風刺画家」と高く評価している。

1889年日本で発布された大日本帝国憲法は、ドイツの憲法体制をベースにしたものだと考えられている。ビゴはこれに対し、日本政府が西洋吸収における大きな方針の転換(フランス式からドイツ式へ)として受け止めたようである。前述のように、普仏戦争以降、日本の陸軍はフランス式からドイツ式への転換を迎えたのである。ビゴの作品には日本のドイツ指向を風刺した作品が多く見出される。

まず、「坊ちゃんの気紛れ」(図66)という一枚は、各国製のおもちゃから日本坊がドイツ製を選んだことが描かれていた。成長期における日本という「子供」がドイツを手本として取り上げはじめたことを風刺している。これは近代成長を求めた日本が、性急で無選別に西洋(ドイツ)を取り込むことを風刺していた。



図 66 「坊ちゃんの気紛れ、または、今日のおもちゃ」、『トバエ』、1887 年 3 月
注)酒井忠康，清水勲編『日清戦争期の漫画：G=ビゴー・田口米作』、1985 年 6 月，
p.11 より

また、憲法が発布された直前に発表した二枚(図 67,68)は、フランスが日本を手放したことを暗喩していた。



図 67「両国の最初の段階」、『トバエ』第 48 号、1889 年 2 月 1 日

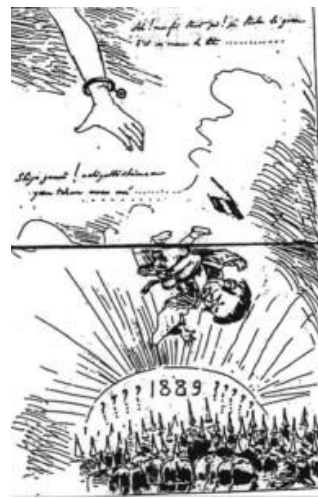


図 68 無題『トバエ』第 48 号、1889 年 2 月 1 日

注)清水勲『トバエ』の全体像，川崎市市民ミュージアム，伊丹市立美術館編『明治の面影・フランス人画家ビゴーの世界』、2002 年，p.158 より

ドイツ指向に対する批判には、一部母国最良の感情も作用したと思われる。しかし、彼がもっと強調したいのは、日本が「ドイツを見習う危険さ」⁶⁹ではないだろうか。フランスと違い、当時のドイツ軍制は「国民皆兵主義」を指針としていた。ビゴーは、日本が「気紛れ」でドイツ指向になったことは、自ら軍国主義の道に入り込んだように理解していたのだろうか。

そして、無選別に西洋吸収を行った日本について、ビゴーは詩画集『ヨコハマパレード』において、「教育されてすぎ」としていると強烈に批判している。

明治維新以降、日本が「電車や電信機、ライフルやダイナマイト、多くの軍艦、山高帽やランプに至るまで」、西洋のあらゆるものを吸収しはじめた。「欧米人の行き過ぎた教育のために」、もともと善良な日本人も「かえって生意気になり、ずるくなってきた」ことに、ビゴーが失望を感じたようである⁷⁰。

ビゴーは日中関係に関しても、その背後にある欧米諸国の影響力を鋭く認識していた。1887 年発行『トバエ』⁷¹「朝鮮問題(時事)」というテーマで描いた二枚(図 69 と図 70)がみかけられる。

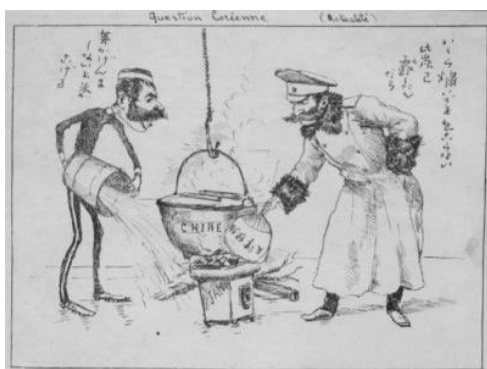


図 69 「朝鮮問題」、『トバエ』第 20 号、1887 年 12 月

注)『Tobae : journal satirique』、Yokahama : On s'abonne au Club Hotel 出版

図 70 「朝鮮問題」、『トバエ』第 20 号、1887 年 12 月

注)『Tobae : journal satirique』、Yokahama : On s'abonne au Club Hotel 出版

一枚目では、1885 年日清両国が締結した「天津條約」を題材にしたものである。しかしここでは、日中両国の相互の牽制をはかる「ロシア」と「イギリス」が主役として登場している。一方「天津條約」という扇を使って、「日本」の炭から火を煽ぎ、「中国」飯を煮ようとした「ロシア」、一方は水をかけて火を冷ますようにする「イギリス」が描かれている。アジアにおける勢力の均衡を企んで、それぞれ日中関係の火加減を調節し続けるイギリスとロシアの作用が見出せる。

そして、2 枚目では、「中国」が「朝鮮」へ向かって歩み寄っていることに、川の対岸で「ロシア」が「日本」のそばで手を指して示した情景が描かれている。また壁に攀じ上った「イギリス」が上から見守った様子も興味深く感じられる。



図 71「長崎事件—大詰め」、『トバエ』、1887 年 3 月 1 日

注) 川崎市市民ミュージアム、伊丹市立美術館編『明治の面影・フランス人画家ビゴールの世界』、2002 年、p.61 より

1886 年で北洋艦隊の清兵が長崎で暴動を起こした長崎事件についても、ビゴーが日中両国の調停の流れについて描いていた。英仏の調停によって、日清は平和的に妥結できたが、仲良く話し合った日清の公使の背後に、報酬を持って通り過ぎた欧米人の姿も描かれていた(図 71)。キャプションでは「災いを転じて福と為す」と書いていて、日清の間の「災い」に対する調停によって、欧米人は高額な報酬⁷²という「福」を得たということが興味深い。

欧米を無選別に取り込んで、近代国家を建設していく日本に対して、ビゴーが深い懸念を示した風刺画を描き続けたのである。このような視点を持ったビゴーは、どのように欧米読者に日清戦争を伝えていたのか。次節では、ビゴーの報道画について具体的に検討してみる。

3.2 ビゴーが描いた戦争中の人々

日清戦争に従軍した絵師の戦争報道画を素材に検討した研究は、近時大きく深化している⁷³。福永は、久保田米僊父子を取り上げて、米僊の名を使った報道画を

- (A)「戦闘場面」
- (B)軍隊の動き(「戦闘終了後の戦場、行軍、キャンプ」)
- (C)朝鮮当地(「名所・旧跡」、「風景および建造物」、「朝鮮の風俗、風習」)
- (D)「その他」

と分類し、久保田米僊の報道画に、戦闘シーンの少ないこと、そして兵士の日常生活に取材したものが最も多いことを指摘している。「従軍画家たちはなかなか実戦の様子を間近でみる機会に恵まれなかった」という理由を提示している。

大谷は「日清戦争報道とグラフィック・メディア」においても米僊の報道画に言及し、(B)(C)が最も多く描かれたのは、「司令部に所属の従軍写真師・画家は、戦闘の後方から見えており」、「『写生画』を描くことはできても、(A)をみることは困難であった」と指摘している。

米僊のほか、浅井忠も『時事新報』の従軍絵師として、従弟の浅井魁一と一緒に戦場に赴いた⁷⁴。彼も 1894 年 9 月から 12 月の間、新聞に 41 枚ほどの報道画を発表した。この 41 枚について、福永の分類方法を参考し、以下の三種類に整理した：

「戦闘場面」(遠景)	1 枚 (A)
「戦闘終了後の戦場、行軍、キャンプ」	11 枚 (B: 軍隊の動き)
「名所・旧跡」	} 23 枚 (C: 朝鮮当地)
「風景および建造物」	
「朝鮮の風俗、風習」	
「その他」(人物の姿、分捕品、中国人の逃亡など)	6 枚 (D)

浅井忠の報道画も米僊と共通して、戦闘場面より「戦闘の後方」を多く描いている。また、風景や建造物を最も多く取り上げたことも特徴的である。久保田米僊の報道画では、(C)に分類できる「平壤城牡丹臺」⁷⁵など、主に戦争時の要塞を題材にしたものが多くみられる。しかし、「平壤城牡丹臺」の掲載時間は 10 月 17 日で、すでに平壤陸戦(9 月)が終わってから一ヵ月程立っている。

浅井忠も、「船橋里苦戦の跡」(10 月 13 日)や「牡丹台」(11 月 4 日)などを描いている。平壤陸戦が終わってから一ヵ月後に掲載されたものである。

つまり、風景や建築物の絵は多くの場合、軍事拠点や、軍隊が経過した地方を素材にしていた。報道画が戦闘より一ヵ月ほど遅れて掲載されたのは、戦争時の検閲制度が関わっているが、ある意味で今までの戦闘や軍隊の行動を追想する役割を果たしたといえる。

では、ビゴーはどんな報道画を描いたのか。前述した先行研究の分類方法を参考にし、ビゴーの報道画を以下のように整理してみた⁷⁶：

(A)「戦闘場面」	計 1 枚 (⑩) ⁷⁷
-----------	-------------------------

(B)「戦闘終了後の戦場、行軍、キャンプ」	計 20 枚
内訳： 戦闘直後・ 戦場掃除	4 枚(②、⑦、⑲、⑳)
戦死者の追悼	1 枚(⑩)
行軍、偵察、捕虜の訊問など	8 枚(⑨、⑪、⑬、⑯、⑳、㉑、㉒、㉓)
兵士の生活面、休憩姿	5 枚(①、⑥、⑫、⑮、⑰)
軍夫関係	5 枚(②、③、⑫、㉔)
野戦病院	1 枚(⑧)
(C)「朝鮮の風俗、風習」	計 2 枚(④、⑤)
(D)「その他」	計 6 枚
内訳： 朝鮮人と戦争	2 枚(⑬、⑭)
肖像画(日本人や朝鮮人)	4 枚(㉕～㉗)
(E)「日本国内」	計 5 枚(㉘～㉚)

戦闘場面が極めて少ない点や戦場の背後を多く取り上げた点で、ビゴアの報道画は浅井忠と久保田米僊と共通している。そして、ビゴアは戦場掃除(死体の処分)、軍夫の仕事、さらに日本国内の情景を報道画に加えている。また、風景画ではなく、ほとんど人を主体にして表現している。

このように、ビゴアの報道画には風景や建造物を題材にしたものがほとんどない。アジア人の人物画によって欧米読者の好奇心を満足させる狙いも考えられるが、風俗の一つにもなる朝鮮風景を全く描かなかったことは、やはり特徴的だといえる。いままで、近代日本社会を描き記す際に使った手法と同じく、ビゴアは各場面の人物像を取り上げることによって、戦争報道を組み立てたのではないかと考えている。そこで、拙稿では、登場人物を基準に、再度ビゴアの報道画を分類してみたのである：

日本人が描かれた絵：合計 28 枚

中国人が描かれた絵：合計 6 枚

朝鮮人が描かれた絵：合計 10 枚

また、前述のように、『ザ・グラフィック』の中では、ビゴア親筆絵を補足したように、サインがなく単にビゴアまたは「日本側の特派員」の名を使った 17 枚(写真を含めて)もある。中には、図 52 のような架空の戦闘場面も含まれている。17 枚のなかで、ビゴアの紹介に使う絵は 3 枚、戦闘場面(海戦の風景を含め)は 3 枚、戦闘地図は 2 枚、旅順絵及び写真 4

枚、風景絵 3 枚以上が確認できている。この 17 枚は、より久保田米遷と浅井忠の報道画に似ており、戦事の追跡なども行っている。ここからみると、戦闘そのものより戦時下の人々に注目したビゴーの絵は、非常に特異な存在だといえる。

以下では、報道画を写真帳及び戦争前後の作品に結びつけながら、日中韓の人々がいかに描かれたのかについて考察してみる。

明治 22(1889)年 1 月に改正された徴兵令によって、今まで免役の対象となった「官立公立学校教員」、「官立大学・学校本科生」そして「陸海軍生徒、学業の為留学」した人たちも、一般民衆と同じく兵役に服することが義務づけられるようになっている⁷⁸。つまり、貧富や学歴を問わず、身体検査に合格した人は召集されることになる。

また、兵士だけでなく、様々な業種からきた軍夫も戦場へ赴いた。大谷正の考察によると⁷⁹、日清戦争当時の輜重輸送は、駄馬編制ではなく軍夫が運送する「臨時車両編制」という手段を取っていた。戦争初期に朝鮮へ赴いた第三師団は、七千五百人以上の軍夫を伴ったという。民間請負業者に募集を依頼したため、軍夫の多くは都市と農村の貧民・雑業層だと考えられている。一方、戦勝の消息が続く中で応募も多くなり、第二師団の場合、以前と異なった募集手段を使ったため、軍夫のなかで「義勇兵組織・銃後支援組織」の人も入ったという。

このように、軍隊組織も様々な職業の人によって構成された「小さな日本社会」⁸⁰だった。ビゴーは戦場のこの小さな社会に生きた人々を観察し、彼らを報道画に記録したのである。

まず、日本兵から考えてみる。前述のように、報道画の中で戦闘シーンを題材にしたのはただ一枚だが、戦闘の周辺そして軍隊の日常を題材にしたものが多くみられる。

直接戦闘にかかわったテーマを描写した報道画を考えると、上陸してから戦地まで行軍する兵士(⑬、⑳)、そして、出征の前に戦死者の墓前で弔い(⑩)、偵察などで戦闘の準備を行う兵士(⑨、⑪)、また戦闘直後で戦場掃除を行って遺体の処理にかかわる兵士(②、⑦、㉑、㉒)、そして捕虜の訊問を行う兵士(⑯)の姿などが取り上げられている。

ビゴーは軍隊の仕事に携わった兵士を「静粛で規律正しく」表現したことは、すでに清水の研究で提示されている。確かに、行軍や戦闘の準備をテーマとした報道画からは、整然して行軍する部隊、そして命令に従って整然と動く兵士たちの姿は印象深い(㉑)。にもかかわらず、報道画に描かれた兵士の仕事は、決して気楽なものでなかった。

「広島で騎兵馬を列車から下ろす日本軍兵士たち」(㉑、図 72)⁸¹では、列車から軍馬を下ろすために、一生懸命手縄を引っ張る兵士の苦労が伝わっている。



図 72「広島で騎兵馬を列車から下ろす日本軍兵士たち」(㉑、『ザ・グラフィック』,1895 年 4 月 13 日)



図 73「平壤での戦闘後 戦場の一角」(㉑、『ザ・グラフィック』,1894 年 12 月 1 日)

特に注目すべきは、前述した二人の日本人絵師が描かなかった戦闘直後の場面である。「平壤での戦闘後：戦場の一角」(㉑、図 73)では、清兵だけでなく日本兵の遺体も多く描かれている。さらに、「交戦のあと戦死者を確認する日本軍将校たち」(㉒)と「交戦の後、戦死者の死体を焼く——『ヤキバ』すなわち日本式の火葬」(㉓)では、戦死した日本兵が描かれている。戦場掃除を手伝う捕虜の姿がなければ、戦勝さえ分からないほど、戦闘の激しさが生々しく描き出されている。ビゴーは冷静な目線で、戦場の残酷さを描き出したのである。

また、戦闘関係の内容から目を離してみると、日常における兵士たちも 5 枚ほどみかけられる。具体的な内容として、長い行軍でくたびれて、目を伏せて休憩した兵士を表現したものもあり、また戦病を題材にしたものもある。

日清戦争では、戦場で戦病死者は遥かに戦死者を上回り、主な病気は、脚気や赤痢だと考えられている⁸²。赤痢を防ぐために、軍隊自ら井戸を掘りきれいな水をとる工夫をしていた(「東方の戦争：井戸を掘る日本兵」(㉔)が、それでも戦場で多く兵士が赤痢にかかって行軍で落伍していた。「東方の戦争：行軍中、赤痢にかかった日本兵たち」(㉕)は、まさに赤痢に罹患した兵隊の様子を描いたものである。

生死を決する戦闘以外でも、兵士は戦場で様々な問題に面していたのである。ビゴーは無惨な戦死者のほか、部隊からの脱落者、長い行軍でくたびれた兵士の姿を描くことによって、戦場の現実を伝えたのである。

最後に、唯一の戦闘場面を考えてみたい。「東方の戦争：鴨緑江の渡河地点の虎山の闘いにおける日本軍の進撃」(⑰、図 55)は、10 月 24 日中韓の境界である鴨緑江を渡河する前の戦いを素材にした一枚である。

前掲の図 52 と違って、ビゴーが描いた戦闘シーンには、激烈な衝突シーンを描いていないことがみられる。戦闘相手である清兵は描かれず、遠い向こうの煙だけで存在が示されている。日本兵は、戦争錦絵でよく見られたような、ひたすら整列して攻撃する姿ではない。ビゴーは射撃の姿勢をとる兵士のほか、さまざまな姿を活写している。

たとえば、画面の真ん中に隊長と思われた兵士は、剣を高くあげて叫んでいる。そのそばで、弾丸を使い切って、腰の裏に下げた弾薬箱に手を伸ばした兵士も見かけられる。さらに、遠いところに突撃しようとする騎馬兵もいる。

また負傷した兵士や、前に倒れかけている兵士の姿も確認できる。負傷して腕で身体を支えてあえいだ兵士もいるし、前方を見ている体も体が後ろ向きになって、迷いながら佇んでいた兵士も印象深い。

この一枚の戦闘シーンからは、まさに戦場の兵士の現実をリアルに描こうという姿勢が感じられる。ビゴーが描いた兵士は、戦闘に集中した姿もいたが、負傷したりした戦場で戸惑った兵士もいた。戦場での日本兵だけでなく、家族との別れを悲しむ兵士姿(「いざ出陣：家族に別れを告げる日本軍兵士」、⑲)も、さらに戦場に赴いた兵士の悲しさを伝えている。

このように多様で人間性を持った兵士像を描けたのは、ビゴーが来日初期に陸軍士官学校で勤務した経験にもよっている。1882～1884 年の間で接触した士官学校の教え子たちは、まさに「日清戦争に中隊や小隊の指揮官として関わっていく」⁸³といわれたのである。

次に、「軍服を着ない私服の集団で、華やかさがなかったから戦争錦絵にも描れていない」⁸⁴軍夫について、ビゴーはどのように取り上げたのだろうか。

前文では、軍夫はさまざまな職業から募集されてきて、貧しい労働者が主であったことについて、すでに説明を行っていた。まず、前掲の「軍夫の点呼と食糧の配給」(⑳、図 56)において、キャプションでは軍夫たちが「休止地点に到着すると、すぐ点呼がとられ」、そして「食糧の分配は、実に驚くべき規則正しさで」行われたと説明されている。報道画においても、ビゴーは整列した軍夫を組織良く表現している。

それに対し、残りの 3 枚はどのような内容なのか。「東方の戦争 偵察中に起きた小競り合いの後、前線から負傷兵が運び込まれる」(㉑、図 74)との一枚を例に考えると、キャプ

ションでは「兵士たちは気転を利かせて負傷兵の輸送用に臨時担架をこしらえた」との説明があり、兵士の活躍が評価されていたが、画面では実際軍夫たちが運搬を担当していたとみられる。報道画からみると、戦場の脇役と思われた軍夫は、実際より多くの体力労働を担当していた。



図 74 「東方の戦争：偵察中に起きた小競り合いの後、前線から傷兵が運び込まれる」(②、『ザ・グラフィック』、1894 年 10 月 27 日)

日常で兵士用の米を洗う仕事も担当していたし、そして赤痢を防ぐため井戸を掘る仕事もすべて軍夫に任せられていたとみられる。

日清戦争当時では、軍馬不足で軍夫を使う臨時車両編制を取ったので、ある意味で軍夫は馬の代わりに重労働に携わったのである⁸⁵。『ザ・グラフィック』(1895 年 3 月 2 日)の増刊において、軍夫は「(日本軍の考えでは)各面においても軍馬より優れている。軍夫たちはそれほどの食料も要らず、しかも馬より多くの荷物を運搬できる頼もしい存在だと考えられている」(筆者意識)とのように紹介されていた。戦闘に直接かかわらないとはいえ、軍夫は戦場で想像を越えるほどの重労働を担当したと分かる。

このように、ビゴーは冷徹な目線で、戦場における軍隊の現実を描いていったのである。当時日本で盛んに宣伝された連戦連勝より、ビゴーは読者に向けて、戦争の厳しさを提示し続けていた。

ところで、戦場の中国人はどのように報道画に登場していたのか。前文で述べたように、中国人が描かれた報道画は計 6 枚で、2 枚は戦場、そして 4 枚は日本国内を舞台にしている。ここでは、先に戦場の 2 枚を考察してみる。

1 枚目は前掲の「平壤での戦闘後：戦場の一角」(⑦、図 73)であり、清捕虜は脇役として、戦場掃除で死体の運搬を手伝った姿で登場していた。そして 2 枚目は、1895 年 1 月 5 日の『ザ・グラフィック』の表紙を飾った「平壤の戦闘の後で：中国軍捕虜を尋問する日本

軍将校」(⑩、図 75)である。ここで、後者の清捕虜を審問する情景は特に注目すべきである。



図 75 「平壤の戦闘の後で:中国軍捕虜を尋問する日本軍将校」(⑩、『ザ・グラフィック』、1895 年 1 月 5 日)

捕虜になったにも関わらず、この一枚で描かれた清兵は、畏縮した姿を見せていなく、眉をひそめ背筋を伸ばして日本兵の審問に立ち向かう姿が印象的である。それに対して、浅井忠の報道画(「捕虜兵審問の圖」, 1894 年 10 月 12 日)で描かれた捕虜は、倒れて体を支えながら訊問を受けた姿が対比になっている。

浅井忠のように清兵を弱くに表現するのは、当時日本の戦争絵として非常に一般的に思われる。しかし、ガネスコとビゴー合著の『ショッキング・オ・ジャポン』では、この現象を強く批判した文章がある:

清国と戦争が開始されて以来、全くだらのしない絵・ポスター・出版物の内容見本・下絵、さらには日清両国民を登場させた芝居や寸劇の場面と思われるものも描かれた。大衆は、新聞にオーバーに書き立てられた生地から戦争をイメージしていったが、それらは驚くほどグロテスクで子どもっぽく書かれていた。(中略)

空想たくましく描かれた看板絵のどれもが滑稽で、清国に対する大衆の意志を支配している無分別な考えを表していた。店頭に打ち負かされた敵の絵をさらず、この流行は、職業の如何を問わずすべての人々の心をあつという間にとらえた。誰もが清

国ざらいになった。一人の薬剤師、とくに名指しするわけではないが、薬剤師というのは、大体どこの国でも穏やかな性格の人間に決まっているのだが、その彼が灌腸を二度する間に次のような絵を思いついた。すなわち、一人の日本兵が六人の清国兵を一撃でやっつけている図である。(前掲第一章の図 45)⁸⁶

ガネスコが執筆した文章ではあるが、協力者であるビゴーもある程度共感していたことだと考えられる。誇張的な戦争絵に対する批判意識を示したように、ビゴーは図 45 によって全く違う姿の清兵を描き出したのである。

日清戦争期において、ビゴーの母国フランスと中国との外交関係は、決して穏やかとはいえない。同時期において、フランス人が中国人に殺害された事件が起っていたからである。『国民新聞』(1894 年 9 月 4 日)は、戦争の最初でフランスが「傍観の地位にあれども」、その事件によって、「其清國政府に對する談判は目下被害者の位置を以て猶豫なく嚴談し居る趣なり」、「佛國艦隊の支那海に集まらんとするも事實にして毫も疑ふ可からず」と、フランス側の強硬姿勢を報道していた。

母国に関わった事件とはいえ、ビゴー自身は報道画において、中国人に対し良し悪しの評価を示していなく、相変わらず冷靜的な目線で中国人を表現したのである。

また、ビゴーは戦時下の朝鮮人をいかに描いたのか。報道画の中で、朝鮮人が登場したものは 10 枚に達し、中国人の報道画を上回っているが、実際その中の 5 枚は、朝鮮人の姿がそれほど鮮明には描かれておらず、通りすぎていく姿や遠くで軍隊の働きを見守る姿だけである。つまり、この 5 枚における朝鮮人は、日本軍が駐留している場所が、朝鮮であるということを示すための記号として描かれたようにみえる。朝鮮本土で起った戦争とはいえ、この五枚では朝鮮人はかえって傍観者の存在となり、日本兵隊との関わりも見あたらない。

そして、ほかの五枚はどのような場面で朝鮮人を取り上げたのか。前述したように、朝鮮の風俗と肖像をテーマにした三枚は、写真をベースに描かれたことが判明できている。「朝鮮の役人」(②4、図 76)は役人の肖像絵で、10 月 27 日の特集で掲載された 2 枚は、朝鮮女性の職業と朝鮮の刑罰を紹介していたのである。



図 76 「朝鮮の役人」(②4、『ザ・グラフィック』,1895 年 3 月 2 日)

働く女性を描くのは、ビゴーにとってははじめてのことではない。来日以降、ビゴーは様々な日本女性を描き、またその働く姿を画集に出していた。遊女や女中など、彼は日本女性の職業を数多くの絵に記録したのである。

そして、前掲の図 63 で描かれた朝鮮女性は、肉を売る職業に携わっていた。このように、ナイフを持って屋根から下げている肉をその場で捌く姿は、珍奇な風俗としてビゴーの目に映ったようである。肉屋とはいえ、ただ藁葺きで粗末な建物である。そして女性の服装や、げっそりした顔、さらにそばに置かれた角の欠けた桶は、生活の貧しさを反映している。

次に、同号の「朝鮮における刑の執行」は、朝鮮式の刑罰を紹介したものである。キャプションの説明によると、罪の重さによって刑罰の棍棒の太さが決められる。死刑の囚人が太い棒で打たれて、苦痛の中で死んでしまうなど、刑罰の残酷さ表現しがされている。

しかし、刑罰の絵の上に、ビゴーが執筆したと説明された記事が載せられていて、朝鮮人の生活を以下のように書いている：

現地人たちは寄り集まって汚い小屋に住み、想像もつかないかつかつの暮らしを立てている。彼らはひどく貧しく、ごく少量の食糧しか必要としないのに、いつも飢えに瀕しているように見える。(後略)⁸⁷

また、朝鮮人は「これまで見たことのないほどおとなしい連中」だと紹介している。

このように表現される朝鮮人を、ビゴーは戦争の中で、どのように描いているのだろうか。「東方の戦争：京城(ソウル)へ行進する日本軍」(⑬、図 77)、「朝鮮王の第二王子が日本

への途次、仁川に到着」(⑭、図 78)の二枚は、まさに戦時下の朝鮮民衆を取り上げたものである。

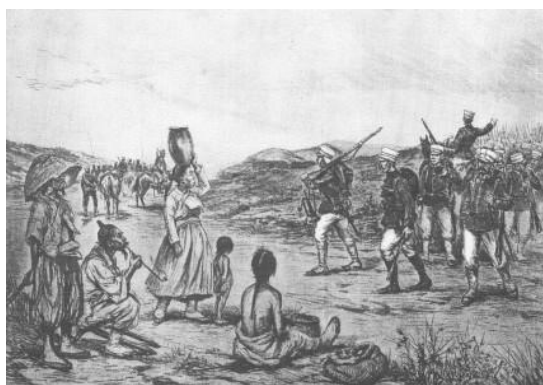


図 77 「東方の戦争:京城(ソウル)へ行進する日本軍」(⑬、『ザ・グラフィック』、1894 年 12 月 22 日)



図 78 「朝鮮王の第二王子が日本への途次、仁川に到着」(⑭、『ザ・グラフィック』、1894 年 12 月 22 日)

一枚目は、道端で日本軍の行軍をじっと見つめる朝鮮人の姿が描かれている。現代的な服装を着用した日本兵とボロをまとった朝鮮民衆が鮮明な対比となっている。特に興味深いのは、これから自分の国を支配しようとする他国軍隊を、ただ「静かで好奇のまなざしで」見つめる朝鮮人の姿である。

第 2 節ですでに紹介した「朝鮮王の第二王子が日本への途次、仁川に到着」(⑭、図 78)は、第二の王子が報聘使として、日本へ旅立つ途中、仁川の町を通りすぎた情景を取り上げている。画面の中では、王子の姿より、見送っていった朝鮮民衆がクローズアップされたのである。一枚目と同じく、激しい行動や表情も見当たらず、ただおとなしくじっと見守った様相が描かれている。ここから、温和な朝鮮人像も見いだせる。

日本側が宣伝したような、朝鮮を「救おうとした」日本軍に対して、絵の中の朝鮮人は積極的に受け入れる姿もなく、そして反抗する姿もない。また、日朝の友好関係を結ぶために、日本へ向かっていた朝鮮王子をみても、なんの反応も示していない。ここで、朝鮮民衆は傍観的な立場が描かれたことによって、ある意味で戦争に対する無力感がつたわっている。

しかし、当時の朝鮮社会は決して平穏とはいえない。戦争初期から、日本は朝鮮人夫を徴集したが、徴集が難航したうえ、逃亡してしまうのが常で、「七月二十七日には歩兵第二十一連隊が人馬不足のため出発すらできない状態に陥り、大隊長の古志正綱が引責自殺をするという事態」まで起こったという⁸⁸。



図 79 「朝鮮人と日本人の争い」、『ル・モンド・イリュストレ』、1904 年 1 月 2 日
 注) 芳賀徹ほか編『ビゴー素描コレクション 3-明治の事件-』、岩波書店、九十二ページより。キャプションには、「仁川の乱闘 上陸間もない日本軍海兵隊の兵士と、女や娘たちを護ろうとする朝鮮住民との間に小ぜり合いがあった」と書いている。

そして、ビゴーは「朝鮮人と日本人の争い」(図 79)という一枚を 1904 年の『ル・モンド・イリュストレ』に投稿していた。ビゴーは日露戦争の従軍に行かなかったため、絵は日清戦争期の場面をベースにしたものだと考えられるが、画面の中で日本軍と衝突した朝鮮民衆の姿が描かれている。つまり、ビゴー自身も日清戦争当時における日本人と朝鮮人の衝突を知らながらも、わざわざ朝鮮人を抑制された表現で取り上げたとみえる。

また、戦場からかけ離れた日本国内に目を向けると、日本人民衆と日本に滞在した中国人との接触した場面が主に題材として取り上げられている。

第2節で述べたように、戦争当時日本に押送された清兵捕虜が町に出るたびに、多くの民衆が見物に集まってきていた。「東京へ護送される中国人捕虜」(㉓、図 80)というと、憎い表情で捕虜に石を投げたりする日本民衆と抑えようとする兵士が描かれている。それに対し、清捕虜はただおとなしく車に乗っていく。



図 80「東京へ護送される中国人捕虜」(㉓、『ザ・グラフィック』、1895 年 4 月 27 日)

図 81 「東京の街頭の光景: 中国居留民を嘲る日本の子供たち」(㉔、『ザ・グラフィック』、1895 年 4 月 13 日)

また「東京の街頭の光景：中国居留民を嘲る日本の子供たち」(③0、図 81)と題した一枚において、中国居留民が日本の町中で歩いた情景が描かれている。画面の中で、子どもたちは中国居留民の後についてはやし立てていたが、そばの大人たちが見て見ぬふりをした。

子どもという純粋な存在によって、ビゴーは当時一般民衆で普遍した敵愾心を的確に描き出していた。絵の中で、中国人の表情もビゴーにうまくつかまれている。

来日直後のビゴーも、日本の子供に後をつけられた経験があったという。東京の美術学校の校長に会うために、余りお金を持たずに東京に出かけたため、帰りの交通費も無く横浜まで9時間歩き続いたが、その途中で日本の子どもたちに遭遇したようである。その経験が手紙にてフランスにいた母に書いたのである：

子供があとからついて来て、「オハヨー、トージン(外人さん今日は)」と叫びながら、びっくりしたように目を大きく見開いて、ぼくを見つめます。この小さな連中にとって、ぼくは激しい好奇心の的というわけで、思わず笑ってしまいました。道中行く先々で、多くの人々がぼくにお茶やお菓子を出してくれたり、大声で(中略)挨拶してくれます。

89

手紙から、ビゴーが「日本は愉快的な国でこの善良な人々の気立ての良さ」に感心し、彼の目には、日本の子供も好奇心が強くかわいいらしいように映ったようであった。しかし、この「愉快的な国」の友好的な国民は、戦争によって、攻撃的な姿に変身したのである。前記の図 39 も、決して子供をかわいらしく描いたものとはいえない。実際、日清戦争後においても、似たような情景を描く幾枚がみかけられている。『日本人の生活』の「ケトージン」(図 82)と『一八九七年の日本』の何枚(図 83)がまさにその例である。しかし、ここでは、中国人ではなく、欧米人がはやされた対象になっていた⁹⁰。また、画面の真ん中軍人も傍観の姿で描かれたのが興味深く感じられる。



図 82 「ケトージン」(『日本人の生活』、1890 年 4 月 1 日)

注) 及川茂『フランスの浮世絵師ビゴー：ビゴーとエピナール版画』、木魂社、1998 年、p.47 より

日清戦争を経て、純粋な子供でさえ、軍国主義に影響され攻撃的になることに、ビゴーが嘆いたようである。前掲の『ショッキング・オ・ジャポン』においても、類似した論述がみかけられる：

今日、日本では、子どもたちまでが軍国主義の影響を受けている。この国の人々を楽しませているたくさんのおもちゃ屋を見てください。軍帽・軍刀・鉄砲・大砲・肩章それに肩当てしかないのである。そのうちに哺乳期の形まで影響を受けそうなのだ。将来、浮児はみな消防夫のような制服を着るようになるだろう。「全ては力のために、そして全ては力によって」これが今やいたるところに氾濫している標語である。そしてこの標語のために、現在、日本の全ての腕白小僧たちが伍長の格好をしているのである。⁹¹



「ヤエ～ヤエ～ケトウジン バカヤロウ～」

「キミ悪い子だ～トウジン トウジン～」

図 83 『一八九七年の日本』を一部引用

注) 国立国会図書館関西館に所蔵されたものを参照

また、日露戦争期ですでに帰国したビゴーは、フランス紙『ル・プチ・パリジャン』に「フランス公使館前の反仏デモ」という一枚を投稿していた。絵の中では、日本のフランス公使館の構外で石を投げた日本人たちが描かれている。日清戦争後、独仏露の三国干渉によって、日本は中国に遼東半島を還付したのである。それによって日本社会で大きな反発を起こし、当時フランス領事館の前で民衆が対仏抗議を行ったのである。このように、日清戦争期における民衆の過熱な対外感情を、ビゴーも身を以て経験したのである。

まとめていうと、ビゴーは戦闘のほか戦病など様々な問題に直面する兵士から、輜重の重労働を担当し、華やかな戦闘報道に省略された軍夫、そして日本国内で過熱な戦争感情に影響された一般民衆、また日本で生きていた中国人居留民と捕虜、さらに戦争を前にして無力な朝鮮民衆まで細緻に描き出していた。戦争中における人々の姿を描くことによって、ビゴーは日清戦争に大きな疑問を示したのである。

3.3 ビゴーが描いた戦後の日本

ビゴーは日清戦争前から、日本が近代化の中における無選別な欧米吸収に疑問を持っていたことは、すでに 3.1 で論じていた。ドイツ指向に伴った軍国化への転向について、ビゴーは風刺画によって警告を続けてきた。しかし、日本は結局軍国主義を遂行し、日清戦争に突進していった。一方、おもての宣伝では、日本は文明開化の新進国であり、そして日清戦争によって朝鮮を「野蛮」の清国から解放させようとした「正義」の国とのようにイメージ作られていた。当時、『ザ・グラフィック』の中でも、一部日本に対する高い評価も見られた。

それに暗黙な反抗を示すように、ビゴーが筆を執ってあえて勇ましくない日本軍、臆病でない清兵、さらに戦争についた傍観な立場を取った朝鮮人を描いてきた。ところで、日清戦争後になると、ビゴーはどのような作品を出していたのか。戦争後において、ビゴーは大量な画集を制作しはじめた(前掲表 1)が、内容は「一段と露骨」な日本風刺、そして、今までのない日英関係に対する猛烈な風刺に転向したという。及川はそれに対し、「これまでにのようにぼかしを入れて風刺するという方法ではなく、直接的に批判する態度を取り始め」、「ユーモアを越えて、むしろ怒り、憤りととも呼ぶべき内容」と評したのである⁹²。

西洋式を取り入れた軍隊について、ビゴーは戦前よりさらに辛辣な風刺を投げつけていた。たとえば、風刺画集『日本人生活のユーモア』(1899 年)の中では、『兵士の一日』というシリーズがあり、中に戦争報道画と全く違う兵士像が描きだされている。

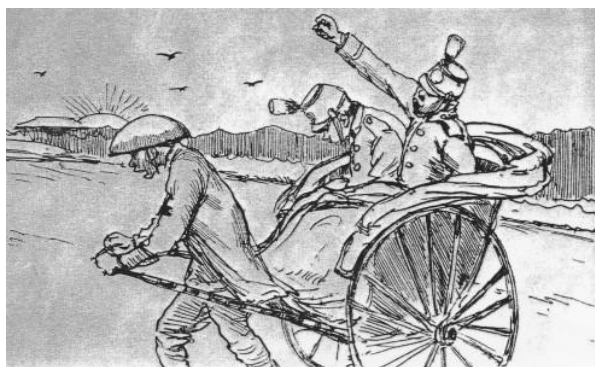


図 84「兵舎への帰り道」(『兵士の一日』、『日本人生活のユーモア』シリーズ、1899 年)

注) 酒井忠康『ビゴー画集』、岩崎美術社、1973 年 5 月 20 日、127 番より

報道画で描かれた真面目に軍事任務を執行した兵士と違って、画集では、兵舎に戻ることを嫌がった兵士(図 84)や遊郭に通った兵士など、規則破りというもう一面が描かれて

いた。軍国主義の下で生まれた現象だと受け止めようで、ビゴーは厳しい批判を行っていた。

ビゴーが日本の軍国化への懸念は、また子供の教育を題材にした絵にも反映されている。帰国後の作品において、子供の戦争ごっこをテーマにしたものが何枚かみられる(図 85、図 86)。



図 85 「戦争ごっこをする日本の学童たち」、『イリュストラシオン』、1904 年 2 月 20 日
図 86 「日本の小学校における戦争ごっこ」、『LE PETIT PARISIEN』、1904 年 9 月 4 日
注) 前掲『明治の面影・フランス人画家ビゴーの世界』, p.133 より

戦争後の日本国内に限らず、ビゴーは国際の局勢についても多くの作品を出していた。その中で、日英関係が最も風刺された対象となっている。

日清戦争直前から、イギリスは条約改正に対する態度を変換し、日英通商航海条約の締結によって日本に急接近していた。官憲に監視された経験を持ったビゴーは、条約改正による領事裁判権の喪失に大きな不安を抱いた。戦後の作品では、彼は図 87 と図 88 によって日英関係を風刺していた。

ビゴーからみると、イギリスの日本接近は、結局目的はアジアにおける権益を守ることである。そのため、日本を人形のようにうまく操り、列強との間の勢力の均衡を求めている。このような手段は、かえって日本をさらなる軍国化の道へ導いていったといえる。1895 年発行の図 88 は、イギリスに背中を押されて、次にロシアに対決しようとする日本が描かれている。1904 年日露戦争の勃発を考えると、この一枚はまさに予見的だといえる。



図 87 「新しい年のおもちゃはイギリス印」(1899 年)

注) 前掲『日清戦争期の漫画：G=ビゴー・田口米作』, 1985 年 6 月, p.103 より。



図 88 (『極東における古き英国』, 1895 年)

注) 前掲『ビゴー素描コレクション2—明治の世相—』, p.117 より

日英関係が大きく取り上げられた一方、日清戦争後では、日中関係に関する作品がそれほどみられない。その限られた作品に日本と中国が同時に登場しても、そばで大体欧米国の登場も伴っている。前節でみられてきたように、日中関係について、ビゴーはやはり単にアジア国の外交でなく、欧米国が干渉したアジア国の外交という構図でとらえていたようである。

ここで、もう一つの視点から、日清戦争の報道画を読返してみる。ビゴーは日本軍の勝利を宣伝せず勇ましくない姿を描き続けたのは、確かに読者に見られない戦場の一面を伝え、そして日本の軍国化の危険さを警告した意図が考えられる。たとえ日本が戦勝したところで、大量な死傷を代価にしないといけない現実がまっていた。

しかし前掲図 69、70 と似たように、日清戦争を借りてアジアにおける勢力の均衡を達成できた欧米国も存在していた。国際的な視野を持ったビゴーは、日清戦争の背後に存在した欧米国の影響力も透けてみえたのであろうか。この角度から考えると、ビゴーは戦場で日本軍の勝利を表現しなかったのは、彼からみると、戦争に直接関わった日中両国には、ある意味で本当の勝者がいないのではないだろうか。

また、日清戦争期の報道画において、日本軍の戦勝を描いていなかったこと、報道画で両国の兵士に対し、善悪の評価を表さなかったのは、欧米国の存在を意識したのではないだろうか。前文で取り上げた戦前の風刺画(図 69)と戦後の風刺画(図 88)も、日中関係に対する第三者国の介入を明らかに意識したものである。

このように、ビゴーは日清戦争の背後にも、欧米諸国の影響力を透けてみたのである。彼にとって、日清戦争はもはや単なるアジア戦争ではなく、欧米諸国の権益がまつわる戦争となっている。それで、国際的な視野で戦争を評価したビゴーからみると、日清戦争に直接かかわった日中両国に、本当の意味での勝者はいないのではないかと考えられる。

おわりに

拙稿は、ビゴーが描いた日清戦争に対する一試論として、ビゴー私蔵の『日清写真帳』をベースに参考しながら、『ザ・グラフィック』へ投稿した戦争報道画に重点をおいて考察を行ってきた。

まず、第一節では、先行研究を踏まえて、新聞資料及び『日清戦争写真帳』によって、ビゴーの従軍取材について追跡を行ってみた。記事における名前の表記の違いから、従軍規則、また写真の出所などの問題で、戦場体験の角度から報道画を考察するのが難しいと判明し、報道画そのものの内容に対する考察を試みることにした。

その前段階として『日清戦争写真帳』の内容について分析し、そこからビゴーの写実的な目線を確認できたのである。

次に、第二節では、『ザ・グラフィック』の日本報道を紹介し、ビゴーの日清戦争報道画の位置づけを考えてみた。そして、ビゴーのサインが確認できた三十三枚の報道画を検討の対象に限定し、その性格について初歩的な把握を行った。風俗画の特徴やニュース性を具えたことを明らかに示し、報道画を考察する価値を提示した。

さらに、第三節では、戦争報道画の内容をテーマごとに分類し、戦争前後におけるビゴーの作品と対照しながら、具体的な検討を行った。

ビゴーは戦場陰の一面に注目し、様々な問題に直面する兵士から、輜重の重労働を担当した軍夫、さらに戦争に対し無力な朝鮮民衆を描きだした。そして日本国内で過熱な戦争感情に影響された一般民衆、また日本で生きていた中国人居留民と捕虜まで細緻に描き続けた。戦争の現実を描くことによって、ビゴーが日本の近代化さらに軍国化に対し、深い懸念を持ったことが判明した。最後に、戦争前後の作品と対照し、ビゴーが日本の近代化、そして、アジアにおける欧米諸国の影響力に対する批判的な姿勢がうかがえた。

一方、考察の中でまだいくつかの問題点がみられる。まず、ビゴーの従軍取材について、他の写真師の写真との対照が不足で、続けての考察が必要である。また、中国の従軍絵師である C・E・フリップの作品に対する考察が必要に思われる。フリップの報道画は、ビゴーのものと違って、中国人も日本人も未開人のように黒っぽく表現し、批判的な姿勢が強く感じられる。そのため、両方を比較しながら詳しく分析する価値がある。

以上を今後の課題として、これからビゴーの戦争報道画について、さらなる詳しい考察を行って行きたい。

表7 ビゴー親筆の報道画

番号	日付	タイトル	形態 (複製版より)	サインの内容	キャプションより
①	1894年10月27日	「病体から回復の兵士たちが釜山で乗船を待ち、帰国の道につく」	A3ほど	「g.Bigot Fusan 1894」(手書き) 「Meisenbach」(活字)	「我が日本軍従軍特派員が執筆」
②	1894年10月27日	「東方の戦争:偵察中に起きた小競り合いの後、前線から傷兵が運び込まれる」	A3二枚ほど	「g.Bigot 1894」(手書き)	「朝鮮にいる我が日本軍従軍特派員の写生画」
③	1894年10月27日	兵士用の米を洗う最中」	A4ほど	「g.Bigot 1894」(手書き) 「Meisenbach」(活字)	「我が特派員ビゴーの写生画」
④	1894年10月27日	「釜山にある一軒の肉屋の中:朝鮮の婦人たちが肉を切り売りする」	A4ほど	「g.Bigot 1894」(手書き) 「Meisenbach」(活字)	「我が特派員ビゴーの写生画」
⑤	1894年10月27日	「朝鮮における処刑の方法:釜山の警察官にムチ打たれる泥棒」	A4ほど	「g.Bigot Fusan ● 1894」(手書き)	「我が特派員ビゴーの写生画」
⑥	1894年12月1日	「平壤への行軍:野営の炊事場」	A4ほど	「g.Bigot 1894 Ping Yang」(手書き) 「C.HENTSEL」(活字)	「我が日本軍従軍特派員の写生画」
⑦	1894年12月1日	「平壤での戦闘後:戦場の一角」	A3ほど	「g.Bigot 1894 Ping Yang」(手書き) 「Meisenbach」(活字)	「我が日本軍従軍特派員の写生画」
⑧	1895年12月8日	「仁川の赤十字病院」	A4ほど	「g.Bigot ● 1894 Chumipo」(手書き) 「Meisenbach」(活字)	「我が日本軍従軍特派員が描いたスケッチの複写」
⑨	1894年12月8日	「日本軍騎兵隊の騎馬哨兵」	A4ほど	「g.Bigot 1894」(手書き) 「Meisenbach」(活字)	「我が日本軍従軍特派員が描いたスケッチの複写」
⑩	1894年12月8日	「戦地での日本兵墓地」	A3ほど	「g.Bigot ● 1894」(手書き) 「C.HENTSEL」(活字)	「我が日本軍従軍特派員が描いたスケッチの複写」
⑪	1894年12月15日	「東方の戦争:日本軍歩兵偵察隊が平壤付近で偵察を行っている」	A4ほど	「g.Bigot 1894」(手書き) 「C.HENTSEL」(活字)	「我が日本軍従軍特派員が描いたスケッチの複写」
⑫	1894年12月22日	「東方の戦争:井戸を掘る日本兵」	A4ほど	「g.Bigot ● 1894 Chumipo」(手書き) 「Meisenbach」(活字)	「我が日本軍従軍特派員が描いたスケッチの複写」
⑬	1894年12月22日	「東方の戦争:京城(ソウル)へ行進する日本軍」	A3ほど	「g.Bigot 1894」(手書き) 「Meisenbach」(活字)	「我が日本軍従軍特派員が描いたスケッチの複写」
⑭	1894年12月29日	「朝鮮王の第二王子が日本への途次、仁川に到着」	A4ほど	「g.Bigot 1894 Chumipo」(手書き) 「C.HENTSEL」(活字)	「我が日本軍従軍特派員が描いたスケッチの複写」

⑮	1894年12月29日	「東方の戦争：行軍中、赤痢にかかった日本兵たち」	A4ほど	「g.Bigot 1894」(手書き) 「Meisenbach」(活字)	「我が日本軍従軍特派員が描いたスケッチの複写」
⑯	1895年1月5日	「平壤の戦いの後で：中国軍捕虜を尋問する日本軍将校」	A3ほど	「g.Bigot 1894 Ping Yang」(手書き)	「日本軍従軍特派員が描いたスケッチの複製」
⑰	1895年1月5日	「東方の戦争：鴨緑江の渡河地点の虎山の闘いにおける日本軍の進撃」	A3ほど	「g.Bigot 1894 ●● Ba●tle de Kusan」(手書き) 「Meisenbach」(活字)	「日本軍従軍特派員が描いたスケッチの複製」
⑱	1895年1月19日	「東方の戦争：鴨緑江近くで露営している日本軍歩兵」	A4ほど	「g.Bigot 1894」(手書き) 「C.HENTSEL」(活字)	「我が日本軍従軍特派員が描いたスケッチの複写」
⑲	1895年1月19日	「東方の戦争：旅順へ進軍中の日本兵が偵察中」	A4ほど	「g.Bigot 1894」(手書き) 「Meisenbach」(活字)	「我が日本軍従軍特派員が描いたスケッチの複写」
⑳	1895年2月2日	「東方の戦争：夜間上陸中の日本軍」	A3ほど	「g.Bigot ●● 1894」(手書き) 「Meisenbach」(活字)	「我が日本軍従軍特派員が描いたスケッチの複写」
㉑	1895年2月9日	「交戦のあと戦死者を確認する日本軍将校たち」	A4ほど	「g.Bigot 1894」(手書き)	「我が日本軍従軍特派員が描いたスケッチの複写」
㉒	1895年2月16日	「交戦の後、戦死者の死体を焼くー『ヤキバ』すなわち日本式の火葬」	A4ほど	「g.Bigot 1894」(手書き)	「我が日本軍従軍特派員が描いたスケッチの複写」
㉓	1895年3月2日	「行軍中の日本人クレーンと随行者たち」	肖像画	「g.Bigot 1894」(手書き)	「我が日本軍従軍特派員の写生画」
㉔	1895年3月2日	「朝鮮の役人」	肖像画	「g.Bigot 1894」(手書き)	「我が日本軍従軍特派員の写生画」
㉕	1895年3月2日	「進軍命令を受けた歩兵中隊司令部の将校」	肖像画	「g.Bigot 1894」(手書き)	「我が日本軍従軍特派員の写生画」
㉖	1895年3月2日	「進軍命令を受けた第10歩兵連隊の兵士」	肖像画	「g.Bigot 1894」(手書き)	「我が日本軍従軍特派員の写生画」
㉗	1895年3月9日	「日本軍が中国俘虜を護送する途中」	A3ほど	「g.Bigot」(手書き)	「我が日本軍従軍特派員が描いたスケッチの複写」
㉘	1895年3月16日	「日本軍軍夫の点呼及び食料の配給」	A3ほど	「g.Bigot 1894」(手書き)	「我が日本軍従軍特派員が描いたスケッチの複写」
㉙	1895年4月13日	「いざ出陣：家族に別れを告げる日本軍兵士」	A4ほど	「陸軍将校 妻子別● 美好画」 「g.Bigot 95」(手書き) 「Meisenbach」(活字)	「日本にいる我が特派員が描いたデッサンの複写」
㉚	1895年4月13日	「東京の街頭の光景：中国居留民を嘲る日本の子供たち」	A4ほど	「g.Bigot」(手書き)	「我が日本軍従軍特派員が描いたスケッチの複写」
㉛	1895年4月13日	「広島で騎兵の馬をおろす日本兵士たち」	A4ほど	「g.Bigot Hiroshima 1895」(手書き)	「我が日本軍従軍特派員が描いたスケッチの複写」
㉜	1895年4月20日	「東京の中国人捕虜：日課の散歩」	A4ほど	「美好画」「g.Bigot Tokio 1895」(手書き)	「日本人と一緒にいる我が特派員が描いたスケッチの複写」

③③	1895年4月27日	「東京へ護送される中国人捕虜」	A4ほど	「g.Bigot ●● 1895年 tokio」(手書き)	「我が日本軍従軍特派員が描いたスケッチの複写」
<p>注1)『ザ・グラフィック』(早稲田大学中央図書館所蔵)及びTERRY BENNETT編『Japan and The Graphic ~ Complete Record of Reported Events 1870~1899』(Global Oriental, 二〇一一年九月)をベースに作成。</p> <p>2)記事名は、一部芳賀徹ほか編『ビゴア素描コレクション3-明治の事件-』(岩波書店, 一九八九年十月, 三十七~七十八)を参考している。</p>					

- 1.『日本史大事典』第四卷,平凡社,1993年8月18日,p.1089。
- 2.「外国新聞記者の従軍」、『国民新聞』,1894年9月13日
- 3.『ジョルジュ・ビゴー展:碧眼の浮世絵師が斬る明治』,東京都写真美術館,2009年
- 4.清水勲主宰『風刺画研究』1～55号,臨川書店,1992年1月～2010年1月。
- 5.具体的な紹介は、以下検討の中で取り上げる。
- 6.拙稿では、『ザ・グラフィック』の復刻版及び TERRY BENNETT 編の『Japan and The Graphic ~ Complete Record of Reported Events 1870~1899』(Global Oriental, 2011年9月)両方に収録されたビゴーの報道画を考察の対象としている。
- 7.大谷正、福井純子『描かれた日清戦争——久保田米僊『日清戦闘画報』影印・翻刻版』,創元社,2015年7月20日, pp.437～438。
- 8.先行研究に関する具体的な考察は、第三節において行うことにする。
- 9.JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B07091015800、日清戦役ノ際外国新聞記者戦況視察ノ為従軍願出一件(5-2-11-0-4)(外務省外交史料館)より。
- 10.C・E・フリップは、全名 Charles Edwin Fripp であり、イギリス水彩協会に所属した絵師である。日清戦争以前の従軍歴は以下のようになっている:
請願者ハ千八百七十八年ノ「カフイル」戦争、千八百七十九年ノ「ズール」戦争、千八百八十一年ノ「ボール」戦争、千八百八十五年ノ「スーダン」戦争ノ際モ「グラフィック」新聞ノ為メニ戦場ニ出張シ(後略)
(JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B07091017700、日清戦役ノ際外国新聞記者戦況視察ノ為従軍願出一件(5-2-11-0-4)(外務省外交史料館)より)
- 11.「英國の新聞社畫工を朝鮮に派遣す」、『時事新報』,1894年8月21日
- 12.この記事は清水勲『ビゴーの150年——異色フランス人画家と日本』(臨川書店,2011年9月,p.137)の訳文を引用している。
- 13.「仁川近事」、『朝日新聞』(聞蔵Ⅱ),1894年9月25日より
- 14.『イラストレイテド・ロンドンニュース』(The Illustrated London News)は、『ザ・グラフィック』の競争紙で、当時イギリスの有力な画報紙である。
- 15.「仏国「フヒガロ」及「イリエストラーション」新聞社通信員「フェルナンガ子スコ」帝国軍隊ニ随後ノ件(許可)」, JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B07091016900、日清戦役ノ際外国新聞記者戦況視察ノ為従軍願出一件(5-2-11-0-4)(外務省外交史料館)より。同資料では、申請書そして外務大臣子爵陸奥宗光、陸軍大臣侯爵西郷従道代理陸軍次官児玉源太郎、神奈川県知事中西健明などによる手書きの書類が見つかった。
- 16.『諷刺画研究』第10号(1994年4月20日, pp.2～6)において、清水がビゴーとガネスコが同一人の可能性について論じていた。一方、『ジョルジュ・ビゴー展:碧眼の浮世絵師が斬る明治』(及川茂編,p.73,2009年)においては、「ガネスコは実在の人物で、東南アジアを拠点とするジャーナリストである」と提示し、「1905年にはサイゴンで『ジャボンネット』(小さい日本娘)という題で、『日本におけるショッキング』の再版も出している」と、同一人説を否定していた。
- 17.「釜山通信(十日發)」、『国民新聞』,1894年9月16日より。
- 18.「京城別信(九月五日發)」、『国民新聞』,1894年9月16日より。
- 19.大谷正「日清戦争と従軍記者」、『日清戦争と東アジア世界の変容 下巻』,1997年9月20日
- 20.前掲『ビゴーの150年——異色フランス人画家と日本』(臨川書店,2011年9月)より。
- 21.写真帳は、現在国立歴史民俗博物館に所蔵されている。
- 22.清水勲「ビゴー『日清戦争写真帳』」、『風刺画研究』16号, pp.1～9。

-
- 23.「美好」は、ビゴアの漢字の名前だと思われ、作品の署名にも使われた場合がある。
- 24.ほかに、129 番と 175 番という金州の二枚で、ビゴアに似たような姿がみかけられるが、撮影の距離が遠く、写真自身もぼやけているため、本人だと断定できない。
- 25.写真帳のサイズは、国立歴史民俗博物館で掲載された情報を参考している。
<http://nihudb.chikyu.ac.jp/infolib/GlobalFinder/pub/dbInformation>, 2015 年 8 月 20 日取得。
- 26.鈴木経勲は、『扶桑新聞』の従軍記者として、知人からコダックカメラを借りて戦場取材を行い、とれた写真は約 6×9 センチでわりと小さいものだという(井上祐子『日清・日露戦争と写真報道：戦場を駆ける写真師たち』,吉川弘文館,2012 年 7 月,pp.59～61 より)。
- 27.浅井魁一は、浅井忠の従弟であり、『時事新報』の特派カメラマンとして戦場に赴いた。日清戦争後には二つのバージョンの『日清戦況写真帖』27を出版し、二冊には同じような写真もみかけられ、それぞれ違うものも見つかっている。
- 現在靖国偕行文庫に所蔵された一冊は、朝鮮戦場で起きた戦事を追跡したような形で戦地順に写真を配置していたが、それに対し高石市で所蔵された一冊は、中国戦場の写真を取り入れたが、配置の順番はまだはっきり判別できない。
- 前川公秀「もうひとりの浅井」,『佐倉市史研究』第 16 号,2003 年 3 月,pp.76～91、前川公秀「写真家 浅井魁一と日清戦況写真帖」,『佐倉市史研究』,2011 年 3 月,pp.62～74 を参考。
- 28.前掲『ビゴアの 150 年—異色フランス人画家と日本』,臨川書店,2011 年 9 月より。
- 29.ここでは、靖国偕行文庫に所蔵された写真帳の方を参考している。
- 30.本稿は、国立歴史民俗博物館の承諾の下で、写真帳のメモ写真を提示している。
- 31.そのほか、旅順港の遠景写真と近い角度で撮ったものも、陸軍測量部の『日清戦況写真』でみかけられる。長南政義ほか編『日清戦況写真』(2013 年 3 月,国書刊行会,p.40)を参考。
- 32.同じ地点で二枚以上撮った写真を以下の 9 組になっている:
- | | | |
|---------------------|---------------------|-------------|
| 10 番と 18 番 | 11 番と 63 番 | 19 番と 67 番、 |
| 22 番と 70 番 | 34 番と 198 番 | |
| 61 番と 195 番(ぼやけている) | 71 番と 196 番(ぼやけている) | |
| 113 番と 115 番と 149 番 | 129 番と 175 番 | |
- 33.前掲『日清・日露戦争と写真報道—戦場を駆ける写真師たち』,pp.10～26。
- 34.木下直之「朝鮮風俗」,『別冊太陽 ビゴアが見た世紀末のニッポン』,平凡社,1996 年 10 月, p.97。
- 35.ビゴアがフランスの子爵デュ・ラブリエにも戦争写真帳を献上していたが、その中の写真はほとんどビゴア私蔵写真帳にも所蔵されている。その比較は今後の課題として考察していこうと思う。
- 36.前掲『別冊太陽 ビゴアが見た世紀末のニッポン』,pp.78～81。
- 37.ビゴアは来日初期(1883～1884 年)に、『あさ』、『おはよ』,そして『また』を出版していたが、いずれも様々な職業や身分を持つ日本人の姿を内容としている。
- 38.前掲清水勲『ビゴアの 150 年—異色フランス人画家と日本』,p.62 より。同書によると、来日以前のビゴアは、写実主義の代表者ドーミエの作品から影響を受け、「そこから社会や人間を見る目を養い」、「時局風刺漫画もドーミエからヒントを得た」と考えられている。
- 39.京都市美術館,北海道立近代美術館,そごう美術館編『ボストン美術館展 19 世紀フランス絵画の名作』,京都新聞社,1989 年,p.89。
- 40.『朝野新聞』,1886 年 12 月 1 日より。
- 41.『The Graphic』という名で刊行された期間は 1869～1932 年である。
- 42.TERRY BENNETT 編『Japan and The Graphic ~ Complete Record of Reported Events

1870~1899』, Global Oriental, 2011 年 9 月。

43.筆者意識、下同。

44. Hugh Corrazi 「HISTORICAL PERSPECTIVES -THE GRAPHIC- FROM THE MEIJI RESTORATION TO ENDING OF THE UNEQUAL TREATIES」, 前掲『Japan and The Graphic ~ Complete Record of Reported Events 1870~1899』, xii~xvi)

45. 日清戦争が終わった以降でも、両国の軍隊などに関する報道画が掲載されていた。

46. 日清戦争に対して、『ザ・グラフィック』では「遠東の戦争」(「THE WAR IN THE FAR EAST」)から、「東方の戦争」(「THE WAR IN THE EAST」)、「朝鮮における戦争」(「THE COREAN WAR」)、さらに「黄色人種の戦争」まで、さまざまな呼び名がみかけられるが、全体的にいうと、「東方の戦争」が最も使われた呼称である。

47. それぞれ「平壤での小競り合い: 中国軍の拠点に急襲」(1894 年 12 月 1 日)、「鴨緑江渡河後、中国軍陣地を攻撃する佐藤大佐指揮下の日本軍歩兵」(1895 年 1 月 5 日)という二枚である。

48. ビゴアのサインが確認できた 33 枚に関して、サインの仕方もそれぞれ異なっている。年代と場所が明記したものもあり、名前しか記していない絵も見かけられる。

その中で「7□」のようなサインがついた絵は、「朝鮮における処刑の方法: 釜山の警察官にムチ打たれる泥棒」(1894 年 10 月 27 日)などの何枚に見かけられる。年代の前に書かれた文字「7□」は、「7bre」の可能性が大きく、つまり、編集者は同じ時期のビゴアの投稿絵を分散して、それぞれ違う日に掲載した可能性がある。

49. 軍服に関する説明は、下記の資料を参考している:

太田臨一郎『日本の軍服』、国書刊行会発行、1979 年 3 月

笹間良彦『図鑑 日本の軍装』(下巻)、雄山閣出版、1969 年 10 月

50. そのほか、「10」番の襟章が付いた兵士が最も多く描かれ、「平壤での戦闘後: 戦場の一角」(1894 年 10 月 27 日)などの三枚ほどが見つかっている。前掲の写真帳の四十七番の写真にも、「10」番の襟章が付いた兵士も見かけられる。「10」は歩兵第十連隊を意味した可能性があるが、一方、部隊経歴書(「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C06061741400、明治二七、八年「各部隊経歴書」(防衛省防衛研究所)」)によると、この連隊は朝鮮に行っていないことがわかる。襟章だけでは部隊を特定しがたいとわかる。

51. 大谷正『兵士と軍夫の日清戦争: 戦場からの手紙をよむ』、有志舎、2006 年 5 月 30 日, pp.55~60。

52. 「軍服」, 『国民新聞』, 1894 年 9 月 3 日より。

53. 「釜山近傍の韓民」, 『国民新聞』, 1894 年 9 月 3 日より。

54. 清水勲『ビゴア日本素描集』、岩波文庫、1986 年 5 月 16 日, p.102。

55. 清水勲「ビゴアの輪郭—7」, 前掲『ビゴアの 150 年—異色フランス人画家と日本』, pp.247~249。

56. 『写真装置 戦争の写真史』5, 写真装置舎、1982 年 6 月 25 日, pp.73~81。

57. 木下直之「ビゴアの戦場スケッチ」, 『別冊太陽 ビゴアが見た世紀末のニッポン』, 平凡社、1996 年 10 月, pp.88~89。

58. そのほか、前掲した『戦国写真画報』の写真をベースにした報道画もあり、そして、写真帳の写真を一部だけ引用した報道画もある。

59. 「浅草東本願寺の俘虜に就て」, 『朝日新聞』聞蔵Ⅱ, 1895 年 1 月 5 日。

60. 幅亮子「日清戦争における清国兵捕虜について—捕虜に対する日本の対応を中心に—」, 名古屋大学大学院修士学位論文、2008 年度。

61. 芳賀徹ほか編『ビゴア素描コレクション 1—明治の風俗—』、岩波書店、1989 年 6 月, p.153。

-
- 62.山田千秋『日本軍制の起源とドイツ・カール・ケッペンと徴兵制および普仏戦争（明治百年史叢書）』,原書房,1996年3月,p.217。
- 63.清水勲訳「本邦初訳『ショッキング・オ・ジャポン』(1) F・ガネスコとG・ビゴー著・挿画」,『諷刺画研究』第18号,1996年4月20日,pp.1~4。
- 64.片寄未嗣「ビゴー「現代日本」に内在する諷刺パワー」,『諷刺画研究』第十二号,1994年10月20日,p.7。
- 65.芳永桜香「ジョルジュ・ビゴーの風刺画における「日本」像」,『千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』213号,2011年2月28日,pp.86~97。
- 66.芳賀徹ほか編『ビゴー素描コレクション 2-明治の世相-』,岩波書店,1989年10月,p.153。
- 67.一方、『トバエ』が明治22年末まで3年間、ほとんど欠号もなく69号まで刊行されたのは、在日フランス人の資金援助があったからだと思われ、『トバエ』の主張はフランス人たちの主張でもあったのであろう」との推測もある。前掲『ビゴーの150年——異色フランス人画家と日本』,p.97。
- 68.芳永桜香「ジョルジュ・ビゴーの風刺画における『日本』像」,千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 第213集,2011年2月28日,pp.86~97。
- 69.前掲『トバエ』の全体像」pp.158~169より。
- 70.『横浜フランス物語 文明開化あ・ら・かると』,産業技術センター,1889年2月5日,pp.189~191。
- 71.『トバエ』第20号,1887年12月。
- 72.『朝日新聞』(1886年9月14日)の「長崎事件」において、このような記事が見ついている:
- 此談判のため来港せし彼のドラモンド氏が今回の事件に關し清國政府に雇聘中は日當一日百兩なるよしなるが、壹兩壹圓三十五錢換とすれば、即一日々當百三十五圓十日にて千三百五十圓なり(中略)同氏のためには今回の事件こそ誠に福の神ならめ。
- つまり、当時の調停を担当した欧米人がかなり高い報酬をもらっていたのである。
- 73.管見の限り、年代順に木下直之「ビゴーの戦場スケッチ」、「従軍画家が伝えるもの」(清水勲編『別冊太陽 ビゴーがみた世紀末ニッポン』,平凡社,1996年10月25日,pp.88~93)、福永知代の「久保田米僊の画業に関する基礎的研究(2) 久保田米僊と日清戦争—『国民新聞』におけるルポルタージュを中心に」(『お茶の水女子大学人文科学紀要 第57巻』,pp.33~49)、大谷正の「日清戦争報道とグラフィック・メディア」(『メディア史研究』第21号,ゆまに書房,2006年12月15日,pp.1~19)、大谷正,福井純子編『描かれた日清戦争: 久保田米僊『日清戦闘画報』影印・翻刻版』(創元社,2015年7月22日)などが見つかっている。
- 74.前掲「もうひとりの浅井」,『佐倉市史研究』第16号,2003年3月,pp.76~91。
- 75.『国民新聞』,1894年10月16日、19日に掲載された記事より。
- 76.内容によって絵が重複して現れる場合もある。
- 77.括弧の中の番号は、表6の報道画の番号と対応している。
- 78.加藤陽子『徴兵制と近代日本 1868-1945』より(pp.45~139)。同書によると、免役条項の廃止は、「ドイツ人軍事顧問メッケルが主唱したもの」で、「学力ある上流の人々が軍隊に入ることは、兵役を賤役視する傾向の打破にもよい影響を与えうると考えた」からだという(pp.83~84)。
- 79.前掲大谷正『兵士と軍夫の日清戦争 戦場からの手紙をよむ』,pp.38~74。
- 80.前掲「ビゴーが撮った日清戦争」,『別冊太陽 ビゴーがみた世紀末ニッポン』より。
- 81.報道画の掲載日付は表三にまとめられたため、本文では、報道画のタイトル、表でつけ

られた通し番号「数」、そして掲載の図番号「図●」だけを提示することにした。

- 82.宗澤亜『清日戦争』,北京連合出版公司出版,2014年6月,p.533。
- 83.前掲『ビゴーを読むー明治レアリズム版画 200 点の世界ー』,p.122。
- 84.清水勲『ビゴーが見た明治職業事情』,講談社,2009年1月8日,p.106。
- 85.前掲大谷正『兵士と軍夫の日清戦争:戦場からの手紙をよむ』,pp.38~74。
- 86.『ショッキング・オ・ジャポン』の訳文は、清水勲訳「本邦初訳『ショッキング・オ・ジャポン』(1) F・がネスコと G・ビゴー著・挿画」(『諷刺画研究』第 18 号,1996 年 4 月 20 日)の訳文を引用している。下同。
- 87.訳文は、芳賀徹ほか編『ビゴー素描コレクション3ー明治の事件ー』,岩波書店,1989 年 10 月,pp.37~78 を参考している。
- 88.宮内彩希「日清戦争における朝鮮人人夫の動員」,『日本植民地研究』第 22 号,2010 年, pp.53~69。
- 89.前掲清水勲『ビゴーの 150 年』,pp.68~70。
- 90.この時期では、条約改正による領事裁判権の失いを恐れ、ビゴーが将来の日本の生活に不安を抱えたようである。この何枚は彼の不安を反映した作品ともいえる。
- 91.前掲清水勲訳「本邦初訳『ショッキング・オ・ジャポン』(1) F・がネスコと G・ビゴー著・挿画」より。
- 92.及川茂『フランスの浮世絵師ビゴー』,木魂社,pp.44~45。

第四章 中国東三省を旅した夏目漱石の眼差し

～新聞掲載紀行「満韓ところどころ」から～

はじめに

日清戦争が終結すると、反中熱は一時冷えていた。一方では、戦争報道の延伸として、新聞雑誌に掲載された戦争体験録などが、戦争の再現を果たし、繰り返し中国観を強固にする役割を担っていた。日清戦争の戦勝によって、日本は国際評価に対する意識が強くなっていた。

日清戦争の6年後、北清事変(中国では「義和団運動」と称している)が起こり、中国が再び耳目を集めた。当時では日本はヨーロッパ諸国と八カ国連合軍を組成し義和団の鎮圧に参加した。その中から、日本の軍事力を世界に発信しようとした意図もうかがえる。また、日露戦争で勝利した以降、日本はロシアから中国遼東半島の租借権から東清鉄道南部の利権を獲得し、満州鉄道会社(以下は「満鉄」と略称す)を設立した。植民地での経営を行いつつ、欧米諸国に向けて満鉄を宣伝する動きもみられた。

もう一方、戦争が日本社会にもたらした大きな影響に直視し、知識人の中で戦争に対する反省の論調も台頭した。一つの例として、日清戦争の開戦を支持した内村鑑三は、日露戦争になると大きく非戦論を掲げはじめていた¹。戦争観の転換に従って、中国に対し客観的な態度を呼びかける論調も現れていた。

このような時代背景のもとに、夏目漱石は日露戦争の終結した五年後(1909年)、満鉄が所在した中国の東北地域そして朝鮮に旅立っていた。漱石を旅行に勧誘したのは、まさに満鉄の新任総裁である中村是公という人物である。彼は台湾総督府民政局事務官、満鉄会社の副総裁を歴任し、先代の総裁である後藤新平の推薦によって、1908年末に総裁に就任した²。

夏目漱石と中村是公の関係というと、二人は1884年九段坂上の下宿で出会い、予備門時代の共同生活を経て親交を結んでいた。帝国大学の卒業後はそれぞれ別の生涯を歩んでいたが、イギリス留学の時期に漱石は是公と偶然に再会していた。

漱石が旅行した1909年は、友人が初代総裁後藤新平の後継として二代目総裁の位置に着いた直後だけでなく、1907年から東北三省において不景気が続く中で、満鉄内部が大規模な改革を迎えた時期でもある。また同時期における中国国内の動向というと、1909年前後は、利権回収運動が活発になった時期である。

この時期で漱石が旅たち、そして帰国後で紀行文「満韓ところどころ」(以下満韓と略す)を

『朝日新聞』に掲載した。「満韓」に対する評価は、発表当時から現代の研究までも賛否両論の状態であるが、漱石はこの紀行文によって、一体どんな眼差しで中国に存在した満鉄を観察し、どんな角度から中国そのものを捉えていたのか。

本稿は、漱石の旅程を考察し、そして「満韓」で描かれた日露戦争後の中国を検討する。先行研究の論述をまとめる上で、「満韓」の内容を

①満鉄、戦跡めぐり(中国大陆で生きる日本人も含め)

②中国そのもの(満鉄の中で生きる中国人、近代中国の国際関係、中国人そのもの)

の二部に分けて、同時期の新聞報道と結びつきながら、具体的な分析を試みる。

第1節 旅行の経緯及び紀行文「満韓ところどころ」について

漱石の日記のなかでは、1909年3月から8月にわたって中村是公に対する言及がみられる。その内容は、是公から中国やロシアなどからの土産物をもらったこと³や、是公の紹介で満鉄の重役や『満州日々新聞』の編集者と会見したり連絡を取ったりすること⁴などである。「満洲に新聞を起こすから来ないか」⁵とのように、日記から是公が漱石を満洲の新聞事業に誘う意図が読み取れる。

初代の満鉄総裁後藤新平が在任した1907年に、満鉄では『満洲日日新聞』が創刊された⁶。実際、発足した当初の満鉄事業は、資金不足など様々な問題を抱えていた。投資の誘致や人材の招致の計画を進めるには、まず満鉄の認知度を高めることが必要だと考えられていた。日本国内から欧米諸国へ向けての発信が急務となり、その取り組みの一つは『満州日日新聞』の発行だと思われる。「内外ニ対し満洲ヲ紹介」という方針⁷は、まさに外へ発信する意図を示している。

一方、1909年の時点で漱石を主筆に招聘しようとしたのは、欧米人への正式な発信を試み、英字新聞『マンチュリア・デーリー・ニュース』を発刊するためだと考えられている⁸。それに対し、漱石の反応は「不得要領」、「返事に困る」ようで、主筆の件を棚上げにしていた。返答が不明確のままで、漱石は満洲の旅行を承諾し、同年の9月から中国へ旅たった。

「満韓」及び漱石の日記を参考にし、中国における漱石旅程を以下の図89に示した⁹。

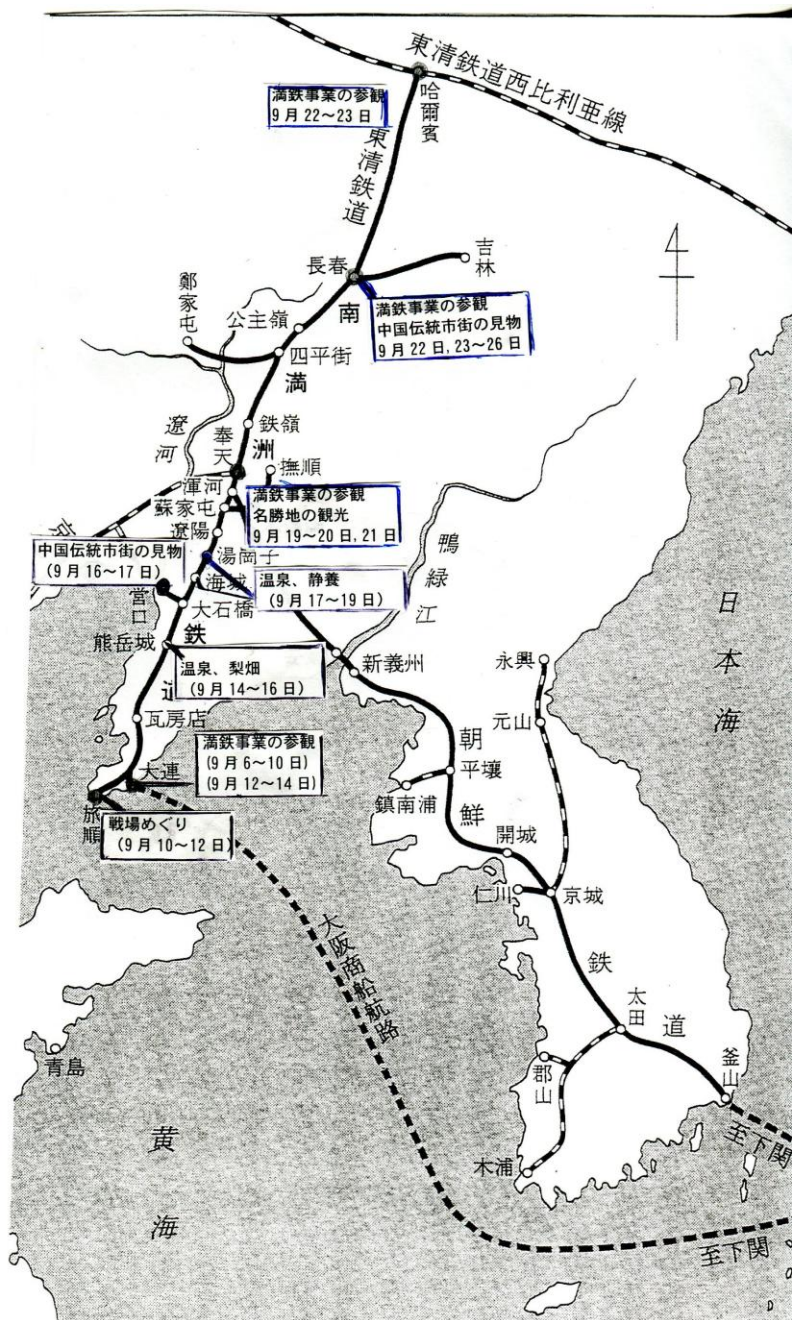


図 89 漱石の満韓旅程について

注)

1. 「満韓」及び日記¹⁰の記述を参考にし、『漱石全集』第十二巻の注解¹¹で提示された地図をベースに作成。
2. 上記の地図で注記した日付は、移動の期間を含めて推定したものである。
3. 上記の地図で注記した「満鉄参観」は、満鉄会社が運営した営利事業、付属地の建設など事業全般の参観を含めている。

以上のように、漱石は満鉄の拠点となる大連から、長春、ハルビンさらに安東県まで北上した路線で旅行していた。その路線は、まさに満鉄が運営した鉄道路線と一致している¹²。

満鉄総裁による招待旅行なので、漱石は旅行中で満鉄上層部の人と多く接触していた。そのなかでは、漱石と同じく帝国大学出身の人物が数多くみられる¹³。高級の招待を受けつつ、旧知との親交も温められたことから考えると、漱石の旅行は「大名旅行」とも言えよう。その一方、胃病を抱えつつ決行されたこの旅行は、どうも強行軍のようだ¹⁴。図 89 で示した日付、また日記の記述から考えると、各地での滞在が非常に短く、それに加えて満鉄参観の日程もいっぱい詰め込んでいた。1 日くらいの静養を挟みながら、漱石の旅行はほとんど参観¹⁵と移動で占められている¹⁶。

旅行の体験をまとめ、漱石は帰国後の 10 月から紀行文「満韓ところどころ」(総計 51 篇)を『朝日新聞』に発表した。掲載が終えた翌年、「満韓」は単行本『四篇』¹⁷にまとめて発表されていたが、独立の作品として製本出版には至らなかった。それで、本稿は『東京朝日新聞』¹⁸で掲載された「満韓ところどころ」(以下「満韓」と略称す)を考察対象として取り扱う。

『東京朝日新聞』において、「満韓」の掲載期間は 1905 年 10 月 21 日から 12 月 31 日となっている。そのなかで、一週間ほどの休載が二回挟まれ、一回目は 1909 年 11 月 1 日(第七篇のあと)から 11 月 8 日の間で、伊藤博文の暗殺事件によったものと判明している¹⁹。そして、二回目は 11 月 23 日(第 23 篇)から 11 月 30 日(第 24 篇)の間であり、その理由は「はじめに渡した二十三回分がそこで終わったため」だと考えられ²⁰、また漱石主宰の「朝日文芸欄」(『朝日新聞』の第三面²¹)の新設による可能性も推測できる²²。

「満韓」の内容から考えると、漱石はすべての旅行体験を紹介したわけではない。「満韓」は 12 月 30 日で掲載を停止し、紀行文の内容は朝鮮旅行の紹介に至らなかった²³。そして、日記の記述では、満鉄参観に関する記録は最後まで続いていた。それに反し、「満韓」における満鉄事業の記述は、(一)から(三十)篇に集中し、最終篇(五十一)における撫順炭鉱の話を除いて、(三十一)から(五十)篇のなかではほとんど満鉄に言及していなかった。また、中国関係の記述は、前半より後半の 20 節で内容の増幅がみられる。

旅行内容の取捨も明らかで、休載も多い「満韓」に対し、その評価も芳しくないものが多い。掲載当初で同社社員の長塚節²⁴が批判したことはともかく、小宮豊隆は「是は当時誰かが『満韓ところどころ』ではなくて『漱石ところどころ』であると言ったかに記憶する。それほど是は、人人の予期に反して、満韓の自然そのものよりも、満韓にいる人間—もつと厳密に言ふと、満州で会った自分の旧友の噂で持ち切紀行文であった」との評価もみられている²⁵。

また、「満韓」で頻出した「チャン」や「露助」などの文章表現は、現在に至っても問題として先行研究で繰り返し議論されている。

ここで具体的に先行研究を整理してみると、「満韓」で反映された中国観に批判的な論調をとった研究として、1990年代以前では、中野重治の『漱石について』²⁶などがあり、中国人を「チャン」などの呼び方から反映された帝国主義、植民主義の側面を批判していた。

また90年代以降における批判的な論説という、崔明淑は「夏目漱石『満韓ところどころ』—明治知識人の限界と「朝鮮・中国人」像」²⁷において漱石を「帝国主義的な限界に囚われた明治知識人」と批判し、朴裕河は「「インデペンデント」の陥穽—漱石における戦争・文明・帝国主義」また『ナショナル・アイデンティティとジェンダー 漱石・文学・近代』²⁸において、漱石がイギリスに対する驚嘆な姿を「発展至上主義的近代主義」と解釈し、当時中国、朝鮮の衛生問題で、日本との差異を意識する点は、「差別意識」に結びつけられ、またこの意識は「日本の帝国主義を支えたものでもあった」と指摘している。

一方、以上の「満韓」批判を再検討したり、または反論したりした研究も少なくない。1990年代以前では、竹内実が『日本人にとっての中国像』²⁹では、漱石の「おそろしいまでのリアリティ」を論じ、中野重治の論説について漱石が帝国主義や植民主義にしみたことについて「プラスの面とマイナスの面の解明」が必要だと論じていた。

そして、相馬庸郎は「漱石の紀行—「満韓ところどころ」論」³⁰において、「チャン」などの表現は諧謔的、写生文的な手法だと論じ、伊豆利彦は「「満韓ところどころ」について—上—漱石におけるアジアの問題」³¹において、漱石が「西欧のアジアに対する「帝国主義的優越感」に対して強い反感を示した」が、「日本のアジアに対する植民地支配には鈍感」だということから、彼の時代的な限界を示したが、文学者の身分について肯定的に論じていた。

また90年代以降では、吉田真は「夏目漱石『満韓ところどころ』論」³²において、「満韓」を執筆した漱石は、「〈帝国主義的な「感受性」〉を持たざるを得ないように歴史的な構造の力〉の中に確かにまきこまれている」と認めた一方、「自身の中にある、そして当時のほとんどの日本人の中にあつた〈帝国主義的な「感受性」〉を見据え、批判的に暴き出そうと」したことを示した。そして、黒田大河は「「満韓ところどころ」論—「余」という語り手の感性」³³において、朴裕河の論述を批判し、「同時代的限界を指摘するこの批判は漱石の『真意』を見出そうとする評価と鋭く対立し」たと論じていた。

さらに、青柳達雄は『満鉄総裁 中村是公と漱石』³⁴において、中村是公の紹介に重心を置きながら、その中で漱石が是公ないし満鉄との関わりを詳しく考察していた。そして「満韓」に

については、漱石がリアリティの姿勢を貫いて中国を描いたと論じていた。その描写は「差別とか侮蔑といった次元を超越した」もので、漱石の「人間の実存と歴史に対する深い洞察力」を評価した。

また、2000 年以降の論説を取り上げると、二宮智之は「『満韓ところどころ』と漱石の中国観」(上、下)³⁵において先行研究をまとめながら、漱石のイギリス留学時代からの日記や書簡を考察し、また同時代の満韓言説「満韓私語」と対照しつつ、「満韓」に対する読み直しを行っていた。漱石は中国人や朝鮮人との直接的な交流がないことを示し、漱石の中国描写は「無自覚な『インペリアリスト』の域を出ない」と指摘した。

さらに、水川隆夫は『夏目漱石と戦争』³⁶において、漱石の戦争に対する姿勢、彼の中に存在した「個人主義」について具体的に考察していた。『満韓』においてクーリーを「不体裁」などの表現は「生命力と生活力を親愛感や感嘆の念をこめてユーモラスに描くつもり」だと論じている。

以上をみてきたように、「満韓」から反映された中国観について、評価は今でも賛否両論の状態である。また今まで各研究において「満韓」に対するアプローチまとめてみると、は主に、

- ①漱石個人の経験(イギリス留学、従軍忌避等)、人間関係；
- ②漱石の文学作品全般また日記、手帳；
- ③満鉄招待の経緯、満鉄内部の状況

を参考して論説を展開したものが多く、「満韓」を掲載した『朝日新聞』自身に対する参照が非常に不足だと感じられる。漱石の日記や手帳は有力な参考資料ではあるが、その内容は主に旅行のスケジュールを記述したもので、中国に対する直裁な感想がほとんど記載されていなかった。そのため、日記以外に同時期の新聞記事を参考する必要性がみられる。

青柳達雄は『満鉄総裁 中村是公と漱石』において提示したように、当時『東京朝日新聞』の主筆を勤めた三山は、「海外通信の拡充をはかるさまざま企画を出して」いた。実際、1909 年前後では、満鉄視察を行う記者、または中国東北三省を旅行した記者が多く、漱石と同じ時期で『東京朝日新聞』に満韓の紀行文を発表した記者さえ存在していた。そのため、『朝日新聞』の記事と対照することは非常に意味を持つとみられる。

そして、「満韓」で描かれた中国に対する考察は、多くの場合「満韓」から中国関連の記述を抽出し、満鉄及び戦跡巡りの内容と分離した形で行われてきた。また一部の研究では、中国に対する言語表現だけを対象にして分析を行っていた。

一方、満鉄参観や戦跡巡りは、当時の中国本土で行われたものであり、当時では満鉄で勤

めた中国人労働者も多く存在していた。それで、満鉄と日露戦争の戦跡は、近代中国の一面を反映したといえよう。「満韓」の描く中国を検討する一環として、戦跡及び満鉄に対する考察も取り上げる必要が思われる。

そのほか、漱石は日露戦争後に旅立ったことも無視できない。戦後という時代の特殊性を考え、前述した新聞検閲条例や、同時期における満鉄事業の状況だけでなく、中国の国内の動向(利権回収熱)を分析する必要も考えられる。

そこで、本稿の検討方法を提示する前に、まず前文の補足として同時期における満鉄の状況及び中国の動向とについて、少し詳しく述べておきたい。前述のように、日露戦争後、日本はロシアから中国遼東半島の租借権から東清鉄道南部の利権を手に入れた。満洲鉄道会社は新たに設立され、営利会社として運営されはじめた³⁷。

満鉄事業は、「誰も資金を携えて来て開拓に従事する者」もなく、公称二億円の資本が実際「わずか二百万円の現金」しか募集できなかった現実で発足したのである³⁸。資本金の欠乏に反し、初代の総裁である後藤新平は「大風呂敷」な建設計画を構想していたという³⁹。

1908年の7月、日露の鉄道貫通の交渉を進めた途中で、後藤が総裁の職から離れて、第二次桂内閣の通相として入閣した：

(前略) 後藤卿の如く満鐵總裁に適任者として天下に認めらるゝ人は殆ど他には之なきを以てなり…後藤卿は曩に病餘の軀を驅りて露國に入り、露國に對する聯絡妥協の先容だけにても之を完くすることを勉めたるなれ。やがて更に清國に赴き、支那本部との聯絡事宜をも謀らんとする由なりしが、折悪くも其入閣談の方が聯絡談よりも早く纏まり、内閣の仕合せが満鐵の不仕合せなり(後略)

(「満鉄連絡事宜」,『東京朝日新聞』,pp.1908年9月20日)

その中で、後藤は満鉄内部における各派閥の反対を押し切って、是公を総裁の位置に薦めた。「後藤卿の如く満鐵總裁に適任者として天下に認めらるゝ人は殆ど他には之なき」という後藤に対する高い評価や、各派閥の反対の声に直面し、また鉄道貫通交渉が進む途中で就任した是公は、外部から強い圧力が想定できる。

それだけでなく、総裁の交代を迎えた1908年から1909年は、東三省の経済状況がまだ不景気の時期にあり、満鉄事業も様々な問題を抱えていた。具体的にいうと、鉄道及び周辺事業の所有権問題、安奉線問題⁴⁰、地域の安全(馬賊)や腐敗の問題、さらに満鉄事業の問題

も挙げられる⁴¹。それを受けて、是公は 1908 年末から満鉄内部の改革を推進しつつ、外部との交渉も行っていた。つまり、漱石が旅行した 1909 年前後は、まさに是公が多忙を極めた時期に当たっていた。

そして、同時期中国内部の動向に目を向けると、当時では利権回収熱が起きていた。東三省における満鉄の回収も中の一環となり、それに伴って満鉄事業に対し抵抗活動も頻繁に行われていた。『東京朝日新聞』では、「在東京清國留學生の決議に係るボイコット」など、関係の報道もよく『朝日新聞』の紙面で確認できる。

以上の時代背景を参考にし、本稿は前掲の先行研究を踏まえて、「満韓」で描かれた中国を満鉄参観・戦跡めぐり、そして中国そのものという二部分に分けて、それぞれ具体的に考察を行う。同時期の『朝日新聞』の記事と漱石の「満韓」を対比し、「満韓」の位置付けや漱石の中国に対する論調を分析していく。

第 2 節「満韓」で描かれた満鉄の諸相及び戦跡めぐり

2.1 「満韓」からみる漱石の満鉄「視察」

漱石の妻夏目鏡子の回顧⁴²では、満韓旅行に関した話がみられる。1909 年当時、是公が漱石を中国に誘ったのは、「いろいろな風物を見せてやらうという思召し」がある一方、「人がよく知らない満鉄の事業や何かの紹介をやらせようという」考えも察知されていた。しかし、回顧のなかでは、漱石が「別に提灯持ちをする気はなかつた」という。

とはいえ、漱石は「満韓」の第一篇から、満鉄事業を「厩大なお茶代」を持つ所に例え、その「厩大な御茶代が宿屋の主人下女下男にどんな影響を生ずるかちよつと見たくなつた」と語り、紀行文のなかで満鉄関係を紹介することを予告した。

また、伊東貴之の「中国——漱石の漢籍蔵書を見てわかること」⁴³によると、漱石の蔵書のなかでは、統監府鉄道管理局編『韓國鉄道線路案内』⁴⁴、統監府通信管理局編『統監府通信事業第二回報告(明治三十九年度下半期)』⁴⁵、また黒田甲子郎『満州紀要』⁴⁶など満鉄関係のものがあり、そのほか、紀行が休載した 2 年後に出版した『南満州写真大観』⁴⁷も見つかっていた。「その刊行年からしても、当該の旅程に先立って、その下調べを兼ねて購入したか、知人などから進呈されたものに相違ない」と推測され、漱石はある程度満鉄の情報を把握していたとみられる。

では満鉄会社の経営について、漱石はいかなる姿勢を以て観察していたのか。また、漱石

は果たして是公の期待した「満鉄の事業や何かの紹介」をうまく行っていたのか。

まず、「満韓」の記述を統計した結果(図90)、「満韓」の内容の中で、半数以上は満鉄関係または日本関係の景観を描いたことが判明した。

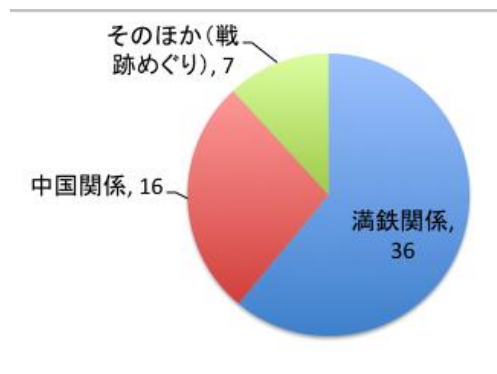


図90 「満韓」で描かれた各種の景観

文章の分量だけから考えると、いかにも期待に応えたような満鉄「視察」であった。ところで、漱石は具体的にいかに満鉄そして居留の日本人を紹介していたのか。本節では、『東京朝日新聞』の報道を参考にしながら、漱石が描いた満鉄を考察する。

まず連載の予告となった「満州の文明」(『東京朝日新聞』,1909年10月18日)、そして『満州日々新聞』で掲載された「満韓所感」(1909年11月16日)、そしてその内容を紹介する必要がある。

満韓を遊歴して見ると、なるほど日本人は頼母しい国民だという気が起こります。従ってどこへ行っても肩身が広くって心持が良いです。之に反してシナ人や朝鮮人を見ると、甚だ気の毒になります。幸いにして日本人に生まれていてよかったと思いました。

「満韓の文明」,『東京朝日新聞』,1909年10月18日⁴⁸

此の度旅行して感心したのは日本人は進取の気性に富んでいて、貧乏世帯ながら分相応に何処までも発展していくと云う事実と之に伴う経営者の気概であります。満韓を遊歴して見ると成程日本人は頼もしい国民だと云う気が起こります。…之に反して支那人や朝鮮人を見るとはなはだ気の毒になります。幸ひにして日本人に生まれて仕合せだと思います

「満韓所感(下)」,『満州日々新聞』,1909年11月16日

両方の記事において、日本人を「進取の気性に富」むことを評価し、「日本人に生まれて

仕合せだ」という感想を示していた。先進国の国民としての優越感を表出した表現として、前掲した先行研究でよく問題視されている。

確かに「シナ人や朝鮮人」を「気の毒」に評価したのは、多少先進国の姿勢があるようである。一方、漱石の旅行は是公からの招待、そして『満洲日日新聞』の主筆である伊藤からの勧誘によって成立していた。それで、英字新聞の主筆職を断ったかわりに、この記事が「頼まれた」可能性が強く、漱石の感想を忠実に表現したものと断言できない。ただ一つ留意すべきなのは、「貧乏世帯ながら**分相応**に何処までも発展していく」という表現である。

日露戦争後、日本では満州の移民熱が起きていた。しかし、その現実という、満鉄の職員として中国に赴任した日本人を除いて、移民を希望した一般民衆が「概ね薄資、射倖の徒か、浮浪者・醜業者」、いわば漱石が書いたような「貧乏世帯」が多かったのである。しかし、移民者の中では、「一時の奇利を博せん」⁴⁹という心理も普遍的に持っていて、それに関係した汚職事件も新聞のなかで報道されていた⁵⁰。それで、漱石自身も一定の認識を持ったと考えられる。

特に、前述した1907年から、満鉄事業に問題が次々と浮上し、現地の不景気が続いたなか、「内地に引上げるもの前後相踵」⁵¹いだ現象さえ起きていた。そこで、この現実に反した「分相応」という言葉は、いかにも風刺味深く感じられる。

満鉄の状況に話を戻すと、前述のように1907年からの「不景気」によって、関連事業における資金の運用も大きく注目され、「満鉄縮小説」さえ新聞紙で掲げられていた：

昨年来の不景気に満洲の日清人は皆閉息の状態なれば新市街の実現も近き将来に於て到底望みなきを以て今回病院ホテル學校等既に着手せしものを除き**積極的計畫は之を停止し且つ地方部の人員を淘汰するの方針なる由**

「満鉄縮小説」, 『東京朝日新聞』, 1908年9月16日

満鉄に「積極的計畫は之を停止」するほど、当時満鉄の経営は決して楽観的だといえない。そして、状況に対する措置として、1908年11月から是公が満鉄の改革を遂行していたが、新聞ではこのような紹介がみられる：

後藤總裁の大風呂敷徹せられ中村是公氏のジミ主義となり以来満鉄の縮小及び改革漸次歩を進め来り今回先づ第一着手として**理事の廃合を行ひ**後藤男の道楽仕事と

なり居りし調査部廃せられ岡松博士理事を退き(中略、ほかにも各部門の理事の辞退を報道)更に来年一月より従来本給の十割なりし社員手當を五割に減じ出張旅費の減額等にて一箇年七十五萬圓許りの節約を為す由

(「満鐵の改革」,『東京朝日新聞』,1908年11月6日)

以上から、改革の手段として、冗員の罷免や資金の節約などがみられる。改革は1909年の年初まで続き、その直後で漱石が旅行していた。改革の実績を日本国内ないし国際に発信する必要もあり、この意味で漱石の満韓旅行も大きく期待されたと想定できる。

一方、漱石は第十一篇で満鐵事業に関し、自分の態度を以下のように示していた：

已を得ず、鹿爪らしい顔をして、満鐵のやつてゐる色々な事業一般について知識を得たいと述べた。…述べる事の内容は、頗る赤毛布式に縹渺とふわついてゐたに違ない。

(中略)

余はまだ營業報告を開けないうちに、早速一工夫し斯云つた…縦覧すべき箇所を御面倒でも一寸書いて下さいませんか。

河村くんははあ左様ですかと、氣輕にすぐ筆を執つて呉れた。所へ何處からか突然妙な小さな男があらはれて、やあと聲を掛けた。(後略)

(十一)

回顧で話したように、漱石は満鐵経営に対する関心を「赤毛布式に縹渺とふわついていたに違ない」と例え、事業の経営に興味を示していなかった。そして、營業報告の要点を書いてもらって、その後に要点の紹介が続くべきだが、「突然妙な小さな男があらわれて、やあと声をかけた」と、漱石は巧妙に旧知との再会に話を移し、事業の説明をそらした。

この姿勢を参考にし、これからは、同時期の新聞報道と結びつき、「満韓」の全体的な内容から、満鐵事業、日本人居留民(満鐵の重役、一般居留民)に分けて分析を試みる。

まず、漱石が満鐵事業をどのように描いたのか。当時の満洲鉄道会社は、「本業たる鉄道のほか、鉄道貨物の委託販売、炭鉱、水運、電気、倉庫、土木建築業などを行うことはもとより、鉄道附属地内の地方行政を担当することとなっており、沿線を含む鉄道網を防衛するため、鉄道守備隊の配置が許可された」とのように広範囲の事業運営を行っていた⁵²。大きく分けると、満鐵事業は本業の鉄道経営、鉄道運輸とかかわった附帯事業(大豆の輸出入事業

および沿線の大和ホテルの経営)、そして附属施設(娯楽、休養施設、社宅など)の三種類に大別できている⁵³。



図 91 日露戦争後の大連市街地図⁵⁴

「満韓」で言及された満鉄事業をまとめてみると、本業となる満鉄に対する言及がかなり少なく、附帯事業となる大和ホテル、豆関連の事業が合わせて 6 回言及され、附属施設とみられる重役の社宅、射撃場、舞踏室、電気公園、倶楽部などが 7 回以上に達し、漱石は営利の事業より付属施設にもっと注目し、かなり高い頻度で紹介したことがわかる。

鉄道事業自身に対する言及について、僅かでありながら第三十一篇で次のような描写がみられる：

貴様が生てから、また乗つた事のない瀟車に乗せてやると云つて、是公は橋本と余を小さい部屋へ案内して呉れた。…此部屋は上等切符を買つた上に、外に二十五^{ドル}拂はなければ這入れない所だよと云つた。成程表にちゃんとさう書いてある。専有の便所、洗面所、化粧室が附属した立派な室であつた。…

(三十一)

満鉄で使用された汽車は、「汽車王」と称された「レネ・ナゲルマツカーズ」という人物が導入したものであり⁵⁵、導入当時の宣伝では、

列車に搭乘したる旅客は普通の一等賃金を日本の鐵道に支拂ふが故に我社の設備が完全にして之によりて乗客を増す毎に日本の鐵道は一等者客を増すべき勘定となるなり…また我者社が南滿洲線に施さんとする設備は全く歐洲線に於ると相同じく寢臺食堂は言ふも更なり讀書室、體操室、喫煙室等皆完備せる…

「汽車王と語る」(下),『東京朝日新聞』, 1906 年 7 月 15 日

つまり、低廉な乗車料そして健全な設備が優勢として強調されていた(図 91)。それに反し、「満韓」によると、いわゆる設備健全の部屋は一等席であり、「上等切符」の買ったうえでさらに「二十五^{ドル}弗払わなければ這入れない所」で、漱石がその現実を確認し皮肉めく提示していた。高価の乗車料を請求する一等席は、いかにも普通の民衆に向けていなく、上流階層または欧米人に向けて提供した席だとみられる。

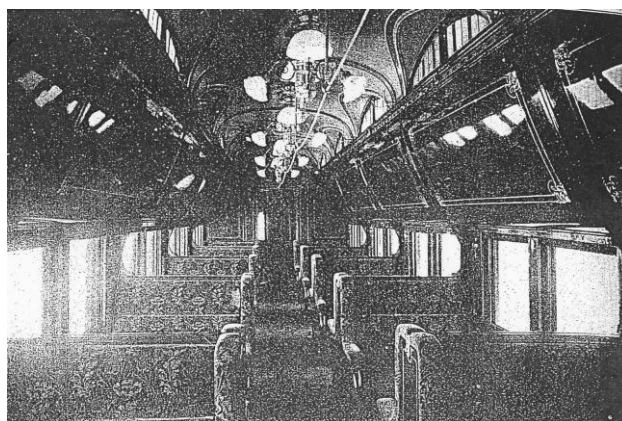


図 92 「南滿洲鐵道の一等客車」

注)『アジア写真集 2』,アジア学叢書,大空社, 2008 年 4 月 26 日,p.105 より

次に、附帯事業について、「満韓」では、大和ホテル、満鉄試験所、大豆事業、川崎造船所、電氣工場などが取り上げられていた。その中で大和ホテルと大豆事業に関する記述は特に印象深い。

大和ホテル(図 93)⁵⁶について、第五、六篇(大連大和ホテル)及び第二十二篇(旅順大和ホテル)において言及がみられる。

第五篇における関連記述は、是公の社宅の紹介に続いたもので、文末で満鉄秘書の話を借りて「社の宿屋ですから、やっぱり大和ホテルがいいでしょう」とわずかな一言だけとなっている。

一方、第六篇の内容からみると、風呂にはいると「摺硝子」のドアが目に入り、ホテルの食堂に降りると西洋人も一緒に食事をしていた。さらに、道で「白服を着けた西洋人」の馬車をみると、大和「ホテルへ帰つて行く」と予想するようになっていた。また、是公に向けて「おいこの宿は少し窮屈だね、浴衣でぶらぶらする事は禁制なんだろう」と話したように、漱石は日本人が経営した大和ホテルは、西洋人向けのように整えていたことを鋭く見出していた。



図 93 現在のロシア風情街: 入り口及び市街内の様相
(漱石が宿泊した大連大和ホテル所在の地域)⁵⁷



図 94 現在の旅順大和ホテル

また、第二十二篇のなかで、漱石は旅順の大和ホテルを以下のような描写していた：

ホテルの中には一人も客がいないように見える。ホテルの外にも一切人が住んでゐるようには思はれない…ホテルよりは廣い赤煉瓦の家が一棟ある。けれども煉瓦が積んであるだけで屋根も葺いてなければ窓硝子もついてゐない…

まるで廢墟だと思いながら、また室の中に這入ると、寢床には雪のような敷布がかかっている…外と内とは全く反対である。満鉄の経営にかかるこのホテルは、固より算盤を取つての儲け仕事でないと云ふ事を思い出すまでは、どうしても矛盾の念が頭を離れなかつた。

(二十二)

漱石の目に映ったのは、ひたすら豪華な内装にもかかわらず、利用者がほとんどいない現実である。また、ホテル内では設備が整った一方、その周辺は荒涼を極め、竣工していない西洋建築も廃棄に近い状態で置かれていた。

実際、同時期の満鉄評論「満鉄大観 附帯事業」⁵⁸においても、大和ホテルに関して以下のような評論が見つかっている：

宿舎に就ては満鉄夙にやまとホテルなるものを經營し大連旅順を始め必要なる各驛附近に於て之を設備したるが…總て純然たる洋式なると同時に輕便を旨とせざるが故に、習慣及び經費の上に於ても中流以下の日本人には不適當の感あるを免れず、但し其目的の歐米人若くは日清中流以上の旅客を接遇するを以て旨とすとならば之れにても宜しからん、左りながら旅客の多くは先づ中流以下のもの多きに居るを記憶せざるべからず(後略)

柏里「満鉄大観 附帯事業」、『東京朝日新聞』,1908年7月24日

鉄道やホテルは、一般民衆に向けての経営事業であるが、漱石の目に映ったのは、高価の料金や西洋化した設備であり、実際西洋人と中流以上の日本人しか利用できない現実であった。このように、漱石は冷徹な目線で満鉄経営の状況を観察し、「儲け仕事でない」という直裁な表現によって、満鉄事業の問題を指摘した。

そのほか、「満韓」では大豆事業に関しても、いくつかの言及がみられる。具体的な内容は第九、十七、十九、二十篇に分布し、それぞれ豆油の研究および製造(第九、十七篇)、豆の商売および輸入(第十九、二十篇)の紹介になっている。その中で、豆の商売および輸入について特筆する必要がある。

同時期の『東京朝日新聞』で、中国東北の視察文を取り上げると、大連の大豆について「輸出先は南清地方を主とし日本へは豆油を絞りたる豆粕が多く輸出せられ…大連開港以来大豆の輸出は頓に増加したり」⁵⁹とのような論述がある。

また、「英國人フヒリツプ其他二三の外商が大豆其他の輸出事情視察の為同地に滞在中なるを聞けり以て外商が満洲大豆の前途に如何に深く着目せるかを見るべし」⁶⁰との紹介もみられる。つまり、当時では大連の大豆事業が大きく期待されていて、中国内地、日本間の貿易だけでなく、欧米諸国への大豆輸出も良い方向で予測されたのである。

その一方、第十九篇において、漱石は以下のように商売の様相を描いている：

谷村君は此地で支那人と組んで豆の商売を営んでゐる。…取引上の必要があつて、奥の方から大連へ出て来る豆の荷主と接觸しなければならないのだが…應接間の入口は低い板間で、突當りの高い所に蒲団が敷いてある。其上に腰を掛けて談判をするのださうだが…彼等は談判をし乍ら阿片を飲む。でなければ煙草を吸ふ。(中略)

二階が荷主の部屋だと云ふんで、…成程室が澤山並んでいる。その中の一つでは四人で博奕を打つてゐた。(中略)

一つの室では五六人寄つて、そのうちの一人が笛を吹くのを聞いてゐた…股野が何か云ふと、向ふの支那人も何か云ふ。しかし両方の云ふ事は両方へ通じない様である。

(十九)

談判の時には「阿片を飲む」や「博奕を打」つことなど、漱石は日清貿易の実態を暴露的に描いたのである。そして「彼等」という表現、またその後漱石にも勧められたことから、アヘンを飲む人は中国人だけでなく、日本人も交渉の時に使う可能性が推測できる。予告篇の「満韓の文明」で提示した「頼もしい国民」、「分相應」という言葉に、いかにも反対した実情が描かれている。また、この篇の文末に、日本人の股野は中国人との話し合いで、「両方の云ふ事は両方へ通じないよう」だと、漱石は皮肉っぽく貿易の内実を風刺したのである。

そのほか、第二十一篇では、「豆の出盛りには持て余すほど荷が後から後からと出てくる」、「このくらい豆を積んだらずいぶん盛なものだろう」とのような紹介がある。「盛なもの」という表現は、大量な豆の備蓄を擁したことを説明し、一見豆事業を有望のように語ったが、実際この篇また前掲の視察文が掲載された何ヶ月前から、『東京朝日新聞』の紙上でこのような記事が見つかっている：

(日本) 内地不景気の為豆と豆粕堆積し大連のみにて九萬噸に達し鉄嶺奉天にも夥しく各地よりは毎日四五千噸着荷しつゝあり…

(「大連の豆(長崎)」,『東京日々新聞』,1909年3月28日)

前掲の視察文が貿易を楽観に予測したに反し、漱石がまた皮肉に「持越」しという現実に注目したのである。また特に興味深いのは、第二十篇が掲載された間もなく、12月9日の『朝日』で、以下のような大豆事業に関連した記事が掲載されていた：

奉天に於る最大の豆粕仲賣人楊泰、興須倒産せり日清兩國商人よりの債務多大なれども債権者の多くは營口大連にある為め奉天實業界に及ぼす影響尠し…

(「豆粕仲買人倒産」,『東京朝日新聞』,1909年12月9日)

中国人経営の豆粕貿易事業が倒産し、奉天の業界に影響しない一方、その債務が「營口大連にある」多くの債権者にとって深刻な問題になったことは明らかである。当時では、豆粕の貿易は大豆事業の一部で、日本が最も大きな豆粕の輸入国となっていた⁶¹。それで、豆粕仲買人の倒産は、必然的に大連の大豆事業にも影響を及ぼすことが推測できる。この記事から、漱石の鋭い目線が再度確認できる。予告篇の「満韓の文明」や「満韓所感」で日本人の努力を評価したにもかかわらず、「満韓」において現実の状況を暴き出すことはいかにも興味深く思われる。

前述のように、営利事業以外では、満鉄の娯楽施設は「満韓」において頻繁に紹介されていた。「満韓」の第十一篇において、営業報告の要点を書いてもらったことは、すでに前文で触れていたが、その続きとして、第十五篇の冒頭では「河村さんの書いてくれた表を見ると、娯楽機関という題目のもとに、倶楽部とか会とか名のつくものが十ばかり並べている」と書いていた。つまり、満鉄事業について、漱石はまず娯楽施設に注目していた。

では、彼は娯楽施設をどのようにとらえたのか。電気公園に関する紹介に、以下のような内容がある：

あれは電気公園と云つて、内地にも無いものだ、電気仕掛で色々な娯楽を遣つて、大連の人に保養をさせる爲に、會社で拵へてるんだと云ふ説明である。…娯楽つてどんな事を遣るんだと重ねて聞き返すと、娯楽とは字のごとく娯楽でさあと、何だか少々危^{あや}しくなつて来た。…何をやるんだか、其日になつて見なければ、總裁にも分らないのださうである。

(八)

「少々危^{あや}しくなつて来た」とのように、漱石は疑問を示していた。漱石が最初に娯楽設備をみたのは、実際大連に到着した直後で、是公の家を訪れた時である。

室の奥を見渡した時に、こりや滅法廣いなと思つた。…其廣い座敷がただ一枚の絨毯で敷き詰められて、四角丈が僅許り華やかな織物の色と映り合ふために、薄暗く光つてゐる…此だゝ広い応接間は、實は舞踏室で、それを見下してゐる手摺付の二階は、樂隊の樂を奏する所に出来て居るのださうだ。そんなら、さうと早くから教へて呉れゝば、安心するものを、斷りなしに急に佛様のない本堂へ案内されたものだから先づ一番に吃驚した。

(五)

「仏様のない本堂」など、相変わらず諧謔な表現が多いが、家に舞踏室を設置したほど、満鉄總裁として豪華な生活だけでなく、多くの接待が行われたことがわかる。第十八篇でもにおいても、股野の社宅の紹介があり、「家の座敷から、大連が一目に見渡されるのみならず、海が手に取るように眺められるのみならず、海の向うに連なる突兀極まる山脈さえ、坐っていると、窓の中に向うから這入つて着てくれる」とのように、満鉄上層部の生活施設の完備が語られている。



図 95 総裁社宅が所在した場所（前掲のロシア風情街の中、団結街一号）

娯楽施設に話を戻すと、満鉄会社の内部にも舞踏室が設置されたようである：

（満鉄）の食堂は社の表二階に当たる大廣間で、晩になれば、それが舞踏室に變化する程の大きなものであつた。是は社員全體に向つて公開してあるのださうだが、同じ食卓に着いた人の數と云うと、約三十人に過ぎなかつた。

（十）

以上からみると、当時では満鉄本社の人員がかなり少ないにもかかわらず、食堂は不必要であるほど舞踏室に使用できるように広く設置されていた。



図 96 満鉄本社所在地の現在の様相□⁶²

また、クラブに関する紹介は、以下の内容がある：

（クラブの中で）誰か居るかなと、玉突場を覗いたが、ただ電燈が明るく点いてゐる丈で玉の鳴る音はしなかつた。讀書室へ這入つたが、西洋の雑誌が、秩序よく列べてあるばかりで、ページを繰る手の影はどこにも見ゑなかつた。将棋歌留多を遣る所へ這入つて腰をかけて見たが、三人の尻を卸したほかは、椅子も洋卓も悉く空いてゐた。今日は遅いので西洋人が居ないから詰まらないと是公が云ふ…會員の名札は成程外國流の綴が多い。

（七）

表面では、移民者のために付属施設が完備したことが表現されていたが、その背後には娯楽施設を建設するに高額な費用を要することはまず予測できる。一方、実際の利用者がかなり少数だという現象も、さらに皮肉っぽく娯楽機関の現実を示していた。満鉄の改革で経費節約のため人員削減も行われた反面、舞踏室や欧米人向けのクラブを保留したに、漱石は厳しい視線を投じていた。

さらに興味深いのは、第十五篇では、漱石は「社員倶楽部と云うのに連れて行かれて、謡の先生の月給は百五十円だと云う事を聞いたと記述したが、さも軽くのように「謡の先生」の給料を提示していた。当時朝日新聞社の給料という、漱石は主筆の池辺三山に次いで月200円ほどであり、古参の編集長佐藤北江は月130円ほどとなっている。また、漱石が入社前の待遇について、東大英文科の講師と一高講師と合わせて年間1800余円（月約150円）となっている。つまり、役者の給料はかなり高額なものだとうかがえる⁶³。

このように、漱石は豪華な娯楽施設に重点をおいて紹介しつづけていた。費用縮減の方針を背けて、是公の改革が効果をきたしていないように、彼は風刺味深く満鉄の現実を描き出していた。

さらに、「會員の名札はなるほど外国流の綴が多い」ことが示した通り、全体的にいうと、漱石が描いた娯楽機関も、営利事業と共通して「西洋」という存在が見いだせる。

「名は日本橋だけれどもその実は純然たる洋式」（第七篇）と皮肉的に語ったように、満鉄の本業から付属施設まで、あらゆるところで西洋を吸収した証拠が提示されている。前文で汽車の賃金と設備についてすでに述べていたが、大和ホテル、娯楽施設に関しては、また類似し

たような紹介がみられる：

おい此宿(大和ホテル)は少し窮屈だね、浴衣でぶらぶらする事は禁制なんだらう
と聞いたら、(是公は)此處が厭なら遼東ホテルへでも行けと云つて歸つて行つた(後略)
(六)

是公は正直だから本當に(日本服で舞踏会に)すると好くないと思って、ただ羽織袴は不可よと斷つた。是公は夫でも舞踏會を見せる氣と見ゑて、翌日の午、社の二階で上田君を捕へて、君の燕尾服を此奴に貸して遣らないか、君なら丁度合ひそうだと云つて居た(後略)
(七)

(満鉄の本社の)料理は大和ホテルから持つて来るのださうで、…みな一様の皿を平
げてゐた。胃が痛いのでナイフとフォーク肉刀と肉匙人並みに動かしたようなものゝ、その實は肉も野菜も咽喉の奥へ詰め込んだ姿である。一つ何うですと向う側の田中君から瓢箪形の西洋梨を勧められた時は、手を出す勇氣すらなかつた。(後略)
(十)

満鉄の設備が日本の習慣を切り捨てるくらい、生活面は食事から服装まで、設備も日本の名に乗りながら西洋式を取り入れていたのである。莫大な資金をかけて整えた付属施設は、結局一般欧米人に向けたこともみられる。

また、是公が満鉄の中央試験所で作った「高粱酒の比較飲み」を「並製も上製も同じく謝絶した」に対し、漱石は「ウイスキーがこの試験場でできるようになつたら是公はさぞ喜んで飲む事だろう」(第九篇)と諧謔的に語っていた。

そもそも日本人居留者と中国内地を基点に構成された満鉄事業は、また移民者と中国内地とかけ離れた形で発展していった。まるで西洋に向けて、先進国としてのプライドを示すために整えた満鉄施設は、果たして現実の経営で成功できるかどうか。漱石はリアリズムを貫いて、満鉄に切実な疑問を提示した。

満鉄事業を批判精神で描いてきた漱石は、またどのように旅の中で出会った日本人居留者を描いたのか。中国の東北に居留した日本人は、当時では次の通りに分類されていた：

居留民中の一萬四千餘人は官吏、満鐵其他の會社員並に官公衙會社の傭人なるが此以外の居留民は…大體にて之を三種に區別するを得べし其第一は満鐵及官衙軍隊並に是等從屬員の餘瀝を啜りて生活するものなり…第二は満洲の輸出入業並に此業に

付随せる業務に従事するものなり…第三は支那人相手に商業を営むものなり…満洲発展力の先鋒として最も推奨に値するは第三の種類に在り

(「満洲概観 邦人の発展力 (上)」, 1909 年 6 月 2 日)

ここで、「最も推奨に値するは第三の種類」である「支那人相手に商業を営む」人について、すでに前文で大豆事業を検討した際に、「談判をしながら阿片を飲む」(第十九篇)というように叙述が見られている。そのほか、漱石はまたいかに満鉄の重役と一般職についての居留民を描いたのだろうか。

まず、漱石は満鉄の重役、つまり親友の中村是公そして満鉄の田中理事について、以下いくつかの場面を提示していた。

是公はその夜舞踏の済んだ後で、多数の亜米利加士官と共に倶楽部のバーに繰り込んだのださうだ。そこで、士官連が是公に向って、今夜の會は大成功とか、非常に盛であつたとか、口々に賛辭を呈したものだから、是公は已を得ず、大聲を振り絞つて gentleman! と叫んだ。…所がゼントルメン以外の英語が生憎一言も出て来なかつた。英語と云ふ英語が頭の底から悉く酒で洗ひ去られて仕舞つているので、仕方なしに、急に日本語に鞍換をして、ゼントルメンの次へもつてきて、すぐ大いに飲みませうと怒鳴つた。(中略)

…ゼントルメン大いに飲みませうも、此際亜米利加語として士官側に通用したと心得てゐるんだらう。通じた證據には胴上にしたぢやないか位、酔ふと云ひかねない男である。(後略)

(十二)

アメリカから来航した士官たちを招待した是公は、英語と日本語のまじりでお酒の音頭をとった情景が滑稽的に描かれていた。その最後に日本語もアメリカ語のように士官たちに「通用したと心得ている」表現は特に興味深い。

1909 年 11 月『東京朝日新聞』の紙面では、タイムズ紙が掲げた日本批判について、反論を行う記事がみつまっている：

紐育タイムスは特筆して曰く日本政府は其國民の為に盛に悪手段を弄し以て外國の物品を排斥せんとせり…日本政府は外國より一步の金を借りながら満洲へは二歩の金

を出せり是れ到底外國人の競争し能わざる所なる(後略)

(「満洲問題 日本攻撃」、『東京朝日新聞』, 1909 年 11 月 29 日)

とのように、批判の多くは日本の中国における鉄道経営に対する内容だとうかがえる。

また、アメリカ士官が満鉄を訪問し招待したのはおよそ 10 月前後であり、まさに日清協約が締結され、清政府は日本の安奉線鉄道の所有権を黙認した時期である。しかし、日米友好を示した宴会を裏切ったように、アメリカ側は強く日本批判を行い続け、中国における鉄道の中立を主張した。

当然のように、いわゆる鉄道中立に対する主張は、アメリカが中国における権益を図る意図もうかがえるが、この部分に対する詳しい検討は第三節に委ねる。

上記のエピソードにおいて、お酒の音頭がアメリカ士官に通じたと「心得ている」表現は、日米の合意が達成したという「勘違い」を暗示したのではないだろうか。この描き方は、また前述の第十九篇で日本人と中国人の会話で「両方の云う事は両方へ通じない」表現と共通したとみられる。

親友でありながらも、漱石は姿勢を保って満鉄の現実そして総裁の働きぶりを活写していた。前述の社宅と同じく、漱石はアメリカ士官の招待の話で、贅沢を尽くした上層部の生活も暴き出していた。また、漱石が大連旅順一帯の旅行を終える直前、田中理事⁶⁴から招待を受けた話も取り上げられていた：

(前略)廊下に出ないうちに給仕が遣つて来た。田中さんがいつしよにスキ焼きを食べにいらつしゃいませんかと云ふ案内である。…(いわゆるすき焼きの店に入ると)玄關に女が二三人出てゐる。…窓を見ると、壁の厚さが一尺程あつたので、始めて普通の日本家屋でないと云ふ事が解つた。(中略)

女が三四人で、孰れも東京の言葉を使わなかつた。田中君はわざと名古屋訛を真似て調戲つていた。…余はしょうがないから畳の上に仰向に寝てゐた。すると女の一人が枕を御貸し申ませうかと云ひながら、自分の膝を余の頭の傍へ持つてきた。…もう少しこつちの方へ出してくれと頼んで、その女の膝の上に頭を乗せて寝てゐた。…不思議な事に、橋本も活動の餘地がないものと見えて、余と同様の真似をして、向ふの方に長くなつてゐる。枕元では田中君が女を相手に碁石でキシャゴ弾きを遣つて大騒ぎをしてゐる。(後略)

経費縮減の時期で盛んな招待を行うことはともかく、大連旅順の視察の最後で女郎屋の話を持ち出すことはいかに風刺的である。興味深いことに、次の第三十篇になると、漱石は「手を分つ古き都や鶉鳴く」と、鶉の籠を歌舞伎の鶉棧敷に暗喩し、鶉の籠と別れた話を掲げていた。大連旅順の「視察」の終了を暗示したように、最終篇となる第五十一篇を除いて、第三十一節以降では、満鉄事業の紹介は歯止めをかけられたように中止したのである。

そして、この第二十九篇では、漱石自身も巻き込まれたように招待の話を取り上げた。女の膝で寝ることや、田中理事が遊女をからかったり大騒ぎしたりする話は、いかにも滑稽の限度を超えて、招待の実情を摘発するに近い内容になっていた。このように、漱石は自分を招待した満鉄そして満鉄関係者を批判し続けてきた。社内の長塚節は漱石が人を馬鹿にしていると非難した原因には、以上のことも含めていたのではないだろうか。

先行研究でよく指摘されたように、「満韓」で漱石は旧友との再会を多く取り上げていた。しかしその再会に関する話は、今の親友がいかに立派な人物になったかということより、学生時代における素朴な生活への追憶、落第の笑い話などが主である。また、「満韓」の冒頭において、是公の「総裁」という呼称に「恐縮」な感情を示したのは、漱石は友人について現在立派な仕事や活躍な姿より、やはり学生時代の素朴な姿に親近感を示したのではないだろうか。

また、満鉄の重役と比べると、「満韓」において一般の移民者に対する描写が非常に限られていた。前掲した女郎屋のほか、第五十篇の番頭に関した話も印象深い。

(陵守の)支那の小僧が跣足で跟いて来た。番頭を捕まへて頻りにこそ～何か云つてゐる。番頭に聞くと、ゑゝなにと曖昧な答をする。また聞き返したら斯う云つた。――屋根の廂の所に着けてある金の玉を、此間一つ落ちた時に、拾つておいたから、買つて呉れと云ふんです。表向にする厳しいものですから、斯うして見物に来た時、そうつと賣付けやうてんで、支那人は實に狡猾ですからね。

支那の陵守も無論狡猾だらうが、金の玉を安く買はうと云ふ番頭もあまり正直な方ぢやない。番頭はそつと錢を遣つて金の玉をポケットへ入れた様である。

すでに水川隆夫が『夏目漱石と戦争』⁶⁵において論じたように、「狡猾な」中国人と交渉した

日本人の番頭も「あまり正直な方じゃない」という表現は、当時日本人移民者が抱えた「一攫千金」の心理を反映していた。早くも 1907 年から、『東京朝日新聞』の紙面で一般駅員に関する不正報道が見られていた：

我野戦理部員非行の噂高きに至りては實に残念千萬なり彼等は火車泥式の運送業者と結託して貨車の交給に依り或は一車幾何金、或は某夜某樓の花費幾何金、或は現生幾百金と屢之を懷にせりと…

（「鐵道駅員の腐敗」、『東京朝日新聞』, 1907 年 2 月 6 日）

ここでも、番頭ないし一般居留民の心理を再確認できたのである。その一方、金儲けに不法な手段をとった一般民衆の姿は、また満鉄の重役たちの豪華な生活とも鮮明な比較になっている。

以上のように、漱石は満鉄の事業から日本人の様相について描いてきた。汽車や附属施設の健全な設備にもかかわらず、漱石は西洋の強い影響、そしてその裏に潜んだ営業問題、経費問題を鋭く指摘した。満鉄改革で経費縮減が唱えられた中で、漱石は招待してくれた満鉄を裏切ったといえるほど、不要な娯楽施設に注目し、重役の豪華な生活様相を暴露的に描き出していた。その対比として、一般居留民の実情にも触れていた。「提灯持ち」するつもりのないこの旅行⁶⁶では、漱石は本当の意味での視察をやり遂げたのではないだろうか。

2.2 当時の話題から遠ざけた戦跡めぐり

漱石の戦跡巡りは、主に旅順の旅行に集中していた。その見聞は、新市街の描写や講演を挟みながら、第22篇(11月22日)から第28篇(12月5日)にわたって紹介されていた。

ここで留意すべきなのは、同時期朝日新聞社で「無冠人」と名乗った記者も、中国の東北に旅立っていた。漱石が戦跡めぐりの内容を発表した直後、彼は12月9日及び13日において、同じく戦跡めぐりを内容とした「表忠塔に登る」、「旅順四日 旅順にて」を『東京朝日新聞』に発表していた⁶⁷。多角な報道を網羅するという『朝日』の編集意図が含まれたかもしれないが、同時期に同じテーマの旅行を重ねて掲載したことは、やはり興味深く思われる。ここでは、両方の内容を対照しつつ、漱石の描き方を考察してみる。

漱石が重点をおいて描いた見聞をまとめると、新市街の風景(第二十二篇)、戦利品でロシア夫人の靴(第二十三篇)、山道を登る馬車、ロシア將軍の住宅(第二十四篇)、塹壕や要塞(二百三高地など)をめぐる戦闘話(第二十五、二十七篇)、旅順港における戦艦引き上げ作業(第二十八篇)などが挙げられる。

全体からいうと、漱石の記述は日本軍だけでなくロシア側の話も多く取り上げた点が特徴的である。戦闘のエピソードを語った一方、当時読者の関心を引く戦跡の景観や、日本兵勇戦の回顧談をほとんど避けていた。

たとえば、当時話題の表忠塔(当時は「戦勝記念碑」とも呼ばれている。図97)に関する叙述は、以下のようにまとめられる：

旅順に着いた瀟車の窓から首を出したら、つい鼻の先の山の上に、圓柱のような高い塔が見へた。それが餘り高過ぎるので、肩から先の前の方へ突き出した、窮屈に仰向かなくては頂點迄見上げる譯に行かなかつた。

…(白玉山の)上の高い塔が戦勝記念碑だと説明して呉た。能く見ると高い燈臺の様な格好である

(二十三)

日露戦争の戦死者を追悼するために、旅順の白玉山で表忠塔が1907年から建設されはじめ、1909年の11月に竣工した。表忠塔は一時戦争を追憶する名地となり、竣工前から大きな話題となっていた⁶⁸。一方、ここでは「円柱のような高い塔」、「高過ぎる」、「高い灯台」など、漱石はただ遠くからみた表忠塔の外観だけを説明し、表忠塔自身の意味に触れていなかった。

「窮屈に仰向かなくては頂点まで見上げる訳に行かなかった」という表現から、いかにも漱石の距離を置いた姿勢がうかがえる。

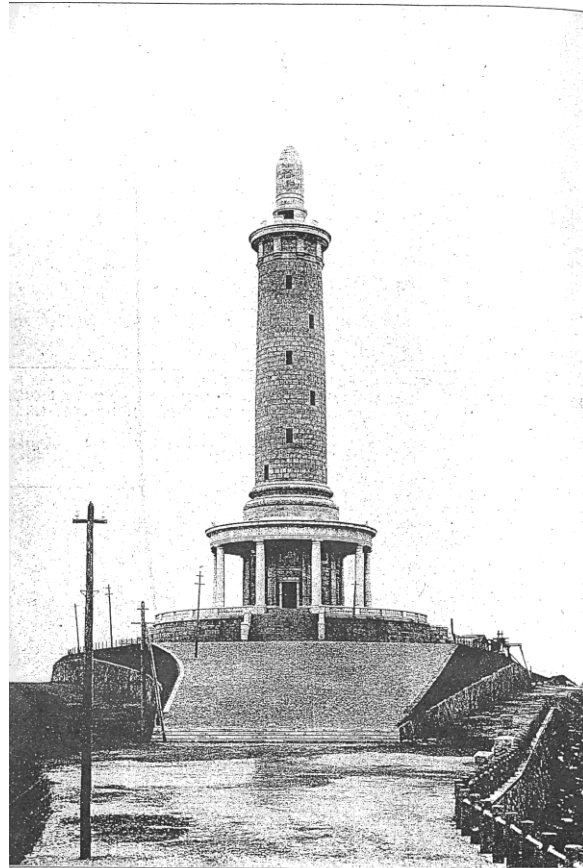


図 97 「白玉山の表忠塔」

注)『南満州写真大観』(『アジア写真集 2』(アジア学叢書,大空社, 2008 年 4 月 26 日)に収録されている)

もう一つの例として、同じく第二十三篇では、戦利品陳列所の参観も記されている。担当者について、漱石は「一々叮嚀に説明の労を取って」、また、「鶏冠山の上まで連れて行って、草も木もない高い所から、遥の麓を指さしながら、自分の従軍当時の実歴譚をことごとく語って聞かせてくれた」と記し、熱心な案内を強調していた。しかし、戦利品の紹介となると「たいてい忘れてしまった」と一括りし、また案内者の「実歴譚」の内容についても触れていなかった。そのかわりに、彼はロシア夫人の靴だけに注目していた。

…戦利品の一々を叙述したら、此陳列所丈の記載でも、二十枚や三十枚の紙数で

は足るまいと思ふが、残念な事に大抵忘れて仕舞つた。然したつた一つ覚えてゐるものがある。夫は女の穿いた靴の片足である。地が繻子で、色は薄鼠であつた。その他の手投弾や、鐵條網や、魚形水雷や、偽造の大砲は、…今は頭の底に判然残つてゐないが、此一足の靴丈は…何時なんでも意志の起り次第鮮に思ひ浮べる事が出来る（中略）

戦争後ある露西亞の士官が此陳列所一覽の爲わざ〜旅順迄来た事がある。…さうしてA君に、これは自分の妻の穿いていたものであると云つて聞かしたさうだ。此小さな白い華奢な靴の所有者は、戦争の際に死んで仕舞つたのか、またはいまだに生存してゐるものか、その點はつい聞き洩らした。

（二十三）

ロシア人士官が戦争後の陳列所に来て、失踪した妻の靴を見つけた話であるが、このエピソードによって、漱石は戦争に対する悲慘な思いを蘇らせていた。そして、日本側でなくロシアの角度から戦争を表現したことも、興味深く戦争に対する疑問を示している。

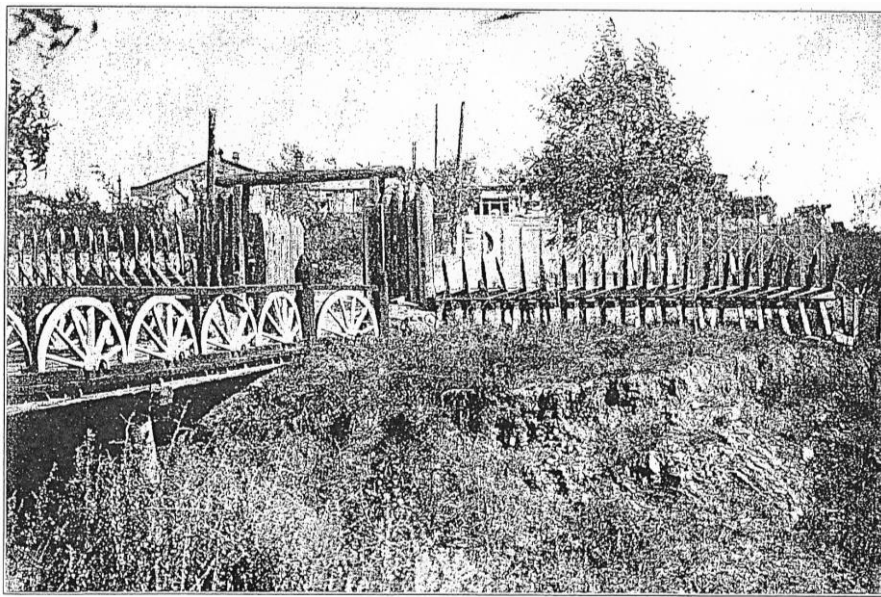


図 98 「旅順の戦利品陳列所」（前掲『南満州写真大観』，『アジア写真集 2』，p.124）

また、旅順港の見学で「露西亞の軍艦がどこで沈没したろうかなど」と思い浮かべる暇も出なかった」（第二十八篇）と言ったきり、漱石は日本軍の勇戦話について関心を示していないようである。

それに対し、「無冠人」は戦跡巡りを、ほとんど漱石と逆方向で描き、壮絶な戦闘を何度も振

り返っていた。特に「表忠塔」についても、前記のように単独の一篇を設けて詳しく紹介したのである。ここでは、同じ場所(旅順の新市街も含めて)に対する描写を抽出し、表 8 にまとめて比較してみた。

表 8 旅順の見聞（新市街&戦跡）

	漱石の描写	「無冠人」の描写
新市街	<p>（市街は）まるで廃墟だと思ひながら、また室の中に這入ると、寝床には雪のような敷布がかかっている。…外と内は全く反対である。<u>満鉄の経営にかかるこのホテルは、固より算盤を取って儲け仕事でない</u>と云う事を思いだすまでは、どうしても矛盾の念が頭を離れなかった。</p> <p>（二十二）</p>	<p>新市街に舊市街に活気は鬱勃として新興の氣運あり〜と充滿する事を看取せざるべからず、帝國發展の新運命は正しく旅順の掌握する所たらざるべからず、即ち旅順は今や創業、開拓、進歩が已に程を發したるなり</p>
山路と馬車	<p>露西亜人だけあって、…その砲台のことごとくに、馬車を駆つて頂辺まで登れるような広い路をつけた…ところが戦争がすんで往復の必要がなくなったので、せつかくできた山路に手をいれる機会を失つたため、我々ごとき物数奇は、かように零落した馬車をさえ、時々復活させる始末になるのである。</p> <p>火打石のために、累々と往來を塞がれている。零落した馬車は容赦なく鳴動してその上を通るのだから、<u>凸凹の多い川床を渡るよりも危険</u>である。二百三高地へ行く途中などでは、とうとうこの火打石に降参して、馬車から下りてしまった。そして痛い腹を抱えながら、膏汗になって歩いたくらいである（後略）</p> <p>…馬車は無鉄砲に山路を登って…</p> <p>（二十四）</p>	<p>山に馬車を乗上げる道路が開かれて何の苦もなく至極輕便に登り得る様になりあるを見るに付けても露國が旅順砲臺には全力を盡して經營したるを見るべきなり</p>
戦闘現場の追憶	<p>一寸二寸とじりじりにセメントで築き上げた窖道を専領するまでに至つては、全く人間以上の辛抱比べに違ひない。その時兩軍の兵士は、この暗い中で、わずかの仕切りを界に、ただ一尺ほどの距離を取つて戦をした。</p> <p>…それに疲れると鉄砲をやめて、<u>両側で話をやつた事もあると云つた。酒があるならくれと強請つたり、死体の收容をやるから少し待てと頼んだり、あんまり下らんから、もう喧嘩はやめにしよう</u>と相談したり、いろいろの事を云い合つたと云う話である。</p> <p>（二十五）</p>	<p>我小銃彈の痕は又コンクリートか何かの壁の上に萬千相亂れ錯交して壁上餘地の存するなからんとする許に相接して狼藉するは是れ皆我軍が短兵先を争ふて相進み激戦累々として敵の塹壕の間に望み多き青春の屍を横へたるの跡にて見るからに惨鼻を覺ゑて鬼哭の啾々たる聲そこらに聞こゆ心地するなり…</p>
二〇三高地	<p><u>ここでやられたものは、多く味方の砲丸自身のためです。それも砲丸自身のためと云うより、砲丸が山へ当つて、石の碎けたのを跳ね返したためです。…味方の砲丸が眼の前へ落ちて、一度に砂煙が揚がるとその虚に乗じて一瞬か二間ずつ這い上がるのですから、勢い砂煙に交じる石のために身体中創だらけになる…</u></p> <p>（二十七）</p>	<p>山上と云はず山下と云はず我砲彈の跡は他の砲臺のそれと同じく歴々と觀るべく…赤坂山はスグ目の前なり、<u>此山こそ露軍が銃砲彈を雨霰と許りに發射して應戰大に奮ひ我軍をして此二百三高地を占領しては奪還されしことを屢ならしめたる山にて乃木令息の殞れたるも亦同じく赤坂山の敵彈によるなり</u></p>
表忠塔	<p>円柱のような高い塔が見えた。それがあまり高過ぎるので、肩から先を前の方へ突き出して、窮屈に仰向かなくては頂点まで見上げる訳に行かなかった。…</p> <p>…これが白玉山で、あの上の高い塔が表忠塔だと説明してくれた。よく見ると高い灯台のような恰好である。</p> <p>（二十三）</p>	<p>當時攻圍軍の第九師團長たりし大島大將同く第十一師團長たりし土屋中將などは砲臺見物に出かけはしたるものゝ其部下が續續と無殘の最期を遂げしを想ふて涙ながらの懷舊にて多く語る能はざりし…</p>

表 8 の比較からみると、漱石の記述は、積極的な評価そして高揚な戦争感情がない点特徴的である。その一方、「無冠人」の紀行文は、まるで漱石の紀行に反論したり、内容を修正したりするような内容になっている。

表 8 での「戦闘現場の追憶」の部分(第二十五篇)を取り上げると、漱石は戦闘で疲労を極めた兵士をリアルに描き、「もう喧嘩をやめよう」など興味深い場面も提示していた。戦争当時の日本国内でみられた高揚な戦争感情、そしてロシアに対する過激な態度を批判したように、漱石はほとんど戦争に対する反省を促すエピソードを取り上げていた。戦争に対する感想として、漱石は「味方の砲弾でやらなければ、勝負のつかないよう烈しい戦は苛すぎる」(第二十七篇)のように、皮肉めいた文章によって戦争に対する批判を示した。

表 8 の内容以外にも、漱石の戦争感情を反映した内容が存在する。旅順港の戦艦引き上げを視察した時(第二十八篇)も、戦艦が「日本人が好んで自分で沈めに來た船だけでもよほどの数」だと語り、日露戦争で広く伝わった広瀬中佐の美談を皮肉に描写していた⁶⁹。それに加えて、「戦争後何年かの今日いまだに引き上げ切れないところを見てもおおよそ見当はつく。器械水雷などになるとこの近海に三千も装置したのだそうだ」と説明したことで、漱石は繰り返し戦争がもたらした問題を提示していた。

また、旅順の戦跡巡りだけでなく、漱石は「化物屋敷」と称された戦時の野戦病院(大連)を訪れていた。負傷兵の角度から、彼は戦争の現実をもう一度描き出したのである：

戦争が烈しくなって、負傷者の数が増して来るに従って、収容した人間に充分の手當が出来ない許りでなく、気の毒ながら見殺しにしなければならない兵士が澤山に出来て、夫らの創口から出る怨みの聲が大連中に響き渡るほど凄まじかったので、その以降は此一廓を化物屋敷と呼ぶようになった(後略)

(十六)

兵士の勇ましい姿より、漱石が目にしたのは、戦争の背後で適当な処置ももらえず、痛みの中で悲惨な死を遂げた兵士の現実である。

水川隆夫はすでに『夏目漱石と戦争』⁷⁰で示したように、漱石は国家主義を盲信し戦争支持を唱えた国内の現象に、反省的さらに批判的な姿勢をとっていた。そして、「新聞紙法」の条例が下された中で発表した「満韓」においても、漱石は一貫して、戦争に対する疑問を表してい

た。彼は冷徹な目線で戦跡を観察し、戦跡めぐりの体験を語りつつ、戦争に対する反省を示唆するエピソードを提示した。日本とロシアの両側から、戦場に強いられた兵士の現実、そして戦争に巻き込まれた民衆の様相を暴き出すことで、彼は戦争の悲惨さを描きだしていた。

第3節「満韓」で描かれた中国の諸相

3.1 満鉄の中でいきた中国人労働者

前掲の図 90 ですでに提示したように、「満韓」において中国関連の記述は、満鉄よりかなり限られている。また、中国の代表的な景観ではなく、旅程の中で偶然に見聞した人や風物を取り上げる傾向がみられる。いままで満鉄事業そして戦跡めぐりを辛辣に描いてきた漱石は、またどのように中国そのものの様相を表現していたのか。

同時代における中国国内の状況という、一面では満鉄は改革の直後で中国人雇用をさらに盛んに行いつつあり、そして、もう一面では、前述のように新政府から知識人の間で、利権回収を唱え、その中で満鉄を含めた東北地域の鉄道を取り戻す運動が試みられていた。

満鉄創立の直後では、その性格が「日清両國政府及び人民の官民合同會社」と定義されていた⁷¹。しかし、合同の会社にもならず、この時期では清政府が鉄道の利権回収も試みていた。その後「日清合辦」がまだ強調されていたが、1909 年で掲載された視察文「満州の概観 邦人の発展力(下)」⁷²のなかでも、その重要性を論じる内容がみられている。

そのほか、1908 年からの満鉄改革によって、経費縮減の一環として中国人労働者の雇用が改革計画に提起されていた。

(前略)昨年十一月中社内の大改革を行ひ使用員約五百名を罷免したるが右は必ずしも冗員に非ず其大部分は實際必要なる傭員なるも其俸給は平均一人六十圓に當り満鐵會社經費の過半は雇人の俸給に支拂ひ居る有様なりし若し日本人に代へるに支那人を使用する時は殆ど三分一の給料にて足れるを以て今後は樞要部社員の外は漸次支那人を採用する方針にて既に數百名の支那人を内地人罷免の補充として雇用する事となりし由

「満鐵の清國人使用」(『東京朝日新聞』,1909 年 1 月 4 日)

枢要な事業に参加できるほどの能力がないと、「冗員」でなくても罷免されるという、当時の日本人移民者が直面した現実が再度確認できている。一方、中国人雇用に積極的な方針をとったのは、「三分一の給料にて足れる」、つまりコスト面で中国人が低廉な労働力だという考慮による措置だとうかがえる。

この時期で満鉄が中国人雇用に積極的に推進した反面、中国側では利権回収運動を盛んに行っていた。1909 年の動向という、清政府は欧米諸国が領有した鉄道をはじめ、東清鉄道、満鉄(安奉線の周辺)に対する利権を主張し続けていた。

また、前述のように利権回収熱に付随したのは、一部の知識人による様々な排外運動であった。日露戦争以降、東北地域の還付をめぐる日清の交渉で、「満州」還付の代わりに福建省の割譲(「割閩換遼」)を要求したという風説が一時流れていた。それをきっかけに、日本に対する反対運動が盛んになり、多くの場合は日貨排斥の形で行われていた。特に 1905 年では、中国革命同盟会が東京において結成していたが、それを抑制する措置として、「清国留学生取締規則」も発布されていたという⁷³。

そして、漱石が中国に旅立つ直前の月では、「在東京清國留學生の決議に係るボイコット」が「上海、天津及東三省」各地で起こり、「日本が自由行動に據り外交に成功せるは清國を侮辱せるの甚だしきものなり」と抗議し、「各地聯合して日貨を排斥し日人と貿易せざること、安奉線工事には人夫を供給せざること、安奉線一帯の地主をして土地を賣らしめざること等」⁷⁴、満鉄の事業に対する抵抗活動がさらに活発になっていた。

では、「満韓」のなかで、中国はどのように登場していたのか。本稿は以上で述べた歴史背景と結びついて、前節と同じく『東京朝日新聞』の記事を参考にしつつ、漱石が描いた中国を考察してみる。「満韓」における中国関係の言葉使いは、すでに前掲の先行研究において詳しい考察が行われたため、本稿では繰り返し論じることを控える。そのかわりに、各人物像や景観は、どのように近代中国を反映したのかに注目して分析を行う。

「満韓」の内容から、漱石が取り上げた「中国」はいくつの特徴が挙げられる。

まず一つは、すでに先行研究で論じられたように、中国人労働者が「日本」と対極的な存在として多く登場したのである。

第2節で検討してきたように「満韓」の中での「日本」は、主に近代化の満鉄事業、そして重役の姿によって表現されていた。それに反し、中国特に中国人は総計 18 箇所と言及で、ほとんど体力労働に従事したクーリー、(第三十五、三十六篇の梨畑の主人を除いて)下層社会の民衆という身分が大多数である。

具体的な職業として、苦力から民営ホテルの女中、伝統音楽の芸者などが挙げられるが、その中で苦力の登場が最も頻繁で、その一部はまた一部満鉄雇員の身分で登場していた。大連に到着して漱石が真っ先に会ったのも、まさに馬車の御者となる中国人である：

河岸の上には人が澤山並んでゐる。けれどもその大部分は支那のクーリーで、一人見ても汚らしいが、二人寄ると猶見苦しい。斯う澤山塊るとさらに不体裁である。…クーリー団は、怒った蜂の巣の様に、急に鳴動し始めた。…早晚地面の上へ下りるべき運命を持つた身軀なんだから、仕舞ひにはどうかして呉れるだらうと思つて、やつぱり頬杖を突ひて河岸の上の混戦を眺めてゐた。

(四)



図 99 近代中国の馬車(「先祖傳来の乗用馬車」,絵葉書)



図 100 近代中国の人力車(「満洲唯一の外出機関」,絵葉書)

馬車の御者(図 99、図 100)を「汚らしい」、「不体裁」だと批判し、無秩序で混乱な様相を「混戦」、「鳴動」と諧謔に表現していた。先行研究のなかでは、以上の表現を先進国国民としての高い姿勢という批判がある一方、漱石のリアリズムとして解釈する論調もみられる。もう一つ留意すべきなのは、次に満鉄会社の馬車の登場である：

(前略)東京の真中でも容易に見る事の出来ない位、新しい奇麗なのが二臺有った。御者が立派なリヴェリーを着て、光った長靴を穿いて、哈爾濱産の肥えた馬の手綱を取って控えてゐた。佐治さんは、…わざわざ余を其奇麗な馬車の傍まで連れて行つた。…車は鳴動の中を揺ぎ出した。(四)

「河岸の上の混戦」、その中から道を切り開いた「奇麗な馬車」、そして「汚らしい」地方の御者と「立派なリヴェリーを着て、光った長靴を穿いた」満鉄の御者は、いかにも対極的な存在として描かれていた。この表現について、崔明淑が「夏目漱石『満韓ところどころ』—明治知識人の限界と「朝鮮・中国人」像—」⁷⁵で「対照の妙」と論じたように、漱石の距離を置いた姿勢が反映されていた。

そのほか、第十七編、第十八編及び第三十二編では、是公御用の御者、大豆の運搬者やトロッキを押す人など、満鉄の雇用人として中国人苦力が登場し、いずれも重労働に従事した人物だとわかる。しかし、ここで留意すべきなのは、漱石の日記(1909年9月9日)によると、漱石は満鉄の従事員養成所を参観した際に、中国人電信技手にも接触していた⁷⁶、しかし、「満韓」における言及はなかった。

大豆を運搬した苦力について、漱石は以下のように描いていた：

クーリーは大人しくて、丈夫で、力があつて、よく働いて、たゞ見物するのでさへ心持が好い。…彼等は舌のない人間の様に黙々として、朝から晩迄、此重い豆の袋を擔ぎ続けに擔いで、三階へ上つては、また三階を下るのである。其沈黙と、其規則づくな運動と、其忍耐と其精力とは殆んど運命の影の如くに見ゑる。(中略)

赤銅の様な肉の色が煙の間から、汗で光々するのが勇ましく見ゑる。この素裸なクーリーの體格を眺めたとき、余は不圖漢楚軍談を思ひ出した。昔韓信に股を潜らした豪傑は屹度こんな連中に違ひない。(中略)

クーリーは實に美事に働きますね、かつ非常に静肅だ。と出掛けに感心すると、案内は、とても日本人には真似も出来ません。あれで一日五六錢で食つてゐるんですからね。どうしてああ強いのだか全く分かりませんと、左も呆れた様に云つて聞かせた。（十七）

漱石は中国人苦力の労働ぶりに注目し、彼らの強い「忍耐」力と「精力」、そして「勇まし」さに感心を示していた。特に堪忍辛抱の逸話となる「韓信の股くぐり」を取り上げ、一時の屈辱を堪忍し成功した「韓信」ではなく、わざと苦力を「韓信に股を潜らした豪傑」に例えたことが興味深い(図 99)。



図 101 豆粕を担ぐクーリー(「豆粕の山と苦力の労働」,絵葉書)

また、「日本人には真似もでき」ない労働の強度、そして「五六錢」(1 錢は 0.01 円に相当)という想像を超えた生活費は、当時中国人雇用の実態を反映したのである。漱石は賃金ではなく生活費だけを取り上げているが、前掲の「満鐵の清國人使用」ですでに触れたように、当時の中国人労働者はほぼ「三分一の給料」で雇われていた。また前掲の日記においても、電信技手の日給は 40 錢と記し、技術仕事ではなく一般体力労働者の給料はさらに低いと考えられ、前述した娯楽施設の「謡の先生」と比べと、大きな落差を持つことがわかる。

創出当初で論じられていた「日清兩國政府及び人民の官民合同會社」に反し、「満韓」では中国人が低賃金の肉体労働力として雇用された現実が、繰り返し証明されていた。

日記から従事員養成所の中国人技手の言及がみられるが、実際 1909 年当時では、中国人の実業教育について、満鐵は消極的な態度を取ったのは現実であった。翌年の 1910 年になると、満鐵における日本人向けの実業教育が開始したというが、中国雇員向けの実業教育は、6 年後の「付屬地公学堂補習科規定」が公布されたからになったという⁷⁷。その本質には中国

人に対する警戒が読み取れる。

いままで一線を画した姿勢をとった描き方は、まさに満鉄と中国人労働者の関係を反映できている。漱石は自分自身の中国観より、満鉄が中国人に対する態度を表現しようとしたのではないだろうか。表面上で満鉄を「日清合辦」と唱え、中国を密接な関係を強調しつつ、一方は高い姿勢そして強い警戒で中国と一線を画した態度をとっている。この態度は、また「満韓」(第四十八編)で肋骨くんという人物によって具象化されたのである。

一方、中国に対する好意を示した日本人も「満韓」で取り上げられていた。漱石は第四十八篇で、中国趣味を持った肋骨君を以下のように取り上げている：

肋骨君は支那通丈あつて、支那の事は何でも心得てゐる。あるとき余に向つて、辮髪迄辯護した位である。肋骨君の説によると、あゝ云ふぶくゝの着物を着て、派出な色の背中へ細い髪を長く垂らした所は、振へ付きたくなるほど好いんださうだから仕方がない。
(中略)

是程の肋骨君も正房の應接間は西洋流で我慢してゐる。其隣の食堂では西洋料理を御馳走した。其から襯衣一枚で玉を突く。其様子は決して支那ぢやない(後略)

(「四十八」)

表面上で中国に対する興味を見せながら、実際は対極的な西洋な生活様式を「我慢」したとのように、漱石は風刺味深く肋骨君の中国趣味の本質を見抜いていた。漱石は文末において「要するに肋骨君は支那好であると同時に、尤も支那に縁の遠い性質の人である」との結論を出し、まさに一見「支那通」でありながら、中国文化と一線を画したという「肋骨君」の態度を直裁に指摘した。このような態度は、また「日清合辦」を唱え続けていた満鉄の本質を再び表現できていた。

3.2 「満韓」からみる利権回収の問題

「満韓」では、中国の国際関係に明確に論じた内容はないが、中国人が使用した物に外国のものが登場していた。それは、ロシア軍が残したと言われた馬車、日本人発明の人力、そしてアメリカから輸入したタバコなどである。ロシアの馬車について、次のような描写がみられる：

…馬車に至つては、其昔日露戦争の當時、露助が大連を引上ぐる際に、此儘日本人

に引渡すのは残念だと云ふので、御叮嚀に穴を掘つて、土の中に埋めて行つたのを、チャンが土の臭を嗅いで歩いて、とうとう嗅ぎ當てて、一つ掘つては鳴動させ、二つ掘つては鳴動させ、とうとう大連を縦横十文字に鳴動させるまでに掘り尽くしたと云う評判のある一評判だから、本當の事は分からないが、この評判が凡ゆる評判のうちで尤も巧妙なものと、誰しも認めざるを得ない程泥だらけの馬車である。

(四)

「露助」や「チャン」などの表現は、当時ロシア人と中国人を軽蔑した言葉であり、中国人が「土の臭を嗅いで」馬車を「掘つては鳴動させ」るような表現も、いかにも風刺の度合いを超えたもので、先行研究でよく批判の対象となっている。一方、もう一つ注目すべきなのは、「泥だらけの馬車」という言葉から、土の中から掘り出した馬車を大事にせず、手入れのないまま利用した意味合いが込められている。また、人力についても類似した叙述がみられる：

人力は日本人の發明したものであるけれども、引子が支那人もしくは朝鮮人である間は決して油斷してはいけない。彼等はどうせ他の拵へたものだという料簡で、毫も人力に對して尊敬を拂はない引き方をする。…其引き方の如何にも無技巧で、たゞ見境なく走けさへすれば車夫の能事畢ると心得てゐる點に至つては、全く朝鮮流である。余は車に揺られながら、乗客の神質に相應の注意を拂はない車夫は、如何に能く走けたつて、遂に成功しない車夫だと考へた。

(四十六)

ここでも、人力車の引子を風刺した表現がみられ、先行研究において問題視されている。その一方、「尊敬を払わない」という表現から、日本の發明した人力車を大事にしないことを強調している。また、短い言及でありながら、梨畑の見学でアメリカのタバコが登場していた：

(梨畑の)主人は背の高い大きな男で、支那人らしく落付拂つて立つてゐる。案内の話では二千萬とか二億萬とかの財産家ださうだが、それは嘘だらう。脂の強い亜米利加煙草を吹かしてゐた。

(中略)御禮のため梨を三十錢程買つて歸りたいと云ふ様な事を話して呉れと頼んでゐる。それを大重君がすこぶる嚴肅な顔で支那語に譯してゐると、主人は途中で笑ひ出し

た。三十錢位なら上げるから持つて御歸りなさいと云ふんださうである(後略)

(三十五)

外に向けては「二千万とか二億万とかの財産家」と称して、慷慨に梨を来客にあげ、「落付き拂つ」た姿をもった中国人が描かれていた。しかし、漱石は「脂の強い亜米利加煙草を吹かしていた」という理由で、「財産家」の話を嘘だと決めつけていた。

以上の記述から、一見して中国とロシア、日本またアメリカとの関連性が見いだせにくい。しかし、当時中国の馬車は古代から伝わったものが多く、ロシア軍から残したものはごく一部だとみられる。そして、アメリカタバコの使用は確かに当時の中国で普及しはじめたが、一概に廉価な商品とは断言できない。そこで、この時期における中国の国際関係をもう一度深く考察する必要がある。

前文では、1909 年前後は中国で利権回収、また鉄道の所有権回収について少し触れていた。鉄道の利権をめぐって、中国と諸国の関係について、以下のような分析がみられる：

列國の清國鐵道に對する投資競争が一層激甚となる可きことは是也。滿洲に於ける東清南滿兩鐵道の事は姑く措き、山東にては獨逸が山東鐵道を守るあり、また獨英協同にて津浦鐵道を擁し、關内外、滬寧、淞滬以下揚子江附近の線路は、重に英吉利の手に在り、諒山、龍州、鎮越等諸鐵道は殆ど佛蘭西の下に在り、而して清人自身も亦大に覺醒し利権回収の聲囂々たるものあり…

「米人と清國鐵道」、『東京朝日新聞』,1909 年 6 月 15 日

日本とロシアが占領した鉄道以外、この時期において、ヨーロッパ諸国も中国の各地で鉄道の権利を所持していたとわかる。一方、当時ではアメリカが中国において、明確な鉄道所有権を持っていないこともうかがえる。

そして、「利権回収の聲」の中で、清政府は各国と交渉を試み続けていた。ロシアとの交渉を取り上げると、1909 年の 5 月前後の新聞報道では、「東清鐵道付屬地に對する清國の主權を認めつゝ、清國官吏をして右の主權を代表するの行動を為さしむ可し」⁷⁸とのような記事が掲げられていた。そのなかから、東清鉄道の付屬地に関する行政権力が、ロシアの独占から中国人官員の関与が合意されたことがうかがえる。また、満鉄に対する鉄道利権の主張も、前文ですでに触れていた。

利権回収に成功した同時に、鉄道を経営した際に、清国は深刻な資金問題を抱えていた。たとえば、1909 年において、清政府は広東省と湖北を連結する粵漢鐵道の敷設権を取り戻し、本格の建設を始めたが、資金不足のため却って欧米列強に借金する事態が起きていた：

清國官民は粵漢線の急設を必要とするに至り英清間の借款交渉起りしも…此の借款問題を英佛獨三國シンジケートに於て引受くるに決し合計五百十萬磅の借款契約近く成立すべく…

(「粵漢鐵道借款問題」,『東京日々新聞』, 1909 年 5 月 15 日)

清政府所有とはいえ、結局ヨーロッパ諸国からの借款によって鉄道を経営したとのように、上記の報道は利権回収の後に存在経営問題を指摘していた。また、同時期の記事では、

此結末により清國に如何程の利益有るや、未だ詳かならざれども、兎に角粵漢鐵道の布設権を取戻し、名義だけなりとも清國の自辦となせし所謂利権回収の目的は、先づ可なりに達したるものと言ふべく

(「清國鐵道事業と日本人」,『東京日々新聞』, 1909 年 5 月 19 日)

との評論があり、粵漢鐵道所有権の回収に積極的な評価がみられる反面、利権回収の実質は「名義だけ」のものと指摘している。実際、早くも 1908 年から『東京朝日新聞』において、利権回収を分析した論説がみつけれられる：

清國政府も亦北清の鐵道敷設の為には随分不利益なる條件を忍んでも、資金を借入れんと欲する…畢竟清國政府が、經濟上の利害よりは、寧ろ政治上の意味に重きを置きて、之を敷設せんと欲するが為のみ。…清國が強ひて利権を回収し、鐵道を是非とも自國の手にて敷設せんとらば、それも可ならんが、其は必ず損益を標準とする所の經濟鐵道ならざる可からず(後略)

(「清國の鐵道」,『東京朝日新聞』, 1908 年 6 月 28 日)

前掲した粵漢鐵道の報道と同じく、ここでも利権回収運動を政治上の名義だけを主張したもので、「經濟上の利害」を無視した強行的な行為だと論じていた。「資金を借入る」まで利権回

収を性急に進めた結果、結局実質の経済収益の問題に立ち向かわないといけなくなる。

ここでは、「満韓」の記述を再度振り返ってみる。ロシア軍の放棄した馬車は清政府が新に手にした東清鉄道の経営権を暗示したものだとなれば、日本発明の人力車は、満鉄占領の安奉線鉄道に真似し、清政府が敷設した競争線である錦斉鉄道だと解釈できよう。

「他の拵えたものだという料簡」だが、「乗客の神経に相応の注意を払わない車夫は、いかによく走けたって、ついに成功しない車夫だ」(第四十四篇)という表現は、まさに「政治上の意味に重きを置いた」清政府が、各国から鉄道を回収の後で結局「損益を標準とする所の経済鉄道ならざる可からず」ことを暗示したのではなかろうか。

またここでは、錦斉鉄道の敷設に関し、アメリカの影響を特筆する必要がある。日露戦争後において安奉線鉄道(安東県から奉天までの鉄道)の権益を巡って、中国は利権の回収を試み続けていたが、交渉が難航したまま 1909 年に長引いていた。1909 年から満鉄会社は安奉線の改築に着手して、以降日清協約の締結によって安奉線の所有権を手に入れた。

その対抗として、清政府が計画したのはまさに錦斉鉄道である。錦州から蒙古を経てロシアのシベリア線に連絡した錦斉鉄道は、新聞紙上では安奉線に対する「間接的な挑戦状」と論じられていた⁷⁹。

一方、錦斉鉄道の敷設は、また粵漢鉄道と同じく借金に頼ったもので、「英米シンジケートに委」していた。いわば、その実質は英吉利とアメリカの投資のもとで成立した計画だった⁸⁰。特に注目すべきなのは、いままで鉄道の中立を支持してきたアメリカも資本を投入していた。

近代においてアメリカが中国に対する戦略として、前掲の「米人と清國鐵道」は、「米人が眼を清國鐵道經營に注げるは一日の事にはあらず」と論じ、「清國學生教育等に依りて無形勢力の扶植に在り」とのことを指摘していた。

1907 年でアメリカの大統領タフトが「米國は清國の領地を得んとするものにあらず」と主張したように、以来アメリカ側は中国本土の鉄道の中立を唱え続けていた。そして、1909 年の『東京朝日新聞』から、「米國の清國鐵道熱」との記事をはじめ、「米人對清投資運動」を論じた記事がみられるようになっていた⁸¹。

華盛頓來電に依れば米國のシンジケートは政府の賛同を得て川漢鐵道の投資に加入せんとす但し政府は自ら實際上の協議に關係するを避け居れり

「米國の清國鐵道熱」、『東京朝日新聞』, 1909 年 6 月 13 日
奉天米國領事ストレイト氏は清國に投資を企て居る昨報米國資本家達の代表者となる

目的を以て其職を辭す可しと

「米人對清投資運動」,『東京朝日新聞』,1909年6月14日

同年9月のアジア協会で、中国駐在のクレーン公使も同じく「清人は他國の干涉だになからんには自ら其諸問題を解決する能力あり」と相変わらず鉄道の中立を支持したが、「清國は内國發展の爲め外國の資本材料を要するもの多し米國は之が割前を得るの決心を有する」⁸²と、中国鉄道に投資する意向を言明するようになった。

また、安奉線鉄道改築問題で「日清協約」が締結した直後、アメリカは強く反対を示して⁸³、その直後中国と協定し、錦斉鉄道の投資に合意した⁸⁴。中国の鉄道中立を唱えた背後、アメリカも鉄道に資本進出する意図が読み取れる。

ここで再度「満韓」に話を戻すと、漱石が語った「脂の強い亜米利加煙草」は、アメリカのタバコ帝国の創始者ジェームス・デュークが販売したタバコをさしたと思われる。

ジェームス・デュークは、19世紀から中国でのタバコの販売を試みていた。清末で禁煙令が出されていたにもかかわらず、田畑で一般民衆に売り込むなどの戦略によって、中国における煙草の販売を可能にした。特に、1902年からデュークのアメリカ煙草会社は、イギリスの帝国煙草会社と共同経営を行い、中国への煙草輸入を本格的に始めたのである。外貨排斥運動にもかかわらず、1909年において中国の煙草販売量は飛躍的な増長を遂げていた⁸⁵。

ジェームス・デュークが中国で煙草の輸入を遂行したことは、中国鉄道事業に対するアメリカ資本の浸透ぶりと同じ性質のものが見出せる。清政府は強力な鉄道競争線を建設し、外に向けて政治上の主権を強調した一方、その現実には自らアメリカの資本を受け入れていた。そこで、漱石が梨畑の主人を「財産家」と否定しつつ、いわゆる「脂の強い亜米利加煙草を吹かしていた」と指摘したのは、まさに利権回収の現実を暗喩していたと思われる。表では「落付拂つて立っている」ようで「財産家」と自称したが、実際アメリカ商人の経営戦略に影響され、自らアメリカの煙草をふかした。

以上をみてきたように、「満韓」の中で、盛んに登場していたロシア馬車、日本人の人力車、またアメリカタバコは、一見無意味な記述であるが、同時代の記事と結びつけると、漱石の鋭い見解が見出せる。漱石はロシア馬車と日本人力車の再利用によって、東清鉄道付属地から安奉線の経営問題を暗示し、またアメリカの煙草によって、アメリカの資本侵入という本質を批判していた。

「見境なく走けさえすれば車夫の能事畢ると心得て」いた表現(第四十五篇)によって、一時

の体面を守ろうとした清政府が外債と経営の問題を顧みず、性急に利権回収を遂行したことを暗示し、漱石は利権回収に強い疑問を示していた。

3.3「満韓」からみる「鷹揚」な中国人

国際関係以外、漱石はまた当時中国そのものにも目を向けていた。「満韓」における一般中国人に対する描写は、全文を通して「汚い」、「臭い」など、過激に思われる表現が多数であり、先行研究では、漱石が中国に対する蔑視的な感情だと解釈された場合が多い。

一方、全般の中国記述を考えると、漱石が注目したのは、生活問題、衛生問題より、その環境で平気に暮らした中国人ではないかと思われる。

その中で最も印象深いのは、満鉄の中央試験所を参観した後で、漱石がみかけた鳥かごを下げた中国人である。第九篇の文末では、彼は是公の話を借りて、以下のように中国人を描いたのである：

そこへ汚ない支那人が二三人、奇麗な鳥籠を提げて遣つて来た。支那人て奴は風雅なものだよ。着るものもない貧乏人の癖に、あゝやって、鳥をぶら下げて、山の中をまご付いて、鳥籠を樹の枝に釣るして、其下に坐つて、食ふものも食はずに大人しく聞いてゐるんだよ。夫がもし二人集まれば鳴き競をするからね。あゝ實に風雅なものだよ。

(九)

満鉄中央試験所の付近でみかけた情景であるが、漱石の目に映ったのは、侵略者の占領地経営とまるで何の関係もなく、また自分の「貧乏」で「汚ない」ことも問題とせず、長閑に自分の小鳥道楽に耽った中国人の姿である(図 102)。



図 102 小鳥趣味を持つ清末の中国人

(「支那風俗◆朝起の一つ小鳥を楽しむ◆路上のどかに小鳥を持ちて」, 絵葉書)

また前述した「忍耐力」のある苦力や、「落付き拂つ」た梨畑の主人と共通したイメージがうかがえる。苦力は汚い環境そして低賃金を従順に忍耐し、そして梨畑の主人はアメリカタバコの使用も意識せず、財産家と自称していた。その根底には、列強の中国侵略または貧困な生活について、そのまま受け止めた一般民衆の「鷹揚」な性格が強調されていた。

また、第四十篇における遼河の論述、そして第四十五篇で取り上げた老人の姿からも同じ見方が読み取れる：

(遼河の)河邊に立つて岸と岸との間を眺めてみると、水の量が泥の量より少いくらい濁つたものが際限なく押し寄せて来る。五萬年は愚か、一二ヶ月で河口は悉皆塞がつてしまひさうである。それでも三千噸位な汽船は苦もなくのそ〜上つて来ると云ふんだから支那の河は無神経である。人間に至つては固より無神経で、古来から此泥水を飲んで、悠然と子を生んで今日迄榮ゑてゐる。

(四十)

汚い遼河の水を飲んで、中国人が「悠然」で「無神経」に生活してきたということは、いかにも度を越えた表現であり、軽視的な描き方は否認し難い。一方、「無神経」の意味を取り直すと、当時の中国人の「鷹揚」な性格に対する激しい批判が読み取れる。また、老人に関する描写は、以下のような記述がみられる。

六十許の爺さんが大地に腰を据ゑて、両脛を折つたなり前の方へ出してゐた。其右の膝と足の甲の間を二寸ほど、強い力で刮り抜いた様に、脛の肉が骨の上を滑つて、下の方迄行つて、一所に縮れ上つてゐる。丸で柘榴を潰して叩き付けた風に見ゑた。…不思議な事に、黒くなつて集つた支那人はいづれも口も利かずに老人の創を眺めてゐる。動きもしないから至つて静かなものである。猶感じたのは、地面の上に手を後へ突いて、創口をみんなの前に曝してゐる老人の顔に、何らの表情もない事であつた。痛みも刻まれてゐない。苦しみも現れてゐない。と云つて、別に平然ともしてゐない。氣が付いたのは、たゞ其眼である。老人は曇りと地面の上を見てゐた。

ひどい傷を負って、決して「平然」でないにもかかわらず、老人の顔に「何らの表情もな」く、「痛み」も示していない。そして老人の周囲に集まっていた中国人も助けようとしていない。痛みに対する鈍感な姿は、同じく「鷹揚」な性格を暗示したとみられる。

実際、中国人の性格を「鷹揚」だと表現したのは、「満韓」だけでなく、早くも漱石の留学時代の日記から言及が見つけられる。

天下に英國人程高慢なる國民なし。世人は支那人を高慢と云ふ。支那人は呑氣の極鷹揚なるなり⁸⁶

また、漱石は友人の菅虎雄⁸⁷が南京出張の際に、書簡を寄せて、そのなかで次のような内容がみられる：

南京迄出張シタノダカラ可成豚ヲ觀察シテ帰ルトキニハ立派ニナツテキ給ヘ御前サンノ潔癖家ニハイイ訓練駄ダ是カラ禅学ナンドヲヤメテ豚学ヲヤルベシダ吾輩ハ唯ゴロクシテ居ル所丈ハ豚ヲ学ビ得テ其骨髓ヲ得テ居ルト自ラ信ジテ居ル其他モ追々稽古シタラ遼東ノ豚位ニハナレルダラウト思フ⁸⁸

前者の日記は、中国人の性格を「鷹揚」だと直裁に表現し、そして後者の書簡は、「豚」というような表現をしようしていた。豚という言葉も少し度の超えた表現だが、ここでは、友人の「潔癖」に反して取り上げた表現だとみられる。豚の性格を友人に勧めたのは、汚い環境で平気に生存できる性格を学び、言い換えれば辛い環境でも「鷹揚」な態度で処することを意味したと考えられる。

過度な比喻がある一方、当時では、漱石は「鷹揚」という言葉を非常に肯定的な意味合いで使用していた。しかし、「満韓」におくと、「鷹揚」は鈍感や自覚の不足という意味に転換し、中国人に対する激しい批判になっていた。満鉄の植民地建設を他人事のように取り扱い、鳥籠をとって悠々と休む中国人、川の汚い水を「無神経」に飲み続けた中国人、また表面で「財産家」と自称し、アメリカ文化の影響も意識していない中国人、さらに痛みには痺れていた中国人など、いずれも一般民衆が国民として自覚が不足したことを暗示したとみられる。

前述のように、対外的には利権回収を唱え続けていた中で、海外の留学生そして一部の知識人は運動を行いつつあったが、その反面、大多数の一般民衆が国土の独立に対する意識が未だ軽薄であった。それは、また魯迅が小説において描いた民衆像と共通したものがみられる。「満韓」の中で中国に対する描写は、過激な表現が頻出したことは否認できないが、もう一面では、漱石が清末中国について、民族的な覚醒の必要性を訴えた意図もうかがえる。以上の論点は、また同時期の記事から再確認できている：

(前略)利権回収の根元たる国民的改革の希望に對しては我等も深く同情を有す、清國にして誠に能く改革の實を擧げんとしたらんには我邦も満幅の道德的援助を與へたりしなるべし、されども清國の改革事業たるや微少にして無力、其改革の意が政府者流の間に行はれ居らざること彼の袁世凱の没落に徴しても知るを得べし、改革運動今日迄の結果は唯排外思想の助畏を致したるあるのみ、…清國は走らんとする前に先づ歩き習はざるべからず清國が其人口財源に相當したる地位を世界に占めんには先づ其人口財源を實用せざるべからず(後略)

「安奉問題と日清：八月七日倫敦タイムズ社説」、『東京朝日新聞』、1909年8月27日

「国民的改革」、「排外思想」の問題は漱石の中国表現と共通したものが読み取れる。

以上をまとめると、漱石は清末中国における利権回収の運動、中国国内の現実を冷徹に観察し、その問題を様々な中国人の姿に具象化し「満韓」に登場させたのである。

他国から馬車を手に入れたことに満足し慎重な取り扱いもせず、また財産家にもかかわらずアメリカが売り込んだ煙草を吸うなどの話によって、漱石は暗喩的な形で利権回収に鋭い見解を示していた。名義上の鉄道還付や体面上で鉄道競争に固執した一方、清政府はアメリカを含めた欧米諸国の投資を性急に吸収し、また実質の経済独立を失ってしまうことについて、彼は疑問の態度を取っていた。

また、漱石は一般民衆に目を向け、満鉄のそばで小鳥の道楽に耽った民衆から痛みに鈍感した老人まで、彼は様々な民間人の姿によって、当時民衆に普遍した「鷹揚」な国民性を激しく批判した。過激な言葉も使いながら、漱石は暗喩的な形で民族覚醒の必要性を論じていた。近代の中国は列強の経済援助に頼って利権回収を行うべきでなく、民族の覚醒によって本当の独立を図らないといけないことを、漱石は「満韓」によって鋭い見解を提示したのである。

おわりに

本稿は、夏目漱石の中国紀行文「満韓ところどころ」を検討対象として、『朝日新聞』の報道を参考にしながら、そのなかで反映された中国認識を考察した。日露戦争後の時代背景と結びつき、また同時代の記事と対照しつつ、「満韓」のなかで反映された漱石の見解を再検討した。

まず、漱石は批判精神を貫いて満鉄の様相を描いた。鉄道及び附帯事業の内容が欧米人向けで、一般民衆から遠ざけた現実を見出し、そして経費縮減に背けた盛んに設立した娯楽機関にも注目し皮肉的に表現した。また、満鉄上層部の豪華な生活様態から一般居留民の金儲けの心理を活写し、彼はある意味で正真正銘の視察を成し遂げていた。

次に、戦跡めぐりについて、話題性のある場所をわざと避け、日本人だけでなく戦時下におけるロシア人のエピソードもいくつ提示し、戦争の悲惨さを表現しつつ戦争に対する反省を促していた。

さらに、漱石は冷徹な姿勢を保って現実の中国に見つめ、そしてさまざまな人物像を通じてそれを活写し続けていた。ロシア馬車からアメリカタバコの話によって、清政府や一部の知識層が性急に利権回収を試みた一方、本質となる莫大な外債問題、経営問題を無視した実態を描き出していた。また、満鉄のそばで小鳥道楽に耽った民間人に注目し、中国における民族覚醒の必要性を提示した。

漱石が旅行した 10 数年後、言い換えれば第一次世界大戦が終結した後、芥川龍之介も中国で取材旅行を行い、旅行記を新聞雑誌に寄稿していた。時代が離れる一方、芥川龍之介の『支那游記』の内容は、漱石の「満韓」といくつ類似した部分が見つけられる。中国に対する最初の印象が中国のクーリーとの遭遇によって構成され、西洋式の舞踏場や中国趣味をもつ日本人までも同じく文章のなかで描かれていた。さらに、国家の現状に無関心な態度を示す中国人は、「満韓」でみられた小鳥道楽の中国人姿から、『支那游記』で別の姿に転換して再び登場していた。

ここで注意すべきなのは、本稿は「満韓」について、新聞記事の論調という「枠」の中において検討を進めてきていた。漱石の論述が時事報道と緊密に関係したことから、「満韓」の内容や言葉表現は、先行研究で論じられたように、時代の枠を脱していなかったこともある意味で確認できたのである。

一方、第一次世界大戦後になると、新聞紙上では論調がさらに多様化したため、「満韓」の検討方法を踏襲し、新聞の報道と対照することが難しく思われる。一方、芥川は旅行中において、

書簡を多数書き残し、そのなかで彼が中国に対する率直な感想が反映されていた。次章では、芥川の中国紀行文を取り上げ、書簡などの資料と対照しながら、第一次世界大戦後で芥川がみた中国を考察する。

- 1.岡野他家夫『増訂・明治言論史』,原書房,1983年12月28日,pp.131~142。
- 2.青柳達雄『満鉄総裁 中村是公と漱石』,勉誠社,1996年11月,pp.93~96。
- 3.日記から、「朝鮮団扇をくれる」(6月28日)、「露西亞煙草を二箱持って来る」(8月4日)、「満洲の払子一本と、煙草一箱をもらって帰る」(8月7日)などの内容が記されている(『漱石全集』第二十卷,岩波書店,1996年7月,pp.3~72)。
- 4.たとえば、8月6日の日記で、漱石が「飯倉の満鉄支社に赴く」内容があり、是公の紹介で満鉄の理事などを務めた清野長太郎などの重役と会見していたと書かれている。
そのほか、1909年の初めで『満洲日日新聞』に新任した伊藤幸次郎も、手紙と面談の形で漱石と連絡を取った内容も日記で記されている(8月13日、8月17日,前掲『漱石全集』第二十卷, pp.3~72)。
- 5.7月31日の日記より(出所同上)。
- 6.満鉄会編『満鉄四十年史』,吉川弘文館,2007年11月。
『満日』は後藤が総裁に就任した時期で発行されていたが、創刊当時では是公が実際の交渉に当たったという。(青柳達雄『満鉄総裁 中村是公と漱石』,勉誠社,p.98より)
- 7.『南満洲鉄道株式会社』,原書房,1974年12月。
- 8.久保尚久『満洲の誕生:日米摩擦のはじまり』,丸善,1996年2月,pp.196~203。
- 9.「満韓」において朝鮮に対する言及がほとんどなく、また日記でも関連な記述が不足したため、ここでは中国の旅程だけを紹介することにした。
- 10.前掲『漱石全集』第二十卷,岩波書店,1996年7月, pp.97~139。
- 11.『漱石全集』第十二卷,岩波書店,1994年,p.684。
- 12.同時期において満鉄が運営した鉄道路線は、大連長春間鉄道、煙台煙台灰坑間鉄道、南関嶺旅順間鉄道、蘇家屯撫順間鉄道、大房身柳樹屯間鉄道、奉天安東県間鉄道、大石橋営口間鉄道などが挙げられる。そのなかで、奉天安東県間鉄道(安奉線)は1909年9月に新たに改築の権利を得た路線である。(鶴見祐輔『<決定版>正伝・後藤新平(4)』満鉄時代1906~1908年,藤原書店,2005年4月,p.213より)
- 13.大連の旅行でであった帝国大学出身の人物を列举してみると、
中村是公:満鉄総裁、帝国大学法科大学法律学科出身。
立花政樹:大連海関関係、帝国大学文科大学英文学科第一期卒業。
田中清次郎:満鉄理事、帝国大学法科大学英法科出身。
川村鋤次郎:満鉄調査課長、「満韓」において「河村」と誤記。帝国大学法科大学政治学科出身。
俣野義郎:鉱業科、「満韓」において「股野」と誤記。帝国大学法科大学英法科出身。
須田綱鑑:川崎造船所大連出張所所長、帝国大学法科大学政治学学科卒業。
清野長太郎:満鉄理事、帝国大学法科大学出身。
村井啓太郎:満鉄公務課・運輸課、帝国大学法科大学政治学科
河西健次:大連医院長兼医長兼地方部衛生課長、帝国大学医科大学出身
どのように10人ほどに達したことが判明している(前掲『漱石全集』第十二卷及び原武哲「夏目漱石の『満韓ところどころ』新注解-旧満洲の今昔写真を添えて」を参考)。
- 14.漱石は10月17日に帰国したが、その翌日に「満韓の文明」を『東京朝日新聞』に掲載した。また同月の21日から、「満韓」の連載を始めていた。
- 15.満鉄の見学や招待は、ほとんど毎日の日記(9月6日~27日)で記述されている(前掲『漱石全集』第二十卷, pp.97~139より)。
- 16.漱石の旅を追跡するため、筆者は2015年9月において、中国の大連からハルビンまで旅行し、実地の考察を行っていた(旅行のルートについて、一部原武哲「夏目漱石の『満韓と

ころどころ』新注解―旧満洲の今昔写真を添えて』(『絃説』2(10), 2006年1月, pp.2-48)の考察を参考している)。

2015年の時点で、主要都市の間での移動に所要した時間は、

大連から瀋陽(当時の奉天):新幹線約2時間、快速列車約5時間半

瀋陽から長春:新幹線約1時間半、快速列車約4時間

長春からハルビン:新幹線約1時間、快速列車約3時間

(以上のデータは、「鉄路客戸服務中心」www.12306.cn(中国鉄道部サービスセンターオフィシャルホームページ)を参考している。2015年9月8日取得)

となっている。鉄道はそれほど発達していない当時では、さらなる移動時間が必要に思われる。特に図89で示したように、長春からハルビンへの旅行は日帰りに近い形で移動したため、その大部分の時間は往復の汽車で過ごしたと考えられる。

17.『四篇』(春陽堂,初版1910年)に収録されたのは「満韓ところどころ」、「文鳥」、「夢十夜」、「永日小品」の四篇である。

18.聞蔵Ⅱを参考にしている。『東京朝日新聞』と『大阪朝日新聞』における「満韓」の掲載は少し日にちのずれが見られるが、本稿は『東京朝日新聞』の記事を引用することにしている。

19.伊豆利彦「満韓ところどころ」について―上―漱石におけるアジアの問題』(『横浜市立大学論叢 人文科学系列』32(2・3), 1981年, p.1-22)を参考。

20同上。

21.『東京朝日』の体裁は、「一面(一ページ)八段組み、一段六十七行十八字詰で、八ページだて」となっている。(遠藤祐編「漱石主宰の「朝日文芸欄」(資料)」、『岩手大学学芸学部研究年報』22(2), 1964年3月, pp.1-18)。

22.「可成多方面」な内容を図った「朝日文芸欄」は、1909年11月25日から『朝日』の第三面の下段で掲載されはじめ、第23篇(11月23日)まで連載した「満韓」と位置が重なっている。長期休載を終えて「満韓」は第24篇だけが「文芸欄」の項目の下で掲載されていたが、第25篇からは第六面の冒頭に掲載位置が移動した(前掲「漱石主宰の「朝日文芸欄」」を参考)。

23.朝鮮に対する言及は第四十五篇における車夫の話だけに限っている。

その理由について、青柳達雄(「漱石と渋川玄耳『満韓ところどころ』中断の理由について」(『漱石研究』(11), pp.178-187, 1998年)の考察によると、同時期の『朝日新聞』において、渋川玄耳は「恐ろしい朝鮮」と題した朝鮮の紀行を連載していた。二人の紀行内容のかぶりや新聞紙の版面における位置などの問題は、「満韓ところどころ」が途中で休載した一つの理由と推測されている。

24.長塚節:歌人、小説家。代表作『土』は漱石の推薦で『東京朝日新聞』に発表されたという。(「人名に関する注および索引」、『漱石全集』, 第二十三巻, 岩波書店, 1996年9月, p.23より)

25.1966年版『漱石全集』, 岩波書店, pp.513-536。

26.岩波書店, 1988年。

27.崔明淑「夏目漱石『満韓ところどころ』―明治知識人の限界と「朝鮮・中国人」像」, 『国文学: 解釈と鑑賞』62(12), 1997年12月, pp.87-92。

28.「「インデペンデント」の陥穽―漱石における戦争・文明・帝国主義」, 『日本近代文学』(58), 1998年5月, pp.85-97; 『ナショナル・アイデンティティとジェンダー 漱石・文学・近代』, 2007年7月, クレイン。

29.春秋社, 1966年。

30.相馬庸郎「漱石の紀行―「満韓ところどころ」論」, 『國文學: 解釈と教材の研究』13(3), pp.94-99, 1968年2月。

31.『横浜市立大学論叢 人文科学系列』32(2・3), 1981年, pp.1-22。

32.『成蹊人文研究』8, 2000年3月, pp.13-40。

33.玉井敬之編『漱石から漱石へ』翰林書房, 2000年5月。

-
- 34.青柳達雄『満鉄総裁 中村是公と漱石』,勉誠社,1996年11月25日,pp.125。
- 35.二宮智之「『満韓ところどころ』と漱石の中国観(上)」,『岩国短期大学紀要』(36),pp. 1～23, 2007年;「『満韓ところどころ』と漱石の中国観(下)」,『岩国短期大学紀要』(37),pp. 1～25, 2009年。
- 36.水川隆夫『夏目漱石と戦争』,2010年6月,平凡社,pp.168～189。
- 37.「満洲鐵道會社」,『東京朝日新聞』,1906年6月10日。
- 38.『<決定版>正伝・後藤新平 4』によると、当時日本国内に向けて発行した満鉄株について、応募数は一億六千万余りにもかかわらず、その応募額は「二千万円の株式に対するものであって、しかも実際払込は、そのうちわずかに二百万円に過ぎなかった」という。
- 39.後述の「満鐵の改革」,『東京朝日新聞』,1908年11月6日による。
- 40.安奉線は安東(朝鮮)と奉天の間を結ぶ二百七十六キロ程の鐵道を指している(『漱石全集』第八卷,小品集,1966年より)。
- 日露戦争後で東三省鐵道の受け渡しは条約上一時成約したが、1907年から鐵道及び周辺事業を巡った権益問題が相次いでいた。清朝の末期を迎えつつあった中国では、利権回収の風潮が盛んになっており、鐵道の所有権特に安奉線の利権に関する交渉が繰り返され、1909年の初めまでは未決着の状態が続いた(『東京朝日新聞』1907～1909年の記事を参考)。
- 41.聞蔵Ⅱ,『東京朝日新聞』1908～1909年の記事を参考。
- 42.『漱石の思ひ出』,1928年,改造社。
- 43.伊東貴之の「中国—漱石の漢籍蔵書を見てわかること」(『国文学:解釈と教材の研究』53(9),2008年,pp.55～63)を参考した。
- 44.京城・同局刊,1908年。
- 45.京城・同局刊,1908年。
- 46.南満州鐵道地方課,1909年。
- 47.大連・南満州新聞社印刷部,1911年。
- 48.聞蔵Ⅱで欠落している。『東京朝日新聞』縮刷版を参考。
- 49.青柳達雄『満鉄総裁 中村是公と漱石』p.99～100、
クリスティー著;矢内原忠雄訳『奉天三十年』,岩波新書,1982年3月より。
- 50.「鐵道驛員の腐敗」,『東京朝日新聞』,1907年2月6日。
- 51.「現に昨年来の不景氣の爲め同地より内地に引上ぐるもの前後相踵ぎ満鐵會社が大規模に其敷地内に建築したる幾多の貸屋は今や貸屋札を斜にして相隣するの有様なり」、「満州の移民策 当局者の意見書」,『東京朝日新聞』,1909年1月17日。
- 52.林采成「満鉄における鐵道業の展開:効率性と収益性の視点より」,『歴史と経済』55(4),pp. 1-15, 2013年7月30日。
- 安藤彦太郎『満鉄:日本帝国主義と中国』,お茶の水書房,1965年。
- 53.同上。
- 54.南満州鐵道株式会社蔵版、満州日日新聞社印行、1911年12月。
- 55.「汽車王と語る」(上)、(下),『東京朝日新聞』,1906年7月14日,1906年7月15日
- 56.前掲原武哲「夏目漱石『満韓ところどころ』新注解—旧満州の今昔写真を添えて」によると、最初のヤマトホテルは、ロシア占領当時の「ダルニー・ホテルを増改築し」たところである(1907年頃)。
- 漱石が泊まったのは、一回目移転後のところで、当時の「満鉄本社の移転の跡を改修」したところ(児玉町)だという。児玉町は現在団結街と改名され、大連のロシア風情街に所在している。1909年当時営業が開始した大和ホテルも、大連、旅順、長春の三ヶ所しかなかったという。
- 57.写真は、前述した2015年筆者の現地考察による。場所の確認は、前掲原武哲「夏目漱石

『満韓ところどころ』新注解―旧満州の今昔写真を添えて(特集 中国観)」を参照している。下同。

58. 柏里,『東京朝日新聞』,1908年7月24日。

59. 「満洲概観 満洲の富源(下)」,『東京日々新聞』,1909年5月30日。

60. 出所同上。

61. 前掲『東京朝日新聞』。

62. 現在の中山広場近くの魯迅路(街の番号が外されているので確認できない)に所在し、現在「大連車務段」となっているが、両側の建物は手入れがよくされていない状況になっている。

63. 五十嵐智友『歴史の瞬間とジャーナリストたち 朝日新聞にみる 20 世紀』,朝日新聞社,1999年2月25日,p.37。

64. 田中清次郎(1972~?):帝国大学法科大学英法科出身。1906~1914年の間満鉄理事を勤めていた。伊藤博文の狙撃事件で負傷していた。(原武哲「夏目漱石『満韓ところどころ』新注解―旧満州の今昔写真を添えて」,『東京朝日新聞』,10月28日を参考)

65. 前掲水川隆夫『夏目漱石と戦争』,pp.177~182。

66. 夏目鏡子述;松岡譲筆録『漱石の思ひ出』,改造社,1928年。

67. そのほか、「無冠人」という人は、伊藤博文の狙撃事件も取材し、それを『東京朝日新聞』に発表していた(無冠人「藤公遭難の跡を弔ふ 四日哈爾濱にて」,1909年12月22日)。

68. たとえば「嗚呼忠魂碑」(『東京朝日新聞』,1909年11月28日)のような戦争回顧談を提示しながら、表忠塔の意味を唱えた記事が当時の『朝日新聞』で多く見られる。

69. 日露戦争当時に旅順口閉塞作戦で戦死した人物。戦後では軍神化されて、その功績がよく唱えられていた。漱石が広瀬中佐に対する姿勢について、前掲水川隆夫の『夏目漱石と戦争』(pp.201~206)では、詳しい紹介を行っている。

70. 前掲水川隆夫『夏目漱石と戦争』,平凡社。

71. 「満洲鐵道會社」,『東京朝日新聞』,1906年6月10日。

72. 「満洲の概観 邦人の発展力(下)」,『東京朝日新聞』,1909年6月3日。

73. 菅野正「日露戦争後、満洲還付をめぐる」,『奈良史学』,2002年,pp.79~86。

74. 「日貨排斥教唆 三十日奉天特派員發」,『東京朝日新聞』,1909年9月1日。

75. 『国文学: 解釈と鑑賞』62(12),1997年12月,pp.87~92。

76. 1909年9月9日の日記において、「従事員養成所。二組の生徒英語支那語。製図。火夫、車掌、別に支那人の電信技手(卒業日給40銭)」とどのような内容が記されていた(『漱石全集』第二十卷,岩波書店,1996年7月,pp.97~139より)。

77. 李潤沢「実務教育からみる日本の中国人教育の特徴―1910年代の満鉄付属地の状況を中心に―」,『国際日本学論叢』8,2011年3月11日。

78. 「露清協約私見」,『東京朝日新聞』,1909年5月18日。

79. 「錦州鐵道と日本」,「満韓ところどころ」(二)と同ページで掲載。「東京朝日新聞」,1909年10月23日。

80. 同上。

81. 「米國の清國鐵道熱」,『東京朝日新聞』,1909年6月13日。

「米人對清投資運動」,『東京朝日新聞』,1909年6月14日。

82. 「駐清米國公使演説(同上)」,『東京朝日新聞』,1909年9月24日。

「米國公使演説別報(同上)」,『東京朝日新聞』,1909年9月25日。

83. 「米國の日清協約反対」,「日清協約抗議説(同上)」,『東京朝日新聞』,1909年10月11日。

84. 「清國政府は英米シンヂケートの手に依りて錦州齊々哈爾間の鐵道を布設せし」,「蒙古鐵道と米國(同上)」,『東京朝日新聞』,1909年10月28日。

85. ジェームス・デュークはまた、アメリカの私立大学デューク大学の創始者である。

皇甫秋実訳, 孫曉校正, エドワード・コクス著「学会在中国做生意：英美公司香烟经销网的演变，1902～1941」, 『近代中国』, 2008 年, pp.358～398。

86. 『漱石全集』第十九卷, 岩波書店, 1995 年 11 月, p.206。

87. 菅虎雄: ドイツ語学者。学生時代から漱石の親友である。(「人名に関する注及び索引」『漱石全集』第二十二卷, 岩波書店, 1996 年 3 月, p.15 より)。

88. 書簡 279, 『漱石全集』第二十二卷, 岩波書店, 1996 年 3 月, pp.282～285。

第五章 中国取材に旅立った芥川龍之介の眼差し

～新聞掲載紀行『支那游記』から～

はじめに

今まで検討してきたように、近代日本人の中国観は日清戦争や日露戦争を経て大きく変貌してきた。日清戦争期では、中国人に対する敵愾心や軽視的な感情が民衆で普遍していたが、日露戦争期になると、戦争に対する反省な感情が台頭し、中国に対する客観的な論調も現れていた。

日露戦争後において夏目漱石は、当時日本の植民地である中国東三省に旅立ち、暴露的な精神を貫いて満鉄の様相から中国の現実を描き続けていた。そして、10 数年が経った第一次世界大戦後（1921 年）において、芥川龍之介は毎日新聞社の依頼を受け、中国の取材に旅立った。帰国後その経験をまとめ、彼は紀行文である『支那游記』を新聞及び雑誌に発表していた。

生涯初めてそして最後の海外旅行では、彼はどのように当時の中国をとらえ、また自分の見解を紀行によって読者に発信したのだろうか。

芥川の中国旅行については、以前からさまざまな考察がなされてきた。『支那游記』における中国についての表現が問題視され、特に中国側の先行研究においてはきびしく批判されてきた。近年では、芥川の書簡や文学作品などを手がかりにした再評価が行われたが、全体的な歴史状況に結びつけながら旅行の様相を把握し、詳しく芥川の中国観を検討するものはまだ少ない。

本稿は、芥川龍之介の新聞掲載紀行『支那游記』、また彼が書き残した書簡などを素材にして、1921 年前後における中国の歴史状況を分析しながら、芥川が見た中国を検討していきたい。

第1節 中国旅行の経緯及び紀行の概要

大阪毎日新聞社の海外視察員として、芥川龍之介は1921(大正10)年3月19日に東京を発って中国への旅路についた。途中で発熱し、大阪で一週間ほど滞在したため、正式に中国の上海に到着したのは3月30日である。上海に到着して以降の日程と路線は、表8と図102で示された通りである。

表8 中国旅行の日程

日付	日程
3月30日	上海到着。万歳館に宿泊
4月1日～23日	乾性肋膜炎で里見病院に入院 ²
4月23日～5月1日	退院後、上海城内を見物、中国有名人と会見
5月1日～5日	杭州で見物(西湖や秋瑾墓など)
5月5日～8日	上海で休憩し、本を買い込む
5月8日～11日	蘇州で見物(寒山寺)
5月11日～12日	鎮江を通過し、揚州で見物
5月12日～14日	南京で見物(秦淮や市内など)
5月15日～16日	上海に戻り、胃痛で診察を受ける
5月17日～24日	蕪湖、九江、廬山で見物
5月26日～30日	漢口で見物(黄鶴楼)
5月30日～6月1日	長沙に着き(洞庭湖、女子師範学校で排日運動に遭遇)
6月1日～6日	漢口で滞在し、游记執筆の困難を『大阪毎日』の学芸部長薄田に報告
6月7日～11日	洛陽に到着(龍門石窟を見物)
6月14日～7月10日	北京で見物、有名人(辜鴻銘、胡適)と会見
7月10日～7月12日	天津で見物
7月12日	天津から帰国の途に着く。途中で奉天、釜山(朝鮮)を経由する

(注)『支那游记』をベースに、そして張薈『芥川龍之介と中国 受容と変容の軌跡』を参考にして作成

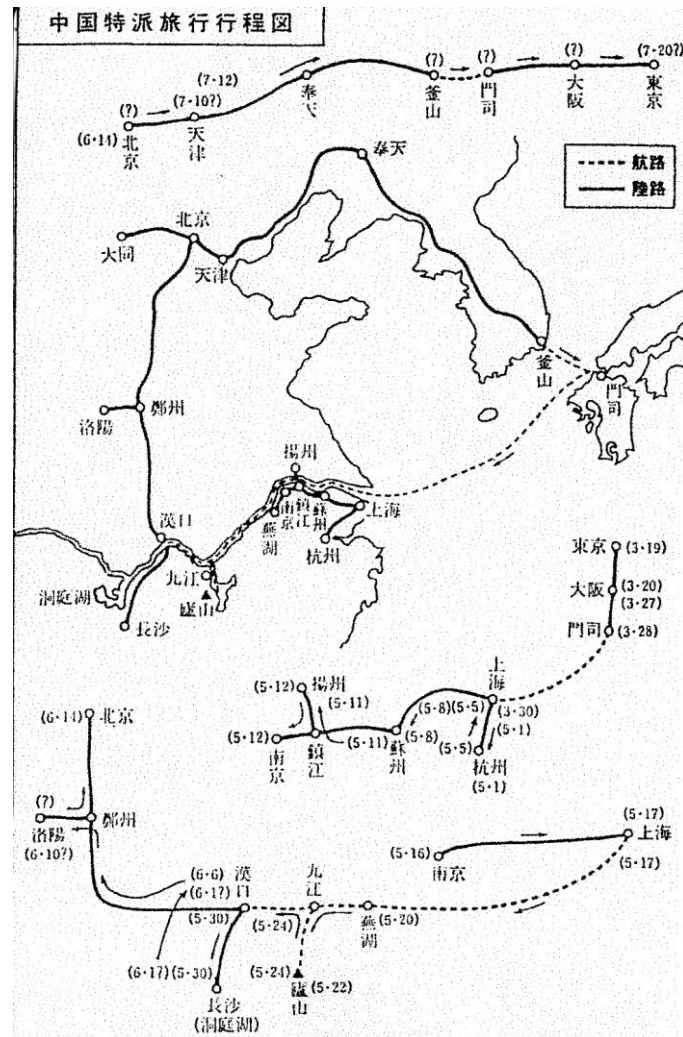


図 103 中国旅行の行程図(『芥川龍之介全集』第十九巻の「注解」部分より⁵⁾)

生まれてはじめての海外旅行だけあって、旅行の日程を充実したものにしようとしたことがうかがえる。また、芥川が中国旅行を行った1921年4月～7月という期間は、1921年五・四運動が終息に近づき、中国共産党が結成される前夜という時期であった。民族運動が盛んなこの時期において、芥川は中国で何を見たのであろうか。

4月上海に着いてから、20日余りは病院で治療を受けたため、実際に中国見物ができたのは、23日からといえる。上海での滞在時間は最も長い、病院で過ごす時間が半分を占め(23日間)、観光は一週間だけになっている。次に長く滞在したのは北京で、滞在時間が1ヵ月に達している。ほかに江南地域の旅は1日から4日のペースで行われ、主に上海を拠点に往復していたのである。また、長江地域での見物で漢口の観光は最も長く、合計10日間に達している。

以上各地における滞在時間をまとめて考えると、まさに芥川は旅行前で『毎日新聞』の薄田泣菫⁶⁾へ

の手紙で書いたように、「上海を中心とした南の印象記」と「北京を中心とした北の印象記」を書くために時間を配分を行ったといえる⁹。旅行の手配、つまり各地方の案内者や宿泊については、次の表10にまとめている。

表10 中国旅行の案内者及び宿泊状況¹⁰

地名	案内者(接待を含めて)	宿泊
上海	村田孜郎 ¹¹ トーマス・ジョンズ ¹² 友住君 ¹³ 余洵 ¹⁴	万歳館
杭州	村田孜郎	新々旅館
蘇州	島津四十起 ¹⁵ 島田太堂 ¹⁶	不明
揚州	高洲太吉 ¹⁷	高洲の家
南京	中国人案内者、 五味 ¹⁸	不明
蕪湖	西村貞吉 ¹⁹	西村の社宅(唐家花園)
漢口	水野 ²⁰ 宇都宮五郎 ²¹	水野の家
北京	中野江漢 ²² 波多野乾一 ²³ 、松本鎗吉 ²⁴ 、辻聴花 ²⁵	不明
天津		常磐ホテル

(注)『支那游記』(改造社、1925年初版)、『芥川龍之介全集』第八巻、第十九巻(岩波書店、1996年)をベースに作成

上記のように、案内者は概ね新聞関係者や中国研究の学者で、芥川の中国旅行は本格的な取材旅行だという性格が感じ取れる。そして、宿泊先は個人経営の一般レベルのホテルで、そして日本人経営のところが主となっている。

しかし、旅行の成果をまとめる『支那游記』は、前述したような上海と北京の両地を中心に「南の印

象記」と「北の印象記」というふうに綴られたのではなく、上海、江南地域、長江地域そして北京という四つの部分にわけて、地域ごとに記述される形になっている。

具体的な掲載状況について、「上海游記」は『大阪毎日新聞』(1921年8月17日～9月12日)において、「江南游記」も同じく『大阪毎日新聞』(1922年1月1日～2月13日)において連載されていた²⁶。それに対し、「長江游記」²⁷は『女性』第6巻第3号(1924年9月1日)において、「北京日記抄」は『改造』第7巻第6号(1925年6月1日)においてそれぞれ一回ずつしか掲載されていない²⁸。「上海游記」、「北京日記抄」は、大別して地方景観の印象記、観劇記、そして中国名人との会見記などという内容となっており、そして「江南游記」、「長江游記」は概ね名所の印象記となっている。1925(大正14)年において、全紀行を収録した『支那游記』²⁹が出版された。『支那游記』には、4篇の掲載紀行がまとめて収録された上、「前置き」や「雑信一束」のような内容も新たに加えられていた。本稿は、著者が入手できた1925年初版の『支那游記』(以下『游記』と略す)を考察対象とする³²。

第2節 先行研究の現状と検討方法について

『游記』で描かれた中国について、現代の研究者によって様々な考察が行われてきた。まず、日本側の先行研究について、2000年以前のものを考えてみると、『支那游記』に対する評価は概ね芳しくない。その中で、吉田精一の論説が代表的である。吉田氏は『芥川龍之介』³⁶において、『支那游記』は「支那の現在や将来を深く洞察し得たものではない」と評価している。彼の論説に影響された研究が多く、内村剛介は「未熟と成熟—上目づかいの「支那游記」(芥川龍之介—新しい評価軸を求めて)」³⁷において、芥川は中国で自身に対する「絶縁体の新文化」に接した際に、「それにどう対応すべきかをしらない」ので、「求めた。会った。書いた。しかしそれだけである」と、芥川が革命中の中国に対する態度を批判している。さらに、和田博文は「芥川の上海体験(特集:芥川龍之介—モダン=現代とは何か)」³⁸において、芥川は下層の中国人対し、「嫌悪感を催すだけ」で、「上海への拒否感情をはっきりと表している」と論じている。

一方、『芥川龍之介全集』、『芥川龍之介事典』の編集に携わった関口安義は「中国旅行—芥川龍之介の道程(九)—」³⁹、『芥川龍之介とその時代』⁴⁰や『芥川龍之介の歴史認識』⁴¹などにおいて、芥川の游記をベースにして緻密な考察を行った。2004年までの論考では、関口氏は中国旅行が芥川の「期待を裏切った」旅と結論づけたが、芥川の全体的な中国観をまだ明確にまとめていない。しかし、2012年で出版された『芥川龍之介新論』において、関口氏は「当時の日本の検閲制度を考慮」する必要性を提示し、積極的に芥川の日本の帝国主義政策に対する反省を論じた。さらに、芥川が章炳麟をはじめ

とするこれからの中国を憂う文人たちに触れ、影響を受けた視点で『游記』の中の諸編をはじめ、中国を材料にして描いた作品を書いていることについても検討を行っていた。

次に、中国側の先行研究について、2000 年以前のものを考えてみると、『游記』に対する解説がまだ不十分に思われる。1930 年代の中国の名作家である巴金⁴²は『游記』を強く批判し、「私は反感を抱かざるを得ない」と論じたことがあった。このような評価は、巴金が生きた時代にも深く関係していたとみられる。

2000 年前後の研究を考えると、祝振媛は『游記』の内容について、「西洋世界のような「富人の天国」を一步出た、「貧乏者の地獄」である中国が芥川の「神経を強く刺激」し、「彼は差別的な言葉使いと苛酷な風刺を投げている」と評した。そして芥川は、「劣等民族を見下ろすような嫌悪の目付き」で中国を嘲っていると批判している⁴³。

また、劉建輝は『魔都上海：日本知識人の「近代」体験』⁴⁴において、「下品な西洋」と上海を拒んだ芥川龍之介の姿を論じている。劉は芥川が「みずから夢見た『詩文にあるやうな支那』をもって『猥褻な、残酷な、食意地の張った、小説にあるやうな支那』を厳しく裁断した」と考え、中国旅をした芥川が「あくまでその『本場』性を求めている」と批判していた。

しかし、2000 年以降『游記』に対する見直しが行われはじめた。特に以前『游記』を厳しく批判した中国側の研究は、2006 年から大きな評価方向の転換を迎えている。それは、2006 年で秦剛や陳生保・張青平による『游記』の中国語訳によって、断片的な記述ではなく『游記』に対する全体的な把握ができるようになったからだといえる。

まず、翻訳者自身が与えた評価として、秦剛訳版の「訳者序」において秦剛は「中国国民の愛国情熱が芥川龍之介に与えたショックと衝撃⁴⁶が目立ち、日本の経済や政治による中国への侵略に対する批判が書き込まれている⁴⁷」と『游記』を批評し、陳生保・張青平訳版においても陳生保は「高い歴史的価値」を持っている作品であるとし、『游記』に良い評価を与えている。

それに加えて、秦剛は「芥川龍之介と谷崎潤一郎の中国表象—〈支那趣味〉言説を批判する『支那游記』」⁴⁸において、同時期に中国に旅した谷崎潤一郎と対比しながら、芥川の中国旅について新しい視点を提示している。秦氏は、谷崎は租界都市（上海や天津）に対し、「欧羅巴の地を踏んでゐるような嬉しさ」を表出したのに対して、芥川は「支那ノ風景ハ全然西洋輸入ノ文明ト調和シナイ」と反対の立場を示したと論じている。そして、秦氏は「支那游記—日本へのまなざし（特集=芥川龍之介再発見—没後 80 年）—（新視覚による作品の再発見）」⁴⁹において、『支那游記』からみる芥川は、「自意識の中で「日本人」である自己を客体化するところから始まり、また外部的な視点から現下の日本を批判的に捉えることで」終わったとも論じている。

さらに『支那游記』における〈私〉—「文芸的」紀行文の成立と記述者の表現意識をめぐって」⁵⁰において、秦氏は「芥川の『支那游記』の中では、「支那」の「国民的腐敗」を遠慮なく批判したとしても、それを直ちに中国人のナショナリティーに結びつけるような独善的臆断が避けられているのである。のみならず、それとは逆に、「日本人とは何か」が、所々で問題化されている」と『游記』を評価していたのである。

翻訳者自身の論述以外、単援朝は芥川の中国への見方について、「『現代の支那』に対する中国人自身の批判を援用して在留日本人社会の甘い中国観を批判するものである」⁵¹という見解を示し、管美燕は「上海の位相—芥川『上海游記』と劉呐鷗の上海（やさしい かなしい 芥川龍之介）」⁵²においても、「中国への軽侮が現れた作品というより、古き良き時代の伝統を失っていく一方の現実の中国に対して、芥川が嘆きをこめて書いたものであるようにおもう」と、『游記』を良い方向で論じている。そのほか、張蕾は『芥川龍之介と中国 受容と変容の軌跡』⁵³において、作品の面、思想(政治)の面、健康の面、作風の面から中国旅行の意味を考察した上で、『游記』を再評価している。

まとめると、日本側の研究について、2000 年初頭までのものでは、芥川が表面的に中国をとらえ中国政治にあまりにも無関心だという論述や、『游記』はほかの作家よりロマンチックな部分が欠け、「非常にやせた、つまらない旅行記」⁵⁴と評したものが多くみられる(92 年、97 年関口安義の論述を除いて)。そして、2001 年頃から芥川が置かれた当時の時代背景を考え、『支那游記』以外に彼が書き残した文章との対照を行い、芥川の中国旅行の内実を考察しつつ、『支那游記』に対する再評価が行われている。

一方、中国側の研究について、2006 年以前『游記』に関する評価は、芥川が中国を「誤解」しているとし、彼の「差別的な言葉使いと苛酷な風刺」を批判する研究が多く、芥川自身の「態度の傲慢さ」を指摘し、彼を「自惚れる知識階級」だと決めつけるものが多い。しかし、2006 年に『游記』が秦剛や陳生保・張青平によって翻訳され中国で出版された後、『游記』に対する再評価が少しずつ行われるようになったとみられる。

つまり、『游記』を検討する際に、芥川が同時代の中国人との交流や、書簡、さらに関連作品などで表出した中国観に対する考察を抜きにしては、その文章表現が蔑視にとらえられやすいと考えられる。いままでの先行研究の中には、上海や北京の紀行を詳しく考察するものが多く、『游記』の全般的な把握や、歴史背景と結びつけながら、各地について芥川が書き留めた記述の深意に対する分析がまだ不足しているのだともいえる。それで、本稿は以上の先行研究を踏まえて、『游記』における各地の論述を 1921 年前後の歴史状況に結びつけて、『游記』から芥川が 1921 年前後の中国を見たときの、その心情の変化を追跡してみたい。

中国旅行に対する最も率直な芥川の感情を伝えたものとして、芥川が日本国内の親友に送った書簡があげられる。ここではまず彼が書き残した書簡を整理しておきたい。

1921 年前後、芥川が書簡の中で中国旅行⁵⁵に言及した便りは 52 通に達している。そのなかで、明確に各地域への印象がうかがえるものを取り上げてみると、南から順に上海は 5 通、江南地域は南京が 1 通、杭州が 4 通、蘇州が 5 通、長江地域は蕪湖が 1 通、廬山が 1 通、長沙が 2 通、そして北上して北京は 7 通、天津は 2 通となる。

まず、最も滞在時間の長い上海について、芥川は以下のような内容を便りに書き付けている：

南京路は上海の銀座通り、僕の行くカツフェ、本屋等皆此処にあり新しい支那の女学生は額の髪へ火鋏を入れ赤い毛布のショオルをする それがこの通りを闊歩する所は此処にのみ見らるべき奇観ならん

(4 月 20 日 小島政二郎⁵⁷ 宛 絵葉書)

これは上海城内⁵⁸の湖心亭⁵⁹なり この中に支那人たちは皆鳥籠を携へ来りて雲雀、目白の声なぞに耳を傾けつつ悠然として茶を飲んでゐる 但し亭外は尿臭甚し

(4 月 23 日 岡栄一郎⁶⁰ 宛 絵葉書)

(前略)昨日退院今日はこれから村田君と支那文人訪問に出かける所です。昨日は退院後すぐに城内を見物、乞食と小便臭いのになかなか驚嘆しました 以上

(4 月 24 日 上海万歳館 薄田泣菫 宛)

この公園 Public Garden と云へど支那人の入るを許さずしかもシベリア辺から流れこんだ碧眼の立ん坊はぞろぞろ樹下を徘徊している

(4 月 25 日 岡栄一郎 宛 絵葉書)

目下上海にぶら～してゐる 上海語も一打ばかり覚えた この地の感じは支那と云ふより西洋だ
しかも下品なる西洋だね 僕の今坐つてゐる料理屋にも日本人の客は僕一人あとは皆西洋人だ
壁上の英国の皇后陛下の写真がそれを愉快さうに見下してゐる

(5 月 宛名不明)

(傍線筆者、以下も同じ)

一般の中国民衆が住んだ中国人街「城内」について、人々の長閑さ、「尿臭甚し」のような評価や、「下品な西洋」などの表現が印象的である。そして、同じく南地域に属する江南地域について、杭州は以下のように記されている：

杭州より一筆啓上、西湖は小規模ながら美しい所なりこの地の名産は老酒と美人、

春の夜や蘇小にとらす耳の垢 (5月2日 松岡譲⁶¹ 宛 絵葉書)

西湖は余り繊巧な美しさが多すぎて自由な想像を起させない(雷峰塔⁶²だけは例外だが)

(5月4日 佐佐木茂索 宛 絵葉書)

杭州に来た今新々旅館の一室に名物の老酒をひっかけてゐる窓の外には月のない西湖、もう
螢の飛ぶのが見える多少のノスタルジア 以上

(5月4日 南部修太郎⁶³ 宛 絵葉書)

昨日杭州より帰来、西湖は明画じみた景色です 夜はもう湖の上に螢が飛んでゐるのに驚きま
した 杭州は名高い老酒の産地ですが僕のやうな下戸では仕方ありません(後略)

(5月5日 下島勲⁶⁴ 宛 絵葉書)

以上引用したように、芥川は西湖が「小規模」で美しい一方で、却って「自由な想像を起させない」
という批評を与えている。そして、同じく江南の名地である蘇州について、彼はこのように便りに記して
いる:

(前略)蘇州へ来ました 昔の姑蘇の都ですが稍頹廢の気味のある、人気の好い水の多いところ
です 乗物に人力車がない為此处では轎子、驢馬によるばかりです 昨日一日驢馬に乗つた
ので大分もう腰が据まりました頸へ鈴をつけた順良な驢馬です(後略)

(5月10日 小沢碧童⁶⁵ 宛)

(前略)蘇州は杭州より遙に支那的なり 水に臨める家家の景色は直に聯芳樓記⁶⁶を想起せしむ
(後略)

(5月10日 岡栄一郎 宛 絵葉書)

(前略)蘇州へ来ましたこの孔子廟は宏大なものだが蝙蝠の巢になつてゐる 行くと廟内に雨の
やうな音がするから何かと思ふと蝙蝠の羽音だと云ふから驚く 床は糞だらけ、恐る可く臭い(後
略)

(5月10日 小穴隆一⁶⁷ 宛 絵葉書)

外はともかくも蘇州だけは先生におめにかけたいと思いました 寒山寺は俗悪無双ですが天平
山の如きは一山南画中の山景です(後略)

(5月10日 下島勲 宛 絵葉書)

蘇州では留園と西園は留園の規模宏壮なのに到底及ばぬしかしどちらも太湖石や芭蕉や嚴桂が白壁の院落と映発している所は中々見事だ願くばあんな邸宅に一日中支那博奕でも打ちくらして見たい

(5月14日 中戸川吉二⁶⁸ 宛 絵葉書)

「蘇州だけは先生におめにかかけたい」という表現から、芥川は蘇州に親しみを感じたようである。「杭州より遙に支那的なり」、「聯芳樓記を想起せしむ」などの表現からみると、彼は蘇州のような中国的な名勝に好感を抱いたことも推測できる。一方では、蘇州において「蝙蝠の巢」になった孔子廟や「俗悪無双」な寒山寺のような頹廢した景觀も存在し、芥川はそれに不快感を示している。杭州や蘇州に与えた好感的な表現に反し、芥川は続いて観光した南京に対して簡潔かつ鋭い評価を与えている：

(「南京名所烏龍潭」の写真の余白に) 支那ノ風景ハ全然西洋輸入ノ文明ト調和シナイ コノ兵隊ノ風流サヲ見給へ

(5月16日 小穴隆一 宛 絵葉書)

揚州に関する直接な批評は見あたらず、長江沿岸の感想をもらす便りが5月20日から現れている：

蕪湖 龍 (「天馬会第一回絵画展覧会出品(高璞女士像)丁悚油絵」と題した絵葉書)

これは現代の支那の洋画なり 日本画でも近頃上海の日本人倶楽部に展覧会を催した支那人あり この先生は栖鳳なぞの四条末派の影響を受けてゐた 要するに現代支那は芸術的にダメのダメのダメなり、

(5月20日 小穴隆一 宛 絵葉書)

廬山⁶⁹をすつかり見物するには一週間ばかりかかるさうです 旅程を急ぐ為山上に一夜とまつて明朝九江へ下りすぐに漢口へ上るつもりです 今の廬山は殆ど西洋人どもの避暑地にすぎません(後略)

(5月23日 下島勲 宛 絵葉書)

揚子江、洞庭湖悉濁水のみもう沢国にもあきあきした漢口へ引返し次第直に洛陽、龍門へ向ふ筈

(5月30日 松岡譲 宛 絵葉書)

(前略)長沙は湘江に望んだ町だが、その所謂清湘なるものも一面の濁り水だ 暑さも八十度を

越へている バンドの柳の外には町中殆樹木を見ぬ 此処の名物は新思想とチブスだ 以上

(5月31日 滝井孝作⁷¹ 宛 絵葉書)

(前略)漢口に止まる一週日、去るに臨んで多少の離愁あり

(6月6日 小島政二郎 宛 絵葉書)

やつと洛陽龍門の見物をすませました 龍門は天下の壯観です 洛陽は碑林があるばかり、場外には唯黄雲の如き麦畑が続いてゐます

(6月10日 下島勲 宛 絵葉書)

つまり、芥川には長沙や廬山などを徹底的に批判した姿勢がみられる。上海を批評した際と同じく、芥川は特に「現代支那」、「新思想」また「西洋人」などの存在を意識しているようである。しかし、古蹟のような龍門に対し、芥川は「天下の壯観」だと関心を示している。

また、北上して最終目的地である北京に到着した途端、芥川は親友に便りを送りはじめたようである。

北京着 北京はさすがに王城の地だ 此処なら二三年住んでも好い(後略)

(6月14日 岡栄一郎 宛)

そして、北京に深く引かれたとみられ、連日の絵葉書の記述には、北京に対する愛情が惜しみなく表現されている：

拝啓北京にある事三日既に北京に惚れこみ候、僕東京に住む能わざるも北京に住まば本望なり

昨夜三慶園に戯を聴き帰途前門を過ぐれば門上弦月ありその景色何とも云へず北京の壮大に比ぶれば上海の如きは蜚市のみ

(6月21日 室生犀星⁷² 宛 絵葉書)

北京は王城の地なり 壯観云ふべからず御府の画の如き他に見難き神品多し 目下大同の石仏寺に至らむとすれどストライキの為汽車通せず北京の本屋をうろついている 以上

(6月24日 滝井孝作 宛 絵葉書)

(前略)僕目下支那服にて毎日東奔西走してゐます 此処の御府の画はすばらしいものです (文華殿の陳列品は貧弱)北京なら一二年留学しても好いと云ふ気がします 又本を買ひこみま

した

(6月24日 下島 勲 宛 絵葉書)

僕は今北京にゐます北京はさすがに王城の地です、僕は毎日支那服を着ては芝居まはりをしてゐます 以上 (中原虎雄⁷⁴ 宛 絵葉書、北京東単牌楼 6月24日)

花合歓に風吹くところ支那服を着つつわが行く姿を思へ

(中略) 文華殿の画は大した事なし、御府の画にはすばらしいものがある画のみならず支那を是非一度君に見せたい (6月27日 小穴隆一 宛 絵葉書)

(前略)僕はまだ少時北京にゐる 芝居、建築、絵画、書物、芸者、料理、すべて北京が好い、以上 (6月27日 恒藤 恭⁷⁵ 宛 絵葉書)

このように感興の湧いた表現が続き、芥川が北京に対する好感は言うまでもなくうかがえる。しかし、帰国する途中で通過した天津で見学すると、彼の評価はまた逆転する。

天津貶謫行

なそがれはかなしきものかほろばると夷の市にわれは来にけり

夷ばら見たり北京の駱駝より少しみにくし驢馬よりもまた

(中略) 索漠たる蛮市我をして羈愁万斛ならしむ一日も早く帰国の予定

(7月11日 松本鎗吉⁷⁶ 宛)

天津へ来た此処は上海同様蛮市だ北京が恋しくてたまらぬ

(7月12日 小穴隆一 宛 絵葉書)

上海の町風景を表現する際と似ていて、天津に与えた評価を表す部分、共通して「蛮市」のような表現が目立っている。このような酷評を与えつつ、彼はもう一度「北京が恋しくてたまらぬ」というふうに、北京への愛着を再確認している。

以上、書簡の内容を並べてみて各地域の旅行における芥川の子感情の起伏を探ってみたところ、彼は中国全体に対し一貫した態度を取らず、地方ごとに中国文学や絵を連想しつつ、具体的に書き残していたのである。

各地域ないし名所に与えた評価から、概ね上海、南京、蕪湖、廬山、長沙に対し明らかな反感を示し、そして北京に明らかに愛着を示したことが判明できる。そのなかで、上海と北京に対する批評が特に対照的ともいえる。そのほか、杭州、蘇州については好感と反感が両立した評価が見出せる。

ちなみに、旅行内容の重要な一部として、芥川が中国の有名人との面会も注目すべきである。面会の内容に関して、書簡にも形跡がみられる：

鄭孝胥⁷⁷、章炳麟⁷⁸などの学者先生に会った 鄭先生などは書ではずつと前から知つてゐたから会つた時にはなつかしい気がした 章先生も同様 この先生はキタナ好きなものだから細君に離婚を申込まれたさうだが襟垢のついた着物を着て古書堆裡に泰然としてゐる所は如何にも学究らしいかつた

(4月26日 佐佐木茂索⁷⁹ 宛 絵葉書)

(前略)章炳麟、鄭孝胥、李經邁等の旧人及余穀民李人傑等の新人に会ひました 李人傑と云ふ男は中々秀才です 場所は徐家滙は領事館が まだ見物許可証をくれないので御教示の書物はまだ見つかりません 明後日は杭州へ出かけます 頓首

(4月30日 沢村幸夫⁸⁰ 宛)

以上引用した内容からみると、芥川は中国の文人たちとの会見について、ユーモア及び好感をもって記していることがわかる。

全体的な評価の内容に関して言えば、否定的に表現された対象として「現代支那」、「新思想」また「西洋人」が目立つのに対して、肯定的な対象は北京のような古い街のおゆに表現されることが特徴的である。一部の先行研究のように上海だけを取り上げると、「蛮市」のような表現は確かに蔑視感情に受け止められやすい。しかし、芥川が北京に対し「東京に住む能わざるも北京に住まば本望なり」というほどの称賛をしていることから、一概に芥川が「劣等民族を見下ろすような嫌悪の目付き」⁸¹で中国をとらえたとはいえない。それで書簡や『游記』について、全体的な把握を行う必要はいうまでもない。

芥川はなぜ上海のような近代化した地域を批判し、北京に愛情を抱いたのか。また同じ地域においても称賛と批判が交錯しているのか。そして、彼はどういう風にこの感情を『游記』で表現しているのか。果たして書簡の表現がそのまま『游記』に反映しているのか、具体的にどのように文章で表現されているのか。つまり、芥川がどのような眼差しを持ち、中国旅行から何を見出したのか。以上のような課題について、次節から詳しく検討する。

具体的な検討方法として、当時の歴史状況を解明しつつ、文人の会見を含め、中国を見つめる芥川の心情の変化を『游記』に求めてみた。その上で『游記』を通じて読者に発信したいと考えた内容を考察していきたい。

第3節 芥川が記した上海の印象記

3.1 芥川が中国に対する第一印象 ～眼差しの転換～

第二次アヘン戦争(1842年)以降、上海は南京条約によって開港された。それ以来、外国資本の中国進出の拠点となり、当時ではすでに国際大都市として世界に名を知られた。1890年代から1900年代において、上海在住の外国人は四千人未満から七千人未満であるが、1920年代になると、23,000人まで跳ね上がったのである。⁸²また、上海の租界は中国において「最も早く成立した租界であり、模範租界と稱せられる」⁸³ほど高く評価されていたのである。

租界とは、中国の「開港場における外国人居住区」を意味し、当時では「清潔な街を求める外国人側と外国人との雑居を嫌う中国側の利害が折り合ってきた」区域を指している⁸⁴。1921年前後における上海租界の区域配分は、図104⁸⁵で示された通りである。

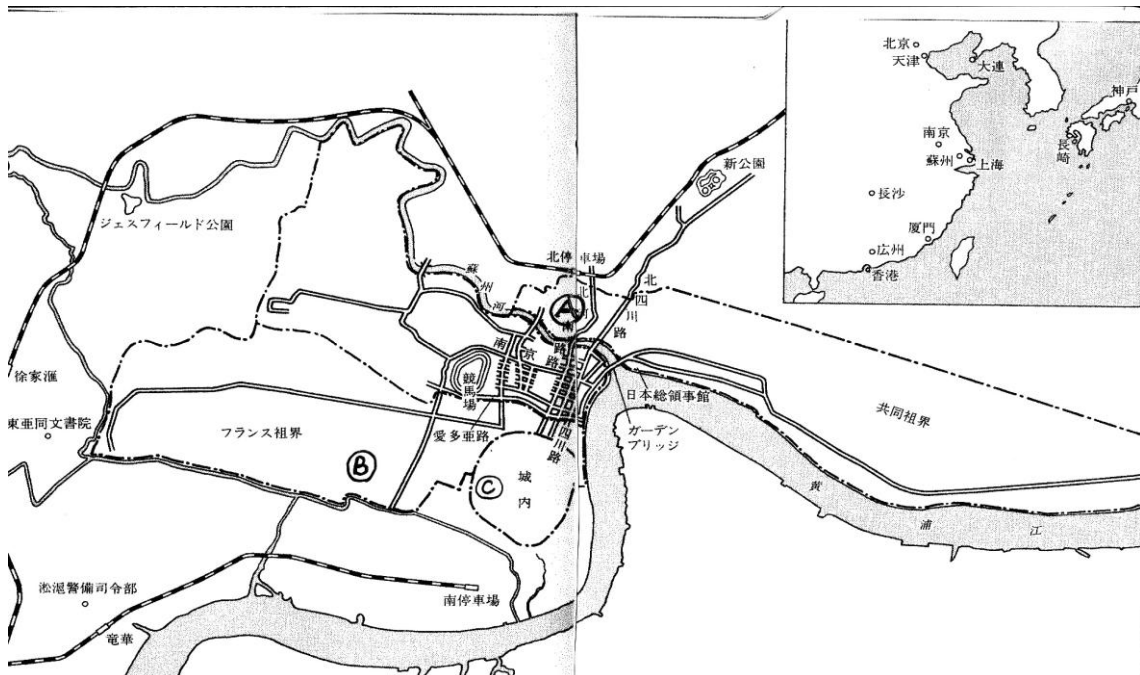


図104 上海市街図

芥川の中国旅行は、まさに各国の人々が集まった上海から始まったのである。そして、彼の中国に対する第一印象は、上海見学によって形成されたともいえよう。1921年3月30日、芥川が上海に上陸し、日本で親交を結んだ旧友ジョオンズに再会した。宿泊を決めた後、芥川はジョオンズの案内で上海における一日目を過ごした。そして、上海での最初の一晚によって、芥川は上海ないし中国に対する第一印象を持ち、またその印象は以降の旅で中国をとらえる姿勢にも影響したと推測できる。

この第一印象を記したのは、「上海游记」の第1～3節の「第一瞥(上)」～「第一瞥(下)」である。次か

ら、「第一瞥」を通じて、芥川の中国の初体験を追跡してみる。

「第一瞥」(上)は、芥川が上陸して宿泊地にたどりつくまでの体験した人や物について、「(中)」は、ジョオンズと一緒に夜の食事を済まし、散歩した後で一軒目のカフェに入った時の見聞について、最後に「(下)」は散歩してまた二軒と三軒目のカフェで喫茶した時の遭遇について述べている。

まず、一日目における芥川の移動地域についてまとめておきたい。当時の上海では黄浦江沿岸に各国の船が碇泊する碼頭⁸⁶が建てられ、芥川もそこから中国に上陸したと推測できる。図 103⁸⁷のように、碼頭は賑やかな街道で囲まれ、そして街道を挟んだ向かい側は欧米式の建築が並んでいる。

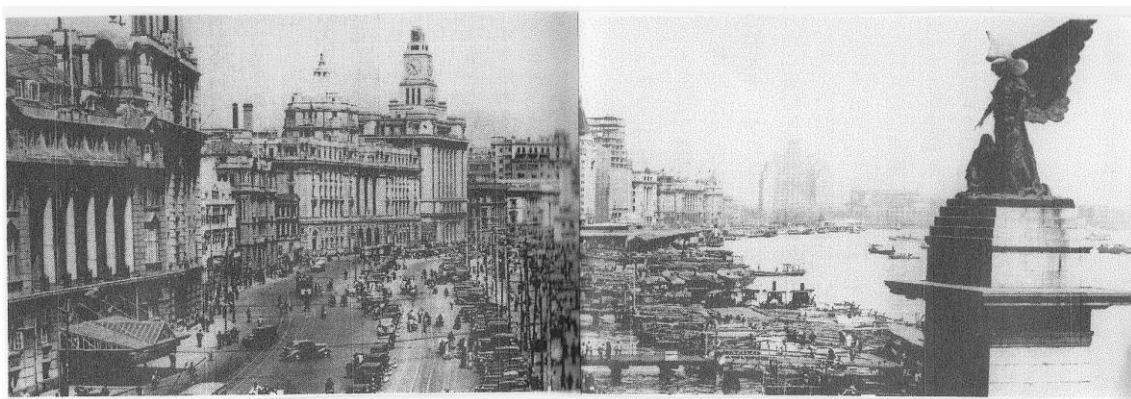


図 105 碼頭附近の景観

「第一瞥(上)」によると、上陸直後、宿泊場所を探すために、最初の「東和洋行」から「萬歳館」に移動していたという。「東和洋行」も「萬歳館」も、当時共同租界の北区(現在虹口区)に位置している(図 104-A)⁸⁸。芥川が翌日入院した里見病院⁸⁹を含め、北区は当時日本人街として在華日本人が集まった地域である(図 106⁹⁰)。現在では「萬歳館」(図 106-⑤★)が所在した場所は、集団住宅の一部となり、そして「東和洋行」がかつてあった場所には、「河浜賓館」という私営ホテルが立っている(図 107⁹¹)。



図 106 当時の日本人街⁹²



図 107「東和洋行」の所在地の現在の風景

宿泊場所が決まった後、芥川はジョオンズの案内で、上海における最初の夜を過ごした。「第一瞥(中)」では、二人が散歩した道で「四馬路」というところが描かれている。「四馬路」は当時のフランス租界に位置し、現在では「福州路」に改名されている⁹³(図 102-B)。

以上みてきたように、上海一日目での芥川の活動範囲は、概ね外国人が多く活動する共同租界地域である。それでは、共同租界において芥川は何と遭遇したのだろうか。上海に上陸した際に、芥川が真っ先に会ったのは中国の車屋である。彼はこういう風に車屋を描いている：

(前略)抑車屋なる言葉は、日本人に與へる映像は、決して薄ぎたないものぢやない。支那の車屋となると、不潔それ自身と云つても誇張ぢやない。その上ざつと見渡した所、どれも皆怪しげな人相をしてゐる。それが前後左右べた一面に、いろいろな首をさし伸しては、大聲に何か喚き立てるのだから、上陸したての日本婦人なぞは、少なからず不気味に感ずるらしい。

日本の車屋と比べると、大きな文化差異を感じた芥川の姿が伺える。しかし、彼はこの「無気味」な車屋を忌避したわけではない。中国の国土に初めて接して、新鮮な感覚を抱えながらも、芥川はやはり「馬車の上の客」になったからである。そして、馬車の上で租界における最初の観光をはじめた：

川には支那の達磨船は、水も見えない程群つてゐる。川の縁には緑色の電車が、滑かに何臺も動いてゐる。建物はどちらを眺めても、赤煉瓦の三階か四階である。アスファルトの大道には、

西洋人や支那人が気忙しさに歩いてゐる。が、その世界的な群衆は、赤いタバアンをまきつけた印度人の巡査が相圖すると、ちゃんと馬車の路を譲ってくれる。

いかにも騒がしくて、多様な文化を包容した繁忙な大都市の様相である。そして、建物も西洋式の「赤煉瓦」が目立っている(前掲図 104)。このような初めて接触した異国の風景をみると、芥川は「到底東京や大阪なぞの日本の都會の及ぶ所ぢやない」と感嘆し、馬車でこのような「晴れ晴れした景色を見てゐる内に、だんだん愉快的な心もちになつた」ようである。

「第一瞥(中)」及び「第一瞥(下)」では、芥川がジョオンズと一緒に食事をして、四馬路で散歩した途中で二軒のカフェに寄ってお茶を飲んだことが記述されている。アイルランド人であるジョオンズが勧めたところだとみえて、晩食は「シェツフアアド」という洋食屋で、そして二軒のカフェもそれぞれ「カツフェ・パリジアン」などと名付けられた西洋風のところである。

西洋風の「シェツフアアド」は、「給仕は悉支那人だが、隣近所の客の中には、一人も黄色い顔はみえない」という西洋人向けのレストランであるが、食事が「南京米のカリー」であり、西洋風とはいえ、隅々まで中国本土のものも混じっているところが興味深い。その他、食後の散歩の途中で、二人はまた西洋人向けのダンスホールを持つ喫茶店「カツフェ・パリジアン」に入った：

我我は隅の卓子に、アニセツトの盃を舐めながら、真赤な着物を着たフィリツピンの少女や、背廣を一着した亜米利加の青年が、愉快さうに踊るのを見物した(中略)肥つた英吉利の老人夫婦が、私の前へ踊つて来た時、成程とこの詞を思ひ浮べた。が、ジョオンズにさう云つたら、折角の私の詠嘆も、ふふんと一笑に付せられてしまつた(後略)

西洋人だけが楽しんでいる舞踊場では、芥川の詩吟が無視されていることからわかるように、中国本土に由来しながらも、伝統的な風情を持つ詩文は、西洋的舞踊場と相容れなかったようである。また、二軒目の喫茶店で芥川が見かけたのは次のような風景である：

このカツフェはパリジアンなぞより、餘程下等な所らしい。桃色に塗つた壁の側には、髪を分けた支那の少年が、大きなピアノを叩いてゐる。それからカツフェの真ん中には、英吉利の水兵が三四人、頬紅の濃い女たちを相手に、だらしない舞蹈を續けてゐる。

(中略)其處へ外から五六人、同じやうな水兵仲間が、一時どやどやはいつて来た。(中略、バラの花を売る中国の)婆さんは酔ぱらひの水兵連が、乱暴に戸を押し開ける途端、腕にかけた(バ

ラの)籠を落としてしまった。しかも當の水兵連は、そんなことにかまふ所ぢやない。もう踊つてゐる連中と一しょに、氣違ひのやうにとち狂つてゐる。

どうも、芥川が入った西洋風の場所はすべて「シェツプアアド」や「パリジアン」のような上品なところとは限らないようである。二軒目の喫茶店で、イギリス人水兵の下品で乱暴な行動に、芥川が違和感を示した。芥川が特筆した、外からの水兵仲間がむりやり喫茶店のドアを押し開けて、(バラ売りの)お婆さんのバラの籠を落とした情景も特に興味深い。イギリス水兵の乱暴な進入によって、美しいバラの花が落ちる。しかし次の場面では、お婆さんが落ちたバラの花を顧みず、しつこく「乞食のやうに手を出して」欧米人のジョオンズへ金をせびっていた。この場面は、中国旅行の様相を描く布石になりはしないだろうか。これについては、次の節における検討にゆだねたい。

このように、芥川は上海における一日目を、伝統的な中国より近代化そして西洋化した一面の見聞で終えた。「第一瞥」の内容には、「中国そのもの」の存在感が非常に薄いと思われる。芥川は「第一瞥」の最後で、彼が上海ないし中国に対する第一印象を、「この圖圖しいお婆さんと、晝間乗つた馬車の馭者と、——これは何も上海の第一瞥に限つた事ぢやない。残念ながら同時に又、確に支那の第一瞥であつた」とまとめている。なぜなら、一日目で接触できた中国的な部分は車屋とバラ売りの婆さんしかなく、そのほかはほとんど「西洋」だからである。このような情景が、芥川の中国に対する第一印象を構成したのであった。

初めて中国の土地を踏んだ芥川は、最初から辟易したわけではなく、国際大都市として上海を受け止めようとした。しかし、上海に存在した西洋文化を国際大都市の一部としてとらえた芥川は、共同租界の様相に深く入れば入る程、欧米に対し態度を変えはじめている。次の節では、芥川の正式な上海取材について考察していきたい。

3.2 上海から見出した「現代」の中国

上海到着の翌日、芥川は体調不良で萬歳館の近くにある里見病院(図 105—④)に入院した。退院後、ようやく取材旅行が正式に始まったのである。「上海游記」では、第6節から観光取材の記録が続いていく。具体的な内容について、それぞれ第6～8節には、俳人四十起の案内で上海の内地で名所めぐりの体験をしたことが示され、第9～10節には、中国伝統戯台での芝居を見物したことが記録されている。次に第11、13、18節は、それぞれ中国当時の有名人章炳麟、鄭孝胥、李人傑⁹⁴の訪問録で、第15

～17 節は、酒樓で会った芸妓を取り上げた「南國の美人」⁹⁵という内容である。残った第 12、19、20 節は上海に存在した異文化「西洋」と「日本」を描いて、また第14節では各国文化が混雑した上海における犯罪状況を論じている。最後の第 21 節では芥川の上海に対する最後の一瞥を記している。

到着と入院の部分(第 1～5 節)を除いて、16 節の中で 11 節の内容は伝統の中国に注目したことがわかる。つまり、芥川が取材した重心は中国そのものにあると考えられる。以下、芥川の目に映った上海を見ていきたい。

芥川の取材は湖心亭や城隍廟をめぐる豫園地域から始まっていた⁹⁶。交通手段は相変わらず馬車で、湖心亭にたどりつくまで、芥川は以下のように馬車の上で見た風景を描いている：

朱泥のやうな丸焼きの鶏が、べた一面に下つた店がある。種種雑多の吊洋燈が、無気味な程並んだ店がある。精巧な銀器が鮮かに光つた、裕福さうな銀樓もあれば、太白の遺風の招牌が古びた、貧乏らしい酒棧もある。

このような伝統風景を、芥川は「おもしろがつて見てゐる」が、路を曲がるとまた「その狭い路の両側には、麻雀の道具を賣る店だの、紫檀の道具を賣る店だのが、ぎつしり軒を並べてゐる。その又せせこましい軒先には、無暗に招牌がぶら下つてゐるから、空の色を見るのも困難である」ようにかいていることからわかるように、にぎやかな町の様相が目に入っている。しかし、上海の名所といわれる湖心亭に到着したとたん、芥川は失望感に襲われた：

湖心亭と云へば立派らしいが、實は今にも壊れ兼ねない、荒廢を極めた茶館である。その上亭外の池を見ても、まつ蒼な水どろが浮んでゐるから、水の色などは殆見えない。

想像に反して、「荒廢を極めた」伝統景観である湖心亭について、芥川の失望を感じたのである。それと無関係に、その横の湖で「悠々と小便をしていた」中国人の姿は、さらに芥川の神経に触っていた：

その一人の支那人は、悠悠と池へ小便をしてゐた。陳樹藩が叛旗を翻さうが、白話詩の流行が下火にならうが、日英續盟が持ち上らうが、そんな事は全然この男には、問題にならないのに相違ない。少くともこの男の態度や顔には、さうとしか思はれない長閑さがあつた。

「長閑」で「悠悠と池へ小便」をした男の姿が深く芥川に印象を与えたようで、彼は書簡においても「この中に支那人たちは皆鳥籠を携へ来りて雲雀、目白の声なぞに耳を傾けつつ悠然として茶を飲んでゐる 但し亭外は尿臭甚し」という記述が見かけられる。荒廃した湖心亭や尿臭も顧みず、長閑にお茶を飲んでいる中国人に対し芥川が苛立っていた。

そして、取材が続けられていく。道端で「新聞紙の反古しか着てゐなかつたり、石榴のやうに肉の腐つた膝頭をべろべろ舐めてゐたり」するような、「恐縮する程」の乞食を見ると、芥川は中国近代小説の中で現れた赤脚仙人⁹⁷を連想したり、城隍廟で「美髯」な城隍像をみると、中国小説で現れる悪人を懲戒し善者を助ける城隍に連想したりしながら、観光を進めていった。

町風景というと、名所の周囲では、「靴足袋」、「玩具」などようなお土産の店から「薄穢い食物店」までがぎっしりと道ばたにならんでいるが、だんだんと最初のように芥川の興味を引かなくなっている。次の文章で記されたように、このような店で売っていた商品も芥川の目にはすべて「安物のモック・オリエンタリズム」のものや、「西洋でも追ひ追ひ流行らなくなつた」ものとは映らなかった。

中国風に模した安物の土産の店が並んでいる中国街で、西洋風の「派手な縞の背広」を着て「紫のネクタイピンをした」お洒落な「ハイカラ」や、清代伝統の纏足をした「お上さん」という様々な中国人が芥川の傍をすれ違って行く。頹廢的な町模様と派手な西洋的な衣装は、いずれも古典的な中国詩文からははるかに隔たっている。この風景はだんだん芥川を苛立たせていったようで、彼の筆鋒も従って鋭くなっていった：

（前略）現代の支那なるものは、詩文にあるやうな支那ぢやない。猥褻な、残酷な、食意地の張つた、小説にあるやうな支那である。（中略）文章軌範や唐詩選の外に、支那あるを知らない漢学趣味は、日本でも好い加減に消滅するが好い。

中国古典文化しか知らない「漢学趣味」が「消滅するが好い」と発言するなんて、芥川はよほど「現代」中国の現実から衝撃を受けたようである。古典詩文に親しむ中で培った芥川の目には、「現代」中国は、伝統的な景觀が頹廢し、古典的な美も色あせていた現状が映っている。そして、さらに彼が衝撃を受けたのは、その現状を意識せず、のんびりとお茶を飲んだり、湖心亭の傍で「悠々と小便をし」たりした中国人や、西洋服を着し堂々と道で散歩する中国人自身のようなものである。この様相は、まさに美しいバラを落とした老婆さんが、バラを顧みず欧米人に金を乞い続ける姿と重なり合っているのではないかと思われる。

このように、「第一瞥」で租界からみた西洋化が進んだ模様、そして「城内」で中国人街からみた伝統

景観が消滅しつつある模様が対照をなしつつ、上海の両面性は芥川の目の前で展開していく。この現象は、南京条約以来、外国資本の中国進出の拠点として、上海に広範囲の租界がおかれ、そして「19 世紀後半から上海の租界地域が素早く発展した反面、元来の中国人が住む伝統地域が未開化の部分として価値が認められなく」¹⁰⁰なったことに原因が求められる。

初めて上海に接した時、芥川はその特徴を国際大都市の多様性ととらえ、「晴れ晴れ」と「おもしろがっている」上海に存在する西洋や伝統風景を受け止めていた。しかし深く入れば入るほど、列強に侵食された上海の様相がはっきりみえるようになり、芥川が「西洋」に投じる視線が変化したのである。次の第 12 節と第 14 節は、まさに上海に存在した外来文化を論じたものである。

第 12 節では、芥川は上海観光の感想を問答の形式でまとめている。友人の問いに対し、芥川は上海に存在した「西洋」に対する態度を提示している。例えば、次のような会話が現れている：

問。パブリック・ガーデン¹⁰¹は？

答。あの公園は面白かった。外国人ははいつでも好いが、支那人は一人もはいる事が出来ない。しかもパブリックと號するのだから、命名の妙を極めてゐるよ。

(中略) 佛蘭西租界なぞへも行つたかい？

答。あの住宅は愉快だった。柳がもう煙つてゐたり、鳩がかすかに啼いてゐたり、桃がまだ咲いてゐたり、支那の民家が残つてゐたり、――

問。あの邊は殆ど西洋だね。赤瓦だの、白煉瓦だの、西洋人の家も好いぢやないか？

答。西洋人の家は大抵駄目だね。少くとも僕の見た家は、悉く下等なものばかりだった。

問。君がそんな西洋嫌ひとは、夢にも僕は思はなかつたが、――

答。僕は西洋が嫌ひなのぢやない。俗悪なものが嫌ひなのだ。

以上のように、芥川はきびしく租界における「西洋」を批判している。しかし、個人の蔵書として洋書を圧倒的に多く所蔵している¹⁰²芥川は、西洋文化そのものに反感を持っていたとはいえない。最後に言及しているように、彼は西洋そのものを嫌ったわけではなく、「場違い」の西洋を嫌っている。なぜなら、ここでの「西洋」は欧米の伝統を示すものではなく、列強侵略の証拠となっているからである。そして「兎に角一面では西洋」をかかえこむ上海も、芥川に対してはいかに異様に映ったようである。

次に、第 14 節の「罪惡」では、芥川は上海の犯罪を紹介し、国際化に伴った様々な問題を取り上げた。「追剥ぎに変わる車屋」、犯罪を行う「無頼の少年団」から、日本語を使って日本人を誘う「売笑婦」、そしてアヘンの氾濫などの問題が論じられている。さらに「男女とも怪しい西洋人」が、大勢上海に来

たと聞いたことを話し、散歩する時にロシア人の乞食に金をねだられたという芥川も自身の経験を例に取り上げていた。そして、この一節の冒頭ですでに提示したように、「何しろ各国の人間がより集まってくる所ですから」と、発生の根源をもう一度近代化、国際化した上海自身に求めている。

以上のように、芥川は上海に潜んだ様々な問題を論じていくなかで、西洋と中国伝統文化に対する姿勢を変化させていったことが明らかに見て取れるようになっている。

いうまでもなく、上海旅行の内容は、以上のような芥川を苛立たせる経験ばかりだったわけではない。上海の天蟾戯台において、彼が興味を持った中国の伝統芝居(劇)を見学でき¹⁰⁴、そして、上海の名記者余洵の紹介で、彼は上海の美人たち¹⁰⁵の姿も目にすることができ¹⁰⁶た。また、「模範租界」と考えられたとはいえ、19世紀末から、租界が置かれたのは上海だけというわけではない。にもかかわらず、書簡からも見られるように、芥川は特に上海へきびしい視線を投じ、反感を抱いているようである。ここでは、1921年以前における上海の政治状況、特に民族運動を取り上げて把握する必要がある。

第一次世界大戦後、中国は戦勝国としてパリ講和会議で独立を主張し、二十一カ条の改正を提案した。一方、日本側と交渉した段祺瑞政権が二十一カ条を容認し、条約改正の努力は失敗のうちに終わりを告げた。条約改正の失敗が引きがねとなり、1919年5月4日から、北京をはじめとする反帝国主義、反北洋軍閥政府(段祺瑞政権)の運動が各地で行われはじめた。いうまでもなく、反帝国主義の標的は、特に山東利権を握った日本に集中した。

同時期に、上海においても五・四事件の新聞報道に基づいて、上海の民衆も排日風潮で行動しはじめた。6月5日から、上海学生連合会の呼びかけで總商会、商業公団連合会をはじめ、上海の同業団体、同郷団体も協力し、罷市、罷工、売国賊¹⁰⁸の罷免を内容とした「三罷運動」がはじまった。

一方、米英政府は「全国範囲の日貨ボイコットに対して、すべてのビジネスは事実上停止状態にあるが、無秩序な混乱はない」や中国の学生は運動の秩序維持に大きな努力を払っているなどと、好意的に宣伝し、容認的な対応を取っていた。この挙動の理由について、笠原十九司はアメリカのラインシュ駐華公使の報告書に注目し、「(パリ講和会議で)他の列強が日本を支持したという日本当局の宣伝のために、反外国一般の運動が起ることが懸念される」という報告内容を取り上げている。笠原は、英米政府が五・四運動に対し好意的な態度を示したのは、日本の軍国主義、帝国主義に反抗する「排日運動」から、全般的な反外国(帝国主義)運動へと転化する可能性を予測し、自国が中国における利権の安全性をはかるためにとった措置であると指摘している。

ともかく、上海の五・四運動は最終的に反日・反親日派の運動という枠内で収まったことは確かである。しかし、無視できないのは、運動当時上海学生連合会も英文のパンフレット¹⁰⁹を発行し、日本を除く欧米列強からの支持に力を入れていたことである。欧米列強へ支持を呼びかけていたことは、上海五・

四運動の主流である上海学連が極めて親欧米的傾向を見せていた証左となる。そして、五・四運動¹¹⁰の間、1920年7月の上海で発行された『民国日報』では、「1919年の上海の貿易額が、歴史上初めてアメリカが日本を抜いてトップになったことが報じられていた」¹¹¹という。そして、五・四事件以降、運動で主張された親日派の辞職から、その延長として、運動当時懲罰できていなかった「売国官僚」（親日派）を懲戒する「禍首懲罰運動」も始まった。「禍首懲罰運動」は、五・四運動よりも厳格な反親日派運動だといわれ、日本への抵抗がさらに激しく感じられる。

しかし、反日熱情が高まった一方、同時期にアメリカの国会議員による中国訪問が行われている。1920年8月、視察と友好を目的として、52名の国会議員が上海及び北京を訪問し、それぞれ約一週間滞在したという。上海で発行された『民国日報』にも、「中米の前途を希望して、歓迎の気持ちを表明」¹¹²したとのような記事が記載され、上海市民の間で高まった排日親米の気運がうかがえる。¹¹³

1921年上海にきた芥川は、その「気運」にも気づいたのであろう。同じく中国の侵略者である列強にもかかわらず、当時の上海で盛んであった欧米歓迎の様子は、さぞ芥川の目に異様に映ったのであろう。その様子を凝縮して反映しているのは、まさに『游記』で生き生きと表現された「派手な縞の背廣に、紫水晶のネクタイ・ピンをした」の中国人姿である。旅行から帰った芥川は、それ以降の作品である「侏儒の言葉」¹¹⁴において、「支那」と題した部分でも、

螢の幼虫は蝸牛を食ふ時に全然蝸牛を殺してはしまはぬ。いつも新らしい肉を食ふ為に蝸牛を麻痺させてしまふだけである。我日本帝国を始め、列強の支那に対する態度は畢竟この蝸牛に対する螢の態度と選ぶ所はない。

と、芥川は欧米列強の中国に対する態度を暗喩の形で論じ、無条件に西洋を歓迎し吸収した「現代」中国の様相を強く非難していたとみえる。当時の中国は、日本に対し反対運動を行った一方、同じ侵入者である欧米を無条件に歓迎していた。文化侵略によって欧米列強が思想面から中国をコントロールしようとする意図は、まさに「螢の幼虫」が「蝸牛」を麻痺させるのと同じではないかと思われる。

欧米列強だけでなく、芥川は侵略者の性格をもった日本にも反発的な姿勢を取っていた。芥川は、『上海游記』が発表されてまもなく、「將軍」と題された芥川的一篇が1922年の1月に雑誌『改造』で掲載されている。内容はあえて当時日本人が普遍的に尊敬した乃木將軍を諷刺対象にし、戦場における將軍の残虐な姿を提示したもので、当時日本の国内で大きな反発を受けたとみられる¹¹⁵が、芥川自身の侵略者に対する抵抗感が明らかに見出せる。

『游記』の解説を試みると、『游記』に反映された芥川の歴史認識が顔を出してくる。彼は侵略国の文

化、特に西洋に対し反感を示した。そして、伝統を捨てつつ「西洋」を一部として取り込み続けた「現代中国」に対しても、芥川は失望を感じたと思われる。

このように、芥川は伝統の中国景観に取材の重心をおいた一方、「現代の中国」について、「西洋」という存在を意識し、それを『游記』の一部として取り込んでいたのである。「上海游記」だけではなく、「江南游記」、「長江游記」ないし「北京日記抄」においても「西洋」に関する記述が見つけられる。

『游記』全般に対し、中国的な伝統景観及び西洋式の景観に関する記述を統計した結果、以下図108のように、西洋風の景観に関する叙述は、四分の一に近いことがうかがえる。『游記』では、芥川が愛着した北京や蘇州などにも西洋という存在が目立っている。これについて、次の節で具体的な検討を行いたい。

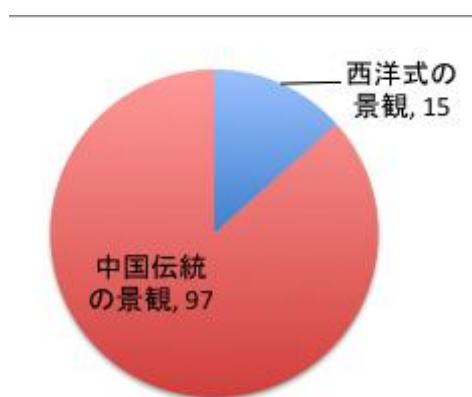


図108 芥川が描いた景観の数量統計

注) 本稿は統計の対象を明確に中国伝統的、西洋式と判別できた風景と建造物に限定している。

第4節 『游記』からみる江南地域及び長江地域

書簡では、芥川は江南地域の杭州や蘇州に対し、比較的好感的な評価を与えている。そして、『游記』においても、最初に杭州の西湖の景色に目を引かれた芥川の姿がみられる。杭州に到着した夜に、芥川はこのように西湖の景色を描いている：

西湖！私は實際この瞬間、如何にも西湖らしい心もちになった。茫茫と煙つた水の上には、雲の裂けた中空から、幅の狭い月光が流れてゐる。その水を斜に横ぎつたのは、蘇堤か白堤に違ひない。堤の一箇所には三角形に、例の眼鏡橋が盛り上つてゐる。この美しい銀と黒とは、到底

日本では見る事が出来ない。

(pp.103～104,「四 杭州の一夜(中)」)

しかし、このようなロマンチズムは、また宿泊先である新々旅館での遭遇によって打ち破れてしまった。それは新々旅館の玄関で、彼はまた酔っぱらいの西洋人たちに出会ったのである。

玄関の外には門の左に、玫瑰の棚が出来てゐる。(中略)何時の間にか暗い空は、糠雨に變つてゐるのだつた。玫瑰、微雨、孤客の心、——此處までは詩になるかも知れない。が、鼻の先の玄関には、酔つ拂ひのヤンキイが騒いでゐる。私はとてもこの分では、「天鵝絨の夢」の作者のやうに、ロマンティックにはなれないと思つた。

(玄関で中国風の轎子から降りた中国老人と少女をみて、中国の風流に魅了していたが、)この時突然玄関から、ひよろひよろ石段を下りて来たのは、あの禿頭の亜米利加人である。彼は同類に聲をかけられると、妙な手つきをして見せながら、ブラツデイ何とか返答をした。上海の異人はヴェリイの代わりに、屢恐る可きブラツデイを使ふ。これだけでも既に愉快ぢやない。その上彼は危なさうに、我々の側へ立ち止まるが早いか、玄関への後を向けたなり、傍若無人にも立小便をした。

ロマンティズムよ、さようならである。私は陶然たる村田君と、人気のないサロンへ引き返した。水戸の浪士にも十倍した、攘夷的精神に燃え立ちながら。

(pp.106～108,「五 杭州の一夜(下)」)

『天鵝絨の夢』の作者』というのは、芥川に先立って中国旅行を行った谷崎潤一郎をさしている。谷崎は中国旅から帰国後、中国の古典的な美を演出した「天鵝絨の夢」などの作品を執筆し、中国趣味の満ちた游记を発表した。しかし、杭州の美や中国趣味より、芥川が見かけたのは侵略者である欧米人の姿である。「ロマンティズムよ、さようならである」と芥川が言ったように、ここで彼は中国趣味から脱出して、よりきびしい当時の中国の現実を見つめる一種の決意がみられる。

中国の歴史状況についていうと、前述のように18世紀のアヘン戦争から20世紀はじめにかけて、列強は中国で相繼いで租界ないし租借地¹¹⁶を獲得し、中国領土を蚕食していった。20世紀20年代における各侵略国の利権について、次の表11¹¹⁷を参考してもらいたい。

表11 中国における外国租界の一覧

界 租 同 共		界 租						管				專				所在地
鼓浪嶼	上海	福州	重慶	沙市	蘇州	杭州	厦門	廣東	漢口	上海	天津	伊國	佛國	英國	日本	管理國
共同	共同	日本	日本	日本	日本	日本	日本	佛國	英國	佛國	日本	佛國	佛國	英國	日本	設定時期
一九〇二	一八四五 (英清) 一八六三 (共同)	一八九九	一九〇一	一八九八	一八九七	一八九六	一八九九	一八六一	一八六一	一八九六	一八九八	一九〇二	一八六〇	一八六一	一八九八	
一八四二年八月二十九日英清南京條約第二條 一九〇二年一月十日厦門鼓浪嶼共同租界土地章程	一八四二年八月二十九日英清南京條約第二條 一八四三年十月八日虎門邊道加條約第七條 一八四五年十一月二十九日第一回土地章程	一八九九年(明治三十二年)四月二十八日福州日本專管居留地取極書	一八九五年(明治二十八年)八月十八日沙市日本居留地取極書 一九〇一年(明治三十四年)九月二十四日重慶日本專管居留地取極書	一八九五年(明治二十八年)八月十八日沙市日本居留地取極書 一八九八年(明治三十一年)八月十八日沙市日本居留地取極書	一八九五年(明治二十八年)八月十八日沙市日本居留地取極書 一八九七年(明治三十年)三月五日蘇州日本居留地取極書	一八九五年(明治二十八年)八月十八日沙市日本居留地取極書 一八九六年(明治二十九年)九月二十七日杭州日本居留地取極書 一八九七年(明治三十年)三月五日蘇州日本居留地取極書	一八九六年(明治二十九年)十月十九日清通商條約附屬議定書第三條 一八九九年(明治三十二年)十月二十五日厦門日本專管居留地取極書(明治二十九年)	一八四二年八月二十九日英清南京條約第二條 一八六一年九月三日沙面租界ニ關スル協定 一八四四年十月二十四日佛清南京條約第二條 一八六一年沙面租界ニ關スル協定	一八四二年八月二十九日英清南京條約第二條 一八六一年九月三日沙面租界ニ關スル協定 一八四四年十月二十四日佛清南京條約第二條 一八六一年沙面租界ニ關スル協定	一八九六年(明治二十九年)十月十九日清通商條約附屬議定書第三條 一八九八年(明治三十一年)七月十六日漢口日本居留地取極書 一八五八年六月二十六日英清天津條約第十條 一八五八年六月二十七日佛清天津條約第七條第十條 一八九六年六月二日取極	一八九六年(明治二十九年)十月十九日清通商條約附屬議定書第三條 一八九八年(明治三十一年)七月十六日漢口日本居留地取極書 一八五八年六月二十六日英清天津條約第十條 一八五八年六月二十七日佛清天津條約第七條第十條 一八九六年六月二日取極	一八九六年(明治二十九年)十月十九日清通商條約附屬議定書第三條 一八九八年(明治三十一年)七月十六日漢口日本居留地取極書 一八五八年六月二十六日英清天津條約第十條 一八五八年六月二十七日佛清天津條約第七條第十條 一八九六年六月七日(光緒二十八年)天津義租界章程合同	一八九六年(明治二十九年)十月十九日清通商條約附屬議定書第三條 一八九八年(明治三十一年)七月十六日漢口日本居留地取極書 一八五八年六月二十六日英清天津條約第十條 一八五八年六月二十七日佛清天津條約第七條第十條 一八九六年六月七日(光緒二十八年)天津義租界章程合同	一八九六年(明治二十九年)十月十九日清通商條約附屬議定書第三條 一八九八年(明治三十一年)七月十六日漢口日本居留地取極書 一八五八年六月二十六日英清天津條約第十條 一八五八年六月二十七日佛清天津條約第七條第十條 一八九六年六月七日(光緒二十八年)天津義租界章程合同	一八九六年(明治二十九年)十月十九日清通商條約附屬議定書第三條 一八九八年(明治三十一年)七月十六日漢口日本居留地取極書 一八五八年六月二十六日英清天津條約第十條 一八五八年六月二十七日佛清天津條約第七條第十條 一八九六年六月七日(光緒二十八年)天津義租界章程合同	

表 11 で示されたように、当時の杭州においても日本領の租界が置かれ、杭州に侵入した外国人の姿もいうまでもなく多くみかけられたのである。このように、「ロマンチズム」を捨てた芥川は、翌日から杭州取材を正式にはじめたが、この時に彼はより冷たい目で西湖を見ていた：

(日本人なり西湖の繊細な感じになれないが、)もしこれだけに止まるとすれば、西湖は兎に角春寒を怯れる、支那美人の観だけはある筈である。處がその支那美人は、湖岸至る所に建てられた、赤と鼠と二色の俗悪恐るべき煉瓦建の為に、垂死の病根を与えられた。いや、獨り西湖ばかりぢやない。この二色の煉瓦建は、殆ど大きい南京蟲のやうに、古蹟と云はず名勝と云はず江南一帯に蔓つた結果、悉風景を破壊してゐる。私はさつき秋瑾女史の墓前に、やはりこの煉瓦の門を見た時、西湖の為に不平だつたばかりか、女史の靈の為に不平だつた。

(中略)どうも今後十年もたてば、湖岸に並び建つた西洋館の中に、一軒づつヤンキイどもが酔拂つてゐて、その又西洋館の門の前は、一人づつヤンキイが立小便をしてゐる、—と云ふ事にもなりさうである(後略)

(pp.114～115, 「七 西湖(二)」)

杭州古来の美を破壊した西洋式の「俗悪恐るべき煉瓦建」は、再び芥川を苛立たせたようである。そして、彼がもっと懸念したのは、このままだと、昨夜のような、「湖岸に並び建った西洋館の中に、一軒づつヤンキイどもが酔拂つてゐる」という、中国に対する列強の侵略がさらに激化していくことである。西湖以外、芥川はその周囲の名所をも巡っている。しかし彼の目に映ったのは、やはり古めかしさを失って、現代風に改修を重ねた様相である。古来評判の高い蘇小小の墓や、岳飛の墓も、「詩的でも何でもない」、「漆喰を塗った土饅頭」と辛辣に表現されていた。

しかし、「江南游記」において芥川が唯一感動を示したのは「赤煉瓦」の雷峰塔である。彼は「西湖(六)」において雷峰塔を以下のようにのべている：

(雷峰塔は)赤煉瓦の壁へ、一面に蔦蘿をからませたばかりか、雑木なぞも頂には靡かせてゐる。それが日の光に煙ながら、幻のやうに聳え立つた所は何と云つても雄大である。赤煉瓦もかうなれば不足はない。

(何故に雷峰塔は赤煉瓦であるかという、旅館の西湖案内記によると)、今を距る三百七十年餘の昔、この西湖のほとりには、屢倭寇が攻めこんで来た。處が彼等海賊には、雷峰塔が邪魔になつて仕方がない。(中略)日本の海賊は、雷峰塔のまはりに火を放つて、三日三晩焼き打ちを續けた。かかるが故に雷峰塔は、赤煉瓦の製造が始まらない以前、早くも赤煉瓦の塔に變つたのである。

(pp.129～130「十一 西湖(六)」)

同じ「赤煉瓦」の建築物であるが、芥川は「不足はない」と雷峰塔を評している。なぜなら、雷峰塔の「赤煉瓦」は、外来侵略に抵抗した証拠となったからである。ここでは、いつもの「俗悪」という言い方ではなく、芥川はわざと「幻のやうに聳え立つた所は何と云つても雄大」で、「赤煉瓦もかうなれば不足はない」というふうに表示している。ここで、芥川は「赤煉瓦」の景觀自身に対したわけではなく、いままで「赤煉瓦」が象徴してきた列強に反感を持ったことが実証できる。

また、書簡で好感を示した蘇州についても、『游記』において、芥川は「まだあすこは西湖のやうに、ヤンキイ趣味に染んでゐない。それだけでも難有い気がした」と好感の理由を提示した。しかし、「姑蘇城外の寒山寺」だけが例外である：

今の寒山寺は明治四十四年に、江蘇の巡撫程徳全が、重建したと云ふ事だか、本堂と云はず、

鐘樓と云はず、悉紅殻を塗り立てた、俗悪恐るべき建物だから、到底月落ち烏啼くどころの騒ぎぢやない。

(中略)程徳全が重修したのも、一つには日本人の参詣が多いから、日本に敬意を表する為に、一肌脱いだのだと云ふ事だ。すると寒山寺を俗悪にしたのは、日本人にも責はあるかも知れない。
(中略)程徳全の愚を晒ふ連中でも、西洋人相手の仕事になると、程大人と同じ事をしてゐる。寒山寺はその實物教訓だね。

(pp.165～167、「十九 寒山寺と虎邱と」)

つまり、芥川にとっては、西洋人や日本人の興味にあわせるため、現代風に重修した寒山寺も、元来伝統の美しさを失い、「煉瓦建」と同じく「俗悪恐るべき建物」にすぎない。ここでもう一度、「西洋」に非常に敏感な芥川の姿が確認できた。

書簡から、景色だけを取り上げて考えると、芥川は南の杭州や蘇州から美しさを感じ取れた一方、北京のように「二三年住んでも好い」という感興がわいていなかったようである。それに関し、「新芸術家の眼に映じた支那の印象」¹¹⁸において、芥川は中国での遊歴について、次のような感想を書きのしている：

南方では蘇州も杭州も南京も漢口も見ましたが、矢張一番気に入ったのは蘇州の景でした。然し凡て南の風景は唯だ美しいと云ふに過ぎません。丁度日本の景の夫れに似て比較的支那の気分が薄かつたのであります。

「支那的な気分」に欠けたのは、外来文化の侵入が一つの理由として考えられるが、それに加え、芥川はさらに以下の説明を行っている。

今度初めて支那へ渡りましたが、来て見るとモット早やく来れば好かつたと思ひました。支那は早く来ないと時と共に段々古いものが破壊されて行きます。殊に南方は革命が相續いて起るので古い建物の如きは殆んど破滅されて了つて居ります。

つまり、西洋の影響が考えられる一方、「現代」中国人自身が伝統の価値を認識していないのも、伝統風景が消滅しつつある一つの理由だと考えられる。ちなみに、この時期における排日運動について、前述笠原十九司が上海日本商業会議所『山東問題に関する排日状況』の第二輯からまとめたもの

¹²⁰によると、長江流域、江南地域を含め、「上海・武漢・湖南(長沙・常德)・江西(九江・南昌)・蕪湖・淮安・南京・松江・常州・揚州・鎮江・蘇州・無錫・嘉興・杭州・寧波・台州・重慶・清江・安慶・紹興」、「広東・福州・厦門」という広範囲で行われたことがわかり、芥川が言及した「南方は革命が相續いて起る」と一致している。

当時の中国では、帝国主義に抵抗した革命が盛んに行われた反面、大切な伝統文化の廃棄や侵略者である欧米国の文化に対する受容が進んでいた。その現実を見聞し、芥川は中国古典文化に耽るロマンチズムを捨て、それに直面することを選んだのである。

また、江南地域で揚州や南京の観光が続いた。そして、芥川は相変わらず感興をそそられず、強い批判を行っていた。彼は揚州に対し、「見すばらしい事」や「蘇州や江州を見た眼には、悲しい気がすると云つても誇張ぢやない」といい、南京に対し、「今日の秦淮は、俗臭紛紛たる柳橋」と辛辣な言葉を投げ続けている。

そして5月17日から、長江流域の観光が始まった。今までの観光取材から蓄積した憤懣がついに暴発したようで、彼は蕪湖で親友たる西村貞吉に会ったとき、以下のように旅行の感想をもらした：

(中略)その夜唐家花園のバルコンに、西村と籐椅子を並べてみた時、私は莫迦莫迦しい程熱心に現代の支那の悪口を云つた。現代の支那に何があるか？政治、学問、経済、芸術、悉墮落してゐるではないか？殊に藝術となつた日には、嘉慶道光の間以来、一つでも自慢になる作品があるか？しかも国民は老若を問はず、太平樂ばかり唱へてゐる。成程若い国民の中には、多少の活力も見えるかも知れない。しかし彼等の聲と雖も、全国民の胸に響くべき、大きい情熱のないのは事実である。私は支那を愛さない。愛したいにしても愛し得ない。この国民的腐敗を目撃した後も、なほ且支那を愛し得るものは、頽唐を極めたセンジュアリстка、浅薄なる支那趣味の愉悦者であろう。いや、支那人自身にしても、心さへ昏んでゐないとすれば、我我一介の旅客よりも、もつと嫌惡に堪へない筈である。(後略)

(pp.216～219、「一 蕪湖」)

芥川からみると、今まで見てきた「現代」中国は「政治、学問、経済、芸術、悉墮落」していたという。そして、ここで「現代」中国が伝統文化を失い続けることを批判するより、芥川が痛烈に訴えたのは、無条件に西洋文化を歓迎し、伝統文化の価値を認識していない当時の中国人自身である。

当然、排日運動を続けてきた若い中国人は、「多少の活力も見えるかも知れない」と芥川が認識している。しかし、自国の伝統文化をさえも守れていないことに、「大きい情熱のないのは事実」だと、芥川

は考えていた。それで、彼はつい「支那を愛さない。愛したいにしても愛し得ない」と痛恨な言葉を吐いたのである。このような憤懣な言葉は、もう一度前文で頽廃した湖心亭の傍で長閑に小便をした中国人を見た際に、芥川の嘆きと同じ感情がうかがえる。

この一節で見出された激しい感情は、中国旅行から受けた衝撃によるものであるが、実際日本に対する懸念も一部投影しているのではないかと推測できる。ここでは、今まで言及した「中国趣味」あるいは「支那趣味」、「漢学趣味」について紹介しておきたい。

明治維新以降、日本は西欧文化を吸収しつつ近代化を進めている。西欧文化が浸透した一方、「1888 年以降の東京市区改正事業のなかで東京の伝統的な都市景観が急速に崩壊していたこと」によって、日本自身も伝統文化の象徴である『江戸事情』はほとんど消滅してしまった¹²¹という当時の現状に直面している。その時期に、日本の文学者の間で「支那趣味」という言葉が生まれたのである。それについて、井上洋子は、「西洋風の生活スタイルは日常の隅々にまで浸透」していた背景に、「西洋に対して日本文化のアイデンティティーを確保しようとするとき、文化の根源として＜支那＞が意識されてゆく」¹²²と定義している。

日本が経験した問題は、今度は「支那趣味」の本土である中国も経験していたのである。20 世紀 20 年代前後の中国の、革命をはかりつつ西洋を取り込んでいた様相について、北京の日本語新聞『日刊支那』(1921 年 6 月 14 日)において芥川の談話記事が掲載されたが、そこでは次のような感想を述べている：

学生が示威運動をやるのもよいでしょう、それより外に道はありませんでしょう。今日の支那は恰度我国の明治十二、三年頃無暗に欧米の文化輸入をなした時と同じではないでしょうか。頻りに新思想の輸入に努めて居り、又其輸入した新思想を片端から訳なく捨てて進行して居る様ですね。

ここで、芥川は中国と日本の西洋に対する受容の様相を論じている。日本と共通して「無暗に欧米の文化輸入を」している中国に対し、前述のような憤懣な言葉を投げつけたのは、日本自身に対する懸念もあるからであろうか。

また、長江の廬山の避暑地においても、芥川は一貫して批判を行っている。臧理、十代田朗そして渡辺貴介は「租界時代の上海からの避暑地としての廬山の成立過程」において、1917 年及び 1931 年を対象に、廬山の避暑客の数(国別)を考察した。外国人の避暑客の中でアメリカ、イギリス人の人口が最も多いことがこの研究から分かる。

表 12 廬山における各国別の避暑人口(人)と別荘数(戸)

	米国	英国	独国	仏国	日本	露国	瑞典	中国	合計
1917	672	678	153	18	28	42	56	0	1647
夏	(228)	(236)	(52)			(14)	(19)		(549)
1931	597	537	221	31	28	29	30	1243	2716
夏	(195)	(217)	(40)			(11)	(11)	(262)	(736)

* () 内は別荘数

(注)「租界時代の上海からの避暑地としての廬山の成立過程」¹²³より

そして 1920 年代に旅行した芥川も、廬山に存在した「西洋」に気づいたのである。彼は、以下のよう
に「西洋」が侵入した地域について、ただ西洋文化と中国文化の対立を繰り返し強調している。

(前略)避暑地の一角なるものが軽井澤の場末と選ぶ所はない。いや、赤禿の山の裾に支那の
ラムプ屋だの酒棧だのがごみごみ店を出した景色は軽井澤よりも一層下等である。西洋人の別
荘も見渡した所、気の利いた構へは一軒も見えない。皆烈しい日の光に、赤や青のペンキを塗
った、卑しい亜鉛屋根を火照らせてゐる。(後略)

(pp.227～228、「三 廬山(上)」)

また、漢口についても、芥川は「雑信一束」で「欧羅巴的漢口」と「支那的漢口」との二節に分けて描き
出している。「英吉利の国旗の鮮やかさ」と伝統地域における「彩票や麻雀戯の道具の間に西日の赤
あかとさした砂利道」¹²⁴の対比が、特に「鮮やか」な「西洋」と頹廢なる「伝統」両面の対立を引き出して
いる。

以上のように、芥川が描いた江南地域と長江地域を見てきたが、彼は中国趣味というロマンチズムを
捨て、終始「現代」中国に存在した西洋と伝統の両面に注目していたとみられる。

このような描き方に対し、川本三郎は芥川の游记を「やせた、つまらない游记」と酷評しているし、「支
那趣味に惑溺しきっていない」という指摘をしている¹²⁵。一方、このような手法は、まさに芥川が中国趣
味をベースにした伝統の景観などに引きつけられながら、当時中国の現実にも目を離せないという、
矛盾した心情を反映したものなのではないかとも考えられる。

第5節 芥川が描いた「王城」北京

6月14日の、芥川から父芥川道章宛ての便りでは、「北京着山本にあひました唯今支那各地動乱の
兆あり余り愚図々々してゐると、帰れなくなる惧あれば北京見物すませ次第(大同府の石仏寺まで行き)
直に山東へ出で済南、泰山、曲阜、見物の上、青島より海路帰京の筈、満州朝鮮方面は一切今度は

立ち寄りぬ事としました」との報告があり、再び旅行当時は中国国内における動乱の様相が見られたことがうかがえる。1921年6月は中国共産党が創立する直前となり、「支那各地動乱の兆」とは、まさにその意味をさしているのではないか。

推測はさておき、結果として芥川はやはり北上の旅を遂行し、しかも当時中国の不穏な政治情勢にもかかわらず、北京に一月ほど滞在した。彼は北京の旅に大満足したようで、前述した書簡からも「北京なら一二年留学しても好いと云ふ気がします」と、北京に対する愛情をもらす記述が見かけられる。そして「毎日支那服を着ては芝居まはりをしてゐます」という自分の姿も自慢そうに友達に報告していた。

また、前掲した「新芸術家の眼に映じた支那の印象」では、芥川は以下のように上海と北京を比べ、北京に対する感想をもらしている：

上海は何か騒々しく、人間でもソワソワして実に忙しい。それに北方へ来ると一般に静かで人間にしても落ち着きがあつて実に大陸的な気分が自然の裡に味はれました。

(中略)私が南から北支那へ来て見ますと眼界が一変して、見るものが総て大支那、何千年の昔から文明であつた支那と云ふ感じを無言の裡に説明して呉れる程、それは実に雄大な感に打たれるのであります。

つまり、「騒々しい」上海と違い、芥川は北京から「落ち着き」感や、「何千年の昔から文明」の蓄積があったことを感じ取れているようである。芥川はこの旅で終始中国そのものである伝統文化を求めてきたが、そして北京はまさに彼の願いをかなえたところのようである。中国の一部として、北京では前述した「乱暴」な車屋や長閑な民間人がいないわけではない。しかし、「支那的気分」の満ちあふれた北京に対し、芥川はやはり好感を抱いていた。

そして、後の「旅のおもひで」¹²⁷において、旅行した先である長崎、京都より芥川は北京が好きな理由をもう一度披露している：

僕のあるいて一番好きな所といつたら北京でせうね。ふるい、いかにも悠々とした街と人、そしてあらゆるものを掩ひつくす程の青青とした樹立、あれほど調和のとれた感じのよい都はないと思ひます。

書簡でも記されたように、芥川は北京のような伝統的中国風景を保ち、落ち着いた古い町に好感を

抱いたといえる。

これだけ北京に対する愛情を繰り返し強調していた芥川は、実際『游記』の「北京日記抄」でどういふふう北京を表現したのであろうか。

「北京日記抄」の内容からみると、景観の見学をまとめたのは、「一 雍和宮」、「三 十刹海」、「五 名勝」である¹²⁸。

第一節で紹介された「雍和宮」は、清代康熙帝が建立した宮殿で、雍正帝の御所となっている。1744年モンゴル仏教の寺院いわばラマ廟に改造されたのである。そこで芥川が見たのは、「醜惡無雙の怪物」の姿をし、「何か残酷なる好奇心の満足を與ふるのみ」の「歡喜佛」¹²⁹や、「頗る狂人の畫に類した」仏像などである。どうも、中国伝統の漢文化と相違したラマ教について、芥川が感じ取って、そして記したのは「詩文にあるやうな支那」ではなく、「猥褻な、残酷な」模様である。

そして、第三節の「十刹海」の冒頭の四行で、北京の古い景観が言及されていた。芥川は、大鐘寺の永樂大鐘について、「この大鐘は半ば土中に埋まり、事實上の共同便所に用ゐられつゝあり」と、相変わらず伝統景観の頹廢を鋭く指摘していた。

また、「十刹海」について、「別に何事もあつた訣にはあらず、只人を見るのが面白かりしだけなり」と書いているように、芥川が関心を持ったのは、十刹海の景色ではなく、十刹海の茶館で見た中国人たちの姿である。「水煙管を啣へたる老爺」、「雙孖髻に結へる少女」から「満州旗人の細君」まで、芥川は「支那の浮世絵」に現れたような中国人姿に魅了したようである。一方、さらに彼の目を引いたのは、茶館の席の配置である：

僕等のはひりし掛茶屋をみるも、まん中に一本の丸太を渡し、男女は斷じて同席することを許さず。女の子をつれたる父親などは女の子だけを向う側に置き、自分はこちら側に坐りながら、丸太越しに菓子などを食はせてゐたり。この分にては僕も敬服の餘り、旗人の細君にお辞儀をしたとすれば、忽ち風俗壞亂罪に問はれ、警察か何かへ送られしならん。まことに支那人の形式主義も徹底したものと稱すべし。

そして、彼は「中野君」の話を引用し、「環城鉄道」という名に合わせるため、城内を通る路線の場所で「もう一つの城壁を築いた」という「形式主義」をさらに強調した。これを通じて、芥川は革命を唱えながらも、肝心な伝統文化をちゃんと守れない中国の現状を考えたのであろうか。

また、「五 名勝」においても芥川の姿勢が変わらなく、北京の伝統景観の現状に注目していた：

萬壽山。自動車を飛ばせて萬壽山に至る途中の風光は愛すべし。されど萬壽山の宮殿泉石は西太后の悪趣味を見るに足るのみ。柳の垂れたる池の邊に醜惡なる大理石の畫舫あり。

天寧寺。この寺の塔は隋の文帝の建立のよし。尤も今あるのは乾隆二十年の重修なり。塔は緑瓦を疊むこと十三層、屋縁は白く、塔壁は赤し、一と言へば綺麗らしけれど、實は荒廢見るに堪へず。寺は既に全然滅び、只紫燕の亂飛するをみるのみ。

松筠庵。楊椒山の故宅なり。故宅と言へば風流なれど、今は郵便局の横町にある上、入口に君子自重の小便壺あるは没風流も亦甚し。

謝文節公祠。これも外右四區警察署第一半日学校の門内にあり。(中略)木像の前に紙錫、硝子張の燈籠など、他は只滿堂の塵埃のみ。

ここで、愛着のある北京を描く際にも、彼は終始伝統景観の荒廢を批判した姿がみられる。帰国する途中で天津¹³⁰の租界を見学した時、芥川は「かう言ふ西洋風の町を歩いてみると、妙に郷愁を感じますね」といい、そして帰りたいのが「日本へちやありません。北京へ歸りたくなるのですよ」と、北京を故郷にさえたとなえていた。しかし、「北京日記抄」で芥川は北京について、書簡や思い出で語るような、さほど大きな熱情を表現していない。中国趣味より中国の現実に注目する内容を多く取り上げたことは、芥川が中国に対する苦心を反映していたのではないか。

自己の感情と現実に対する内容の取捨以外、芥川は『游記』を執筆した際に、取材内容に対し取捨も行っていた。この点については、特に中国有名人との会見に言及する必要がある。

『游記』によると、芥川は上海で章炳麟、鄭孝胥そして李人傑と、北京で辜鴻銘と会見したという。そして、会見に関する記述は、主に諧謔的な表現が特徴的である。

例えば、彼は章炳麟の書齋を訪れた時、書齋に「大きな鰐の剥製が一匹、腹這ひに壁に引つ付いている」というところや、章炳麟の「長い爪」に注目していた。そして章炳麟の時局論を聞く際にも、「唯寒かつた」のようなユーモアな表現を取っていた。そして、辜鴻銘を訪れた時、彼を「大いなる蝙蝠に似たり」と形容し、歴史を論じた時の辜について、「顔は益蝙蝠に似たり」と諧謔的に描いている。

このように、芥川は諧謔の手法をとって、主に中国学者を好意的に表現しているが、会見の際に芥川自身の行った発言が記録されていない。会見の際に、お互いの交流はいうまでもなく行われたはずだが、『游記』では、中国学者たちの論説が提示された一方、芥川個人の論述、深入りした表現があまり見当たらない。

そして、単援朝などの考察によると、上海滞在中、芥川は二度鄭孝胥を訪問したようだが、『游記』は一回目の内容だけを記録したという。また、前述のように7月に中国共産党が結成されたが、芥川が会

見た李人傑はまさに共産党を創立した重要メンバーの一人である。そして、二人が会見する部屋も後に共産党の創立大会の会場だったことが判明している¹³¹。共産党が結成された前夜にこの会見が行われたことを非常に興味深く感じられる。

さらに、北京において、芥川が訪れたのは辜鴻銘一人だけでなく、当時新文化革命の担い手として活躍していた胡適もいる。胡適との会見は『胡適の日記』によってすでに実証され、その内容によると、会見は一回に止まらず、芥川が自ら胡適を食事に誘ったこともあったという。¹³²このような頻繁な接触から、芥川の訪問はただ取材という仕事のためだけに中国学者に接触したことに止まっていたとは言いがたい。

わざわざ会見の内容を省いた理由について、『胡適の日記』において、1921年6月27日で芥川と作家の自由について論じた内容から少し手がかりが見つけられる。芥川は当時「中国の作家が享受している自由は、日本人の得ている自由よりもかなり大幅のように思われ、それがうらやましい」と語ったという。そこに、芥川が明治憲法下に存在した検閲に対する意識が見られる。

しかし、後年芥川の文学作品から、少しずつ『游记』で見かけない旅行のエピソードが明らかになっている。章炳麟に会見した当時の様相を記録した「瞥見」¹³³に、章が芥川に対して、以下のような話をしたと記されている：

予の最も嫌悪する日本人は鬼が島を征伐した桃太郎である。桃太郎を愛する日本国民に多少反感を抱かざるを得ない。

そして、章の見解に対し、芥川は会見の思い出で「先生はまことに賢人である」と賛同を示したようである。帰国後の1924年で発表した「桃太郎」¹³⁴は、まさに章炳麟から影響を受けて書き残した一篇だと考えられている。

「桃太郎」では、桃太郎が罪のない鬼たちの島に侵略したエピソードが紹介されている。小説が発表された当時、日本国内で大きな争議を起したという。日本を明らかに批判したとはいえないが、少なくとも芥川自身の列強の侵略行為に対する反発の姿勢がうかがえる。

また、後年江口渙の回顧録『わが文学半生記』¹³⁵で、芥川の長沙取材の感想について、次のような思い出が記されている：

(当時の日貨排斥運動で)芥川が長沙の女学校で見たのもその運動の一端だった。女学生たちは教室でも家庭でも絶対に日本品を使わない。ペンもペンじくも、インクも、ノートもつかわない。

…ノートの代りに中国紙のけい紙の帳面をつかい、それへ毛筆でかいている。

(中略)その決意と闘志のはげしさを実際に見たとき、芥川はもう少しで涙が出そうになるほどの感動に打たれた、といていた。「中国人という民族は全く大した民族だね。いまに見たまえ。いまに、君。中国はたいした国になるよ」

以上のように、芥川の侵略者である列強に対する強い批判が見出せる。しかし、『游記』を書く際に、検閲を意識した芥川は、やむを得ず政治面の主張を控え、苦慮しながら最大限度で『游記』によって侵略であえいだ中国の現実と侵略者に対する批判を表現した。旅行の経験を記録する一方、芥川はその合間でやはりさりげなく個人の認識を伝えている。例えば、「雑信一束」の最後の二節においてこのような記述がある：

丁度日の暮の停車場に日本人が四五十人歩いてゐるのを見た時、僕はもう少しで黄禍論に賛成してしまふ所だつた。

(十九 奉天)

高粱の根を匍ふ一匹の百足。

(二十 南満鉄道)

侵略者の身分として中国に入った「日本」について、芥川も相変わらず批判の姿勢を取っていたとみられる。このように、『支那游記』を通じて、中国旅行において芥川は中国そのものを求めながら、中国の立場にたって侵略を受けつつある現状をみつめる芥川の姿を見出せたのである。

おわりに

本稿では、近代日本知識人の中国に対する眼差しの一端として、第一次世界大戦後における芥川龍之介の中国旅行について考察を行ってきた。考察する対象について、芥川が記した中国紀行である『支那游記』を主な研究素材にし、同時期における芥川の書簡、関連する文学作品、また友人などの思い出を参考素材として取り扱っている。中日両国の先行研究をまとめて把握した上で、『游記』からみる芥川の中国観に関し再検討を試みた。

検討方法として、まず書簡を手がかりにして、芥川の中国各地域に対する感想を把握した。そしてその感想を踏まえて、当時各地域の歴史状況を具体的に考察しながら、『游記』を各参考素材に結びつけて、新たに中国旅行の追跡を試みた。さらに、芥川が『游記』で重点をおいて描いた部分を分析し、彼が中国旅行で注目し、そして読者に伝えたいと思った内容が何だったのかを検討してみた。

具体的に、第1節では芥川の中国旅行の経緯を紹介し、第2節では游記の執筆及び後世の研究内容をまとめ、書簡を提示してそれをベースにした検討方法を説明した。そして、第3節から第4節まで、具体的に当時の中国歴史状況を含めて、芥川の旅行状況を追いながら、『游記』における各地域の記述に対し解説を試みた。

第3節では、上海到着の夜で、芥川が租界から受けた中国の第一印象を検討し、彼の上海における「西洋」に対する心情の変化をたどってみた。続いて芥川の上海の中国人街である豫園地域での観光を検討し、当時の中国伝統景観の実態に接した時の感情を考察した。そこから、芥川が中国そのものである伝統文化に対する関心を理解し、そして現実で荒廃し続けた伝統景観に直面した際に、彼がもらした感情をうかがうことができた。

そして第4節では、芥川の江南地域および長江地域における見聞を考え、『游記』で注目した景観から強調した遭遇などを抽出し、また直接の感想を通して彼が中国を捉える姿勢を確かめた。最後に、第5節において芥川がもっとも愛着した北京に対する『游記』の描き方を考察した。書簡と『游記』の内容の落差、取捨、そして紀行で記されていない中国学者との交流内容から、芥川が『游記』を通じて伝えたい内容を再確認してみた。

まとめると、芥川は、中国伝統文化に対し愛着を抱きながら、終始「中国の現実」から目を離しておらず、西洋文化の浸入、伝統景観の消滅、ないし中国人自身の意識に注目し、「現代」の中国に存在した様々な問題を取り上げている。関口氏が『芥川龍之介新論』で論じたように、『游記』の中の中国表現は、当時の「言論統治、検閲をかいぐるため」に工夫したものだと考えられる。本稿は、このような辛辣な表現を再検討することによって、芥川が漱石と同じく現実の中国に対する深い関心を明らかにした。

1921 年の中国旅行は、それ以降どんなに芥川を影響し、その影響はいかに文学作品に反映されていたのであろうか。そして、中国旅行を終えて、「北京日記抄」を発表した二年後、または全集である『支那游記』が出版された二年後、芥川は自殺を遂げた。自殺直前の芥川が、検閲制度を意識しながら、紀行文によって日本の帝国主義に対する反省を行い、当時の中国の現実を論じたことは、一体どんな意味を持っているのか。そこから芥川の中国旅行の具体像を究明するには、当時の検閲制度をさらに詳しく考察した上で、関係者の芥川関連の記述や芥川の文学作品の追跡などから手がかりを探り続ける必要が考えられる。それを今後の課題として、これからも中国旅行の関連資料に対する調査及び考察を続けていきたい。

- 1.本稿は、主に新聞に連載された全紀行を収録した『支那游記』を考察対象とする。具体的な掲載状況は、次の節における説明にゆだねる。
- 2.戸田民子「芥川龍之介「上海游記」―里見病院のことなど―」(『論究日本文学』46,1983年5月,pp.11～月,pp.11～23)によると、入院の間でも、何回も上海から蘇州を取材に往復したこともあったという。
- 3.ここでは、改造社1925年初版のものを参考している。
- 4.国書刊行会,2007年4月。
- 5.岩波書店、1997年6月、p.346。
- 6.「五・四運動」の定義及び期間について、笠原十九司は『第一次世界大戦期の中国民族運動―東アジア動―東アジア国際関係に位置づけて―』(汲古書院,2014年2月)において詳しい説明を行っている。本稿では、「五・四運動」を「1915年から開始され、1921年の中国共産党の成立にいたるまで」たるまでの様々な反帝国主義運動、新文化運動などを含めた「五・四時期」という広義の意味で捉えている。
- 7.中国共産党は、1921年7月23日上海で中国共産党第一次全国代表大会によって結成されていた。
- 8.薄田泣菫(1887～1945年)詩人・随筆家。大阪毎日新聞社学芸部長。当時は芥川の上司である。書である。書簡に現れた人物の紹介は関口安義、宮坂寛編「人名解説索引」、『芥川龍之介全集』第十九集』第十九卷(岩波書店、1996年6月9日)より。
- 9.1921年3月11日における薄田への書簡より(『芥川龍之介全集』第十九卷、岩波書店、1996年6月9日、p.153)
- 10.表10では、資料によって判明した部分だけを取り扱っている。
- 11.村田孜郎(?～1945年):当時大阪毎日新聞社上海支局長。案内者の紹介は「注解(上海游記)」、『芥川龍之介全集』第八卷,1996年6月10日,p.304より。
- 12.トーマス・ジョーンズ:イギリスのロイター通信社上海支局の記者。アイルランド人(前掲『芥川龍之介全集』第八卷より)。
- 13.友住君:大阪毎日新聞記者、詳細不明(前掲『芥川龍之介全集』第八卷より)。
- 14.余洵(1888～1939年):中国安徽省出身。十代後半に日本に留学し、1909年に早稲田大学入学。1914年帰国後、『大共和報』編集長になり、以降上海の名記者として認められたという。1938年10月に上海のホテルで暗殺される。(秦剛「上海小新聞の一記事から中日文壇交渉を探る―谷崎潤一郎・芥川龍之介の上海体験の一齣―」、『日本近代文学』75,日本近代文学会,2006年,pp.206～214)
- 15.島津四十起(1871～1948年):俳人。自由律俳句誌「華彫」を編集し、『上海在留邦人人名録』『上海日本電話帳』を出版。(鎮江、蘇州)
- 16.島田太堂(1866年～1926年):「上海日報」主筆。蘇州駅の停車場まで芥川を迎えに来ていた(前掲『芥川龍之介全集』第八卷より)。
- 17.高洲太吉:『游記』の「古揚州(上)」の部分によると、当時揚州唯一の日本人で塩務官を務めるとい
- 18.五味:大阪毎日新聞の記者。詳細不明(前掲『芥川龍之介全集』第八卷より)。
- 19.西村貞吉:東京府立第三中学校時代の同級生。(前掲『芥川龍之介全集』第十九卷より)。
- 20.水野:水野。書簡(芥川道章宛、1921年6月6日付)によると、当時1920年代の中国漢口で住友の口で住友の支店長を務めたという。
- 21.宇都宮五郎:当時漢口のイギリス租界にあった武漢洋行の商社マン(前掲『芥川龍之介全集』第十九卷より)。
- 22.中野江漢(1889～1950年):中国民俗の研究者。26才で北京に渡り30年間在住した。
- 23.波多野乾一(1890～1963):新聞記者。1913年大阪朝日新聞社に入社。後大阪毎日新聞北京特派

聞北京特派員、北京新聞主幹、時事新報北京特派員など一貫して中国専門記者として活躍している。している。関口安義、宮坂寛編「人名解説索引」、『芥川龍之介全集』第十九巻(岩波書店、1996年6月1996年6月9日)より。

24.松本鎗吉:大阪毎日新聞社北京支局員。詳細不明(出所同上)。

25.辻聴花(1866～1931年)中国文学研究家、劇評家。

26.「上海游記」及び「江南游記」は『毎日新聞』で20回以上連載され、後1925(大正14)年でまとめられまとめられた『支那游記』で、それぞれ、84ページ、124ページの紙幅を占めている。

27.初出のタイトルは「長江」である。

28.芥川は帰国後、「上海游記」などの紀行文を執筆しはじめたが、執筆から非常に苦しみを感じたようである。「江南游記」の連載が終わった後の1922年2月22日において、芥川は新聞社の上司である薄田泣菫宛に、「原稿を書かねばならぬ苦しさで瘦すらむ我をあはれと思へ」と執筆の苦しみを伝えていた書簡を書いた(石割透編『芥川龍之介書簡集』,岩波書店,2009年より)。

それが原因なのか紀行の発表が一時「江南游記」で止まったのである。そして1924年以降、後続とし後続として「長江游記」と「北京日記抄」が『女性』や『改造』に発表されたが、内容は「上海游記」と「江記」と「江南游記」よりかなり短くなっている。

29.改造社,1925年11月。

32.『芥川龍之介全集』の後記において、『支那游記』と初出との校合が行われ、それによって『支那游記』に大きな変更がないことが確認できている。

(『芥川龍之介全集』に収録された旅行記は、『支那游記』所収のものを底本にしている。4編をまとめて出したわけではなく、初出の時間に依拠しほかの文学作品と一緒に収録したのである。4編の掲載時期が離れていたので、「上海游記」と「江南游記」は第8巻、「長江游記」は第11巻、そして「北京日記抄」は第12巻とばらばらに収録されている)

36.三省堂、1942年12月。

37.国文学 解釈と教材の研究 22(6), 1977年5月, pp.85-91。

38.「芥川の上海体験(特集:芥川龍之介—モダン=現代とは何か)」、『国文学 解釈と教材の研究』, 研究』, 2001年9月, pp.108-115

39.『都留文科大学研究紀要』(37), 1992年, pp.200-178。

40.関口安義「第九章 中国視察の旅」,『芥川龍之介とその時代』,筑摩書房,1999年3月, pp.403-449。

41.「中国視察旅行」,『芥川龍之介の歴史認識』新日本出版社,2004年10月, pp.106-121。

42.巴金(1904-2005年), 中国の小説家、翻訳家、エッセイスト。

43.『支那游記』(特集 芥川龍之介作品の世界)、『国文学解釈と鑑賞』64(11), 1999年11月, 月, pp.115-119

44.講談社, 2000年6月, pp.172-197

46.湖南の長沙で女学生の抗日行為を見聞したのを指している。

47.奉天での満鉄の見聞で芥川は日本人の集まりを見て、「黄禍論」との表現を使い、嫌悪な感情を表している(『支那游記』の第264ページに参照)。

48.『国語と国文学』83(11), 2006年11月, pp. 57-69。

49.『国文学: 解釈と鑑賞』72(9), 2007年9月, pp.179-186。

50.『芥川龍之介研究』2, 2008年, pp.19-29。

51.単援朝「現代の支那の悪口」が如何に形成されたか—『支那游記』における中国の現実批判の言説について—, 『芥川龍之介研究』2, 2008年, pp.9-18。

52.『国文学: 解釈と教材の研究』53(3), 2008年2月, pp.103-115。

-
- 53.張薔『芥川龍之介と中国 受容と変容の軌跡』,国書刊行会,2007年4月
- 54.川本三郎『大正幻影』「8 支那服を着た少女」,新潮社,1990年10月,pp.142～143。
- 55.ここでは、中国現地から発信した書信だけを取り扱っている。
- 57.小島政二郎(1894～1994年)小説家・随筆家。鈴木三重吉の「赤い鳥」の編集助手として童話を書き、童話を書き、三重吉の紹介で芥川や菊池と交流する。人物の紹介は関口安義、宮坂覚編「人名解説索引」、『芥川龍之介全集』第十九巻(岩波書店、1996年6月9日)より、以下も同じ。
- じ。
- 58.城内:1921年前後では、上海の共同租界に位置した中国人だけの街をさす(前掲『芥川龍之介全集』第八巻より)。
- 59.湖心亭:上海の共同租界内荷花池の中央に建っていた清朝建築の会館。何回の再建を経て、2014を経て、2014年における実地の考察によると、現在そこにおいて「明心亭」という茶館が経営されている。
- 60.岡栄一郎(1890～1966年)劇作家。漱石門に出入りし、のち芥川の我鬼窟の常連となる(前掲『芥川龍之介全集』第十九巻より)。
- 61.松岡 譲(1891～1969年):小説家。東大在学中芥川、久米正雄らと第3、4次「新思潮」を創刊(前掲『芥川龍之介全集』より)。
- 62.雷峰塔:呉越王の銭弘俶が王妃の黄氏のために建立(977年)。西湖西岸の夕照山の雷峰の頂上峰の頂上に建つ。芥川が訪れた後1924年9月25日倒壊し、2000年から再建され復元されたのである(雷峰塔のホームページ <http://jing.leifengta.com/index.aspx> に参照、2015年7月)。
- 月)。
- 63.南部修太郎(1892～1936年):小説家。1917年頃から芥川に師事(前掲『芥川龍之介全集』第十九巻より)。
- 64.下島勲(1870～1947年):医者、俳人、随筆家。日清、日露両戦争に軍医として従軍。のち東京田端ち東京田端で開業し、近隣に住む芥川の主治医となる(前掲『芥川龍之介全集』より)。
- 65.小沢碧童(1881～1941年):俳人。滝井孝作や小穴隆一を介して芥川を知る(前掲『芥川龍之介全集』第十九巻より)。
- 66.聯芳楼記:明代の詩人、瞿佑の怪異小説集『剪燈新話』中の一編。
- 67.小穴隆一(1894～1966):洋画家・俳人。1919年俳句雑誌「海紅」に載せた雄鶏の挿絵が機縁となって芥川と親交を結んだ(前掲『芥川龍之介全集』第十九巻より)。
- 68.中戸川吉二(1896～1942年):小説家。第5次「新思潮」同人で、芥川が期待した作家の一人(前掲『芥川龍之介全集』第十九巻より)。
- 69.廬山:山西省の九江市にある名山中、もともとは仏教の霊跡であるが、当時は避暑地として名が知れて名が知られていた。1930年代から中国政界の要人が会議する所となり、一時政治の中心にもなっていた。
- 71.滝井孝作(1894～1984年):俳人、小説家。(前掲『芥川龍之介全集』より)。
- 72.室生犀星(1889～1962年):詩人、小説家。田端の芥川家の近隣に住んでいた(前掲『芥川龍之介全集』より)。
- 74.中原虎雄(1897～1959年):紡績学者(前掲『芥川龍之介全集』より)。
- 75.恒藤恭(1888～1967年):法学者。芥川の一高時代の同級生(前掲『芥川龍之介全集』より)。
- 76.松本鎗吉:大阪毎日新聞社北京支局員。詳細未詳(前掲『芥川龍之介全集』より)。
- 77.鄭孝胥(1860～1938年):清の詩人、政治家、書家。中華民国では宣統帝の侍講をつとめ、「満州国」では國務総理として就任していた(「注解(上海游記)」、『芥川龍之介全集』第八巻、1996年6月10日、p.314)。
- 78.章炳麟(1868～1936年):清末から中華民国初めの学者、革命家。清朝考証学最後の大家(「注解(上海游記)」、『芥川龍之介全集』第八巻、1996年6月10日、p.313)。

- 79.佐佐木茂索(1894～1966年):小説家。雑誌編集者。1919年9月頃から芥川に師事した(前掲『芥川龍之介全集』より)。
- 80.沢村幸夫(1883～1942年):大阪毎日新聞社社員。大阪毎日新聞社外国通信部を経て、「支那課長・上海支局長」を務めた。芥川の中国旅行についていろいろと便宜をはかったという(前掲『芥川龍之介全集』より)。
- 81.前掲祝振媛『支那游記』(特集 芥川龍之介作品の世界)、『国文学解釈と鑑賞』64(11), 1999年64(11), 1999年11月, pp.115-119。
- 82.臧理, 十代田朗, 渡辺貴介「租界時代の上海からの避暑地としての廬山の成立過程」、『ランドスケープ研究: 日本造園学会誌: Journal of the Japanese Institute of Landscape Architecture』61(5), 1998年3月
- 83.大平善悟『支那租界の歴史』, 岩波書店, 1941年6月30日, p.246。
- 84.川島真『近代国家への模索 1894-1925 シリーズ 中国近現代史②』, 岩波新書, 2010年12月17日, p.20。
- 85.尾崎秀樹『上海 1930年』(岩波書店, 1989年12月20日)より。
- 86.碼頭は、波止場を意味している。
- 87.前掲尾崎秀樹『上海 1930年』(岩波書店, 1989年12月20日)より。
- 88.初版の『支那游記』では、「東和洋行」ではなく「東亜洋行」と記述している。1921年前後の上海では、上海では、「萬歳館」というホテルは確かに存在しているが、「東亜洋行」とのホテルはなく、その代りにその代りに「萬歳館」の近くに「東和洋行」というところがあり、そこは日清戦争前に朝鮮人の金玉均が暗殺されたホテルである。
- また、芥川は『游記』で「東亜洋行」は金玉均が暗殺されたホテルだと書いているので、「東亜洋行」は「東和洋行」の可能性が高いと考えられる。それで、拙稿では「東和洋行」と見なして検討して検討する(木之内誠『上海歴史ガイドブック』, 大修館書店, 1999年6月を参考にしている)。
- 89.『全集』によると、里見病院は当時の密勒路A六号、現在の上海の虹口区峨嵋路108号に位置する。
- 90.前掲戸田民子「芥川龍之介「上海游記」-里見病院のことなど-」より。
- 91.筆者は2014年8月において、ゼミ一同で芥川の上海旅の追跡を行った。そこでもう一度芥川が行った芥川が行った場所を確認し、各場所の現在の様相を写真として記録した。以降の文章も追跡によって場所によって場所を確かめたのである。参考資料として、前掲の木之内誠『上海歴史ガイドブック』(大修館書店, 1999年6月)を使用している。
- 92.童世亨編『実測上海城市租界分図』(商務印書館, 1918年)より。
- 93.「注解(上海游記)」、『芥川龍之介全集』第八巻、1996年6月10日、p.305
- 94.李人傑(1890～?年): 中国共産党の創立メンバーの一人である(「注解(上海游記)」、『芥川龍之介全集』第八巻、1996年6月10日、p.319)。
- 95.前掲『全集』の注解によると、「南国の美人」の三節は『沙羅の花』に独立した形で納められた。
- 96.取材内容をまとめたのは「城内」の上、中、下三節(第6～8節)であり、『游記』では、「城内」が租界内」が租界に対する呼称で、伝統の生活様式を保った地域をさしたと考えられる(地図102-C)。
- 97.中国では「赤脚大仙」と読んでいる。原典は『劉海戯金蟾』だと考えられているが、初出は不明。(于潤琦編著『北京的門礮』, 北京美術摄影出版社, 2002年より)
- 100.前掲川島真『近代国家への模索 1894-1925 シリーズ 中国近現代史②』より。
- 101.1866年イギリスが上海の領事館前に造成した公園である、現在は黄浦公園という。開園日から、中日から、中国人の入園を禁止していた。それによって、入り口に「華人と犬、入るべからず」(「華人与狗(「華人与狗不得入内」)の看板をかかげたという噂が伝わり、中国で大きな反発を招いた時期がある。期がある。一方『上海遊覧指南』(上海図書集成公司出版, 1919年)は当時の中国人の入園禁止につい

禁止について研究を行い、噂の真実性を否定していた。

102.『芥川龍之介文庫目録』(日本近代文学館所蔵資料目録<2>、1977年)によると、芥川の個人蔵書の中で、洋書が638点、和書は277点、漢籍が188点収蔵されている。

104.「戯台」(上)、(下)(第9～10節)に参照。芥川の上海観劇について、秦剛は「芥川龍之介上海観劇考」『芥川龍之介研究』(5・6)、2012年、pp.1～16)において詳しい検討を行っていた。

105.ここでは、芸者のことを指している。

106.「南国の美人」(上)、(中)、(下)(第15～17節)に参照。

108.当時の二十一カ条を受け止めた北洋軍閥政府をさしている。

109.笠原十九司『第一次世界大戦期の中国民族運動』(汲古書院、2014年2月)より。同書によると、「パよと」、「パンフレットには、上海学生連合会は、上海の学校83校を組織、2万人の学生、内女学生5女学生5千人を代表しているとあった」。

110.ここでは、「五・四運動」を五・四事件から中国共産党が成立するまでの期間として取り上げている。げている。(前掲笠原十九司『第一次世界大戦期の中国民族運動』より)

111.前掲笠原の『第一次世界大戦期の中国民族運動』より。

112.前掲笠原の『第一次世界大戦期の中国民族運動』より。

113.以上の排日親米の現象に関する説明は、前掲川島真『近代国家への模索 1894-1925 シリーズ シリーズ 中国近現代史②』及び前掲笠原十九司『第一次世界大戦期の中国民族運動-東アジア国際アジア国際関係に位置づけて-』などを参考にしている。

114.芥川龍之介「侏儒の言葉」,文春文庫,文藝春秋,2014年7月。

115.「将軍」に次いで『改造』で刊行された「長江游記」の中でも関連の記述が見出され、「将軍」の掲載軍」の掲載が日本で大きな騒ぎを起したことが明らかである。

116.租借地は、中国側による黙認があり、租界よりも主権譲渡の意味合いが強かったと考えられている(前掲川島真『近代国家への模索 1894-1925 シリーズ 中国近現代史②』)。

117.大平善梧『支那租界の歴史』(岩波書店、1941年6月30日、pp.268～269)を参照。租界範囲について、中国に認められていないところも存在しているが、各地における外国人の侵入を確認入を確認するため、ここではそのような場所も含めて考えることにしている。

118.「日華公論」第八巻第八号の「雑録」(1921年8月1日)に掲載されていた(「後記」、『芥川龍之介全集』第八巻、1996年6月10日、p.374より)。

120.前掲の笠原十九司『第一次世界大戦期の中国民族運動-東アジア国際関係に位置づけて-』より。

121.前掲劉建輝『魔都上海：日本知識人の「近代」体験』より。

122.井上洋子「芥川龍之介の中国旅行と<支那趣味>の変容-(その一)中国到着まで」、『福岡国際『福岡国際大学紀要』(3)、2000年2月、pp.85～92。

123.臧理、十代田朗、渡辺貴介『ランドスケープ研究：日本造園学会誌：journal of the Japanese Institute of Landscape Architecture』61(5)、1998年3月、p.644。

124.『支那游記』、p.257。

125.前述川本三郎『大正幻影』より。

127.「旅のおもひで」:『東京日日新聞』(1925年6月20～21日)に「旅十題」の総題のもとに、その「(7)の上、下」として「(長崎、北京、京都)」と副題をつけて掲載されていた(『芥川龍之介全集』第十二巻、岩波書店、1996年10月8日、p.247、p.405より)。

128.残りの二節はそれぞれ「二 辜鴻銘先生」と「四 蝴蝶夢」である。「二 辜鴻銘先生」は辜鴻銘と会見する内容で、「四 蝴蝶夢」は北京における観劇の経験を記したものである。

129.ラマ教特有の仏で、男女の抱き合う姿勢を取った二身相抱の象頭人身の形をした仏像である。男である。男は法を意味し、女は知恵を意味することで、歓喜佛は法界の無限な知恵を象徴している。ている。

130.「雑信一束」の「十八 天津」より(p.264)。

131.単援朝「上海の芥川龍之介——中国共産党の代表者李人傑との接触」、『日本の文学』第八号,1990年12月。

132.単援朝「芥川龍之介と胡適——北京体験の一側面——」、『国文学言語と文芸』第一〇七号,1992年8月。

133.章炳麟に関する内容は、1924年4月1日発行の「女性改造」第三巻第四号に「僻見」の「岩見重太」「岩見重太郎」の章に掲載されている(『芥川龍之介』第十一巻,岩波書店,1996年9月9日より)。「岩見り」。「岩見重太郎」のなかでは、章炳麟が「章太炎」と呼称されている。

134.「桃太郎」:1924年7月発行の「サンデー毎日」第三年第二十八号の「創作」欄に掲載。

135.江口渙『わが文学半生記』、吉田精一監修『近代作家研究叢書』、日本図書センター、pp.217～219。

終章 近代の新聞雑誌からみる日中のまなざし

本論文は、日本と中国の 20 世紀前半の約半世紀にわたる戦争と軍事的大規模紛争の背景に日本人による中国に対する「蔑視」観や「劣等」視する見方があるのではないかという点を問題意識に設定し、各戦争期の代表的な新聞雑誌資料を取り上げ、そのなかで表出された中国イメージについて分析を試みた。

近代の新聞雑誌事業は明治維新から発足し、そして初めての対外戦争である日清戦争によって、飛躍的な成長を遂げていた。情報が多様化していく中で、読者の情報吸収や選別の能力も鍛えられていったのである。それに従って、読者が情報に対する要求は、直観的で単一なものから、多様かつ信憑性の高いものへと変化していったとみられる。

近代日本人の教育程度を確認した上、各時期の特性を考慮に入れて、本論文は近代日本人の中国観をよく反映できた代表的な資料を取り上げた。

日清戦争期では、新聞事業が発足した間もない時期にあり、伝統な絵草紙読み物が繁盛していた一方、そして電報通信から写真まで新しい報道形式も現れていた。それで、本論は直観的な戯画読み物と多様な報道形式を揃えた読み物をそれぞれ取り上げて検討を試みた。第一章、第二章では、当時大衆が大いに喝采した『团团珍聞』の「戯画」や日清戦争を速報して大ベストセラーになった『日清戦争実記』を素材に、そのなかに表現された「中国」観を抽出し分析を行った。

そして、日本人の描き方を再確認するため、第三章では、欧米人絵師ビゴーがイギリス大衆新聞に寄稿したデッサンの分析を通じ、外国人の目に映る日清戦争を検討した。

一方、日露戦争や第一世界大戦後になると、文学者が独立な職業として身分を確立した。交通の発達によって観光や実地考察が盛んになり、それと同時に、一般読者もより迫真性のある中国情報を求め続けていた。その時代背景を参考にして、第四、五章では、当該時期の代表的な知識人として夏目漱石そして芥川龍之介を取り上げた。現地での調査などを踏まえながら、日露戦争直後に満鉄肝入りで中国東北地方を旅した夏目と、第一次世界大戦後に現地新聞社の招待により芥川の眼差しをそれぞれ分析し比較を行った。論文の内容構成は、以下の通りである。

第一章 日清戦争期の戯画が描いた中国

第二章 『日清戦争実記』で報道された中国

第三章 ジョルジュ・ビゴーが描いた日清戦争

～イギリスの画報紙『ザ・グラフィック』を素材にして～

第四章 中国東三省を旅した夏目漱石の眼差し

～新聞掲載紀行「満韓ところどころ」から～

第五章 中国取材に旅立った芥川龍之介の眼差し

～新聞掲載紀行『支那游記』から～

第一章では、戦時中に読者の人気を博した『時事』、『団珍』および『百笑』を取り上げ、その中の戯画を考察した。『時事』、『団珍』、『百笑』は、それぞれ出版指向が異なるものの、共通して戯画の内容はわりと浅く、題材も単一化する傾向がみられる。「清国は弱い」、「清兵は弱兵」と表現しているところや、清国を弁髪姿や豚のイメージで表現しているところも共通し、いずれも上からの視線で当時の中国を批判していた。それをみた民衆たちも、戯画のイメージをそのまま受け入れ、人々の間では、清人の弁髪首の姿を敵愾や嘲笑の対象として、展示や商品に使っていた。中国の諷刺を繰り返す戯画は、民衆の敵愾感情を高揚させ、さらに中国蔑視感情の形成も促した。

『団珍』や『百笑』のような一般大衆に向けた読み物から、『時事』のような大新聞までも、過激なイメージを頻繁に掲載した現象があり、戦争戯画の内容は戦争また敵国に対し冷静さを失ったことがうかがえる。そのため、清国を嘲笑する戯画は単に、一部教養の低い民衆が戦争の雰囲気流されて楽しんだものでなく、知識人から一般民衆まで、幅広い読者層が楽しむものとなっていた。つまり、日清戦争時に民衆の間には、すでに中国に対する蔑視観念が醸成されていた。

第二章では、博文館が創刊した『日清戦争実記』を素材として、戦況報道(「本紀」/「戦争實記」欄)や各種の雑報で描かれた中国を検討した。

戦況報道について、代表的な戦役となる平壤陸戦(朝鮮戦場)、旅順半島の攻略(中国戦場)、そして黄海海戦(大規模の海戦)を対象に考察し、戦闘場面で表出した清軍イメージを分析した。平壤陸戦では、清軍の臆病なイメージが重点的に強調されたが、旅順半島の攻略になると、清軍の強い対抗も描くようになった一方、「野蛮」、「残虐」なイメージも強調されるようになっていった。また、黄海海戦の場合は、引き続き清兵の臆病的な行動に注目したが、その理由として、清兵の愛国心の欠乏を表現する内容も見られるようになっていった。

次に、雑報の部分については、戦争中の清軍報道、そして戦争後の中国社会全般にわけて、それぞれ彙報、「地理」欄で掲載された記事を抽出し考察を行った。戦中の雑報で描かれた清軍は、自己本位、無秩序、戦闘力の低いイメージで批判され続けていた。その一方、戦

後になると、雑報の内容は中国の風土、中国人全般へと転換し、そして論説でなく実地考察を取り扱うようになっていく。戦中の論調を踏襲して、「無神経なる事」、「保守主義」など中国批判が多くみられるが、そのほか少数でありながら、中国に対する冷静的な論調も現れてきた。

第一、二章の考察を踏まえて、第三章では、日清戦争期で中国に対する描き方を再度確認するため、欧米人ジョルジュ・ビゴーの戦争報道画を考察してみた。戦場写真のソース源を把握したうえ、ビゴー私蔵の『日清写真帳』及び関連の写真資料を参考にしながら、『ザ・グラフィック』へ投稿した戦争報道画に重点をおいて考察を行ってみた。

まず、先行研究を参考にしながら、新聞資料及び『日清戦争写真帳』によって、ビゴーの従軍取材について追跡を行ってみた。そのなかから、ビゴーの報道画のベースとなった写真を確認できた。

次に、戦争以前におけるビゴーの風刺画作品をまとめて考え、そのなかで反映された国際観を把握してみた。日清戦争以前の作品から、日本が近代化の中における無選別な欧米吸収について、ビゴーが疑問を示したとうかがえる。ドイツ指向に伴った軍国化への転向について、ビゴーは風刺画によって警告を続けてきた。そして、戦争後になると、ビゴーは大量な画集を制作しはじめたが、内容は「一段と露骨」な日本風刺、そして、今までのない日英関係に対する猛烈な風刺に転向したという。西洋式を取り入れた軍隊について、ビゴーは戦前よりさらに辛辣な風刺を投げつけていた。

戦前戦後の作品と対照しつつ、最後にビゴーの『ザ・グラフィック』に投稿した報道画を考察した。報道画の情報性を確認したうえ、戦争報道画の内容をテーマごとに分類し、ビゴーが描いた戦争を具体的な検討した。結論として、彼は日本人絵師と違って、主に戦場の陰の一面に注目し続けた姿勢を持ったことが判明した。特に、戦勝者である日本を描く際にも、負傷者の姿や戦病に関わった姿を重点的に描き、ビゴーはリアリティを貫いて戦争の残酷さを強調した。そこから、ビゴーの日本の近代化さらに軍国化に対する強い懸念がうかがえた。

日露戦争期になると、日本主義論が唱えられていた反面、戦争の反省による非戦論も台頭していた。戦争観の転換に従って、中国に対し客観的な態度を呼びかける論調も現れていた。このような時代背景のもとに中国に旅立った知識人たちは、また紀行文によってどのようにこの時期の中国を描いたのか。第四章では、1909年に夏目漱石が『東京朝日新聞』に発表した「満韓ところどころ」によって、当時日本の知識人が中国に対するまなざしを考察してみた。

夏目漱石は日露戦争の終結した五年後(1909年)、満鉄が所在した中国の東北地域そして朝鮮に旅立っていた。強行軍の視察旅行を終えた直後から、「満韓ところどころ」を『朝日新聞』

に掲載しはじめた。紀行文のなかで過激な文章表現が多く、今でも問題視され議論されているが、同時期における『東京朝日新聞』の時事報道と対照した結果、「満韓」から漱石の鋭い見解が確認できた。

まず、漱石は批判精神を貫いて満鉄の様相を描いた。鉄道及び附帯事業の内容が欧米人向けで、一般民衆から遠ざけた現実を見出し、そして経費縮減に背けた盛んに設立した娯楽機関にも注目し皮肉的に表現した。

次に、戦跡めぐりについて、漱石はわざと話題性のある場所を避け、日本人だけでなく戦時下におけるロシア人のエピソードもいくつか提示し、戦争の悲惨さを表現することによって戦争に対する反省を促していた。

さらに、中国そのものについて、漱石はさまざまな人物像を通じて、近代中国の現実を描き続けていた。ロシア馬車からアメリカタバコの話を通じて、彼は利権回収の問題を提示した。清政府や一部の知識層が性急に利権回収を試みた一方、本質となる莫大な外債問題、経営問題を無視した実態を、漱石が鋭く見出したのである。また、満鉄のそばで小鳥道楽に耽った民間人を描くことによって、彼は中国の民族覚醒の必要性を暗喩的な形で提示した。

漱石が旅立った十数年後、いわば第一次世界大戦直後、芥川龍之介も取材で中国を旅行した。彼は帰国後漱石と同じく新聞紙に紀行文『支那游記』を発表した。旅行の案内者から日程、移動ルートまで漱石と異なる一方、『支那游記』には「満韓」と類似した内容が多く現れていた。中国に対する最初の印象が中国のクーリーとの遭遇によって構成され、西洋式の舞踏場から中国趣味をもつ日本人までも同じくこの紀行文のなかで取り上げられた。さらに、国家の現状に無関心な態度を示す中国人は、「満韓」でみられた小鳥道楽の中国人姿から、『支那游記』でまた別の姿を以て再び登場していた。

第五章では、まず同時期における芥川の書簡、関連する文学作品、また友人などの思い出を手がかりにして、芥川の中国各地域に対する感想を把握した。その上で、各地域の歴史状況を具体的に考察しながら、『游記』についての検討を試みた。さらに、芥川が『游記』で重点をおいて描いた部分を分析し、彼が中国旅行で注目し、そして読者に伝えたいと思った内容が何だったのかを検討してみた。

結論からいうと、芥川は西洋と中国そのものに着目し、それぞれ自分の見解を示した。中国伝統文化に対し愛着を抱きながら、終始「中国の現実」から目を離しておらず、西洋文化の浸入、伝統景観の消滅、ないし中国人自身の意識に注目し、「現代」の中国に存在した様々な問題を取り上げている。

以上をみてきたように、日清戦争では、過熱な戦争支持に付随して、日本人のなかでは中国に対する否定的な感情が形成した。そのため、戦争報道で中国を侮蔑的に表現する現象が普遍し、日本の戦争戯画から戦争実記報道、さらに欧米人絵師の報道画との比較によって判明していた。その一方、戦後を迎えると、戦争に対する反省を行いつつ、中国に対する冷静な態度を持つ知識人も増えていった。一部の知識人は中国趣味や中国蔑視の両極から脱出し、中国の現実を見つめていた。そのなかで、代表的な知識人として漱石や芥川が挙げられるが、彼らが近代中国から見出したのは、民族的自覚の必要性や中国背後に存在した欧米列強の影響であった。近代西洋吸収に急いだ日本に姿を重ね合わせながら、彼らは現実の中国を辛辣に表現し続けていた。

このように、戦争観の転換によって、近代日本人が描いた中国も変貌し続けていった。メディア報道だけでなく、戦争は実際様々な形で伝えられていた。1894 年で日清戦争が勃発してから三ヶ月経つと、日本の各地で祝捷会が相次ぎ開かれるようになった。その中もっとも規模の大きいのは東京市祝捷大会で、当時では「東京市祝捷大会 會券」も配布されたようである。三十箇所以上の「賣捌所」、「并に各區役所に於いて五十銭」を払えば、祝捷会に「會券および晝餐券」をもらえるという。

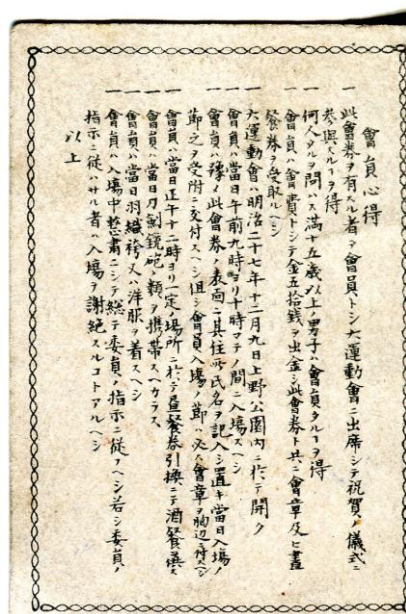


図 109 「東京市祝捷大會 會券」(正面) 図 110 「東京市祝捷大會 會券」(裏面)

トランプカードより少々サイズの小さい一枚の会券では、会員の番号、住所、氏名が手書きで記されており、参加者はこの会券を所持して当時運動会に入場できていたようである。その会券の背面では、「會員心得」まで掲げられ、このように、日清戦争の当時では、参加規則ま

で整えたまで戦勝祝賀会が重視されていた。戦争祝賀会がこれほど秩序よく組織されたとは、大規模であることを意味した一方、民衆が戦争に対する関心もある程度で反映した。

木下直之は『戦争という見世物：日清戦争祝捷大会潜入記』¹において、タイムスリップの形で東京市祝捷大会の景況を再現していたが、その内容から日本国民の戦争感情、さらに敵国に対する感情の一斑もうかがえた。

朝日新聞の記事データベース聞蔵Ⅱをベースに、「祝捷」という言葉を検索した結果、日清戦争から第二次世界大戦までにおいて、関連記事は 901 件に達したことが判明した。そのなかで、日清戦争前後(1893～1896 年)に関連した記事は 130 件余りであるに対し、日露戦争前後(1904～1907 年)の関連記事は 720 件前後に大きく跳ね上がっていた。一方、第一次世界大戦と第二次世界大戦(1914～1945)になると、合わせて 40 件に明らかに下落し、そのなかで日清日露戦争当時の祝捷会に対する回顧も含まれていた。

戦争祝捷は、民衆がある程度戦争認識を共有したことを前提にして成り立っていた。それで、各時期における戦争祝捷の変化は、また一般民衆の戦争観の変貌から、さらに対外認識の変容にもつながっていたとみられる。これから、日本人が描いた中国を考察するには、戦争観など多角的な視点から、さらなる実証的な考察が必要ではないかと考えられる。

その一方、近代の中国人はまたいかに日本を描いたのだろうか。近代中国の新聞事業は、最初がイギリス人の宣教活動によって発足していた。日清戦争期になった時点では、未だ十分な発達を遂げていなく、その多くは上海を拠点にして、中国居留の欧米人が経営したものであった。

その中で、最も注目すべきなのは申報館である。イギリスの商人アーネスト・メイジャー(Anerst・Major)などが同館を経営し、1872 年『申報』を創刊し、続いて 1877 年は『瀛寰画報』、1884 年は『点石斎画報』などを創刊していった。

『申報』(1872 年～1947 年)は、上海の春申江(現在では黄浦江)より命名され、78 年に亘った長い出版期間を持った近代新聞紙として高く評価されてきている。欧米人経営の新聞紙とはいえ、当時では蔣湘、何桂笙などの中国の知識人は執筆及び編集者の任に当たり、魯迅も 1930 年前後同紙に投稿していたという。内容は論説及び から構成され、文章表現も堅い「文言文」を多用し、主に知識人向けに発行した新聞だとみられる。



図 111 『申報』の紙面(1894 年 11 月 3 日の紙面)²



図 112 『点石齋』の紙面³

『瀛寰画報』が欧米人絵師より執筆され、風俗紹介を兼ねて海外へも販売された画報であるに対し、旬刊(10 日ごとの発行)である『点石齋画報』(以下『点石齋』と略称す)は『申報』と同じく、中国人が編集者に任じたていた。代表的な絵師として呉友如⁴、張志瀛、金桂生などが挙げられるが、いずれも西洋留学の経験もなく、年画などを長じた中国伝統絵師であり、海外の奇譚を描く際に、写真をベースに作画した場合も多くみられている。

「点石齋」という命名は申報館に付設された「点石齋印書局」にちなんだもので、「点石成金、嘉惠后人」(石を点じて金と成す、後世に(文化)の恩沢を施す)という趣旨を持って、啓蒙的な意味合いも含まれている⁵。

内容からみると、石印の一枚物で報道絵が掲載され、絵の中で読み下しの説明文が施されている(図 112)。「市井の話題」から「世界の時事」までの情報を網羅し絵の形で表現され、言葉の表現も一般民衆に親しまれやすい白話文を使用し、若い時の魯迅もその愛読者の一人だといわれている。

『点石齋』の発行について、最初は『申報』の付録として新聞紙に挟まれ、購読者に配布されていたが、単独の購読も可能なのである。また 1910 年前後において、『中国人—中国人自ら描いた社会と家庭生活—』(図 113)⁶という一冊は、『点石齋』から選出された 82 枚をドイツ語説明文付きでまとめ、ベルリンで出版されていた。編集者の M.von BRANDT はドイツの外交官で、日中両国で長く滞在した経験を持った人物である⁷。

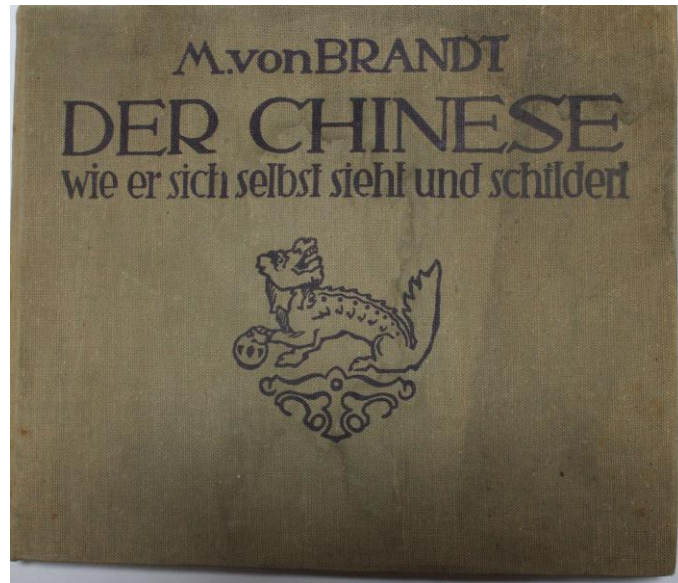


図 113 『中国人—中国人自ら描いた社会と家庭生活—』(M.von BRANDT『DER CHINESE
-wie er sich selbst sieht und schildert-』)の表紙

以上のように、『申報』と『点石斎画報』は、近代の代表的な中国新聞雑誌であり、それぞれ知識人と一般民衆向けの出版物として、検討する価値が高いとみられる。以下では、今後の課題に対する最初のアプローチとして、日清戦争期において、両紙が日本に対する紹介を考察してみる。考察の対象について、それぞれ『申報』の冒頭に位置する「社説」欄、『点石斎』で掲載された戦争関係の版面をとりあげる。

『申報』の論説では、10月まで牙山戦勝などの誤報が続いていた。9月25日の社説では清軍に対し積極的な評価を示していたが、10月1日で掲載された「憤言」(憤怒による一言)をはじめ、敗戦の事実を論じるようになり、続いて5日に日本に対する工程的な評価を兼ねて自国に対する反省が行われるようになっている。

戦前では友人の一人は中日について、…中国軍官の腐敗に対し、日本の軍隊が少ないわりに、人材が充実して、西洋技術に長じる人も少なくないと評価している。…当時この友人に反発し嘲笑した人が多いが、今となって、当時友人がいうように中国が修好を求め、日本にならわないといけないかもしれない。⁸

(「罪言」,10月5日)

日本はドイツにまなんで、三年懲役を行っている。それでいざとなると、民間人が直ぐ兵士になっても、懲役の経験で多少作戦の知識を持っている。…それに、中国は訓練も行

わず、直接民間人を戦場に送っている。中国は兵力が弱いわけではなく、兵力を使う方法、訓練の仕方がわからないというべきである。

(「練兵水陸難易説」「海陸軍事訓練の難易説」, (10月14日))

また、10月12日の「倭奴無恥」との一文で、日本の誇大的な戦勝報道について厳しく批判した一方、中国自身に対する反省の論説も多くなっていった。今後の戦略そして改革の必要性に関する論説で、日本に対する分析も多く掲載されるようになっている:

①日本の近代化について

日本は古い習慣をことごとく放棄し、専ら西洋諸国の長所を学び、西洋学問を尊んできて、たくさんの軍事品を性急に買っていた。西洋に笑われていたが、10年の間、苦心して国の計画をして、中国に手を伸ばすことを企んでいた。それにして、中国が気づかず、のんびりして構えて備えるところもなかった。(中略)

日本の大臣たちは着実な姿勢を貫き、役割を務めるにあたって苦勞を厭わない。一方中国の大臣たちは経営管理のすべてを人任せにしている。(中略)

日本が豊富な人材をそろえ、うわべでなく実用な教養を重視している。しかし、中国の教官は多く定職のない下級官吏で、軽卒に無知なもので、一人立派な学生も養成できない。

(「中国における改革の必要性を論ず」, 10月22日)

②戦争の正義性について

現在東学党は各地で倭人と争っており、倭政府はそれを鎮圧するため、朝鮮兵も強制的に動員したが効果が少ない。…倭人が暴虐で国(朝鮮)を危うくし民を苦しめて…官吏や庶民のことごとく彼らに怒りを持っている

(「中倭戦争に関する西洋人の手紙の転載」, 11月3日)

倭がたいへん狡猾で、朝鮮を手に入れてから、意気揚々で中国を狙ってきた。しかし、倭が力不足で、国民が少ないで海外に出兵できる数もすくない。それで、1地域を得るたび10日半月にわたりひきこもってから、また騒乱を起こすのが決まっている。

(「倭人の狡猾な陰謀と国力の低下を論ず」, 4月19日)

③日本国内&経済面について

倭国は今国庫が尽き、民衆が窮乏なので、上野にある徳川将軍の祠堂から金製の獣環などを壊して銀に変えて軍需に足すうわさも流されている。それで、領土割譲のわりに賠償金を支払うべきである。

原文：

(「倭人の領土割譲要求を断固拒絶すべきことを論ず」,3月10日)

日本が貧しさは西洋のやり方をまねるに急いで、軍艦など、西洋流の外見を整えるため、金銀をことごとく欧米諸国に流入させていることにある。…日本政府は金銀をさらに誘い寄せるため、紙幣を発行し、民間に押し付けた。また、細々とした諸税で金をしぼりとっている。貧民の生活も日に日に苦しくなっていく。

(「日本貧乏説」,4月1日)

今の倭人は利益を見てその害を忘れて、自らを戒めるという心もない。…中国が東三省や台湾の地を日本に与えるのは、豚を飼ってその肥えるのを待ちながら、それを売って人に与えて食べさせしめようようなものである。

(「倭人が利を得ても、恃みにならないことを論ず」,4月25日)

以上の内容をまとめてみると、清国国内の現状を反省する反面、日本の近代化そして軍事改革について、『申報』は高い評価を与えている。その一方、正義性の面から、『申報』は日本を戦争の挑発者として位置付け、戦地での暴虐など、否定的な論調がみられる。また、大国の姿勢を保つような論調もみられ、特に講和の論説では、『申報』は日本の戦勝を一時の「虚名」と論じ、日本の物資の欠乏、経済の問題を繰り返し提示していたのである。

次に、『点石齋』において、日清戦争に関係した記事は92件見つかри、その内容は戦闘場面、日本軍の様相(戦闘のない時)、日本国内との三つに大別できる。

戦闘場面について、画面の構成は日本の錦絵版画と類似し、架空なものが多くみられる。内容の多くは朝鮮戦場の戦闘そして海戦であり、中国国内の戦闘に関する画面が見つからない。

具体的な発行日が確認できないが、速報性がなく、戦中の報道において、宣戦布告以前の衝突(例えば、豊島海戦を描いた「形同海盜」(海賊と同様)などは、平壤の戦いの後で報道されていた)を取り上げる場合もみられる。その中で戦勝の誤報も多くみられるが、以下では代表的なものとして、「牙山大勝」(戦前)、「大同江記戦」の二枚を紹介する。



図 114 蟾香(絵師名)「牙山大勝」⁹

説明文(筆者意識、下同):

今回葉曙郷、聶功亭両軍門(将校名)が軍隊を率い高麗を応援し、牙山に駐在している。6月25、6日(旧暦)、亜希瑪という倭奴がその利害を知らず、中国大軍が赴いてくるとの情報を得て、腹背から攻撃を受け逃げ場がなくなるのを恐れて、牙山を突撃したが、華軍は僅かの二千人で四千の倭兵を撃退した。…倭兵の死傷が多く、死体を枕にして倒れた人、死体を踏んで逃げる人、跪いて命の助けを乞う人がみられ、その情景は非常に悲惨である。



図 115 明甫「大同江記戦」

注)説明文:

我が軍は中和府より大同江を経過したとき、いきなり倭兵艦十三艘の砲撃を受けた。我が軍が一時引いて、直ぐ歩砲隊に 32 尊の大砲を並べさせ、一斉に倭艦を射撃した。時は正に潮が引く時期で、倭艦三艘が座礁してしまい、我が軍の砲撃で壊れてしまった。倭兵が混乱に逃げ込んだ。

一枚目は、葉志超が敗戦を隠蔽し、偽って清政府に戦勝と報告したことによるもので、二枚目は平壤攻略の前で中和府の激戦を誇張的に中国の勝利と報道した内容である。画面の中では、中国軍は勇ましく戦う姿で描かれ一方、日本軍はひたすら攻撃され、逃亡または戦死の姿で表現されている。積極的な対抗がみられなく、日本軍は臆病なイメージで描かれたとみられる。

そして戦闘周辺の内容として、「倭兵無状」(日本兵の乱暴)が代表的な一枚である。図 116 からみると一つの場面ではなく、いくつかのエピソードを組み合わせで表現したものである。テント内は日本兵が戦地の困苦に堪えずに自殺する場面であり、左下は税務司に問題を挑発した場面で、また右下は、日本軍がイギリス領事の夫婦を攻撃した情景である。

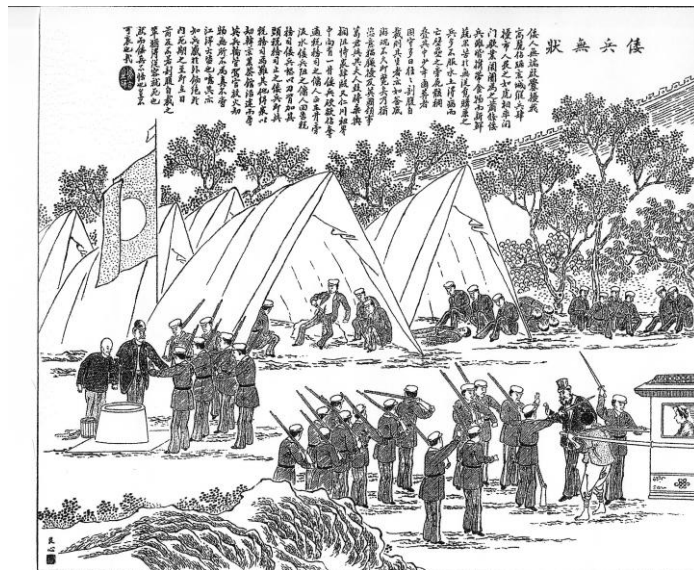


図 116 良心「倭兵無状」

注)説明文:

中で年少の者が長い滞在で切腹した人もいる。それでも彼等は絶えず恣意に民家を侵し、多くの紛争を引き起こしている。

また日本国内の様相について、『点石齋』は徴兵や経済の面に注目したのである。図117は民家に侵入し、若者を強制的に軍隊に徴発する場面であり、図 118 は国庫の空虚によって、民間から寄付金を強要した結果、価値の低い紙幣だけが集まったことを描いたのである。



図 117 何元後「拘民当兵」(民衆の強制徴役)

注)説明文:

倭民は愚鈍で無知ではあるが、懲役されたらきつと死ぬしかないと察知し、だれも応募する人がない。それで政府が任意に民衆を拘束し強制懲役した。民衆の不満が上がり、自殺する人も出ている。また老婦人をむりやり連れて雑用させたこともあり、その状況はまるで杜甫が『石壕吏』で書いた悲惨な情景である。



図 118 絵師不明「紙幣充餉」(価値ない紙幣を軍用金に足す)

注)説明文:

寄付した金は紙幣で銀貨幣ではない。これを見て、上海のある華商は冗談で「この紙幣はまるで中国の節で魂霊を祭る冥幣みた、何の価値もない」と言っている。

以上のように、『点石齋』は直観的な形で戦争を伝えた一方、読者の受けを考慮し信憑性が『申報』より低く、日本について一貫して否定的な表現が続き、冷静な評価を欠けている。

しかし、一つ留意すべきなのは、『点石齋』の戦争絵は、戦争そして敵軍を描く際に、日本の戦争絵の着目点と共通したのが見られる。敵軍について、戦場で敵前逃亡など臆病なイメージを描き出し、そして戦場生活に関し民衆の生活を侵害する暴虐なイメージを繰り返し強調したのである。また敵国国内については、経済問題など不穏な社会に着目し否定的に表現し続ける傾向がみられる。

まとめると、同時期における日本の新聞雑誌と比べると、『申報』と『点石齋画報』は、速報性から報道素材、内容構成まで、いまだ成熟していなかったとみられる。

『申報』の内容、国家の動向に注目したものだとうかがえる。具体的な戦闘場面ではなく、政治的な角度から、戦争における清政府の施策また外交方針を論じたものが多くみられ、一部論調で大国としての姿勢も避けられなかったのである。

戦争勃発の初期では誤報が続いた一方、10 月から敗戦の事実を提示し、反省から今後の戦略を論じるようになったのである。その中で、日本に対する論調は賛否両方が存在し、近代化そして軍事政策を高く評価した一方、軍用資源の不足などの問題も指摘したのである。

それに対し、『点石斎』は民衆向けの読み物として、内容が『申報』と明確に区別できている。『申報』と異なって、誤報が続く一方、講和期になっても敗戦の報道を回避している。

信憑性はともかく、報道内容からみると、性格は日本の錦絵とある程度類似している。戦闘情報を想像の画面に再構成し、主に代表的な戦闘場面やエピソードをとりあげている。また、敵国日本の描き方について、軍隊の敵前逃亡、民家の侵入、そして国内情勢の不穏など、表現もパターン化していて、敵国を表現する際に、日本の絵入り雑誌と共通した着目点をもっている。

まとめていうと、知識人向けの『申報』は、日本人に対する論調はより慎重的だとみられる。それに反し、一般民衆向けの『点石斎』は、内容の面白みを重視していた一方で、信憑性が低く思われる。「倭」などの言葉使いが頻繁に出現し、決めつけの形で敵国を否定的に表現した現象もみられる。

また、もう一つ注目すべきなのは、両紙は戦争論述または戦闘場면을提示した一方、戦争時における中国国内の社会状況がほとんど言及していなかったのである。両紙の出版地が上海であり、戦争から直接な影響がないことが一つの原因だが、日清戦争期における戦闘または日本の情報は、民衆の一般生活からかけ離れた形として提示されたことが特徴的である。このような報道方針は、また同時期における一般民衆の戦争意識ないし国家意識も大きく影響したと考えられる。

今までの考察を踏まえて、これから中国人の描いた日本を詳しく検討するには、新聞の編集または受容度の面から、戦争当時における一般民衆の生活様相まで、さらに詳しい考察が必要だと思われる。また、日本人の描いた中国をさらに究明するには、多様なメディア報道を比較する必要があり、戦争時における民間の活動(例えば祝勝大会)などから民間人の戦争観を確認する必要も考えられる。以上の内容を今後の課題として、戦争期における両国民衆の戦争感情そして相互認識を引き続き考察したいと思う。

-
1. ミネルヴァ書房, 2013 年 11 月。
 2. 『申報索引』編集委員会編『申報』復刻版(上海書店, 2011 年)より。
 3. 張奇明主編『點石齋画報 : 大可堂版 : 珍藏本』(上海畫報出版社, 2001.12)より。
デジタルデータベース『点石齋画報』(南京市図書館編集, 北京環球音像出版社, 2003 年)より。
 4. サインは呉友如、友如、吳猷などである。
 5. 郭秋恵「点石:《点石齋画報》与 1884-1898 年間的設計問題」, 清華大学博士学術論文, 2009 年。
 6. M.von BRANDT『DER CHINESE -wie er sich selbst sieht und schildert-』, 詳細な出版日付は不明。
 7. 『ドイツ公使の見た明治維新』, 原潔・永岡敦訳, 新人物往来社, 1987 年。
 8. 前掲『申報索引』編集委員会編『申報』復刻版を参考し、筆者が意識したものである。下同。
 9. 画像は前掲張奇明主編『點石齋画報 : 大可堂版 : 珍藏本』を参考にしている。下同。